

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（59）

南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

し ん じょう
新城跡

（阿久根市山下）

2025 年 3 月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



上空より虎口状遺構を望む

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道(阿久根川内道路)建設に伴って、令和4年度から令和5年度にかけて実施した阿久根市山下に所在する新城跡の発掘調査の記録です。本報告書では、中世から近世(12世紀～19世紀)の調査成果を報告しています。本遺跡では、中世、近世の遺構や遺物が発見され、各時代の集落や人々の活動の場として使われてきた場所であることがわかりました。

注目される成果としては、西日本でも類をみない虎口状遺構など中世の山城の特徴を持つ遺構が発見されました。16世紀ごろの虎口状遺構は、防御施設と考えられます。他にも、中世の青磁、播鉢、鉄器、近世の陶磁器などの遺物も出土しました。近くにある北山遺跡の遺構や遺物と同時代であり、阿久根の中世の様子を知る上で貴重な資料となりました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解いただくとともに、今後の研究の一助となれば幸いです。

最後に、本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、阿久根市教育委員会等の関係各機関並びに御指導をいただきました先生方、発掘作業、整理作業に従事された方々、遺跡の所在する阿久根市山下の皆様に厚く御礼を申し上げます。

令和7年3月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 寺原 徹

報告書抄録

ふりがな	しんじょうあと							
書名	新城跡							
副書名	南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 59 集							
編著者名	弓場隆章 北園和代 川口雅之							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-70-0574							
発行年月	2025 年 3 月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積（㎡）	発掘原因
しんじょうあと 新城跡	かごしまけん 鹿児島県 あくねし 阿久根市 やました 山下 あざしんじょう 字新城	46206	206 - 21	32° 00′ 47″	130° 12′ 57″	分布調査 2017. 12. 11		南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う記録保存調査
						試掘調査（令和3年度） 2021. 6. 29		
						確認調査（令和2年度） 2020. 9. 1～ 2020. 9. 28	34	
						確認調査（令和3年度） 2021. 5. 18～ 2021. 6. 11	30	
						本調査（令和4年度） 2022. 5. 11～ 2023. 1. 27	6,708	
						本調査（令和5年度） 2023. 11. 1～ 2023. 11. 24	1,098	
所収遺跡名	種別	主な時代	主要な遺構		主要な遺物		特記事項	
新城跡	城館跡	中世	掘立柱建物跡5棟 柵列2基 土坑3基 炉跡 10 基 溝状遺構1条 ピット 72 基 虎口状遺構1基 土塁1基		土師器、中世須恵器、播鉢、国産陶器（常滑焼、古瀬戸、備前焼等）、輸入磁器（青磁、白磁、青花等）、輸入陶器（沖縄Ⅲ類、Ⅴ類壺、東南アジア系鉢）、瓦質土器、土錘、台石、滑石製品、鉄製品、基石、羽口、木製品			
		近世以降	炉跡1基 集石1基		陶器（肥前系、薩摩焼等）、磁器（染付等）、石皿、煙管			
遺跡の概要	<p>新城跡は、阿久根市山下に位置し、高松川左岸の標高 30 ～ 35 mの台地上に所在する。東側に位置する愛宕山には、中世莫祢氏の本拠地である阿久根城跡がある。新城跡は、その西麓の台地上に点在する山城の一つであり、中世において歴史的に重要な役割を果たした地域といえる。</p> <p>発掘調査では、西台地で虎口（出入口）の可能性がある大型土坑と通路状遺構から成る虎口状遺構など中世の山城の特徴を持つ遺構が発見された。虎口状遺構は、防御施設と考えられる。他にも、中世の青磁、播鉢、鉄器、近世の陶磁器、石皿などの遺物も出土した。</p> <p>近隣の北山遺跡や諏訪ノ前遺跡の遺構や遺物と類似点が多く、阿久根の中世の歴史を知る上で貴重な資料である。</p>							



新城跡遺跡位置図 (1 : 25, 000)

例 言

- 1 本書は、南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う新城跡の発掘調査報告書である。
- 2 新城跡は、鹿児島県阿久根市山下に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下、「県教委」という）が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下、「埋文調査センター」という）へ調査委託し、埋文調査センターが令和4・5年度の2年間にわたり実施した。
- 4 整理・報告書作成事業は、令和5年度から令和6年度まで埋文調査センターが、第一整理作業所で実施した。
- 5 掲載遺構番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表および図版の遺構番号は一致する。掲載遺物番号は、通し番号であり、本文・挿図・表および図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた遺跡記号は、「ASJ」である。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海拔高度である。
- 8 本書で使用した方位は、全て真北であり、測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 9 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者が行った。また空中写真の撮影は、株式会社ふじたに委託した。
- 10 本編に係る遺構実測図・出土遺物の実測、トレース図の作成は埋文調査センター整理作業担当職員の指示・確認のもと行い、石器実測の一部を株式会社九州文化財研究所に委託した。
- 11 出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」）の写場にて西園勝彦、辻明啓が行った。
- 12 本報告に係る自然科学分析を、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボ、株式会社加速器分析研究所に依頼した。
- 13 執筆担当は、以下のとおりである。

第Ⅰ章	辻・弓場
第Ⅱ章	辻・弓場
第Ⅲ章	北園・川口
第Ⅳ章 第1節	北園・川口
第2節	北園・川口・川野 聖人
第3節	北園・川口
第4節	弓場
第Ⅴ章	パリノ・サーヴェイ株式会社

株式会社パレオ・ラボ
株式会社加速器分析研究所

- | | |
|------|-------|
| 第Ⅵ章 | 弓場・北園 |
| 写真図版 | 弓場・北園 |
- 14 使用した土色は、『新版 標準土色帖』（1970 農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。
 - 15 遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。
SB：掘立柱建物物跡 SK：土坑 SS：集石
SL：炉跡 SP：ピット
 - 16 遺構の縮尺は、次を基本とした。
堅穴建物跡：1/40
土坑：1/40 ピット：1/40
炉跡：1/30 溝：1/80
 - 17 遺物の縮尺は、次のとおりである。また、各図中にも縮尺を示している。
土器 1/3, 1/4
石器、土製品 1/1, 1/2, 1/3, 1/4
（但し、大型の台石は1/6で掲載）
 - 18 本報告書に係る出土遺物および実測図・写真等の記録は、埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

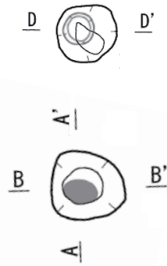
凡例1 作図について

遺構

【柱穴】

柱穴痕跡

(グレーの線かアミカケで示す)

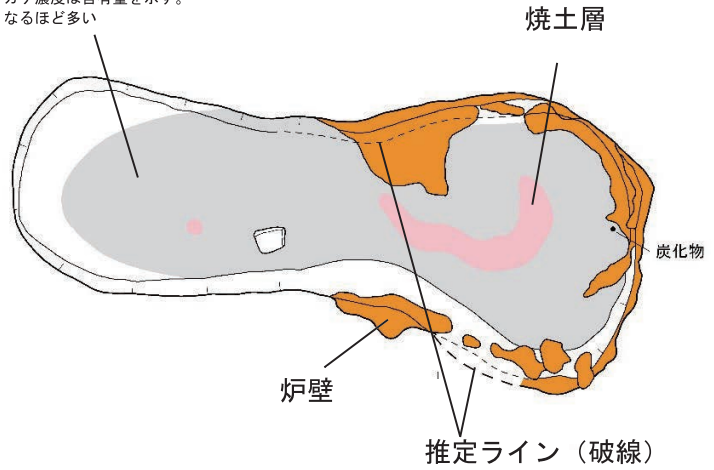


【炉跡】

炭化物層

※アミカケ濃度は含有量を示す。
濃くなるほど多い

焼土層



遺物

【土師器・須恵器】

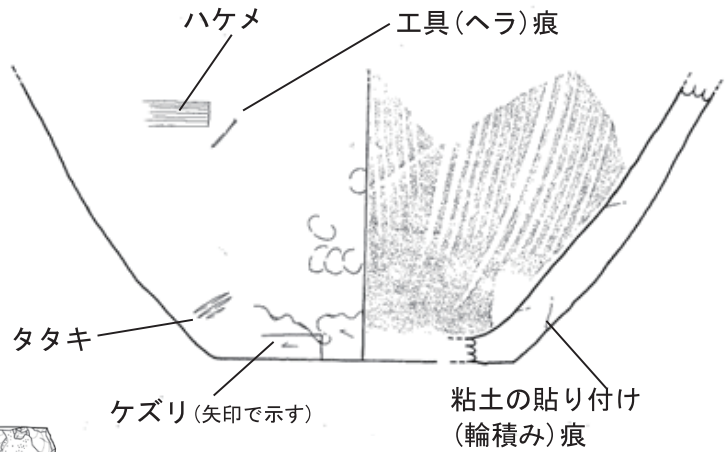
スス附着範囲

(グレーのアミカケで示す)



ハケメ

工具(ヘラ)痕

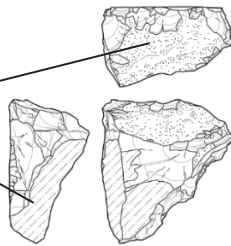


【石 器】

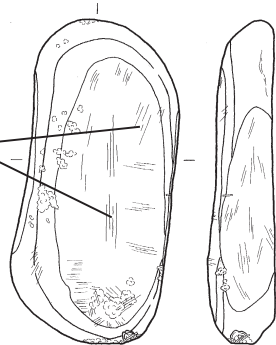
自然面(ドットで示す)

節理面(斜線で示す)

※人為的ではない欠けは、
白抜きで示す。



擦痕



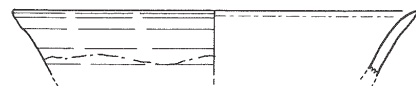
敲打痕

磨面範囲

(断面にのみ矢印で示す)

【陶磁器】

【釉薬が施される範囲について】
一点破線(---)で範囲を示す。
また、見込みや高台内の釉剥ぎの範囲を
—によって示す



凡例2 主な遺物の分類・年代について

【中世陶磁器】

中世陶磁器の分類・編年は、主に以下の文献を参考にし、本文中および観察表に記載した。本報告においては、『歴博分類』・『歴博編年』と呼称する。
また、大橋康二氏、宮城弘樹氏、柴田圭子氏によるご指導の機会を得た。

池谷初恵・小野正敏・岩元康成・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎
2021「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」『国立歴史民俗博物館研究報告』226集
国立歴史民俗博物館

なお、上記分類の補完のために以下の文献も参考にしており、観察表に併記した。

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No. 2）
日本貿易陶磁研究会
小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No. 2）
日本貿易陶磁研究会
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志
2007「沖縄における貿易陶磁研究—14～16世紀を中心に—」
『沖縄埋文研究』5号 沖縄県立埋蔵文化財センター
瀬戸哲也 2015「14・15世紀の沖縄出土中国産青磁について」
『貿易陶磁研究』No. 35 日本貿易陶磁研究会
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
續 伸一郎 2022「第7章 貿易陶磁器 第2節 中世後期の貿易陶磁器」
『概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会
森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」（『貿易陶磁研究』No. 2）
日本貿易陶磁研究会

時期区分と指標とする主な分類
（歴博編年による）

I 期 …11 世紀後半～12 世紀中頃

II 期 …12 世紀後半～13 世紀前半

III 期 …13 世紀後半～14 世紀前半

IV a 期 …14 世紀後半～15 世紀初め

IV b 期 …15 世紀前半～中葉

V 期 …15 世紀後半～16 世紀前半

VI 期 …16 世紀中葉～末

【近世陶磁器】

近世陶磁器の分類・編年は、主に以下の文献を参考にした。
また、大橋康二氏、渡辺芳郎氏によるご指導の機会を得た

九州近世陶磁学会編2008『九州陶磁の編年』

【土師器】

土師器の分類・編年は、主に以下の文献を参考にした。

岩元 康成
2012「鹿児島県の遺構内出土関係遺物の組成」『中近世土器の基礎研究』24集
日本中世土器研究会編

【須恵器・瓦質土器】

器種は、大甕・播鉢・火鉢・風炉等がある。

大甕と播鉢において須恵質、瓦質、土師質の区分があいまいな資料が多い。
本報告では、この2つの器種の大分類を須恵器ととらえ、灰色を呈するものを須恵質、橙色を呈するものを土師質、
燻すことにより黒色を呈するものを瓦質と呼称した。
火鉢・風炉については総じて硬質であり、大分類を瓦質土器ととらえた。
なお播鉢の編年については以下の文献を参考にした。

中村 和美
2007「南九州の土器・陶器」『中世産業の様相～生産技術の展開と編年～』補遺編
全国シンポジウム「中世産業の様相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
中央大学文学部日本史学研究室
静岡大学生涯学習教育研究センター

本文目次

表紙

巻頭図版（カラー）

序文

報告書抄録

遺跡位置図

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の経過	2
第4節 整理・報告書作成の経過	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 新城跡周辺の中世山城について	8
第4節 莫祢（阿久根）氏について	9
第5節 阿久根 IC 周辺～西目 IC（仮）間の遺跡	11
第Ⅲ章 発掘調査の方法と層序	13
第1節 本調査	13
第2節 整理・報告書作成作業	14
第3節 層序	14
第4節 新旧遺構対応表	14
第Ⅳ章 調査の成果	15
第1節 西谷の調査	15
第2節 西台地の調査	19
第3節 東谷の調査	82
第4節 東台地の調査	87
観察表	98
第Ⅴ章 自然科学分析	109
第1節 概要	109
第2節 分析結果の報告	109
第Ⅵ章 総括	123
第1節 調査の成果	123
第2節 新城の城域について	126
第3節 阿久根氏と新城について	128
写真図版	129

挿図目次

第1図	グリット配置図・調査範囲 および確認調査トレンチ位置図	2	第36図	虎口状遺構	48
第2図	遺跡周辺の地形図	6	第37図	虎口状遺構埋土堆積状況	48
第3図	新城跡周辺遺跡位置図	7	第38図	虎口状遺構3D写真	49
第4図	新城跡周辺の中世山城位置図	8	第39図	大型土坑Ⅷ層出土遺物①	51
第5図	南九州西回り自動車道関係遺跡位置図	12	第40図	大型土坑Ⅷ層出土遺物② (中国産褐釉大壺 沖縄Ⅴ類)	52
第6図	調査区範囲および断面図	13	第41図	大型土坑出土遺物①(青磁)	54
第7図	周辺地形および調査範囲図	15	第42図	大型土坑出土遺物②(白磁・青花)	55
第8図	西谷調査区および土層断面	16	第43図	大型土坑出土遺物③(土師器)	56
第9図	西谷出土遺物	18	第44図	大型土坑出土遺物④(中国産陶磁器)	57
第10図	周辺地形および調査範囲図	19	第45図	大型土坑出土遺物⑤(須恵器)	59
第11図	西台地遺構配置図	20	第46図	大型土坑出土遺物⑥(播鉢①)	60
第12図	西台地南壁土層断面図	21	第47図	大型土坑出土遺物⑦(播鉢②)	61
第13図	掘立柱建物跡1号	22	第48図	大型土坑出土遺物⑧(播鉢③)	62
第14図	掘立柱建物跡2号	23	第49図	大型土坑出土遺物⑨(瓦質土器①)	63
第15図	掘立柱建物跡2号 出土遺物	24	第50図	大型土坑出土遺物⑩(瓦質土器②)	64
第16図	掘立柱建物跡3号および出土遺物	24	第51図	大型土坑出土遺物⑪(近世以降の磁器)	66
第17図	掘立柱建物跡4号	26	第52図	大型土坑出土遺物⑫(近代の磁器)	66
第18図	掘立柱建物跡4号 出土遺物	27	第53図	大型土坑出土遺物⑬(近世以降の陶器)	67
第19図	掘立柱建物跡5号および出土遺物	28	第54図	大型土坑出土遺物⑭(その他の遺物)	68
第20図	柵列1, 2	29	第55図	大型土坑出土遺物⑮(鉄製品・取鍋・轆の羽口)	69
第21図	土坑1号および出土遺物	30	第56図	大型土坑出土遺物⑯(石製品)	70
第22図	土坑2号および出土遺物	30	第57図	通路状遺構出土遺物①	72
第23図	炉跡1号および出土遺物, 土坑3号	32	第58図	通路状遺構出土遺物②	73
第24図	土坑3号 出土遺物	33	第59図	西台地 中世の遺物①	74
第25図	炉跡2・3・4号および出土遺物	34	第60図	西台地 中世の遺物②	76
第26図	炉跡5・6・7号および出土遺物	36	第61図	西台地 中世の遺物③	77
第27図	炉跡8・9・10号	37	第62図	西台地遺構配置図(近世以降)	78
第28図	土塁状の高まり	38	第63図	階段床面出土遺物	78
第29図	ピット配置図	39	第64図	炉跡11号	79
第30図	西台地のピット(1)	40	第65図	西台地 近世以降の遺物①	80
第31図	西台地のピット(2)	41	第66図	西台地 近世以降の遺物②	81
第32図	西台地のピット(3)	42	第67図	西台地から出土した鉄製品・石製品	81
第33図	西台地のピット(4)	43	第68図	周辺地形および調査範囲図	82
第34図	ピット内出土遺物	45	第69図	東谷トレンチ位置図	83
第35図	溝状遺構および出土遺物	46	第70図	1TR土層 柱状模式図	84

第71図	1TR出土遺物	84	第89図	暦年較正年代グラフ	111
第72図	2TR土層 柱状模式図	84	第90図	新城跡から出土した炭化種実	112
第73図	2TR出土遺物(木製品)	85	第91図	新城跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	114
第74図	3TR土層 柱状模式図	86	第92図	暦年較正結果	116
第75図	3TR出土遺物	86	第93図	種実・マイクロスコープ観察	117
第76図	周辺地形および調査範囲図	87	第94図	生材	118
第77図	東台地土層断面図	88	第95図	炭化材	118
第78図	東台地の遺物①(中世陶磁器)	90	第96図	暦年較正年代グラフ	120
第79図	東台地の遺物②(土師器)	91	第97図	暦年較正年代グラフ	121
第80図	東台地の遺物③(須恵器)	91	第98図	西谷・西台地・東谷・東台地位置図	123
第81図	東台地の遺物④(播鉢)	92	第99図	北山遺跡・外畠遺跡・新城跡の掘立柱建物跡	124
第82図	集石1号および出土遺物	92	第100図	出土陶磁器組成グラフ	125
第83図	東台地の遺物⑤(青磁・白磁・染付)	93	第101図	赤色立体地図を用いた新城周辺の遺跡と地形	127
第84図	東台地の遺物⑥(陶器・瓦質土器)	94	第102図	1888年(明治21)年の古地図	127
第85図	東台地の遺物⑦(薩摩焼)	95	第103図	1947(昭和22)年の航空写真	127
第86図	東台地の遺物⑧(瓦)	95	第104図	1975(昭和50)年の航空写真	127
第87図	東台地の遺物⑨(石製品)	96	第105図	新城を含む中世遺構群	127
第88図	東台地の遺物⑩(石皿・鉄製品)	97			

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	6	第19表	土師器・須恵器・瓦質土器・播鉢観察表(1)	103
第2表	新城跡周辺の中世山城	8	第20表	土師器・須恵器・瓦質土器・播鉢観察表(2)	104
第3表	莫祢(阿久根)氏の歴代当主と概要	9	第21表	土師器・須恵器・瓦質土器・播鉢観察表(3)	105
第4表	阿久根IC～西目IC間の遺跡	11	第22表	土師器・須恵器・瓦質土器・播鉢観察表(4)	106
第5表	新旧遺構対応表	14	第23表	石製品観察表	107
第6表	西谷基本層序	15	第24表	鉄製品・鉄関連遺物観察表	107
第7表	西台地基本層序	19	第25表	木製品観察表	108
第8表	柱穴観察表①	43	第26表	土製品・その他観察表	108
第9表	柱穴観察表②	44	第27表	測定試料および処理	110
第10表	東谷基本層序	82	第28表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	111
第11表	東台地基本層序	87	第29表	新城跡から出土した炭化種実	112
第12表	東台地トレンチ規模表	88	第30表	新城跡出土炭化材の樹種同定結果	114
第13表	陶磁器観察表(1)	98	第31表	新城跡出土炭化材の樹種同定結果一覧	114
第14表	陶磁器観察表(2)	99	第32表	試料一覧・種実・樹種同定結果	116
第15表	陶磁器観察表(3)	100	第33表	放射性炭素年代測定結果	116
第16表	陶磁器観察表(4)	101	第34表	放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$, ^{14}C 年代, pMC)	120
第17表	陶磁器観察表(5)	102			
第18表	陶磁器観察表(6)	103			

第35表	放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用 ¹⁴ C年代, 較正年代) ……	120	第38表	蛍光X線分析試料および結果一覧 ……	122
第36表	放射性炭素年代測定結果($\sigma^{13}\text{C}$ 補正值) …	122	第39表	新城跡出土陶磁器組成表 ……	123
第37表	放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$ 未補正, 暦年較正用 ¹⁴ C年代, 較正年代) …	122	第40表	遺構の年代別一覧表 ……	124

図版目次

巻頭図版1	図版12	西台地遺構内出土遺物(1) ……	140
図版 1	図版13	西台地遺構内出土遺物(2) ……	141
図版 2	図版14	大型土坑Ⅷ層出土遺物 ……	142
図版 3	図版15	大型土坑出土遺物(1) ……	143
図版 4	図版16	大型土坑出土遺物(2) ……	144
図版 5	図版17	大型土坑出土遺物(3) ……	145
図版 6	図版18	大型土坑出土遺物(4)・通路状遺構出土遺物 …	146
図版 7	図版19	西台地・東谷出土遺物 ……	147
図版 8	図版20	東谷発掘調査風景写真および出土木製品	148
図版 9	図版21	東台地出土遺物(1) ……	149
図版10	図版22	東台地出土遺物(2) ……	150
図版11		西谷出土遺物 ……	139

本文写真目次

写真 1	南日本新聞(令和5年3月18日) ……	4	写真16	入口近くから出土した珊瑚 ……	49
写真 2	発掘調査風景 ……	4	写真17	大型土坑土層断面 ……	50
写真 3	大橋康二氏 遺物指導風景 ……	4	写真18	中国産褐釉葉陶器壺(沖縄Ⅴ類)出土状況 …	50
写真 4	整理作業風景 ……	4	写真19	階段完掘状況 ……	78
写真 5	北山遺跡から西谷・西台地を望む ……	17	写真20	東谷調査前風景 ……	83
写真 6	西台地土層断面写真 ……	17	写真21	造成土除去作業風景 ……	83
写真 7	調査前の西台地 ……	20	写真22	旧水田層(Ⅲ層)検出状況 ……	83
写真 8	1960年代の西台地 ……	20	写真23	集石1号検出状況 ……	92
写真 9	炉跡調査風景① ……	35			
写真10	炉跡調査風景② ……	35			
写真11	土塁状の高まり(南壁にあらわれた断面) ……	38			
写真12	虎口状遺構航空写真 ……	47			
写真13	大型土坑入口から通路状遺構を望む ……	49			
写真14	通路状遺構埋土堆積状況 ……	49			
写真15	入口近くから出土した礫 ……	49			

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及び、その取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。この事前協議制に基づき、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下、鹿児島国道事務所）は、南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設の施工計画に基づき、事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。これを受けて、文化財課が平成29年度に事業予定地内の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、周知の遺跡を含む散布地10か所を確認し、鹿児島国道事務所に回答した。

分布調査の結果を受けて、鹿児島国道事務所、文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者で今後の取り扱いについて協議を行い、遺跡の範囲および性格をより詳細に把握するため、文化庁の国庫補助を受け確認調査を計画し、令和2年度及び令和3年度に用地協議が整った範囲を対象に確認調査を実施した（第1図T1～T12）。その結果、旧地形の残存状況や聞き取り調査等から調査対象地に山城に関連する遺構が残存している可能性が高いことが判明した。

確認調査後、遺跡の取り扱いについて協議を行ったところ、現地保存は困難であるため、記録保存調査（本調査）を実施することとなった。

本調査は、文化財課から委託を受けて調査センターが担当することとなった。令和4年度の調査対象範囲は、条件の整った6,708㎡である（実働日165日）。

残りの1,391㎡は、令和5年5月に試掘調査を行い、削平を受けていた293㎡を除いた1,098㎡を調査対象範囲とし、令和5年11月に調査を実施した（実働日16日）。

調査期間

- 1 分布調査：平成29年12月11日（日）
- 2 試掘調査：令和3年6月29日（火）
- 3 確認調査：令和2年9月1日（金）～28日（日）、令和3年5月18日（火）～6月11日（金）
- 4 本調査：令和4年5月11日（木）～令和5年1月27日（金）

令和5年11月1日（水）～11月24日（金）

第2節 調査の組織

1 令和2年度の調査体制

事業主体	鹿児島県
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長	前迫 亮一
調査企画	〃 次長兼総務課長 野間口 誠
	〃 南の縄文調査室長兼調査課長 中村 和美
	〃 調査課第一調査係長 三垣 恵一
調査担当	〃 文化財主事 上浦 麻矢
	〃 馬籠 亮道
事務担当	〃 主 査 新穂 秀貴

2 令和3年度の調査体制

事業主体	鹿児島県
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長	中原 一成
調査企画	〃 次長兼総務課長 大口 浩嗣
	〃 南の縄文調査室長兼調査課長 寺原 徹
	〃 調査課第一調査係長 三垣 恵一
調査担当	〃 文化財主事 湯場崎辰巳
	〃 上浦 麻矢
事務担当	〃 主 査 和田 賢

3 令和4年度の調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局 鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
センター長	中村 和美
調査企画	〃 総務課長兼係長 中島 治
	〃 調査課長 三垣 恵一
	〃 調査第二係長 川口 雅之
調査担当	〃 文化財専門員 松下 寛正

〃 山川 正樹
 〃 辻 明啓
 〃 文化財調査員 川野 聖人
 事務担当 〃 事業推進員 今掛 美子

4 令和5年度の組織体制

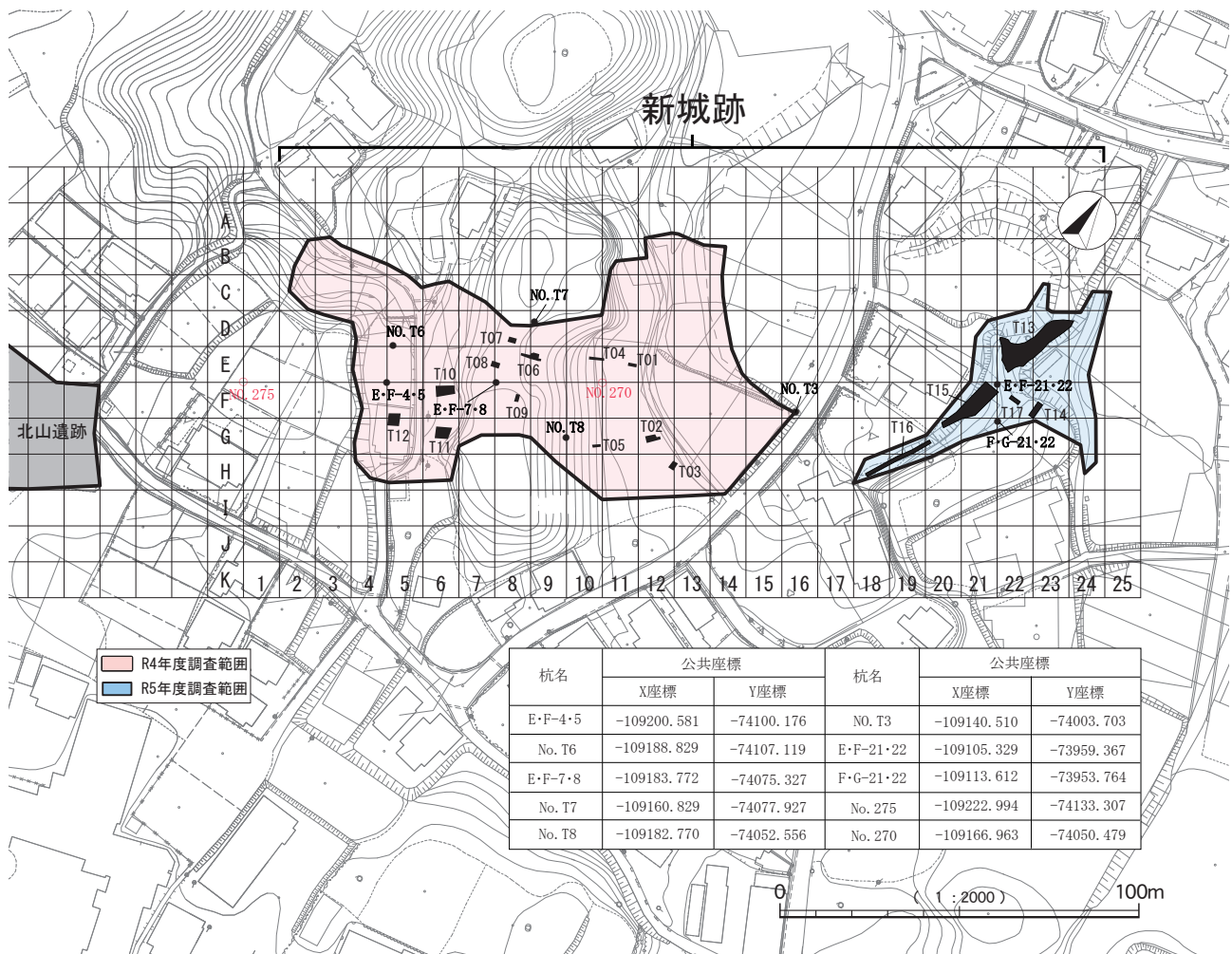
事業主体 国土交通省九州地方整備局
 鹿児島国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 センター長 寺原 徹
 調査企画 〃 総務課長兼係長 脇田 清幸
 〃 調査課長 三垣 恵一
 〃 調査第三係長 上床 真
 調査担当 〃 文化財専門員 辻 明啓
 〃 山川 正樹
 〃 文化財調査員 野田 清志
 事務担当 〃 事業推進員 今掛 美子

第3節発掘調査の経過

発掘調査の経過については、令和4年度および令和5年度の日誌抄を月ごとに集約して掲載する。

令和4年度

4月 プレハブ設置用整地，表土剥ぎ
 5月 13日作業員発掘調査開始
 調査環境整備，D～G－7・8区調査
 6月 D～G－7・8区調査，D・E－9区調査，
 調査環境整備
 7月 台風養生，E～G－4～6区調査前環境整備，
 F・G－7・8区調査，F・G－9区調査，
 E～G－4～6区調査前環境整備，E～
 G－4～6区調査，D～F－11・12区調査前
 環境整備，D～G－4～6区調査
 8月 F・G－4・5区調査，D・F－6区調査，
 作業休止期間前現場養生，F・G－7・8区
 調査
 ※調査員のコロナ感染に伴い，作業員の集中
 管理が必要なことから，全調査員および作業



第1図 グリッド配置図・調査範囲および確認調査トレンチ位置図

	員を北山遺跡支援で運用（23日～9月3日まで）
9月	台風養生，D～G－7・8区調査，F・G－4区調査前環境整備，F・G－4区調査，E～G－5区調査，F・G－4・5区調査
10月	D～G－7・8区調査，F・G－6区調査，D・F－11区調査，F・G－14・15区調査（トレンチ），D～G－7・8区埋土フローテーション
11月	D～G－7・8区調査，F・G－14・15区表土剥ぎ，F・G－14・15区調査
12月	D～G－7・8区調査，F・G－14・15区調査，年末環境整備
1月	D～G－7・8区調査，D～F－11・12区調査（トレンチ），空中写真撮影（25日），作業所閉所作業，環境整備
2月	遺構実測，現場引渡環境整備
3月	報道発表

令和5年度

9月	調査開始前調整
10月	調査開始前調整，発掘調査事前環境整備
11月	調査環境整備，D－23区トレンチ1調査，F・G－22・23区トレンチ2調査，F・G－21区トレンチ3調査，D・E－22・23区トレンチ1調査（拡張），G・H－18～20区トレンチ4調査，G－20・21区トレンチ3調査（拡張）F－22区トレンチ5調査
12月	現場引渡環境整備

第4節 整理・報告書作成の経過

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，調査センターで行った。

令和5年度は，前半に出土遺物の水洗い，注記，遺物選別，接合などの基礎的な作業，遺構の図面チェック，配置図作成，原稿執筆を行った。また，令和4年度調査時の遺構埋土のフローテーション作業を行い，炭化物等の科学分析を行った。後半は，報告書掲載に必要な遺物の実測およびトレースを行った。

令和6年度は，令和5年度調査分の基礎的な作業を行った後に，遺物の実測および拓本，トレース，遺構のトレース，レイアウト，写真撮影，原稿執筆等の報告書作成業務および遺物収納を行った。

整理・報告書作成作業に関する組織および整理作業の経過は以下のとおりである。

1 作業体制

令和5年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 鹿児島国道事務所
作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成総括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター センター長 寺原 徹
作成企画	〃 総務課長兼係長 脇田 清幸 〃 調査課長 三垣 恵一 〃 調査第三係長 上床 真
作成担当	〃 調査第三係長 上床 真 〃 文化財専門員 辻 明啓
事務担当	〃 主 事 上園 慶子

令和6年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 鹿児島国道事務所
作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成総括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター センター長 寺原 徹
作成企画	〃 総務課長兼係長 脇田 清幸 〃 調査課長 三垣 恵一 〃 調査第二係長 川口 雅之
作成担当	〃 文化財専門員 弓場 隆章 〃 文化財調査員 北園 和代
事務担当	〃 主 事 坂元 宏光
整理指導	九州陶磁器文化館名誉顧問 大橋 康二 沖縄国際大学総合文化学部教授 宮城 弘樹 (公財)愛媛県埋蔵文化財センター嘱託調査員 柴田 圭子 鹿児島大学法学部 渡辺 芳郎 鹿児島国際大学短期大学部名誉教授 三木 靖 鹿児島国際大学国際文化部教授 太田 秀春

6月4日，8月10日，10月8日，10月26日

報告書作成指導委員会 三垣調査課長ほか7名
11月6日

報告書作成検討委員会 寺原センター長ほか6名

2 整理作業の経過

令和5年度

4月	水洗い
5月	注記，接合
6月	埋土フローテーション，炭化物等取り上げ

7月 炭化物等取り上げ、遺物分類
 8～11月 遺物実測
 12月 遺物実測、拓本
 1月 遺物実測図修正、トレース
 2月 遺物トレース

8月 トレース、遺物レイアウト、遺物データ入力、遺物指導（大橋康二氏）
 原稿執筆
 9月 資料調査（大分県埋蔵文化センター、大分市歴史資料館、高崎山城跡）
 遺構・遺物レイアウト 遺物復元
 観察表作成、遺構配置図
 原稿執筆、編集
 10月 遺物写真撮影、原稿執筆、編集
 11月 原稿・レイアウト等確認、
 印刷、製本入札
 12月～1月 校正 図面・遺物収納
 3月 納品

令和6年度

4月 遺物・遺構図面等確認 遺物実測
 遺構デジタルトレース
 5月 遺物実測、遺構デジタルトレース
 6月 遺物実測、トレース・拓本
 遺構配置図作成
 7月 遺物実測、トレース、拓本、復元
 遺構配置図作成、遺物データ入力

第3種郵便物認可

阿久根・中世山城の「新城跡」

防御大型土坑を発見

県文化振興財団埋蔵文化財調査センターは17日、阿久根市山下にある中世の山城跡「新城跡」で、深さ3メートル、一辺12メートルの方形の大型土坑を備えた防御施設を発見したと発表した。城の出入り口に相当すると考えられる。専門家は「標高の低い台地に大きな穴を掘り防御施設とする構想は、九州では類例はない。全国的にも珍しいのでは」と話している。

新城跡は標高36メートルのシラス台地の上にある。大型土坑には、深さ約2.5メートル、幅約12メートルの通路が通じている。複数の人が往来できないように狭く、緩やかに蛇行しており、守りやすさを重視していることが分かる。また、土坑の上は曲輪だったと考えられ、建物があったことを示す柱の穴や、炉の跡が見つかっている。

16世紀前半を治めていた阿久根藩・守良正が築城したとされる。調査を指導した、鹿児島国際大学の三木靖名教授（85）は城郭史Ⅱによると、文献資料では

新城跡は、2022年度の南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査で見つかった。（上植元大輔）

戦国があった記録はない。三木名教授は「標高の低い場所の城は攻められやすいが、狭い通路や大型の土坑は弱点を補うのに効果的な仕掛けと指摘。また、同時期に一带の中心地だったと考えられる北山遺跡や、別の山城があったとされる愛宕山とも近く、「二体的な防御を目的とした可能性もある」とみる。






写真1 南日本新聞(R5 3月18日)



写真2 発掘調査風景



写真3 大橋康二氏 遺物指導風景



写真4 整理作業風景

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

新城跡は、阿久根市山下に所在し、阿久根市内を流れる高松川の支流である山下川左岸のシラス台地に立地する。遺跡の標高は約32mである。遺跡周辺の山下台地は愛宕山麓に広がり、新城跡はその台地の縁辺部にあたる。

遺跡のある阿久根市は、鹿児島県の北西部に位置し、東経130度12分、北緯32度1分の地域にある。境界は黒之瀬戸を隔てて出水郡長島町と相対し、東北は出水市高尾野町と接し、東は出水市野田、南は薩摩川内市の川内市および東郷町と接している。西は40kmに及ぶ屈曲に富んだ海岸線で東シナ海に面している。広さは東西11.1km、南北22.4km、面積は134.28km²で周囲は75kmである。

九州山地は鹿児島県に入るに及んで、地皮の破綻と火山の噴出のためその溶岩と火山灰の堆積とで丘陵地となり、またこれらの台地は浸食されて複雑な地層を現し、それぞれ不規則に散在している。その九州山地の一部である出水山地は、地層の走る方向にしたがって北東より南西に連なり、川内川流域、八代海斜面および東シナ海斜面との分水嶺をなしており、これらは旧出水郡・薩摩郡・伊佐郡との自然境界をなしている。

この影響は海岸線にも影響を与えており火山岩が絶壁をなして海に迫り、海岸線も出入りに乏しい場所が多い。そのような中に、断崖絶壁により東および南西の風雨が防がれ、天然の良港である倉津港がある。昔より西欧船および中国船の来航が盛んで、その停泊港として有名であった。また、高松川河口にある阿久根港も戸柱山および遠見が丘によって西および南西の風雨を防ぎ自然の良港として有名で、外国貿易港として繁栄した港である。近世・近代に陸上交通網が整備されるまで、海上交通の要所としてこの地が機能していたことがうかがえる。

阿久根市は、地勢的に山地が多く、とくに出水山地が海に迫る地方のため平野に乏しく、わずかに河川の流域に沖積平野をみるもので、主なものとして阿久根平野と折多平野がある。そのうち、高松川流域の沖積平野である阿久根平野は、本遺跡に近い山下川と鶴川内川の合流点付近が最も広域をなしている。現在山下地区の耕地面積は6,892aあり、阿久根市の地区ごとの耕地面積では最大となる。

地質は砂岩および粘板岩の累層からなり、まれに角岩・凝灰岩・石炭岩の互層から成っている。

阿久根地方は、九州山地ならびに出水山地の影響によって、南国にかかわらず冬季の最低気温が低い。冬季の西北ないし西風のもたらす湿風が九州山地などに遮られて、特に1・2月頃は降雨や雪があり、夏季はこれと反対の現象を呈し市民生活や農業に影響を与えている。

第2節 歴史的環境

旧石器時代の遺跡には、細石刃や細石刃核が出土している陣之尾遺跡がある。また、分布調査において阿久根市鶴川内の赤剥遺跡や日暗遺跡が遺物散布地として報告されている。

縄文時代早期では、吉田式土器や塞ノ神式土器が出土した北山遺跡、条痕文土器や中原式土器、押型文土器が出土した陣之尾遺跡がある。また、阿久根市山下にある下谷遺跡では、口唇部下に貝殻腹縁部による縦位の連続刺突文を三段施し、それ以下は丁寧にナデ仕上げを行っている貝殻文土器が出土している。縄文時代前期は、曾畑式土器が出土した波留貝塚、轟B式土器が出土している北山遺跡がある。縄文時代後期は、波留貝塚から出水式土器や磨消縄文土器、北山遺跡から南福寺式土器や市来式土器が出土している。縄文時代晩期では、北山遺跡で黒川式土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、分布調査における遺物散布地としての報告はされているが、調査が行われた遺跡はない。阿久根平野や折多平野などの稲作に適した地形もあることから、今後の発見が期待される。

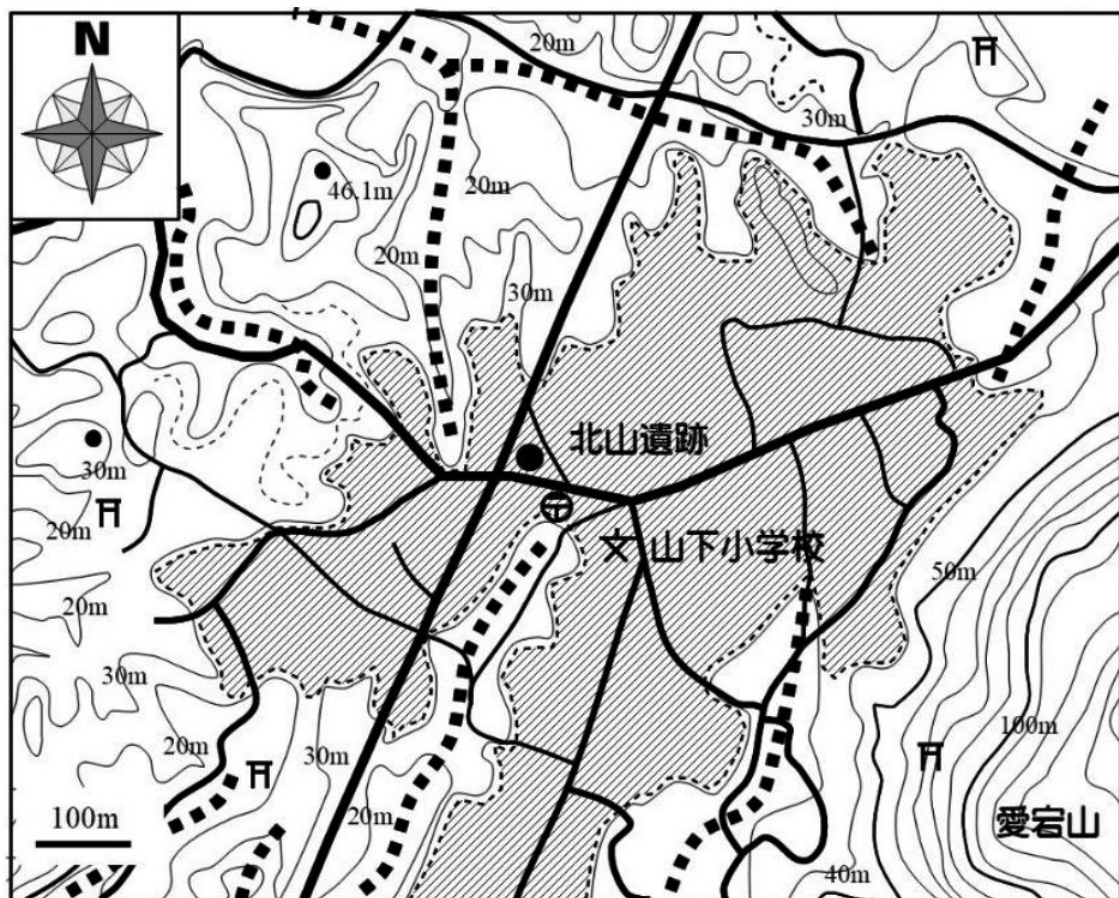
古墳時代の遺跡では、脇本古墳群、新田ヶ丘古墳群、鳥越古墳群がある。鳥越1号墳は墳丘が削平され形状は不明だが、堅穴式石室は初期畿内型古墳の特徴を備えている。これら古墳群の周辺に、古墳の造営に関わった集落等があると考えられるが現在の段階では発見されていない。

古代では、波留・山下地区を中心とした台地上に諏訪ノ前遺跡のほか10遺跡が確認されている。この地域は、出水郡に属し、延喜式に記載の宿駅である英祢（あくね）駅の比定地の1つとされているが、発掘調査では確認されていない。

中世は莫祢氏を中心に時代が動いていくことになるが、第4節で詳しく記したい。阿久根における中世の遺跡は、城館跡と社寺跡が非常に多く見られる。また、中世の遺物の散布地も多く見られるが、新城跡と同一台地上に存在する北山遺跡および諏訪

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	種別	主な時代
1	206	21	新城跡	鹿児島県阿久根市山下新城	城館跡	中世
2	206	34	北山	鹿児島県阿久根市山下字北山	散布地	縄文、古墳、古代、中世、近世
3	206	38	諏訪ノ前	鹿児島県阿久根市波留字諏訪ノ前	散布地	古代、中世
4	206	8	楞嚴寺跡	鹿児島県阿久根市山下	社寺跡	中世、中世室町
5	206	39	下谷	鹿児島県阿久根市山下字下谷	散布地	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世
6	206	9	阿久根城跡	鹿児島県阿久根市山下峰	城館跡	中世
7	206	22	中之城跡	鹿児島県阿久根市山下	城館跡	中世
8	206	40	菟野	鹿児島県阿久根市鶴川内菟野	散布地	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世
9	206	43	奥	鹿児島県阿久根市山下	散布地	縄文時代
10	206	37	大蔵庵	鹿児島県阿久根市波留字大蔵庵	集落跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世
11	206	11	大石城跡	鹿児島県阿久根市波留	城館跡	中世
12	206	57	上野畑	鹿児島県阿久根市鶴川内	散布地	縄文時代、古墳時代、古代、中世、近世
13	206	7	大曲窯跡	鹿児島県阿久根市高松町大曲	生産遺跡	
14	206	3	波留貝塚	鹿児島県阿久根市波留 1591	貝塚	縄文時代
15	206	20	小田城跡	鹿児島県阿久根市波留	城館跡	中世
16	206	15	賀喜城跡	鹿児島県阿久根市波留	城館跡	中世
17	206	36	鳥越古墳群	鹿児島県阿久根市湯字鳥越	地下式板石積石室 墳丘墓（石室のみ残存）	古墳時代



第2図 遺跡周辺の地形図



第3図 新城跡周辺遺跡位置図(1:25,000)

ノ前遺跡にも中世該当と考えられる遺構が検出され、遺物が出土していることから、阿久根市の中世における状況がより詳しく把握できると考えられる。

近世の遺跡は、脇本窯跡がある。平佐郷白和町の今井儀右衛門が有田から陶工を招いて、阿久根市脇本で1772年に窯を開窯した。しかし資力が続かず1781年に廃窯する。平佐に儀右衛門は戻るが、北郷窯を開窯し、後の平佐焼窯跡群につながっていくこととなる。

第3節 新城跡周辺の中世山城について

東側に位置する愛宕山周辺には中世莫祢氏の本拠

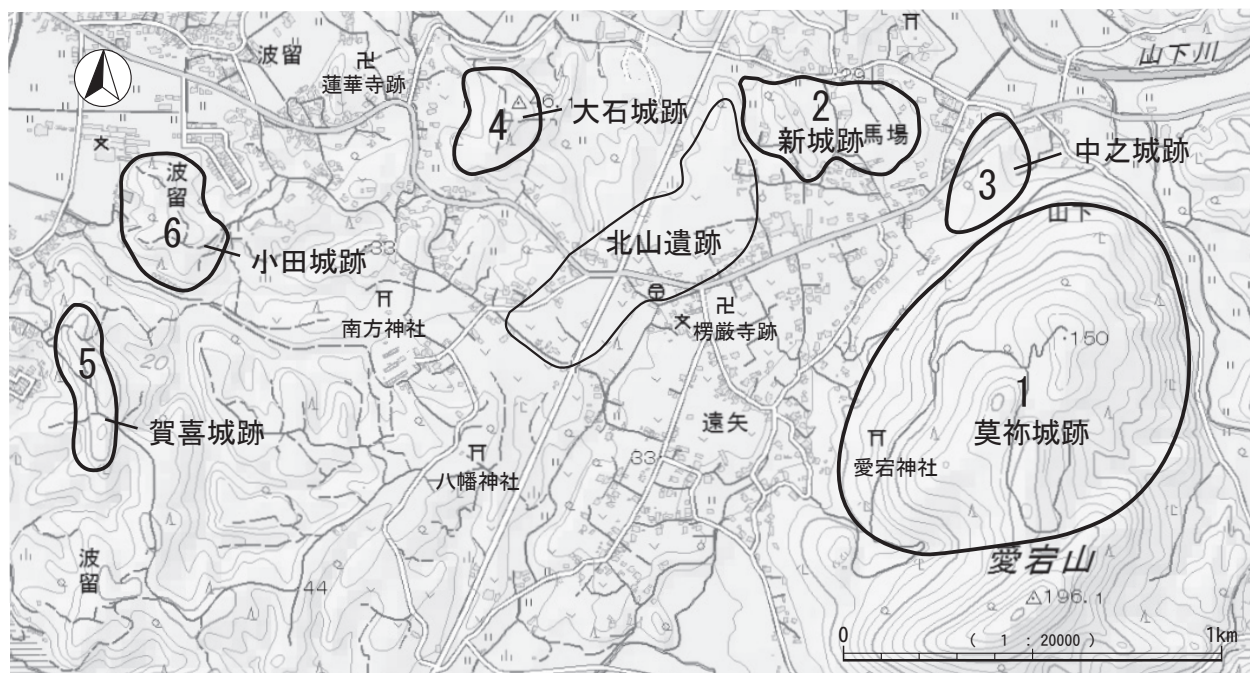
地である莫祢城が築かれ、その西麓の山下から波留にかけての台地には中ノ城跡、新城跡、大石城跡、小田城跡、賀喜城跡などの山城が点在する。これらの遺跡は、北山遺跡および居館推定地の山下小学校を取り囲むように台地縁辺に立地している。

北山遺跡周辺は、中世にはこの地域を支配した莫祢氏の居館や寺院があったとされる。また、発掘調査によって、13～16世紀代の集落跡が確認され、中世において、地域の歴史上重要な役割を果たした地域と考えられている。また、山下台地周辺には莫祢氏が創建したと伝わる多くの寺院跡が残っている。新城跡を含む山城は、立地から北山遺跡を守る防衛拠点の可能性がある。

第2表 新城跡周辺の中世山城

番号	遺跡名	所在地	地形	残存度	存続期間	築城者	在城者	遺構	備考
1	莫祢城	山下峯	山地	やや良	弘安年間～文禄2年	阿久根氏	阿久根氏有馬氏	郭、通路	
2	新城跡	山下新城	台地	消滅	永禄年間～文禄2年	阿久根氏	阿久根氏	掘立柱建物跡、柵列、土坑、炉跡、虎口状遺構	本報告書
3	中之城跡	山下	台地	消滅	室町中頃～寛永以前	阿久根氏	阿久根氏	焼土遺構、方形土坑、ビット	報告書刊行 2003 阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
4	大石城跡	波留	山地	やや良	元弘年間～文禄2年	大石氏	大石氏	郭、石垣、井戸、通路、大石	
5	賀喜城跡	波留	山地	やや良	弘安年間～正安年間	莫祢氏	莫祢氏	郭、池、通路、井戸	(別称) 大竹城
6	小田城跡	波留	丘陵	やや良	弘安年間～正安年間	莫祢氏	莫祢氏	郭、通路	

鹿児島県教育委員会 1987『鹿児島県の中世城館跡－中世城館跡報告書－』
鹿児島県埋蔵文化財調査報告書より作成



第4図 新城跡周辺の中世山城位置図

第4節 莫祢(阿久根)氏について

平安時代末期に神崎太郎成兼が莫祢院の名を冠して莫祢氏を称したとされている。二代成秀までは、居住地を阿久根市波留と山下との中間、現在の諏訪神社（南方神社）周辺の角地区に定め、ここから尾根伝いに南西に延びる賀喜城および小田城を拠城としたとされている。

中世における莫祢（阿久根）氏による統治は、大きく二期に区分できる。第一期は、莫祢氏が鎌倉幕府の御家人として新たに島津庄の守護に任命された島津氏に追従しながら統治にあたった期間である。第二期は、1451年から1593年までになり、島津好久の出水郷入りから、薩州家断絶までの期間である。

莫祢（阿久根）氏は、初代から十四代まで続き、文献資料による位置づけは、以下のとおりである。

第一期(三代成光・四代成綱・五代成友・六代成忠・七代成重・八代成村)

建久8（1197）年に作成された建久図田帳の中に三代成光の名が記されている。このころに拠城としていた賀喜城・小田城を取り囲む入江がしだいに遠浅になり戦術的価値を失ってきたので拠城を山下の東側高地に移して莫祢城と命名し、その居所も角地区から山下馬場地区に移したという伝承が残っている。

三代成光から五代成友までは勢いが盛んであり、島津忠久が山門院の経営にあたらせた本田貞親が木之牟礼城（高尾野）や桑原城（鶴川内）を築城し莫祢氏に備えたといわれている。鎌倉末期から室町初期の六代成忠や七代成重のころには島津氏との主従関係を深くした。

第3表 莫祢（阿久根）氏の歴代当主と概要

時代	西暦	概要	歴代	当主
平安時代	900	英祢駅が設けられた	始祖	平 季基
	1024	平季基が島津荘を開拓。子の兼輔が神崎氏を称す		兼輔
				神崎 兼第
				成道
	1124	神崎太郎成兼が、平氏のもとで莫祢院司になり莫祢氏を称す。賀喜城ができた。	初代	莫祢 成兼
			2代	成秀
鎌倉時代	1197	莫祢氏 3代成光が鎌倉幕府御家人になる。 この頃、莫祢（阿久根）城を築城する。	3代	成光
			4代	成綱
	1262	莫祢氏 5代成友が折口・多田を、後に川内長崎も領地に加える。この頃川内長崎の南方神社を波留に勧請する。	5代	成友
南北朝期 室町時代 戦国期			6代	成忠
			7代	成重
			8代	成村
	1451	出水に薩州島津家をおこした。「莫祢」を「阿久根」に改めた。	9代	阿久根 良忠
			10代	良守
			11代	良速
安土桃山	1547	田代の戦い 島津実久×渋谷氏東郷重治（島津勝利） 島津寛久と阿久根氏 12代良正が南方神社を再興する。 この頃、新城に拠点を置いたとされる。	12代	良正
	1557	大川の戦い 島津義虎×東郷重治（東郷勝利）	13代	良有
	1561	ポルトガル船が阿久根に来航した。		
	1568	深迫の戦い 島津義虎×東郷重尚（東郷勝利）		
	1586	関白豊臣秀吉の九州征伐	14代	良照
	1593	薩州島津家領地が没収された。朝鮮出兵（文禄の役）。阿久根氏離散		

七代成重のころに島津貞久に従い九州南部の各地を転戦したが、莫祢氏一族に多くの戦死者を出し、加えて莫大な出費のために次第に一族の衰退を招くことになった。

八代成村になるとますます弱体化し、守護島津氏が莫祢領の一部を渋谷氏の一族入来院弾正少弼に政略的に割譲した。この状態は、島津総州家が滅び、さらに出水の地に薩州島津家が創設されるまで続いた。

第二期(九代良忠・十代良守・十一代良速・十二代良正・十三代良有・十四代良照)

宝徳3(1451)年出水郡を領する薩州家が創設されると、九代良忠は家名を「阿久根」とし、先祖伝来用いた「成」を「良」に改め、自ら「阿久根播磨守良正」と名乗り、薩州家初代好久の家老となった。

十代良守と十一代良速に関する詳しい資料は残っていない。十二代良正と十三代良有の時代は、島津氏の三州統一と深い関わりがある時期で、室町時代の末期に起こった渋谷氏を相手とした島津氏の統一時代の争いは規模が大きく、各地に古戦場として伝えられている。

また、十二代良正は、天文16(1547)年八月初九日に、薩州家当主島津実久、義虎と共に波留南方神社を再興したほか、阿久根城の「新城」に拠点を置き、阿久根城域を広げたとされている。

十四代良照は、薩州家七代忠永(初め忠辰)の家老であったが、文禄の役に主君忠永が秀吉の怒りに触れて出水郡の所領を没収されたので、良照も新たな主君に使えることを拒んで山下を去り、阿久根氏は各地に離散することとなった。ここに莫祢氏(九代以降は阿久根氏)と莫祢領との十四代にわたる関係は終わることとなる。

ー引用・参考文献ー

藤崎琢郎2024『鎌倉・室町時代における莫祢(阿久根)一族と阿久根・川内地方』「千台」第52号(薩摩千台郷土史研究会)抜粋

五代秀堯ほか編纂1982『三國名勝圖會』

阿久根市1974『阿久根市誌』阿久根市誌編さん委員会編

阿久根市教育委員会1992『鳥越古墳群』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

阿久根市教育委員会1982『北山遺跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

阿久根市教育委員会1997『鳥越古墳群 大蔵庵遺跡・北山遺跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

阿久根市教育委員会2003『中之城跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

鹿児島県教育委員会1987『鹿児島県の中世城館跡—中世城館跡報告書—』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書

鹿児島県教育委員会1997『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(VI)』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(72)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2012『陣之尾遺跡・陣之尾墓跡 上野畑遺跡・広段遺跡 北山田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(167)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書2023『北山遺跡1』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(51)

第5節 阿久根IC～西目IC(仮)間の遺跡

南九州西回り自動車道の阿久根IC周辺～西目IC（仮）間には、第4表に示すとおり3か所の遺跡が存在する。ここでは、その遺跡の概要を記載する。

第4表 阿久根IC～西目IC間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	調査面積 発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺 跡 の 概 要		
					時代・時期	主 な 遺 構	主 な 遺 物
1	上野畑	阿久根市鶴川内 散布地	調査面積 3900㎡	報告書刊行 2012 県立埋文センター 調査報告書 167	縄文時代 ～近世	竪穴状遺構1基 掘立柱建物跡2棟 炉状遺構2基 柱穴28基 土坑1基	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁 石鏃、削器、磨製石斧、磨石
			調査期間 2009.08.03 ～ 2009.10.28				
上野畑遺跡は、縄文時代晩期から近世の遺構である。掘立柱建物跡や炉状遺構は当該期の生活の一端を知る資料となった。							
2	北山	阿久根市山下 ・字北山	本調査 3121㎡ 4481㎡ 11549㎡ 9327㎡ 2530㎡	報告書刊行 2023・2025 (公財)埋文調査 センター 51・61	縄文時代	集石5基 土坑1基 落とし穴2基	加栗山式、小牧3A、吉田式、別府原式、政所式、中原1類、中原2類、中原5類、塞ノ神B式、その他早期土器、春日式、阿高系(南福寺式含む)、西平式、その他後晩期土器 石鏃、スクレーパー、石錐、二次加工のある剥片、石核、打製石斧、磨製石斧、石皿、台石、砥石、石錘、敲石、磨敲石、磨石、凹石、軽石製品、その他石製品
					古墳時代	—	東原式土器(甕、壺、高坏等)等
					古代	—	土師器(甕・坏・埵等)、須恵器(壺・碗等)、黒色土器B類、越州窯系青磁、土錘、土製品、文字資料(へら書き・墨書)【へら書き:土師器、墨書:須恵器】
					中世	掘立柱建物跡12棟 竪穴建物跡1軒 土坑35基 溝条遺構8条 礫集積4基(溝内) 石列4基(溝内)	土師器(坏・皿等)、中世須恵器(東播系・産地不明等)、瓦質土器(播鉢・火鉢・風炉等)、国産陶器(播鉢・甕等)【備前・常滑等】、青磁(碗、皿、坏等)【龍泉窯系・同安窯系等】、白磁(碗・皿・合子等)【中国を基本として朝鮮も含む】、青花(碗・皿等)【景德鎮窯・漳州窯等】、輸入陶器(壺・甕・瓶等)【中国南部・タイ産等】、滑石製石鍋、石錘(石鍋転用)、茶臼、銭貨(洪武通宝)、打欠石
			近世		掘立柱建物1棟 土坑9基	陶器(薩摩焼・備前焼等)、磁器(肥前、古伊万里等)、鉄製品、青銅製品(キセル等)、銭貨(寛永通宝)、火打石、金床石、天草砥石、硯	
			鍛冶・製鉄 関連遺構		製鉄炉4基 竪穴建物1棟 土坑13基	陶器(薩摩焼・備前焼等、磁器(肥前・古伊万里等)、鉄製品、鉄滓、羽子、炉壁等	
			その他		土坑22基 炉跡6基 柱穴・ビツ974基	天草砥石、打欠石、基石、硯、銅製品、古銭、鉄製品	
			北山遺跡は、阿久根市山下および波留に位置し、阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約30～37mの台地上に所在する。遺跡周辺は、古代の英祢駅比定地のひとつと考えられ、東側に位置する愛宕山には、中世莫祢氏の本拠地である阿久根城跡があるなど、古代から中世において歴史的に重要な役割を果たした地域といえる。 調査区では、縄文時代から近世までの遺構・遺物の検出・出土が確認された。特に中世から近世にかけては多く、阿久根地域における有力者の集落跡と推測される。				
3	諏訪ノ前	阿久根市波留 ・字諏訪ノ前	本調査 6646㎡	報告書刊行 2025	縄文時代	—	曾畑式・市来式・西平式・上加世田式・三万田式土器 石鏃、磨敲石、石斧、石錘、石製品
					古墳時代	—	成川式土器(東原式・笹貫式)
					古代	埋甕	須恵器、土師器、紡錘車、土錘
			調査期間 2023.05.08 ～ 2024.01.26	(公財)埋文調査 センター 60	中世	掘立柱建物跡5棟 竪穴建物跡1軒 土坑19基 トイレ遺構6基 溝状遺構2条 礫集積遺構1か所 ビツ227基 炉跡21基 段状遺構1か所(道跡1条含む)	須恵器(瓦質・土師質含む)、土師器、中国磁器(青花・青磁・白磁) 陶器(備前・常滑・国外)、土錘 砥石、滑石製品、水輪 懸仏本尊、洪武通宝、角釘、指貫
					近世～近代	—	陶器(薩摩焼・備前等)、磁器(肥前系・関西系)、土製品、青磁獅子香炉脚部
					時期不詳	—	土製品、金属製品
諏訪ノ前遺跡は阿久根市波留に所在し、阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約35m～30mの斜面上に立地する。遺跡周辺の地域は古代の英祢駅があったとされる比定地のひとつであること、阿久根氏の居城である阿久根城をはじめ居城跡が点在するなど、特に古代～中世にかけて歴史的に重要な役割を果たした地域であるといえる。 今回の調査では、溝状遺構、炉跡、掘立柱建物跡、土坑などが検出された。その中でも、科学分析によって裏付けられたトイレ遺構は南九州で初めての例となり貴重な成果となった。遺物は、縄文～近代までの幅広い遺物が出土しているが、中心となるのは中世後半(14世紀～16世紀頃)の貿易陶磁器や、瓦質及び土師質の播鉢・火鉢である。特筆すべきは五輪塔の水輪や懸仏の本尊などの宗教的意味合いが強い遺物が出土していることであり、阿久根氏に加え、遺跡の北西側に位置する波留南方神社との関係も深いと考えられる遺跡である。							



第Ⅲ章 発掘調査の方法と層序

第1節 本調査

発掘調査の方法

調査に先立ち、本遺跡の調査区割り（グリッド）の設定を行った（第6図）。鹿児島国道事務所が打設した道路建設用センター杭「STANo.275」と「STANo.270」を結ぶ線を基準に調査区内に10m間隔の区画（以下グリッドという）を設定し、その延長ラインをE・Fの境界とし、北から南へA・B・C・D…列、西から東へ1・2・3・4…列と呼称することとした。

本遺跡に関する世界測地系座標は、E-4区とF-5区の接点が世界測地点座標 $X = -109200.581$ 、 $Y = -74100.146$ である。同じくE-7区とF-8

区の接点が世界測地点座標 $X = -109183.772$ 、 $Y = -74075.327$ である。また、E-21区とF-22区の接点が世界測地点座標 $X = -109105.329$ 、 $Y = -73959.367$ である。

調査区には、それぞれ2か所の谷と台地が交互に所在し、谷は遺跡の南側を谷頭として、北側に流れる高松川に向かって開ける。そのため地形の違いから4地点に区分けして調査を行った（第6図）。地層の堆積状況や残存状況は地点ごとに大きく異なり、状況に応じて発掘調査の方法や遺構の認定・検出の方法を変えながら調査を行った。そのため、本章では各年度の概要について記載し、各地点の詳細については、第Ⅳ章調査の成果の中で説明する。



第6図 調査区範囲および断面図

(1) 令和4年度の調査

西側谷部調査区、西側台地部調査区、東側谷部調査区の本調査を実施した。

本調査は湧水による安全面と、効率性を考慮し、乾燥している西側谷部・西側台地部は5月～1月に調査を行い、湧水のある東側谷部は、雨の多い夏場を避けて10月～1月に調査を行った。

(2) 令和5年度の調査

令和5年度の調査範囲は、当初18～25区の予定であったが、第1章第1節の記述の通り調査範囲の変更があったため、18～24区を調査した。重機および人力で表土を剥ぎ取った後、5か所のトレンチを設定し、トレンチごとに層および遺物の出土状況を確認しながらシラス層までを掘削した。

第2節 整理・報告書作成作業

整理作業は埋蔵文化財調査センターが令和5～6年度に実施した。

1 整理作業の方法と内容

図面整理は、遺構配置図、遺構実測図、土層断面図等に仕分けし、台帳や遺物と照合した。

水洗いは、未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。

注記は、遺跡名を表す記号を「ASJ」とした。

土器や陶磁器の分類・接合は遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、遺構内遺物を中心に行った。石器については、種類ごとに分類した。鉄製品は埋文センター精密分析室で、クリーニングとX線写真撮影を実施した。その後、掲載遺物の抽出を行った。

また、令和5年度の整理作業において炉跡や土坑の埋土のウォーターセパレーションを行い、採取することができた炭化材や炭化種子の中から複数点抽出し、放射性炭素年代測定と種実・樹種同定を(株)パレオ・ラボとパリオ・サーヴェイ(株)に委託した。

2 報告書作成の方法と内容

遺構図については、図面のチェックを行い、検討を重ねた上でトレースを行った。

掲載遺物については、実測・トレースを行い、必要に応じて撮影用ボックスにて挿図用写真を撮影した。

遺構内遺物については、出土した層と位置を精査し、遺構ごとに掲載した。また、出土位置が確定できるものについては遺構図内に明示した。

包含層出土の土器・陶磁器については、時代別、種類別、器種別、部位別、特徴別の順番で分類し、レイアウトを行った。石器・鉄器は時期判定が困難であり、時期不明遺物として一部掲載した。

写真図版については、現場写真のレイアウト、遺物写真のレイアウト・撮影を行った。その際、土器・陶磁器については写真撮影用の復元を部分的に行った。

原稿執筆、観察表作成を進めながら編集作業を行い、印刷・製本を実施した。

第3節 層序

本遺跡は、西側から標高約31～32mの西側谷部、標高約37mの西側台地部、標高約25mの東側谷部、標高約31～33mの東側台地部から構成されている。高低差が大きく、先述のように流水の影響を受ける場所もあり、地層の在り方が一様ではない。そのため新城跡としての統一した基本的層序を提示することは難しい。よって、層序に関しては、第IV章にて地点ごとに報告する。

第4節 新旧遺構対応表

調査時の遺構名については、報告書作成段階で第5表の通り名称変更を行った。

第5表 新旧遺構対応表

本調査 (旧名称)		報告書 (新名称)		本調査 (旧名称)		報告書 (新名称)	
SP138	SB5	掘立柱建物跡 1号	P1	SP142	棚列 1	棚列 1	P1
SP141			P2	SP098			P2
SP144			P3	SP118			P3
SP140			P4	SP109			P4
SP086			P5	SP082			P5
SP065	SB4	掘立柱建物跡 2号	P1	SP145	棚列 2	棚列 2	P6
SP061			P2	SP117			P7
SP060			P3	SP113			P8
SP077			P4	SK51			土坑 1号
SP011			P5	SK04	土坑 2号		
SP066			P6	SK54	土坑 3号		
SP068			P7	SL01	炉跡 1号		
SP069			P8	SL04	炉跡 2号		
SP007			P9	SL11	炉跡 3号		
SP009			SB3	掘立柱建物跡 3号	P1	SL05	炉跡 4号
SP049	P2	SL09			炉跡 5号		
SP010	P3	SL08			炉跡 6号		
SP055	P4	SL07			炉跡 7号		
SP014	SB2	掘立柱建物跡 4号	P1	SL12	炉跡 8号		
SP015			P2	SL10	炉跡 9号		
SP040			P3	SL03	炉跡 10号		
SP170			P4	SL02	炉跡 11号		
SP005			P5	SD 1	溝状遺構		
SP018			P6	窪地	虎口状遺構（大型土坑、通路状遺構）		
SK09			P7				
SP022	SB1	掘立柱建物跡 5号	P1	SS 1	集石 1号		
SP024			P2	※ SP 1 ～ 72 については、第 8 ・ 9 表 のピットの埋土観察表に旧遺構名を 併記する。 ※ SL12 号は近世に帰属する。 そのほかの遺構は中世に帰属する。			
SP037			P3				
SP034			P4				
SP032			P5				
SP031			P6				

第Ⅳ章 調査の成果

第Ⅲ章に記したように、本遺跡は、西谷・西台地・東谷・東台地と2つの谷と台地が交互に位置している。以下に各調査区ごとの発掘調査の成果を記す。

本章以降の遺物の分類・年代については凡例を参照いただきたい。本報告では第Ⅳ章以降の本文中の中世陶磁器の分類は、以下の文献を主に参考にし、詳細については観察表中に記した。

2021池谷初恵・小野正俊・岩元康成・小出麻友美・佐々木健作・村木二郎「中世琉球における貿易当時調査Ⅰ」『中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第226集

第1節 西谷の調査

1 発掘調査の概要

遺跡の西端には北山の台地を分断して走る谷があり、この地区を西谷とする。西谷の中央には生活道路があり、その両側には民家が建っていた。本調査は令和4年度の6～10月に実施した。台地部との境界は約4mの急峻な崖である。

西谷は堀切等の遺構が存在することを想定し、調査に着手した。その理由は、隣接する西台地で中世の遺構・遺物がみつかり、山城の一部の可能性が窺えたためである。

調査は、生活の支障にならないように里道を避けて西側と東側に調査区を設定し、便宜上西側を調査区1、東側を調査区2と呼称し調査を行った。里道の調査については調査区1・2の状況をみて判断することとした。

調査の方法は、表土（耕作土・造成土）を重機で掘削した後、人力掘削、精査を行った。排土についてはダンプカーで東谷へと搬出し、調査終了後に再度土を運搬して埋め戻しを行った。

2 層序

調査区1・2は、宅地であったことから厚い造成土が堆積しており、その直下はシラスである。旧表土は部分的に残存するのみであった。

基本層序は下表のとおりである。

第6表 西谷基本層序

層序	土質・土色	層厚	備考
I	表土 (褐色土: 7.5YR4/3)	—	—
II	造成土 (シラスを主体とする)	—	土質の違いにより II a層～II h層に分層
III	シラス	—	—

3 発掘調査の成果

(1) 調査区1 (第8図)

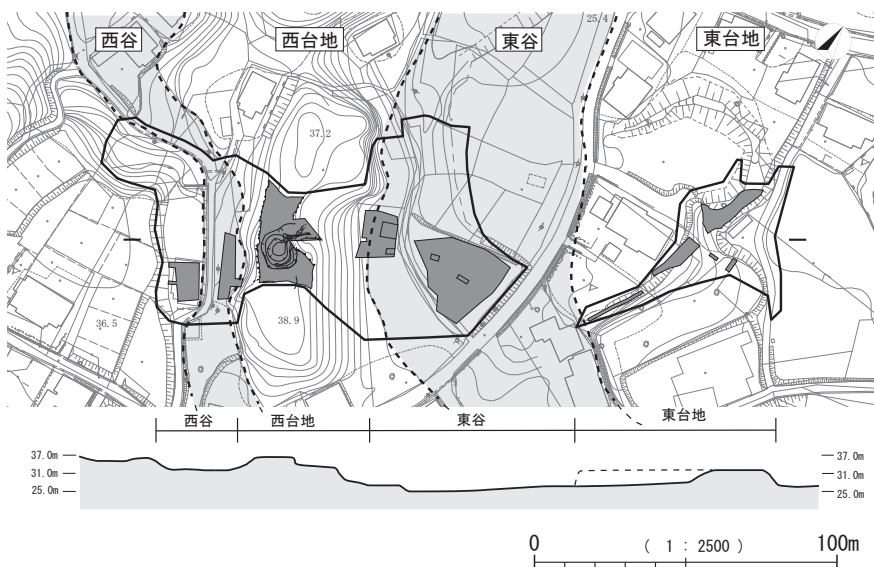
調査区1では、近代まで宅地として利用されていたことによる造成土やトイレの可能性のある大甕の破片等が確認された。

重機で造成土を掘削し、シラス上面を人力で掘削し精査したところ、近現代の遺物に混在して中世の陶磁器の小片がごく少数に出土したのみで、遺構や遺物包含層はみつからなかった。そのためシラスまで削平を受けていると判断した。調査区1の東側は攪乱のために落ちこんでおり、土層断面では北山遺跡側の台地が調査区まで広がっていた旧地形を確認できた。

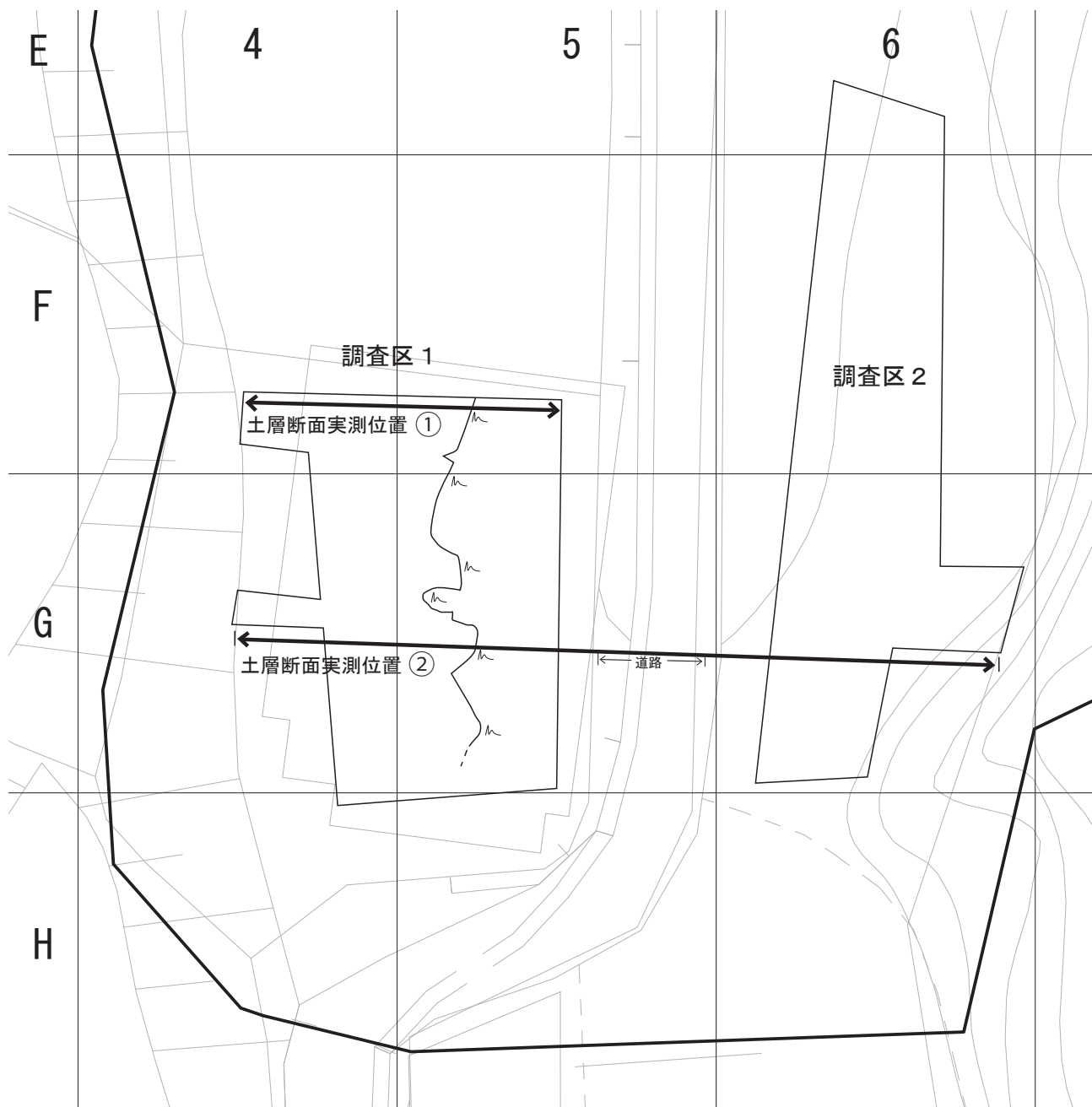
(2) 調査区2 (第8図)

調査区2も、宅地があったためにシラス主体の造成土(II a～II h層)が確認された。造成土の下はシラスが確認され、谷の斜面を確認した。シラス上面は改変を受けた痕跡があり、里道近くまでシラスの斜面を検出したが調査区1と同様に中世～近世の陶磁器の小片がわずかに出土するのみで、明瞭な遺構や遺物包含層は確認できなかった。

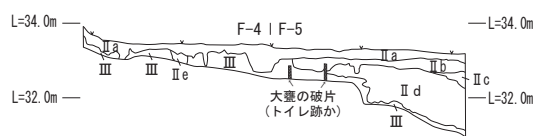
調査区1・2の調査では、旧



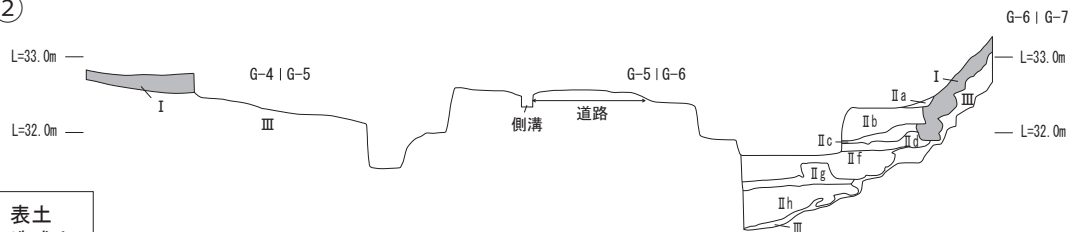
第7図 周辺地形および調査範囲図



①



②



I	表土
II	造成土
III	シラス

0 (1 : 200) 10m

第8図 西谷調査区および土層断面

地形の一部を捉えることができたが、西谷は広い範囲でシラス直下まで後世に大規模な地形の改変が行われたことが判明した。また、調査前に想定してい



写真5 北山遺跡から西谷・西台地を望む ※赤矢印は写真6の位置

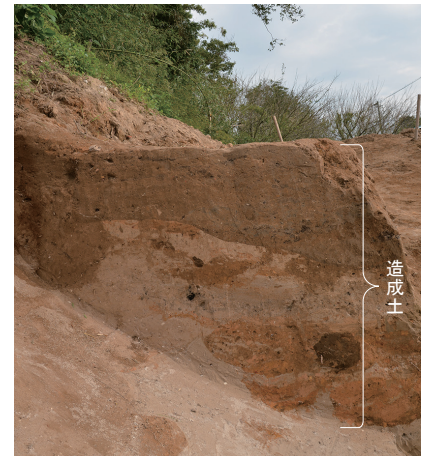


写真6 西台地土層断面写真

(3) 出土遺物 (1～18)

西谷では主に中世後半期（12世紀後半～16世紀頃）の青磁や青花、土師器、近世（18世紀代）の陶磁器が出土したが、ほとんどが小片で出土数も少なかった。また、近代まで宅地として使用されていたため近代（19世紀以降）の染付も少数出土した。

遺物は多くが調査区2から出土している。出土地点については観察表を参照いただきたい。

1～7は中世の遺物である。1・2は青磁である。1は12世紀後半～13世紀初め頃の同安窯系の皿の底部片で、見込みにジグザグ状の櫛点描文を施す。底部はわずかに上げ底で露胎する。2は14世紀前半頃の見込みに双魚文を施す折縁皿の底部片で、高台が付くと推測される。内外面に透明度の高い釉がかかる。6は龍泉窯系青磁碗B1類で、外面に鎗連弁文を施す。13世紀中葉～14世紀前半の遺物である。3は白磁の小杯である。見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。4・5は青花である。4は端反皿の口縁部片である。5は碁笥底をもつ皿の底部片で、見込みに「寿」の文字を描くと推測される。ともに漳洲窯産で胎土の特徴から同一個体の可能性も考えられる。15世紀後半から16世紀初め頃のC群に該当する。7は推定高台径9.5cmの土師器碗の底部片で、断面が四角形状の低い高台を有する。周辺の遺物の状況から鑑みて12世紀～13世紀初頭頃の遺物と判断したが、さらに遡る遺物の可能性もある。

8～17は近世以降の遺物である。

8～13は染付である。8・9は肥前系の碗の口縁部片である。8は外面に梅花文が描かれ、内面に数条の細い圈線を巡らせる。内面の下端部に釉は無く

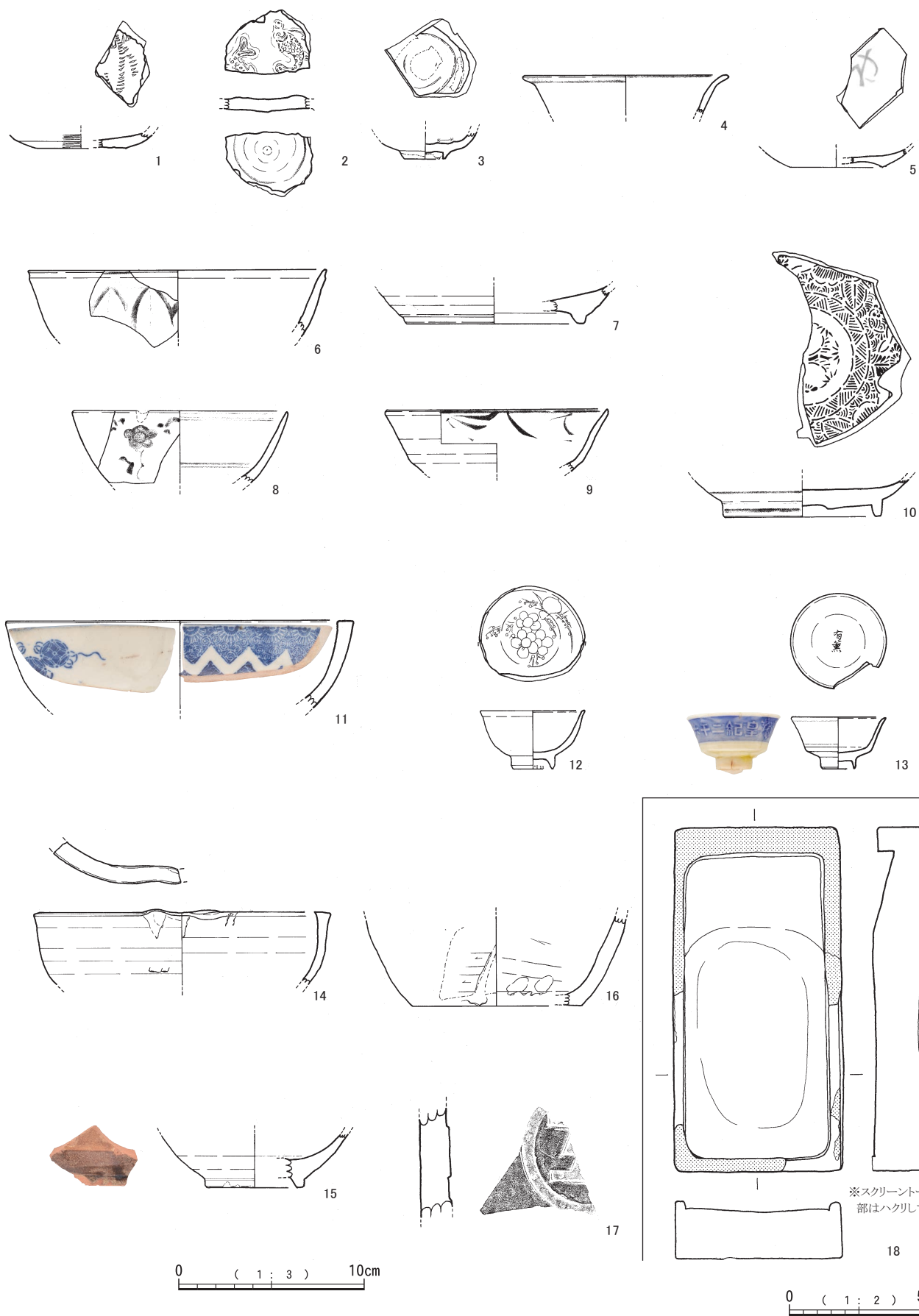
た堀や中世の包含層の痕跡はみつからなかった。このことから里道部分に遺構・遺物が存在する可能性は低いと判断し調査を終了した。

蛇の目釉剥ぎを施すと考えられる。胎土は灰色で18世紀後半頃の波佐見産の可能性もある。9は腰の部分で折れ、ゆるく外反しながら立ち上がる。内面にはコバルトで描いた笹文が巡る。明治期の遺物と考えられる。10・11は型紙摺絵の技法により施文された近代の染付である。10は大型の皿で蛇の目凹型幅広高台を有する。高台内には刷毛によって泥漿を塗布する。19世紀以降の肥前系の特徴である。文様はシャープに刷られる。11は推定口径18cmの鉢で、外面には鞠の文様が、内面には窓絵草花文が描かれる。文様はやや滲む。12・13は近代の小杯である。12は見込みに梅花文のプリントの痕跡が残る。13は「祝皇紀二千六百年」の浮き文字が型押しされ、見込みに「有薫」の銘がみられる。1940(昭和15)年に神武天皇即位紀元(皇紀)2600年を祝った行事の記念品と考えられる。

14～16は陶器である。14は19世紀代の関西系の淡い黄褐色を呈する鉢で口縁端部を肥厚させ、口唇部に平坦面を形成する。口縁部の外面にへら先による強い押圧を施す。内面には貝殻復縁による圧痕が数か所みられる。15・16は18世紀後半の薩摩焼である。15は龍門司系の碗で、白化粧の上に褐釉を施す二彩手である。高台内は露胎すると推測される。16は苗代川系の壺の底部片である。推定底径は9cm程の小型品である。

17は近代の瓦で、銘が型押しされる。

18は6.1×12.4cmの黒色頁岩製の硯である。左右両側面に針先で引っ掻いたような漢字様の傷がみられるが判読は難しかった。近代の宅地としての利用による遺物と判断される。



第9図 西谷出土遺物

第2節 西台地の調査

1 発掘調査の概要

西台地は、西谷と東谷に挟まれた標高約37mのシラス台地である。台地は高松川にのびる痩せ尾根状の舌状台地で、調査区の両端は急峻な崖である。そのため重機が登ることが困難であると判断し、人力で掘削を行った。

本調査は令和4年度の5月～1月に実施した。

台地の東半分は、畑の造成・整地によって5m程度切り下げられていたため、当初は西半分のみを調査対象としていた。しかし、虎口状遺構が発見され、通路状遺構が東谷までのびることが明らかになり、調査終了間際に東谷まで調査範囲を拡大した。台地東半部の調査は小型の重機を台地にかけて通路状遺構を追いかけるとともに、斜面に残っていた階段状の地形にもトレンチを入れ曲輪の有無を確認した。通路状遺構は台地の落ち際で宅地造成によって消滅しており、斜面で曲輪は確認できなかった。

西台地では、中世を中心とした多くの遺構・遺物を検出した。

遺構は、全て表土直下のシラス（Ⅱ層）上面で検出した。遺構埋土は、シラスと表土の混ざったような明るい土である。そのため近世・近代に帰属すると思っていたが、埋土に中世の遺物を包含するため時代の見直しを行い調査対象とした。

遺構調査は、検出後に配置図を作成し、掘立柱建物跡の想定を行った。柱穴については掘立柱建物跡

を構成するものを優先して土層断面図の図化を行った。それ以外の柱穴は遺構台帳に時期・特徴を記し平面図とエレベーションを作成した。

大型土坑は、深度が深くなったことから数回に分けて土層断面実測と写真撮影を行った。

遺構の図化作業は手実測及びトータルステーションで行い、排土はベルトコンベアーを使用して東谷へ直接落とした。

なお、台地部の縁辺は、崩落や斜面上に生えた樹木の影響によって確認することができなかった。

2 層序

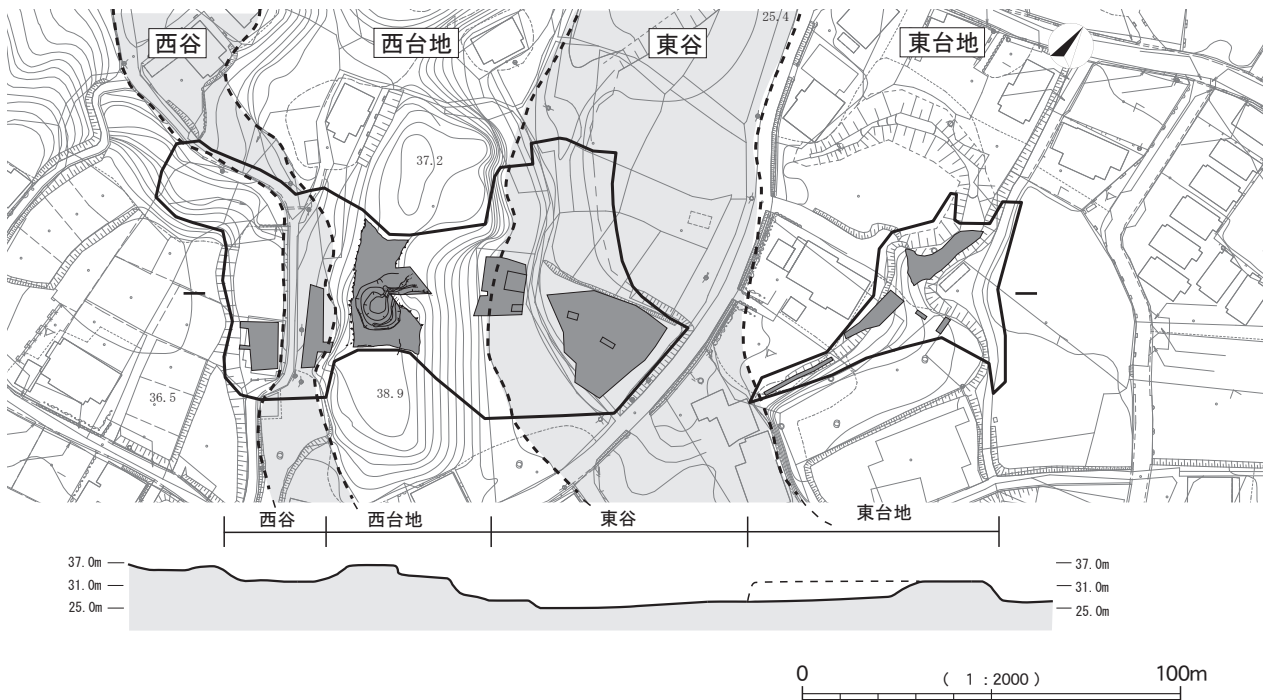
基本層序は下表の通りである。

第7表 西台地基本層序

層序	色調・土質	層厚	備考
I	表土	20cm ～	—
II	シラス (暗黄褐色砂質土)	—	—

西台地は、昭和初期は畑地として、戦後は果樹園としての利用が古地図、米軍による航空写真、国土地理院の航空写真等から確認でき（写真8）、畑として土地利用が続いていたと考えられる。遺物包含層は畑の造成によって削平されており確認できなかった。

表土（Ⅰ層）からは、古代～近現代までの様々な遺物が混在しながら出土した。



第10図 周辺地形および調査範囲図



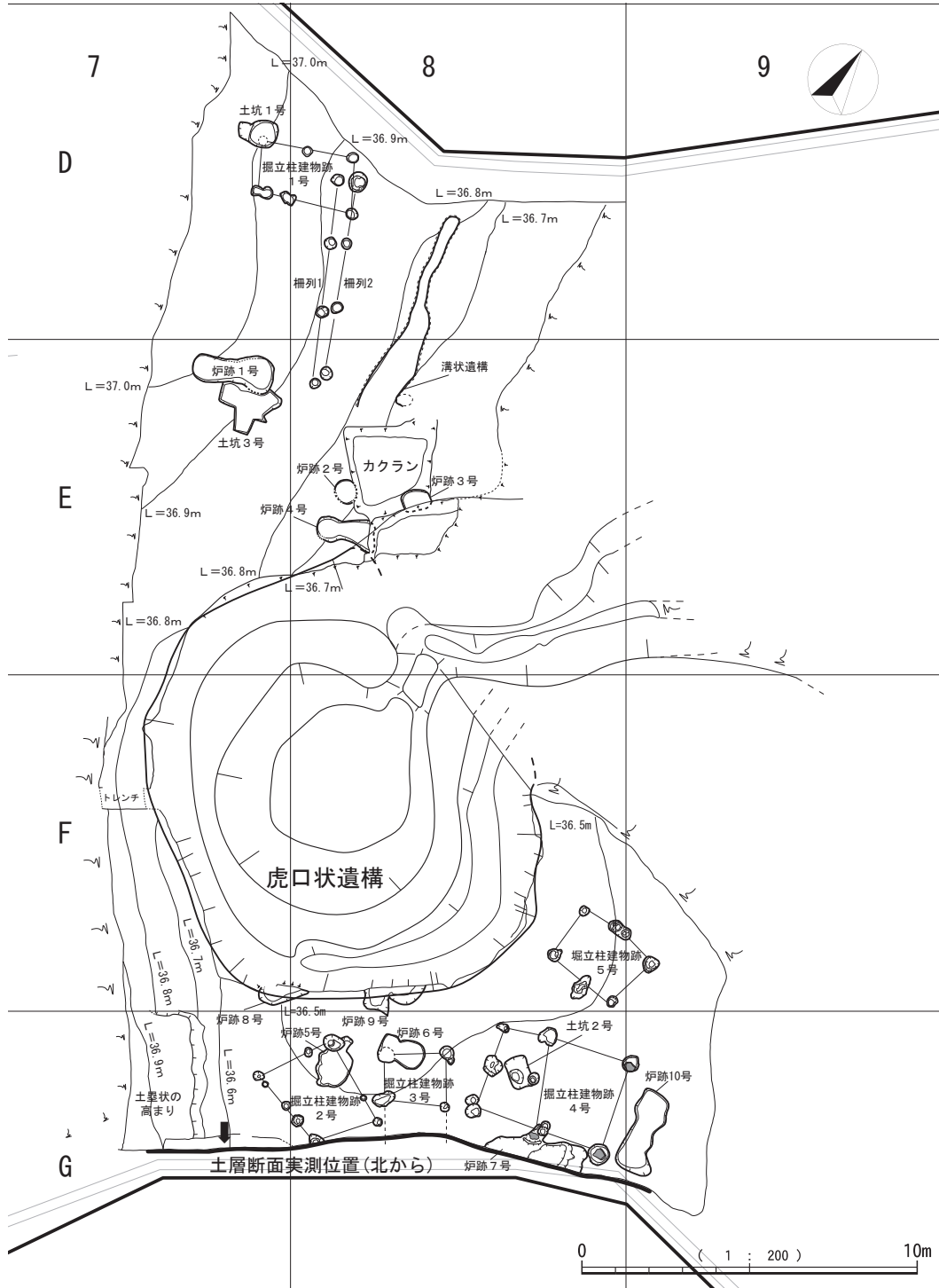
写真7 調査前の西台地(樹木伐採後:東から撮影)



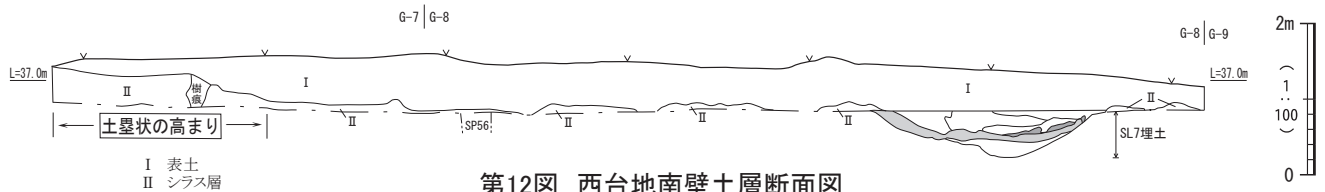
写真8 1960年代の西台地(赤丸部分)

畑や果樹園として利用されている。

(国土地理院 航空写真データベースより)



第11図 西台地遺構配置図



第12図 西台地南壁土層断面図

3 発掘調査の成果

今回の調査で、台地の中央に位置する虎口状遺構によって、平坦地が南北に分断されていることが判明した。大型土坑の周囲では掘立柱建物跡5棟、柵列2列、土坑3基、炉跡11基、ピット72基が検出され、一部は切り合っている状況であった。これらの遺構は埋土中の遺物や炭化物の年代測定の結果などから、ほとんどが中世（14世紀～16世紀頃）に帰属すると考えられ、上記のうち近世に該当するものは炉跡1基のみである。

西台地を形成するシラス層は崩れやすい。虎口状遺構は構築された中世後半以降、機能を失った後も台地上の遺構・遺物を巻き込みながら埋没していった状況が窺え、埋土からはI層と同様に古代から近代の遺物が多数出土した。

詳細は時代・遺構ごとに報告する。

(1) 中世の調査成果

遺構

今回の発掘調査で検出した中世後半期の遺構は、掘立柱建物跡5棟、柵列2列、土坑3基、炉跡10基、ピット72基、溝状遺構1条、虎口状遺構1基である。遺構はすべてII層上面で検出した。また、調査区南西端に土塁状の高まりを検出した。

遺構同士の切り合いや近接から、西台地上の曲輪は数時期にわたって機能していたことが窺え、遺物や遺構内から出土した炭化物の年代測定の結果から判断すると概ね15世紀半ば～16世紀末頃の中世後半期に帰属すると考えられる。

虎口状遺構は、先述のように西台地調査区を南北に分断する規模で深い大型土坑を有する。そして東谷へと下る傾斜地に断面形が「V」の字状の堀切様の通路を設ける。詳細については後述する。

大型土坑より北側は、掘立柱建物跡1棟、柵列2列などを検出した。また南北方向に走る浅い溝状の硬化面を1条検出した。

大型土坑より南側はわずかに標高が低い。掘立柱建物跡4基などを検出した。ほかにも建物跡を構築したと考えられるピットを北側よりも密に検出し、

建て替えが頻繁に行われたエリアであることが窺えた。台地の南西端には、高さ40～50cm程の土塁状の高まりを約2.0m×1.2mの範囲で検出した。検出状況から、遺構群は西台地のさらに南側に広がることが想定される。

遺構から出土した遺物数は少なく、ほとんどが中世の陶磁器・土師器等の小片であって、図化・報告する遺物の多くは、大型土坑と通路状遺構の埋土内から出土したものである。

大型土坑からは中世前半期（12世紀代）～近代までの幅広い時代の遺物が多数出土している。埋土の形成過程と堆積状況・遺物の出土状況は遺構の構築、使用、廃絶の時期を考えるうえで重要である。よって虎口状遺構から出土した近世以降の遺物は、中世の調査成果と一括して掲載する。

掘立柱建物跡

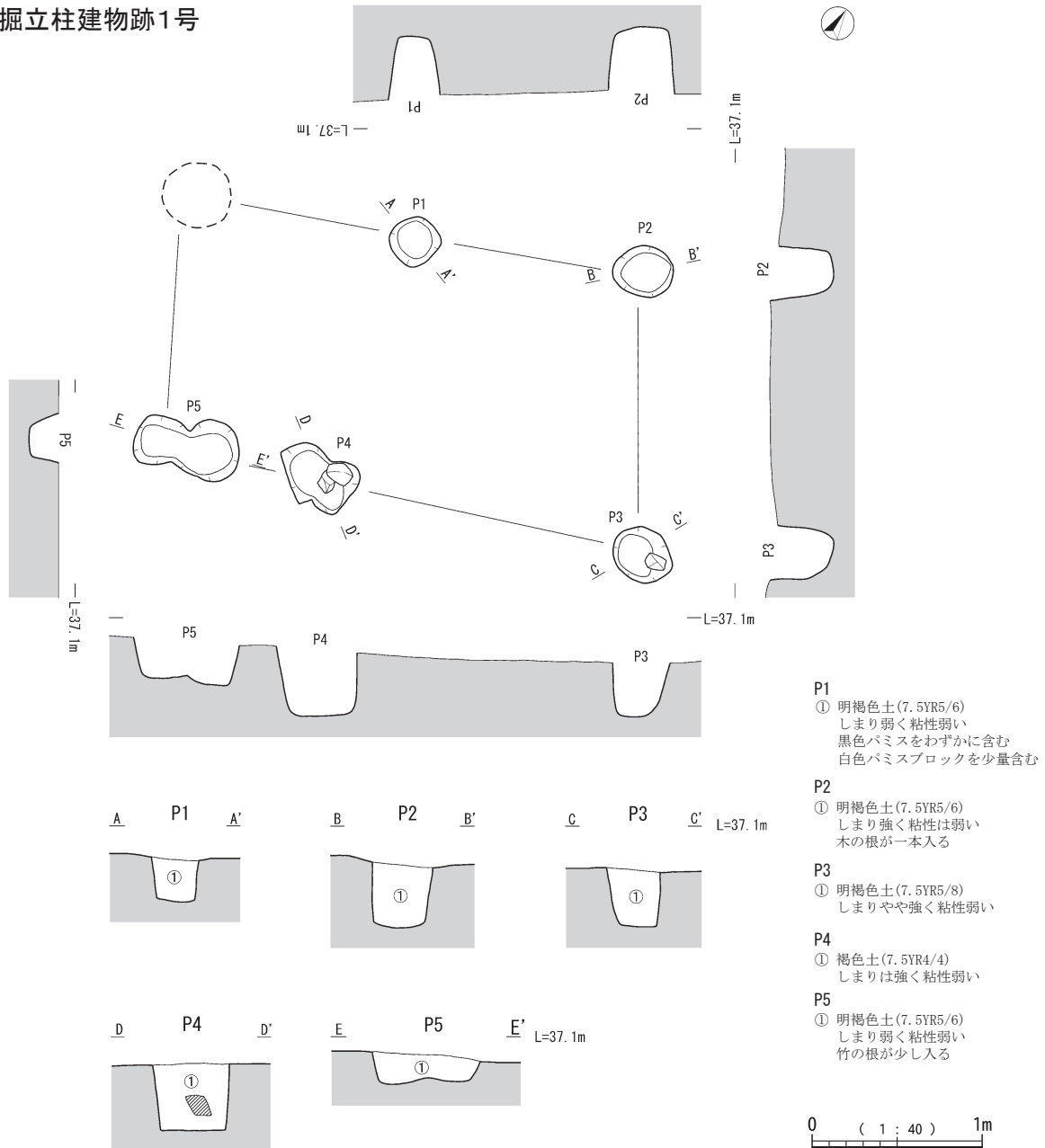
大型土坑の北側から1棟、南側から4棟検出した。本遺跡の建物跡は柱筋がやや整わず、いずれも梁行1～2間、桁行2間で、小規模の傾向がみられた。本遺跡で最大の掘立柱建物跡4号においても床面積は約10.53㎡である。大型土坑の南側では3・4・5号が近接して位置し、炉跡や土坑との切り合いが見られる。切り合い関係などから判断される時期の変遷については総括に記載する。なお埋土の特徴は柱穴ごとに挿図中に示す。

掘立柱建物跡1号(第13図)

D-7・8区で検出した。北西端の柱穴は土坑1号によって切られ残存しない。また、柵列1・2とは柱筋が重複しているが、前後関係は不明である。

梁行1間×桁行2間の長方形を呈する6本柱の側柱建物跡である。隅は直交せず、平面形は平行四辺形に近い。梁行の長さ1.5m、桁行の長さ2.8mで、総面積約4.2㎡である。主軸は磁北から東に68°傾いている。柱間寸法は梁行1.5m、桁行0.9～1.9mである。柱穴は直径30～40cmで深さは18～40cmとばらつきがある。P4・5の形状は建て替えによる可能性がある。柱痕跡は確認できなかった。

掘立柱建物跡1号



第13図 掘立柱建物跡1号

建物跡と重複する土坑1号は、埋土から出土した遺物や炭化物の放射性炭素年代測定の結果から14世紀末頃～15世紀半ば頃に帰属する可能性があり、切り合い関係から掘立柱建物跡1号がより古い時代の遺構である可能性が考えられる。

遺物

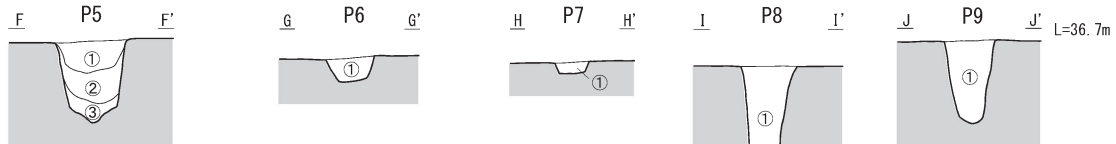
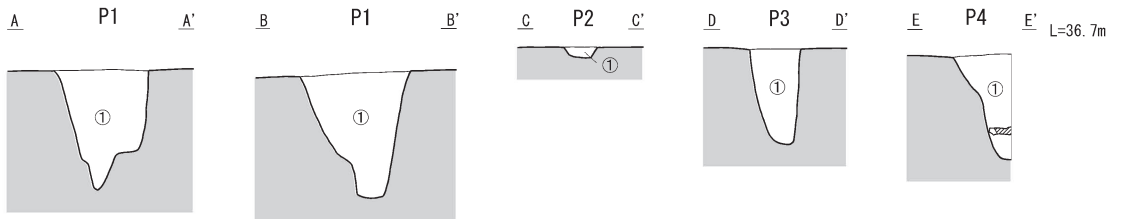
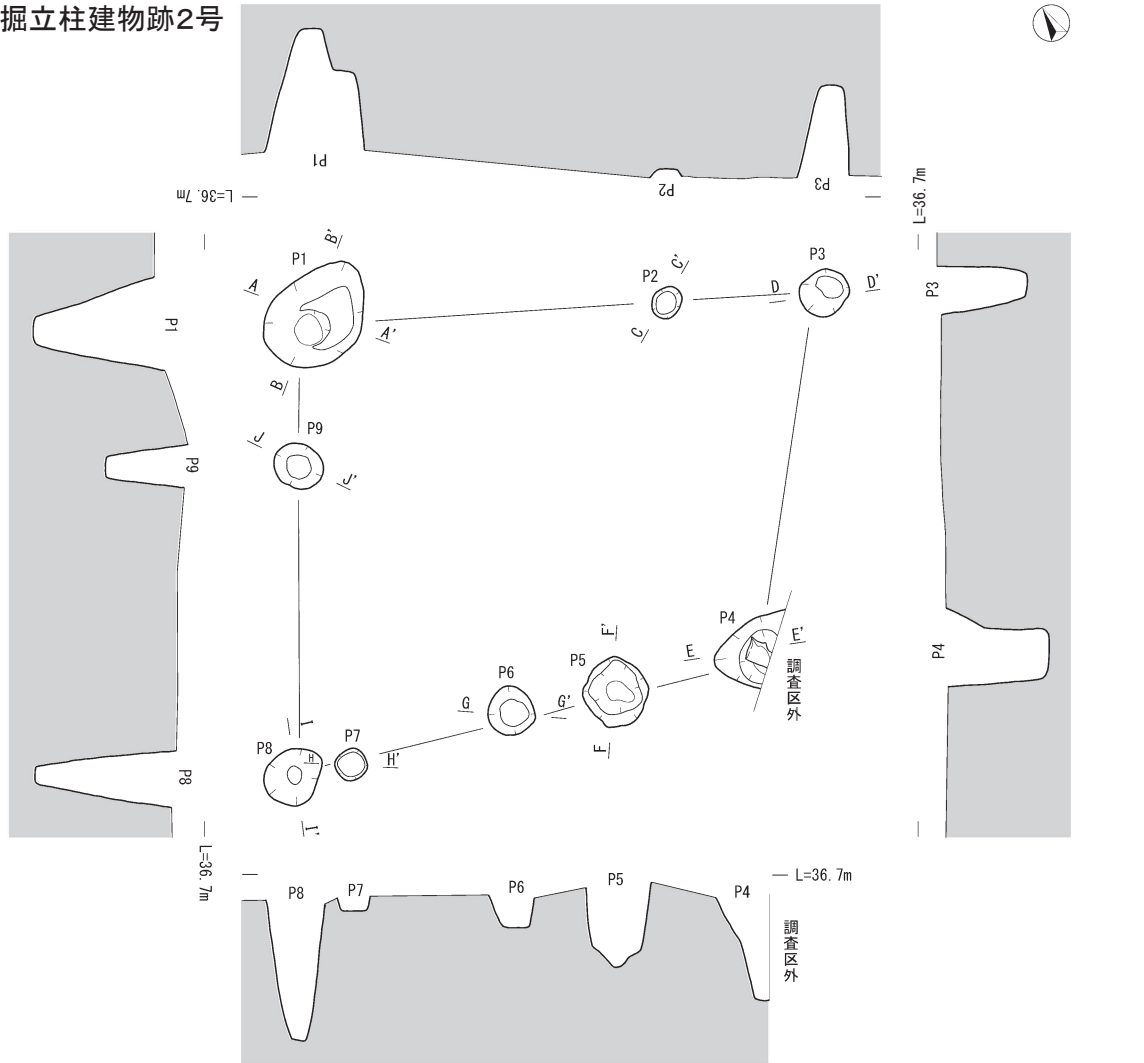
P5から胎土が精良な土師器皿の底部片が出土したが、小片で摩滅が著しく図化にはいたらなかった。

掘立柱建物跡2号(第14図)

G-7・8区で検出した。北西端の柱穴(P1)は炉跡5号を切る。

梁行2間×桁行3間の長方形を呈する9本柱の側柱建物跡である。東側の梁行がやや短いため、平面形状は台形に近い。四隅の柱が深く、柱穴のうちP8に近接するP7は支柱であると判断される。梁行の長さ2.4m、桁行の長さ2.8mで、総面積約6.72㎡である。主軸は磁北から西に67°傾く。柱間寸法は梁行0.7～1.65m、桁行0.6～1.9mである。柱穴は直径20～60cmで深さは6～78cmとばらつきがある。

掘立柱建物跡2号



- P1 ① 褐色土(7.5YR4/4) しまり無く粘性弱い
シラスブロック少量を含む
P2 ① 明褐色土(7.5YR5/6) しまり無く粘性はややあり
P3 ① 褐色土(7.5YR4/4) しまり無く粘性はあり
P4 ① 褐色土(7.5YR4/4) しまり無く粘性ややあり

- P5 ① 褐色土(10YR4/6) しまり強く粘性あり
② 褐色土(7.5YR4/4) しまりやや強く粘性は無い 砂質土
③ 赤褐色土(5YR4/4) しまり無く粘性強い
P6 ① 明褐色土(7.5YR5/6) しまり無く粘性はややある
P7 ① 褐色土(7.5YR4/4) しまり無く粘性無し

- P8 ① 褐色土(7.5YR4/4) しまり無く粘性も無し
P9 ① 褐色土 砂質土

0 (1 : 40) 1m

第14図 掘立柱建物跡2号

埋土の堆積状況から柱痕跡を見つけることは難しかったが、P 1・P 4・P 5の断面形状からは径20cmに満たない細い柱の痕跡が窺える。

P 2から出土した炭化材の放射性炭素年代測定値は暦年較正 2 σ で1407–1439calAD (95.45%)の結果を得ており、柱穴から出土した遺物と年代観が一致する。なお、散孔材のため樹種を同定することはできなかった。

遺物

遺物はすべて小片で、P 4から土師器1点、P 3から青磁1点、播鉢1点が出土した。青磁は底着である。

19は龍泉窯系青磁碗D 2類の口縁部片で、15世紀代に帰属する。口縁部は外反し、口縁端部が玉縁状に肥厚する。やや濁った釉を厚くかける。内面の口縁際の一部が露胎し、やや粗雑な造りである。20は推定口径11.6cmの土師器坏である。器壁は大きく開きながら内湾気味に立ち上がり、15世紀後半～16世紀前半頃の形態であると考えられる。21は土師質の播鉢である。外面下位はケズリ後ナデ調整である、内面には10本単位の整った櫛目を施す。橙色を呈し、焼成は良く硬質である。

掘立柱建物跡3号(第16図)

G－8区で検出した。北西端の柱穴を炉跡6号によって切られる。

梁行1間×桁行2間以上の長方形を呈する側柱建物跡と推測される。南側は調査区外であり、全体形は不明だが北側4本の柱穴を確認することができた。北側の2角の隅はほぼ直角で残存部の柱筋は整い、平面形が長方形を呈することが推測される。梁行の長さ1.8m、桁行の長さ2.2+ α mで、総面積3.96+ α m²である。主軸は磁北から東に35°傾く。柱間寸法は残存部で梁行1.8m、桁行0.65～0.8mである。柱穴は直径24～68cmで深さは20～40cmとばらつきがある。P 3の形状は建て替えによる可能性がある。P 4は底面に径10cm程の柱痕跡がみられた。

重複する炉跡6号は、埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定により16世紀中頃～17世紀初め頃の値を得ており、検出状況から掘立柱建物跡3号は炉跡6号よりも古い時期に帰属する可能性がある。

遺物

P 3から青磁と瓦質土器の小片が出土した。

22は15世紀前半頃の龍泉窯系青磁碗B 2類の胴部片である。内面にはラマ式蓮弁文を施す。透明度の高い釉が掛かる。23は黒色を呈する鉢の胴部片で内

外面はナデ調整である。内面には指頭によるヨコナデの痕が明瞭に残る。

掘立柱建物跡4号(第17図)

G－8区で検出した。南側中央の柱穴は炉跡7号を切る。

梁行2間×桁行2間の7本柱の側柱建物跡である。平面形はほぼ長方形で西側の梁行がやや短い。梁行の長さ2.7m、桁行の長さ3.9mで、総面積10.53m²である。主軸は磁北から東に73°傾く。柱間寸法は梁行1.2～1.4m、桁行1.4～2.5mである。柱穴は直径20～60cmとばらつきがあるが、深さは40～50cmとほぼ揃っている。P 2・6・7の形状は柱抜きか建替えによる可能性がある。明瞭な柱穴痕は確認できなかった。P 3・4は床面に平らな石を敷いており、柱材の長さを微調整するための根石の可能性がある。

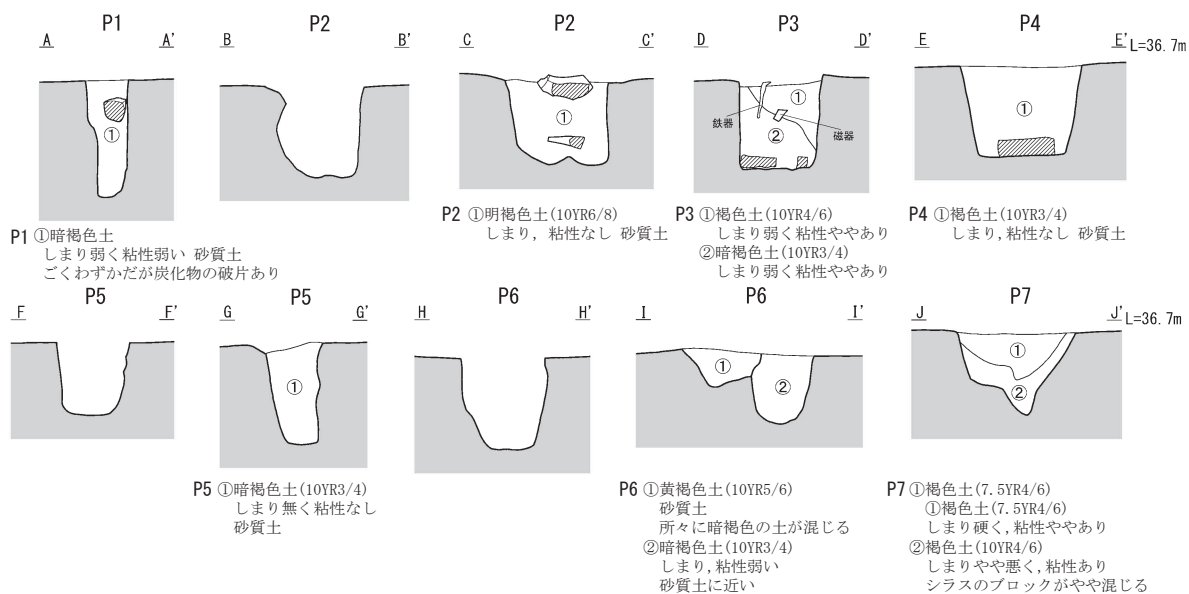
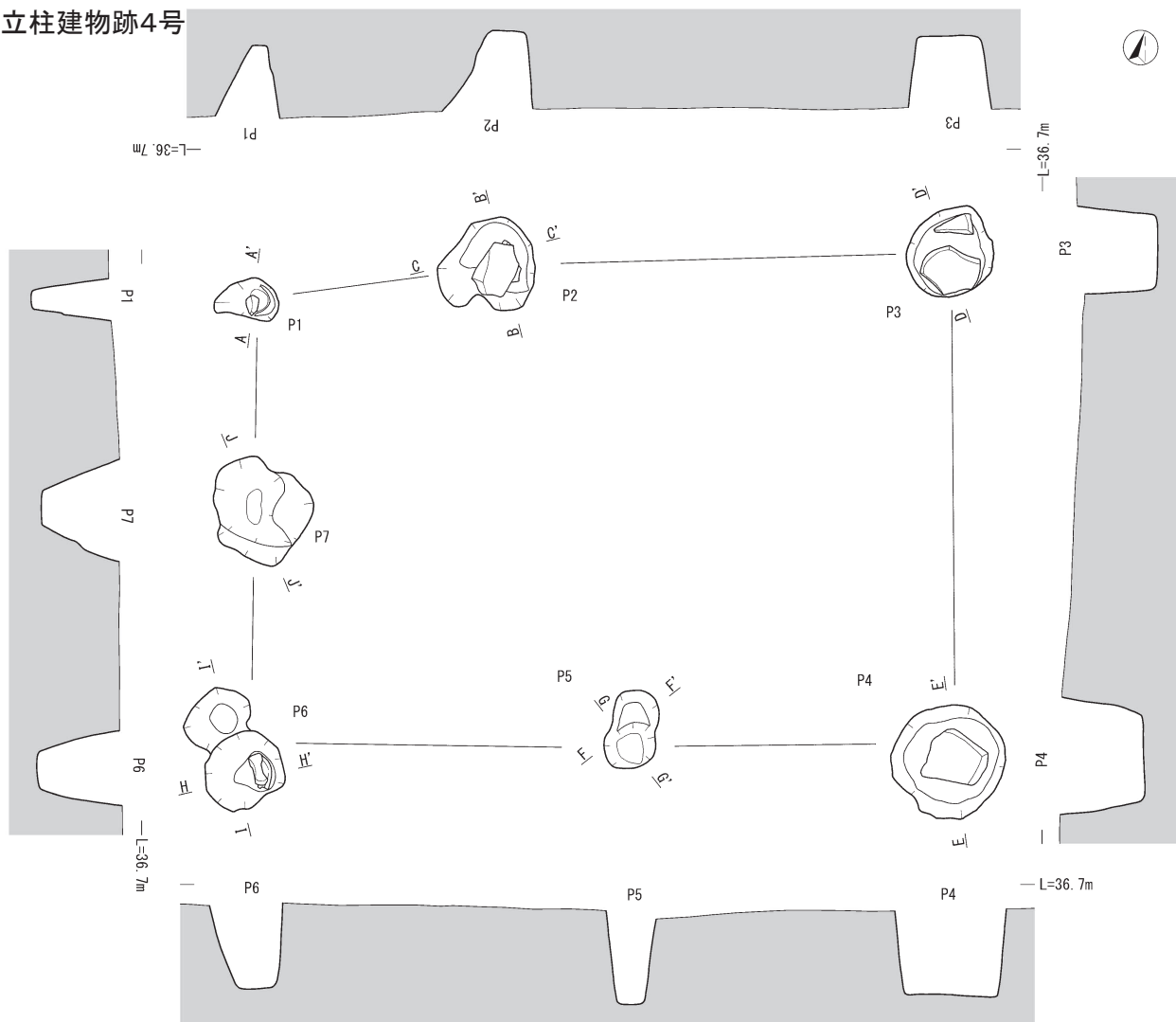
重複する炉跡7号は、埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果から15世紀半ば～16世紀半ば頃に帰属する可能性がある。切り合い関係は判然としないが、出土遺物から掘立柱建物跡4号と炉跡7号の帰属時期は近いと考えられる。

遺物

P 3から青花小坏と土師器坏の小片と鉄製品が、P 7から須恵器大甕1点、P 6から砥石が出土した。また、P 2から出土した台石と基石を1点ずつ図化した。

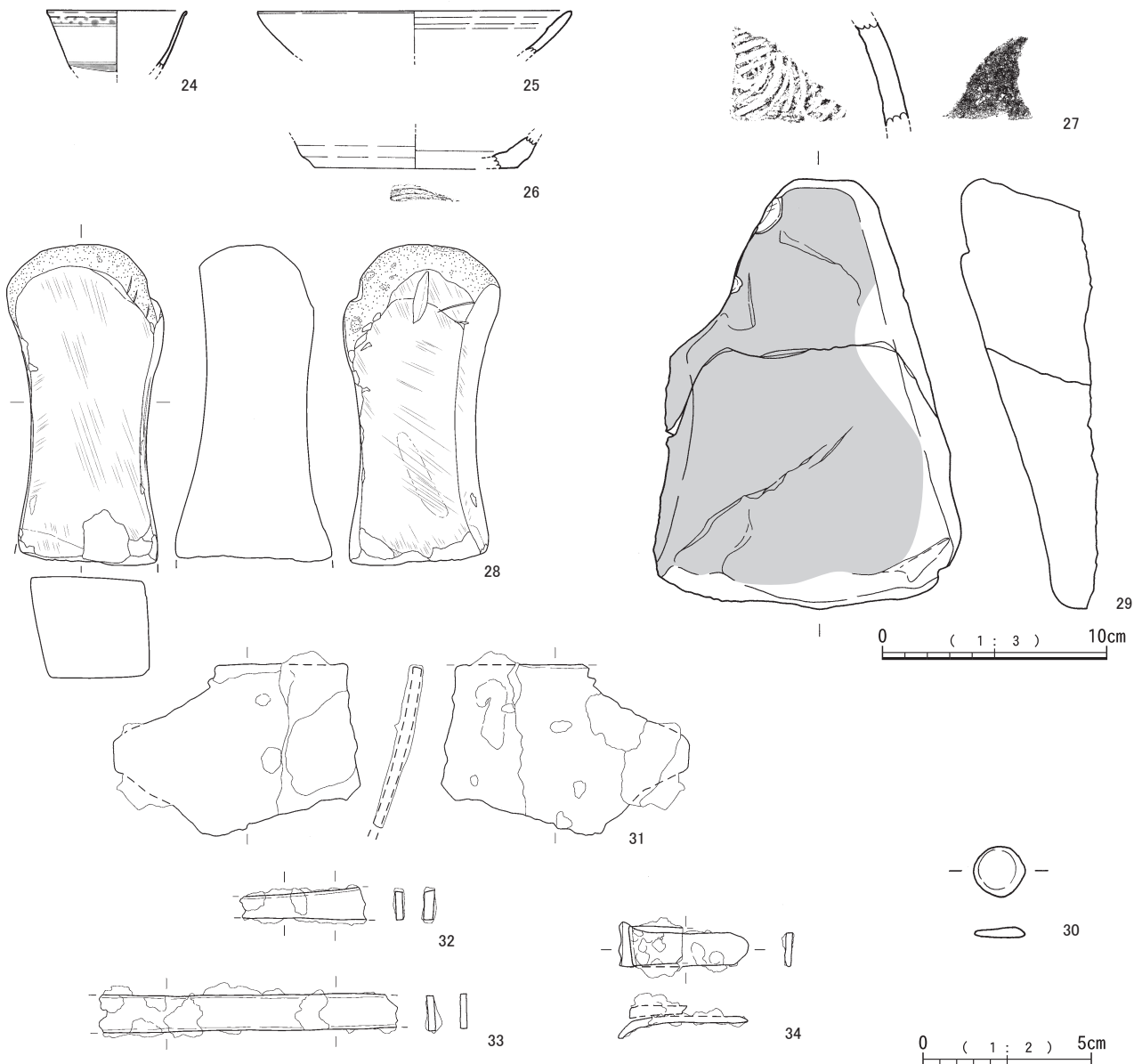
24は景德鎮窯系の青花の小坏で、16世紀後半頃の遺物である。口縁端部は外反し、薄く精緻な造りである。被熱の痕跡が窺える。25は15世紀後半～16世紀半ば頃の土師器坏の口縁部片で、推定口径は14cmで器壁は大きく開く。精良な胎土を使用する。26は25と同一個体と判断される底部である。27は須恵器大甕の肩部片で、外面には平行線状、内面には同心円状のタタキを施す。土師質の焼成色で内外面は皮膜状に灰色化する。28は粒子の粗い砂岩製の砥石で、表裏および左右両側面に砥面を形成する。上面と下面は敲打に使用される。29は柱穴の根石と考えられる。砂岩製の板状の礫を人為的に割り、平たく加工する。表面は滑らかに擦れるが、磨面の範囲は判然としない。表面に煤が付着する。30は直径約1.5cmホルンフェルス製の基石である。31は鑄造の鍋の口縁部である。32～34は器種不明の鍛造の鉄製品である。細長い板状で同一個体の可能性がある。34は2個体が癒着していると考えられ端部を緩く折り曲げている。刃部は確認できない。

掘立柱建物跡4号



0 (1 : 40) 1m

第17図 掘立柱建物跡4号



第18図 掘立柱建物跡4号 出土遺物

掘立柱建物跡5号(第19図)

F-8・9区で検出した。

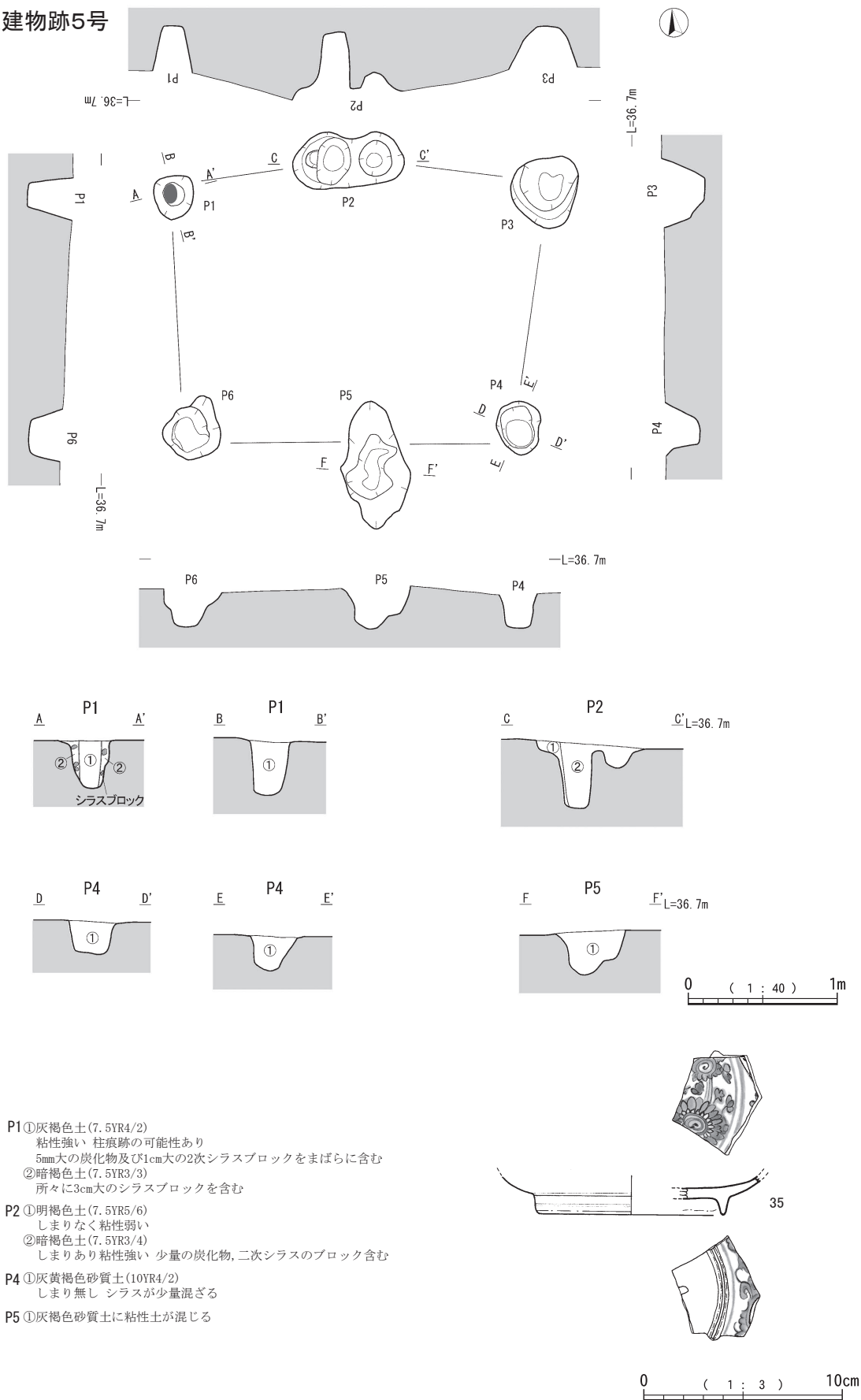
梁行1間×桁行2間の6本柱の側柱建物跡である。平面形はほぼ長方形だが南側の梁行がやや短く北側中央のP2が柱筋から外側にずれるため、平面形は五角形に近い。梁行の長さ1.8m、桁行の長さ2.3mで、総面積約4.14㎡である。主軸は磁北から東に85°傾いている。柱間寸法は梁行1.8m、桁行1.0～1.2mである。柱穴は直径35～50cmとばらつきがあるが、深さは30～40cmとほぼ揃っている。P2・5の形状は建て替えによる可能性がある。P1・2は柱痕跡を確認することができた。

遺物

P4から青花皿底部片が出土した。

35は景德鎮窯系B群の皿で、16世紀代の遺物と考えられる。陥入がみられ、内外面に草花文を描く。

掘立柱建物跡5号



第19図 掘立柱建物跡5号および出土遺物

柵列

D・E-8区で検出した。掘立柱建物跡5号とは柱筋が重複するため時期差があると考えられるが前後関係は不明である。柵列1・2はわずかに軸がずれるが、ほぼ平行に位置する。構成ピット内からの遺物の出土はなかった。

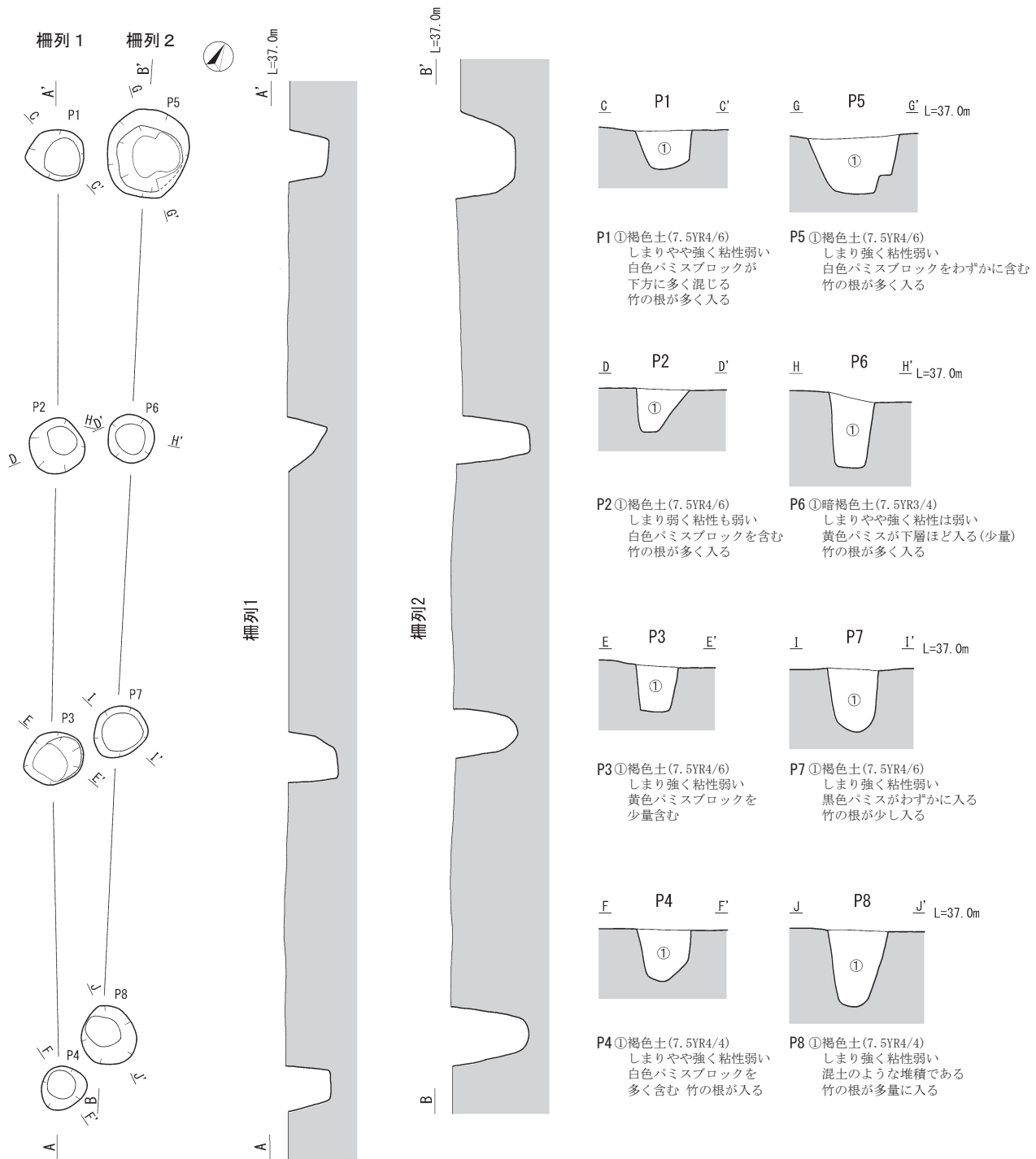
柵列1(第20図)

4本の柱穴により構成され、柱筋は整う。主軸は

磁北から東に約29°ずれる。柱間寸法は1.6m前後でほぼ等間隔である。柱穴は直径30~40cm、深さは35cm程に揃っている。

柵列2(第20図)

4本の柱穴により構成され、柱筋は整う。柱間寸法は1.6m前後でほぼ等間隔である。主軸は磁北から東に約25°ずれる。柱穴は直径30~40cm、深さは35cm前後に揃っている。



第20図 柵列1, 2

土坑

大型土坑の北側に2基、南側に1基検出した。土坑3号については炉跡1号の付帯遺構である可能性をもつため、炉跡の項に詳細を記載する。ほかの2基の用途は不明である。

土坑1号(第21図)

D-7区で検出した。掘立柱建物跡1号の北側西端の柱穴を切る。

長軸1.08m、短軸0.8mである。深さ50cmの円形の土坑の南側にステップ状の段を設ける。円形土坑の掘り込みの底面は平坦でほぼ垂直に立ち上がる。埋土は焼土や黒色のパミスをわずかに含む褐色土である。埋土から検出した炭化材の年代測定値は暦年較正2σで1397-1433calAD(95.45%)で14世紀末～15世紀前半の値を得た。樹種はコナラ属アカガシ亜属であった。

遺物

遺物は土師器小片、青磁、白磁が出土した。2点を図化した。

36は白磁小杯で15世紀前半頃の白磁皿B群(森田分類D群)に該当する。腰部以下は露胎と考えられる。37は龍泉窯系C2類の雷文をもつ青磁碗の底部である。埋土中位から出土した。外面にラム式蓮弁文を、見込みに印花を施す。厚みのある底部は胎土がやや赤みがかり釉調はやや黄色っぽい。15世紀中頃に該当する。

土坑2号(第22図)

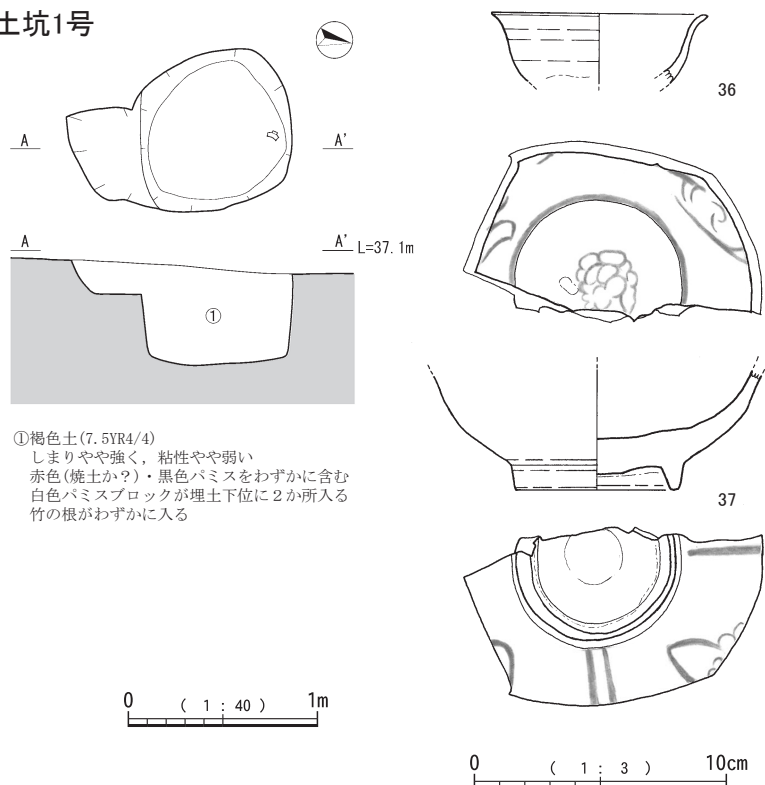
G-8区で検出した。掘立柱建物跡4号内において検出したが、主軸の向きが異なるため建物跡とは時期差のある遺構と判断した。東側を柱穴と考えられる径35cm深さ80cm程のピットに切られる。長軸1.06m、短軸0.6mで、長軸は北西を向く。掘り込みは播鉢状で深さは60cmである。埋土は褐色土と明黄褐色土の3層に分かれる。

遺物

白磁1点、土師器1点を図化した。そのほかに古墳時代に帰属する可能性がある土器小片と薩摩焼が出土した。薩摩焼は表土からの混入と考えられるが、帰属時期が下る遺構の可能性もある。

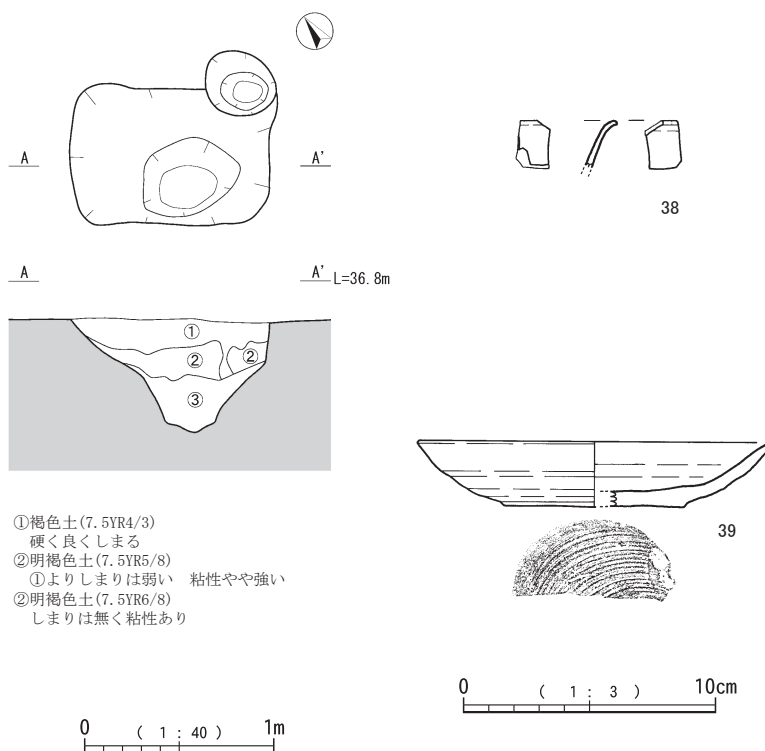
38は白磁の端反皿C群の口縁部片である。39は推定口径14cmの土師器皿で器壁は

土坑1号



第21図 土坑1号および出土遺物

土坑2号



第22図 土坑2号および出土遺物

大きく開きながら内湾気味に立ち上がる。接地面近くを面取りする。38・39はともに15世紀後半～16世紀頃の遺物と考えられる。

炉跡

大型土坑の北側に4基、南側に6基検出した。縦長でひょうたん形に近い形状のものが6基、縦長でしずく状の形状のものが1基、円形のものが1基、不定形のものが1基、残存状況が芳しくなく形態の推測が難しいものが1基である。縦長の炉跡のうち長軸が北側を向くものは1基のみで、長軸が崖側を向く傾向がみられる。うち4基は大型土坑に切られる。

炉跡1号(第23図)

E-7区で検出した。南側に接している土坑3号は付帯遺構の可能性が考えられる。

主軸は磁北から東に60°傾く。平面形はひょうたん形で燃烧部は東側に位置する。長軸2.45m×最大幅1.1mである。燃烧部の断面形は袋状に近く、検出面からの深さは34cmで床面はほぼ平坦である。燃烧部には地山が橙色に変色した炉壁の一部が残存する。燃烧部から作業部にかけての床面の広範囲に炭化物が確認できる。燃烧部入口から内部にかけて床面の土の赤色化がみられる。

埋土は褐色や黄褐色を基調とした6層に分かれる。炉壁のシラスや焼土層を含む。燃烧部から検出した炭化材の放射性炭素年代測定値は暦年較正2σで1552-1634calAD(54.58%)で、15世紀後半～16世紀の値を得た。

遺物

埋土中から白磁、土師器片2点(内黒土師器の可能性のあるものを含む)、播鉢1点、瓦1点が出土したがほとんどが小片で図化にいたらず、播鉢1点を図化した。

40は瓦質焼成の播鉢で色調は橙色を呈する。大きく開く器形で、外面には指オサエによる成形の痕が残る。接地面近くを幅広く面取りする。口縁端部は明瞭に角付けられ、口唇部はやや外傾する。櫛目はシャープである。

土坑3号(第23図)

E-7区で検出した。北側に炉跡1号に切られる。

長軸1.8m、短軸1.32mの不定形の土坑だが、西側と南側は矩形の平面プランである。底面は平坦で、中央部分に焼土を確認できた。埋土は単一の褐

色土で炉跡1号の近くに炭化物を含む。炉跡1号の燃烧部と接し、境目に炉跡1号の焼土壁が残っていた検出状況から鑑みるとより古い年代に帰属することも考えられるが、出土遺物の年代は15世紀後半～16世紀頃で炉跡1号の年代観と一致するため付帯遺構の可能性も考えられる。

遺物

41は白磁の端反皿C群に該当する。42は推定口径12cm程の土師器杯の口縁部である。胎土は白く、石英・赤色の小粒が少量混じる。外面には薄く煤が付着する。43は底径6.4cmの土師器杯の底部で、42とは同一個体の可能性が高い。44は須恵器大甕の口縁部片で瓦質焼成で橙色を呈する。断面は芯部が黒色の縞状である。45は土師質の播鉢で、焼土直上で出土した。接地面近くを幅広く面取りする。内面の櫛目は深く密に施される。胎土は白く、混和材の量が少ない。断面は芯部が黒色の縞状である。

46は黒色のチャート製で使用痕のある剥片である。最大長は3.5cmで、断面は三角形状である。正面・右側面の稜部に敲打による微細な剥離痕がみられる。火打石の可能性がある。

炉跡2号(第25図)

E-8区で検出した。竹根や攪乱により一部を欠損する。

平面形は長軸0.72m×短軸推定値0.64mの楕円形状である。掘り込みの形状は検出面からの深さが14cm程度の浅い皿状である。底面のほぼ全面に炭化物が確認された。埋土の水洗によって得た炭化材の放射性炭素年代測定値は暦年較正2σで1551-1634calAD(57.2%)で、15世紀後半～16世紀の値を得た。樹種はツバキ属であった。遺物は出土していない。

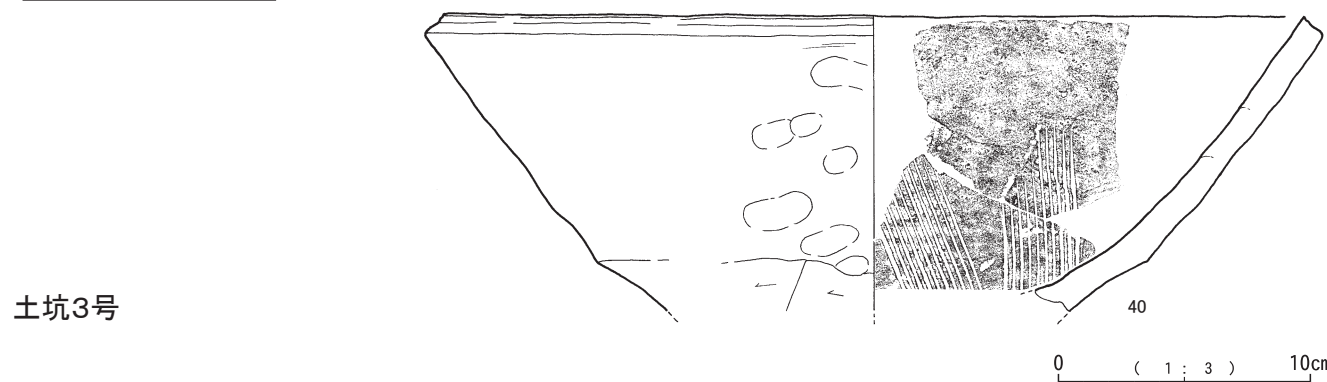
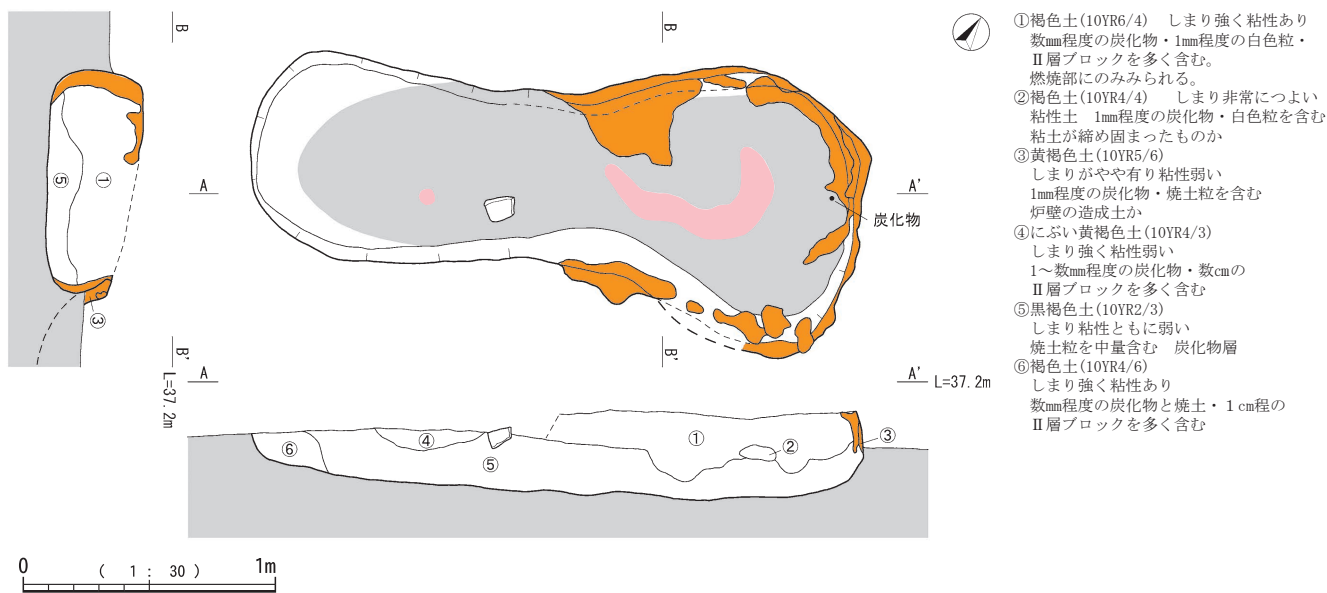
炉跡3号(第25図)

E-8区で検出した。大型土坑の壁の崩落に巻き込まれるように大部分を欠損する。主軸は磁北から東に45°傾く。壁面に赤色化した炉壁を確認できたことから、縦長の炉の燃烧部と判断した。残存部分の最大幅は0.82mである。燃烧部の断面形は袋状で、検出面からの深さは約20cmで底面はほぼ平坦である。底の全面に炭化物が確認できた。埋土は黄褐色・褐色・黒褐色の3層に分層できる。

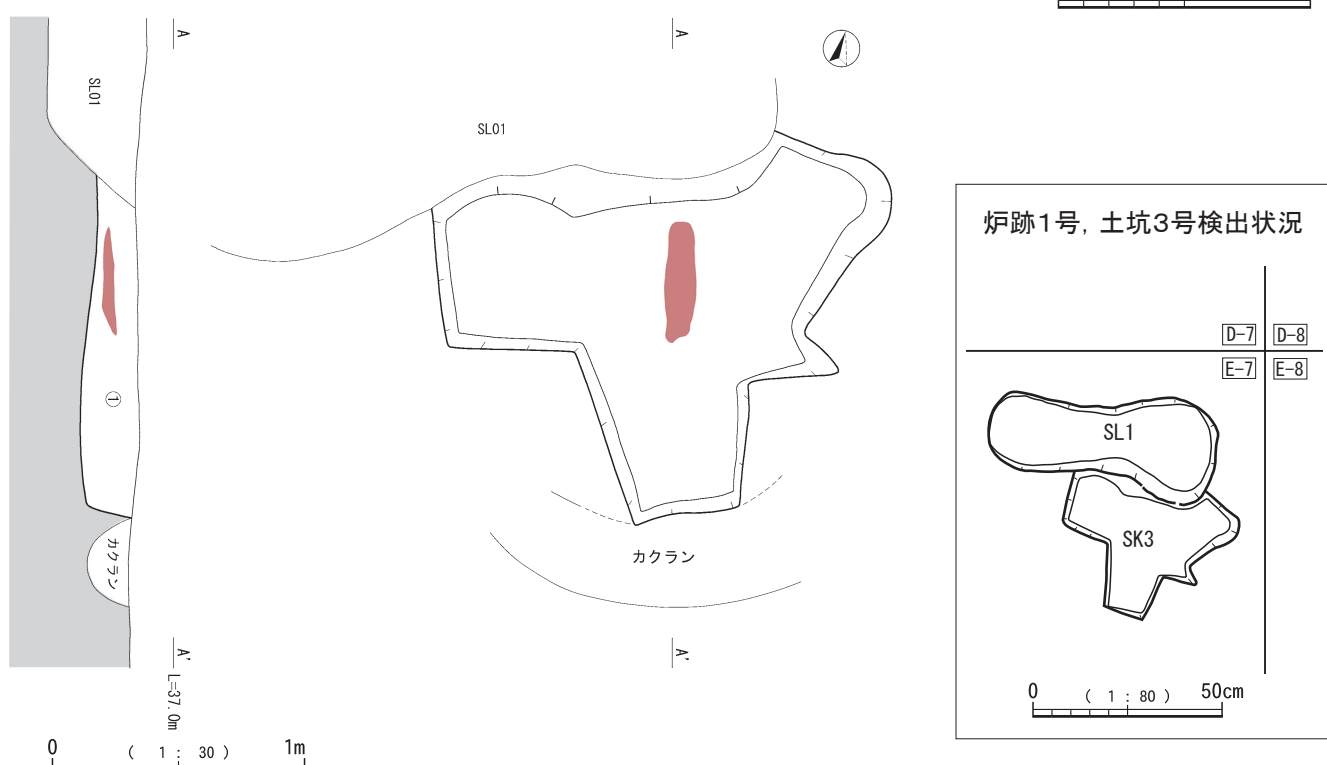
遺物

47は備前系の播鉢の体部片である。櫛目はシャープで焼成もよく、堅緻な造りである。

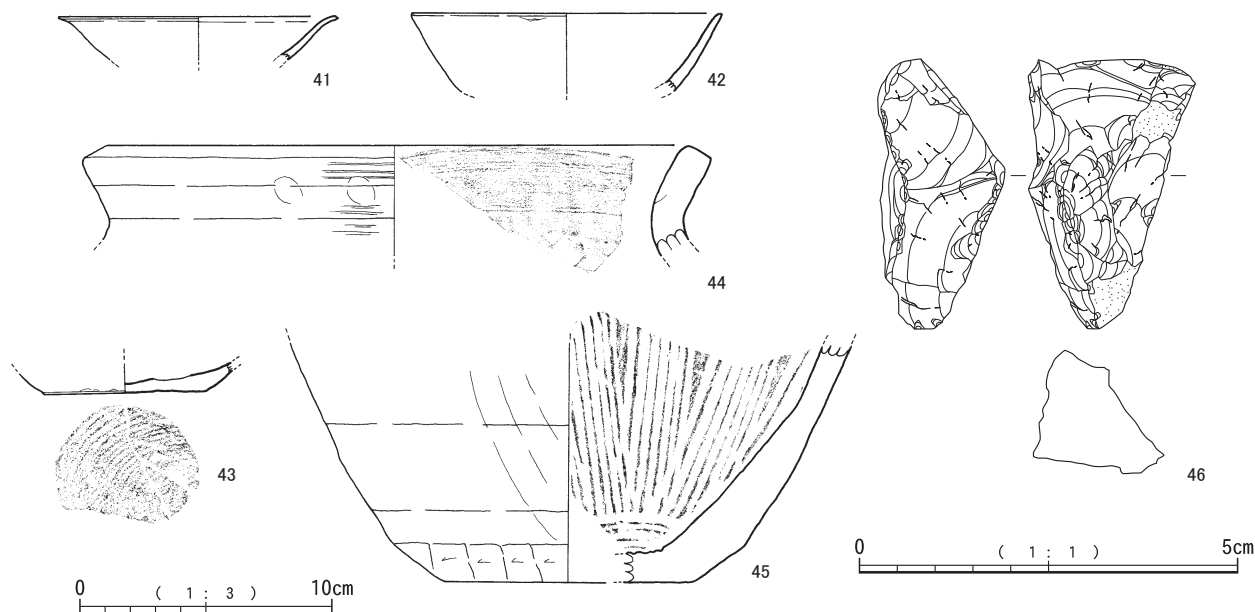
炉跡1号



土坑3号



第23図 炉跡1号および出土遺物, 土坑3号



第24図 土坑3号 出土遺物

炉跡4号(第25図)

E-8区で検出した。東側をわずかに大型土坑に切られる。

平面形はひょうたん形で燃烧部は西側に位置する。主軸は磁北から東に 62° 傾く。長軸 $1.55 + \alpha$ m \times 最大幅0.95mである。作業部の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは30cmである。燃烧部は断面形がレンズ状で検出面からの深さは25cmである。床面の炭化物は燃烧部から作業部西寄りに広がる。くびれ付近には焼土の集中域がみられた。

埋土は褐色・黒褐色・暗褐色を基調とした4層に分かれる。燃烧部から検出した炭化材の放射性炭素年代測定値は暦年較正 2σ で1504-1597calAD (76.3%)で、15世紀代の値を得た。樹種はツバキ属であった。

遺物

48は、土師質の火鉢の底部片である。焼成がよく硬質である。底径約30cmで、底面には丁寧なナデ調整を施し短い筋状のタタキの痕跡が残る。胎土には鮮やかな赤色の粒を含む。

炉跡5号(第26図)

G-8区で検出した。掘立柱建物跡2号の構成ピットに切られる。また北側に攪乱を受ける。

主軸は磁北から西に 2° とわずかに傾く程度ではほぼ南北に沿う。不定形の平面プランで、北側は矩形で、南側が膨らむバチのような形状である。長軸約

1.55m \times 最大幅1.0mである。床面はほぼ平坦で、南側が1段下がる。検出面からの深さは最深52cmである。南側の埋土は焼土や炭化物を含む層と暗褐色土層が重なり合って堆積している。層序から使用→埋め戻し→再利用のサイクルを3回ほど繰り返した状況が窺える。

燃烧部から検出した炭化材の放射性炭素年代測定値は暦年較正 2σ で1550-1634calAD (76.3%)で、16世紀代～17世紀前半の値を得た。樹種はマツ属であった。遺物は出土しなかった。

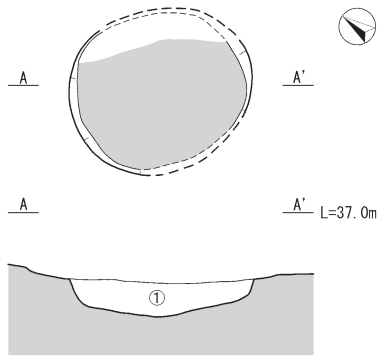
炉跡6号(第26図)

G-8区で検出した。掘立柱建物跡3号の構成ピットを切る。

主軸は磁北から西に 68° 傾く。平面形はひょうたん形に近く、炉跡1号などの縦長の炉跡と比べ、小型である。長軸1.35m \times 最大幅0.82mである。床面はほぼ平坦である。検出面からの深さは30cmである。暗褐色土を主体とし、焼土・炭化物の検出状況から西側が燃烧部であると考えられる。作業部西側の中央部分に径20cm弱のピットを1基確認できた。埋土はくびれ部分の床面あたりを中心に焼土や炭化物が薄く溜まっている状況であった。

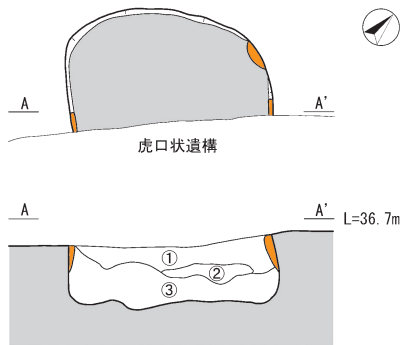
燃烧部から検出した炭化材の放射性炭素年代測定値は暦年較正 2σ で1550-1634calAD (59.36%)で、16世紀代～17世紀前半の値を得た。樹種はトベラであった。遺物は出土していない。

炉跡2号

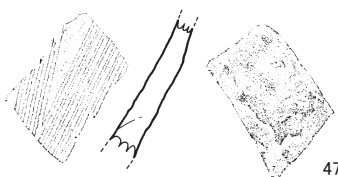


①黒褐色土(10YR2/3) しまり・粘性ともに無し
1mm程度の炭化物・焼土粒, 1cm程のII層ブロックを多く含む

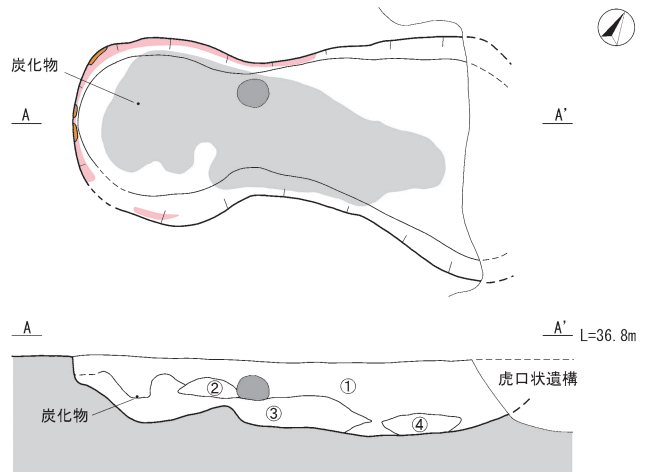
炉跡3号



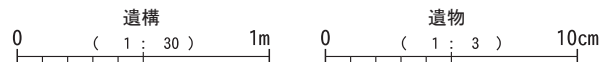
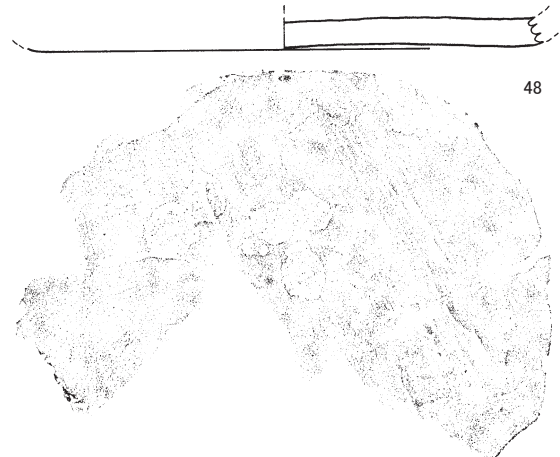
①褐色土(10YR4/4) しまり・粘性ともにやや有り
1cm程度の炭化物・数mm程度の焼土粒・II層ブロックを多く含む。
②褐色土(10YR4/3) しまり・粘性ともに強い
数mm程度の炭化物・白色粒・II層ブロックを含む
粘土のようなブロック状の埋土である
③黒褐色土(10YR2/2) しまり・粘性ともに弱い
数mm程度の焼土粒とII層ブロックを含む炭化物層である



炉跡4号



①褐色土(10YR4/6) しまり・粘性ともにやや有り
数cm程度のII層ブロックを多く含む, 中央部分に焼土が集中する
②褐色土(10YR4/6) しまり・粘性ともに強い
土色は①とほぼ同等だが, II層ブロックが少なく粘性が非常に高い
③黒褐色土(10YR2/2) しまり・粘性ともに弱い
1mm程度の焼土粒をわずかに含む炭化物層である
④暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性ともに弱い
数mm程度炭化物を多く含む, 焼土粒も含む



第25図 炉跡2・3・4号および出土遺物

炉跡7号(第26図)

G-8区で検出した。南半分は調査区外にあるため北側半分を調査することができた。長軸側は掘立柱建物跡4号と重複するが前後関係は不明である。

主軸は磁北から東に72°傾く。平面形は縦長のひょうたん形に近い形状である。北側に小さな張り出しと径20cm弱の柱穴を有する。この部分は掘立柱建物跡4号との切り合いの状況が判然としなかった。そのため西側のプランはやや崩れている。

長軸2.9mで、張り出し部分を除いた最大幅は

0.75mである。縦軸の断面形は掘鉢状で、検出面からの深さは最深64cmである。埋土は、最下層である⑥層の上面は平坦で、その直上に炭化物層(④層)が薄くレンズ状に堆積する。④層より上層にはシラスに近い砂質土がブロック状に堆積するため、人為的に埋め戻した可能性が窺える。

埋土の水洗によって得た炭化材の放射性炭素年代測定値は暦年較正2σで1457-1523calAD(55.38%)で、15世紀後半~16世紀前半の値を得た。炭化材はマツ属である。なお、同様に得た炭化

種子はアキノノゲシであると同定された。

遺物

49は砂岩製の根石である。半月状の形状で、平坦な礫を使用する。表面に浅い円形の凹みを有し、凹みの内側は弱く擦れる。裏面は広い範囲がごく弱く擦れている。左側面の稜部に人為的に打ち欠いた痕跡を確認できる。掘立柱建物跡4号を構成するピットの礎石の可能性も考えられるが掘り込みの有無が確認ができなかったため、炉跡7号の張り出しに伴うものとしてここに掲載した。

炉跡8号(第27図)

F-7区で検出した。北側を大型土坑に切られる。東側に樹痕による攪乱を受ける。

主軸は磁北から東に 54° 傾く。平面形は西側が円形で東側に向かって先細る、やや縦長の形状である。長軸 $1.5\text{m} \times$ 最大幅 $0.5 + \alpha\text{m}$ である。縦軸での断面形は皿状で、検出面からの深さは最深 25cm である。

焼土面を2枚(②, ④層)確認した。シラスの間層(⑤層)を挟んで上下で2枚の焼土層が確認されていることから炉の造り替えが1回行われている。炉床の位置は1回目が底面直上で、2回目が③層上面である。床面はほぼ全面焼けている。遺物は出土しなかった。

炉跡9号(第27図)

F-8区で検出した。北側半分を大型土坑に切られる。

主軸は磁北から東に 62° 傾く。平面形はひょうたん形に近く、炉跡6号に形態が似る。北側は円形で、南側は方形に近い。長軸 $1.8\text{m} \times$ 最大幅 $0.8 + \alpha\text{m}$ である。長軸の断面形は皿状で、検出面からの深さは最大で 30cm である。

円形部分の床面に焼土面(④層)が広がり、焼土を多く含む埋土③を挟んで炭化物層(②層)が堆積する。②層は東側にのみ堆積している。造り替えにより、使用時期が炉床を④層とする時期と、2層の時期に分かれる可能性がある。遺物は出土していない。また、円形部分の壁に沿って焼土層が確認された。

炉跡10号(第27図)

G-9区で検出した。西側には掘立柱建物跡4号が隣接する。

主軸は磁北から東に 23° 傾く。平面形はくびれの緩いひょうたん形で燃焼部は南側に位置する。長軸

$2.54\text{m} \times$ 最大幅 1.1m である。長軸側の断面形は皿状に近く、検出面からの深さは最深 34cm である。

西半分のみ焼土・炭化物の範囲を確認できた。埋土は黄褐色土、炭化物層、焼土層で、4層に分かれる。くびれ部分の床面直上に焼土層④がみられ、炭化物層②は④層と同時期のものと推測されるが、炭化物層③は④層を切っているため時期差がある可能性もある。

埋土から検出した炭化材の放射性炭素年代測定値は暦年較正 2σ で $1552-1634\text{calAD}$ (54.5%)で、15世紀後半～16世紀の値を得た。樹種はマツ属であった。また、水洗で多くの炭化種子を得ており、オオムギが計16点、イネが1点同定された。炭化種子のうちオオムギ2点について、放射性炭素年代測定の結果は、暦年較正 2σ で $1722-1784\text{calAD}$ (35.3%)および $1494-1602\text{calAD}$ (75.9%)であった。

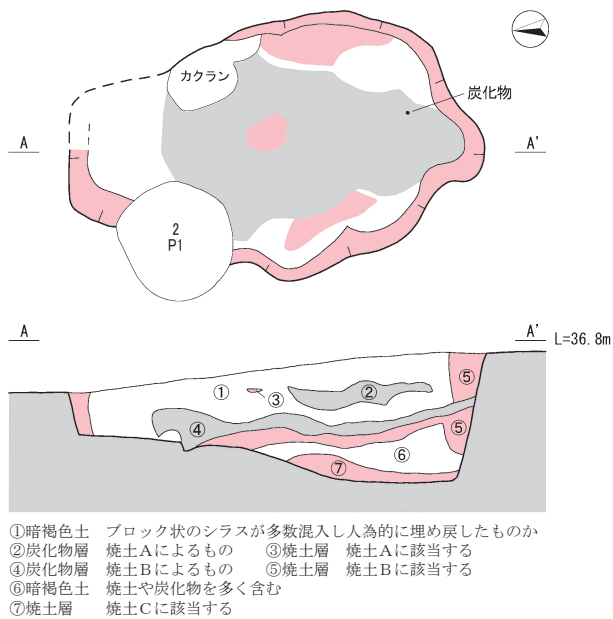


写真9 炉跡調査風景①

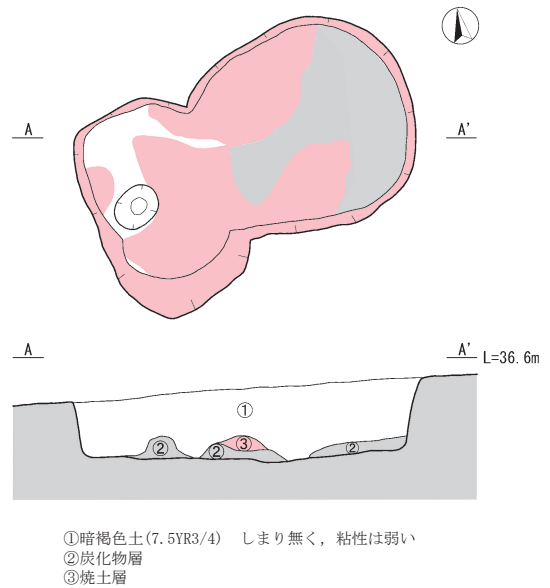


写真10 炉跡調査風景②

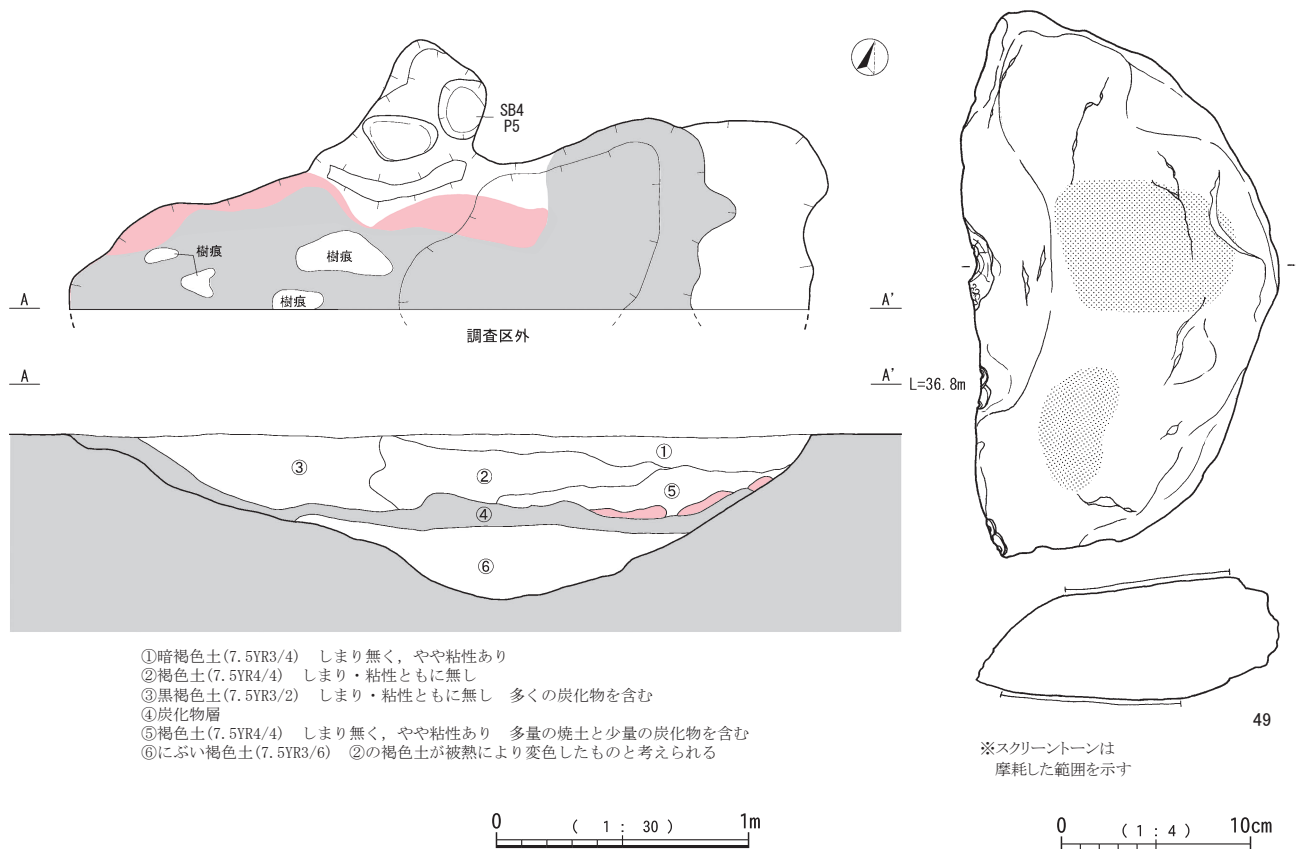
炉跡5号



炉跡6号

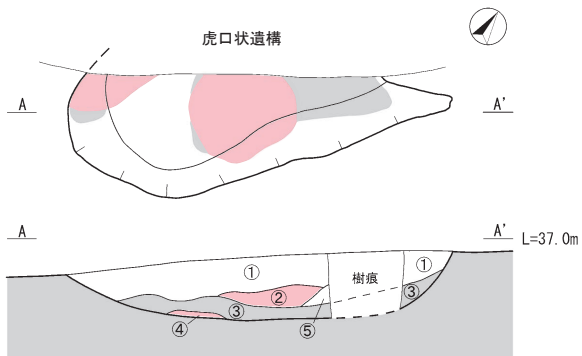


炉跡7号



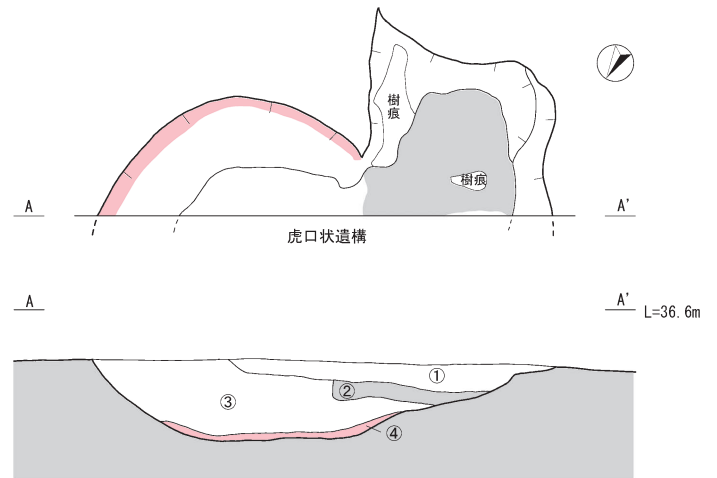
第26図 炉跡5・6・7号および出土遺物

炉跡8号



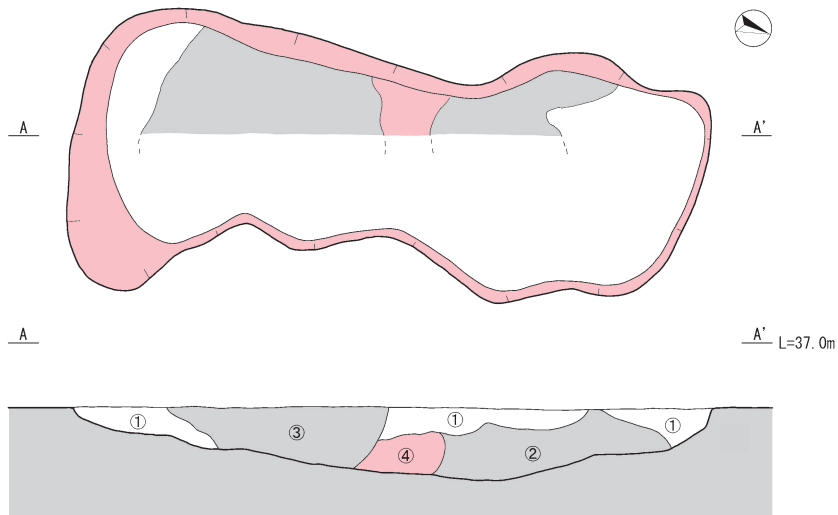
- ①暗褐色砂質土 しまり無し 自然堆積による埋没土
- ②焼土層 橙色でしまっている
- ③炭化物層 ほぼ炭である
- ④焼土層 ③層と同等の土質である 床面直上に堆積する
- ⑤シラス 焼土②と炭化物層③の間に入る

炉跡9号

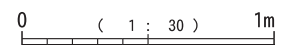


- ①暗褐色土(7.5YR6/8) しまりあり やや粘性あり
- ②炭化物層
- ③褐色土(7.5YR4/4) しまり無し 粘性弱い
炭化物少量と焼土を多量に含む
- ④焼土層

炉跡10号



- ①暗褐色土(7.5YR4/2) しまり無く粘性弱い
- ②炭化物層
- ③炭化物層
- ④焼土層



第27図 炉跡8・9・10号

土塁状の高まり(第28図)

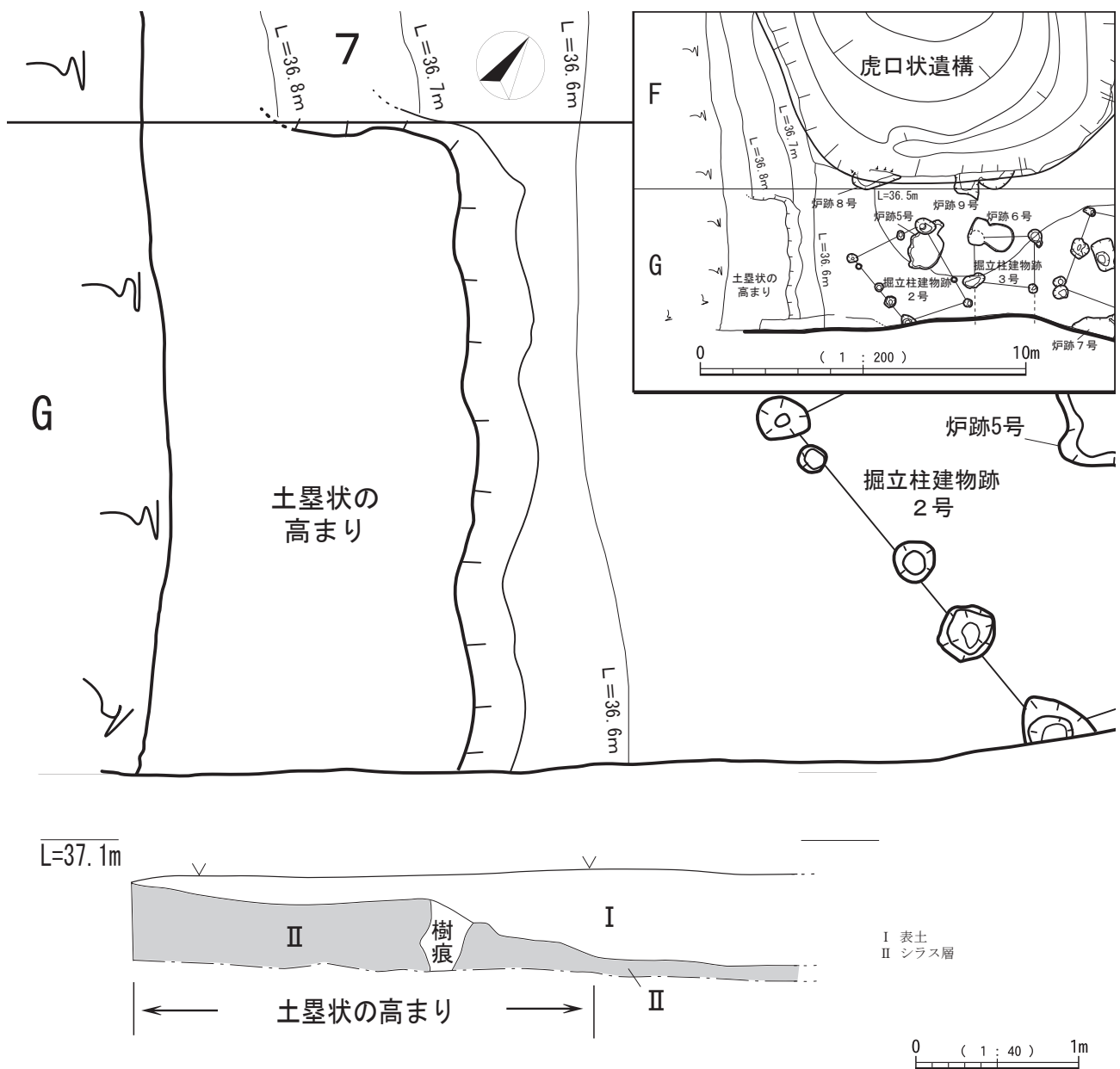
G-7区の西側の壁際で、周囲の地表よりも40～50cm程度高い段状の高まりを検出した。そのまわりの等高線は、周辺と比較して間隔が狭い。

南壁の土層断面の観察によりシラス層が削り残されている状況が確認できた(写真11)。

発掘調査時は表土直下のため、近代の土地利用による削り残しと考えていたが、虎口状遺構が検出されたため、版築層は残っていないが、土塁の基部が削り残った可能性を考えて報告する。



写真11 土塁状の高まり(南壁にあられた断面)

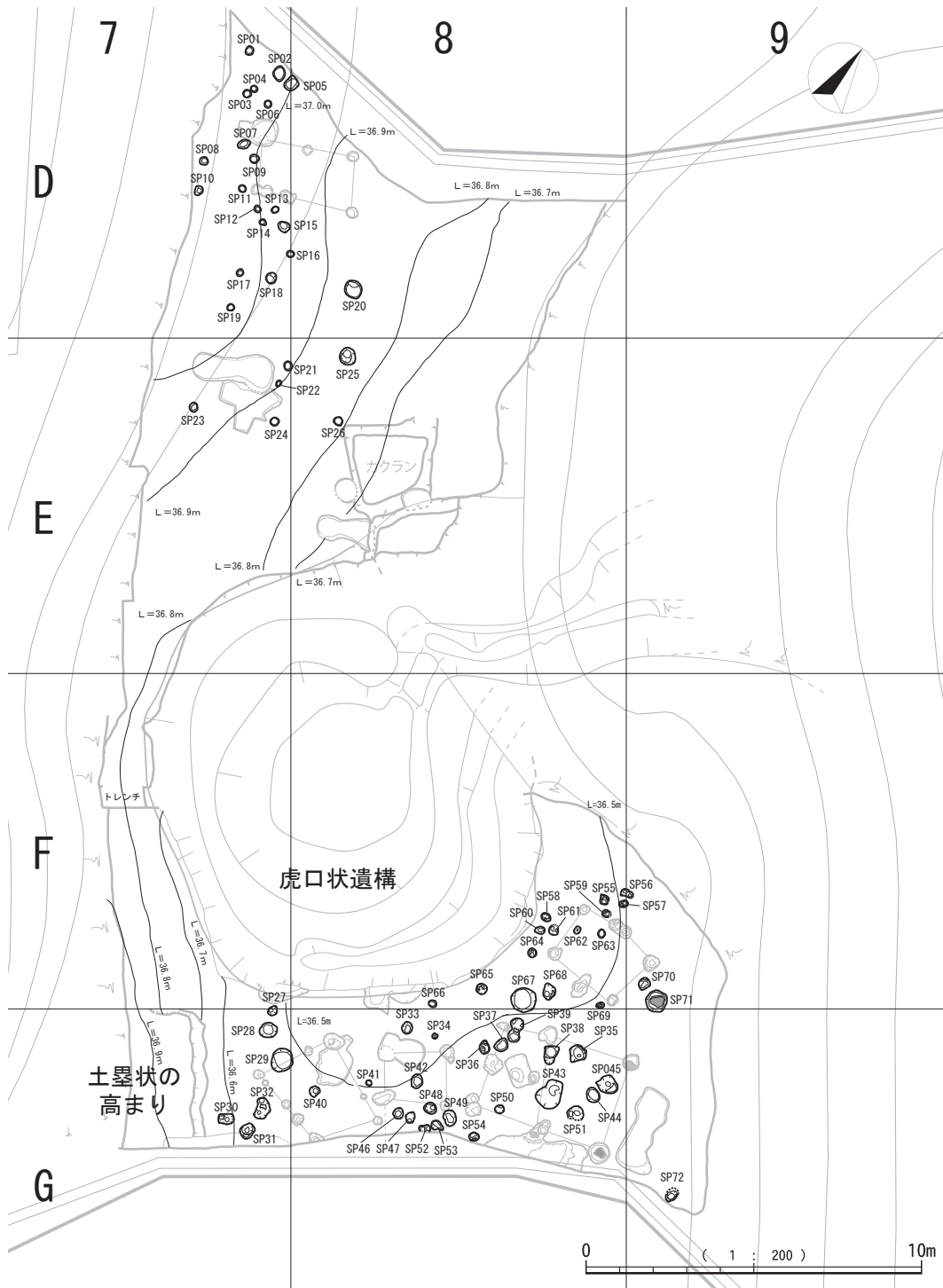


第28図 土塁状の高まり

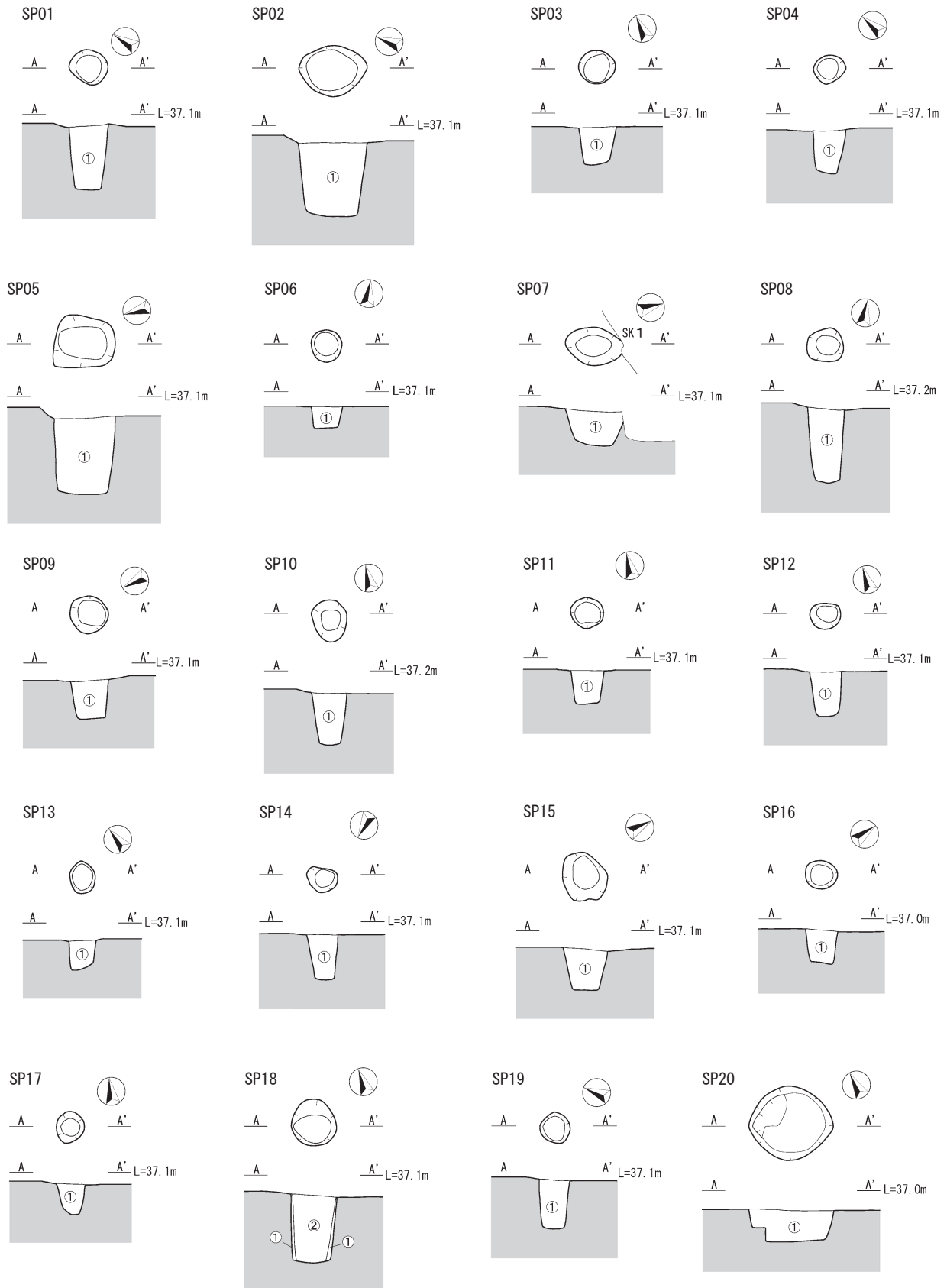
ピット(第29～33図)

中世に帰属すると考えられるピットを大型土坑の北側から26基，南側から46基の合計72基検出した。埋土の特徴や包含する遺物から中世に帰属すると判断した。ピットの配置については第29図に，埋土の

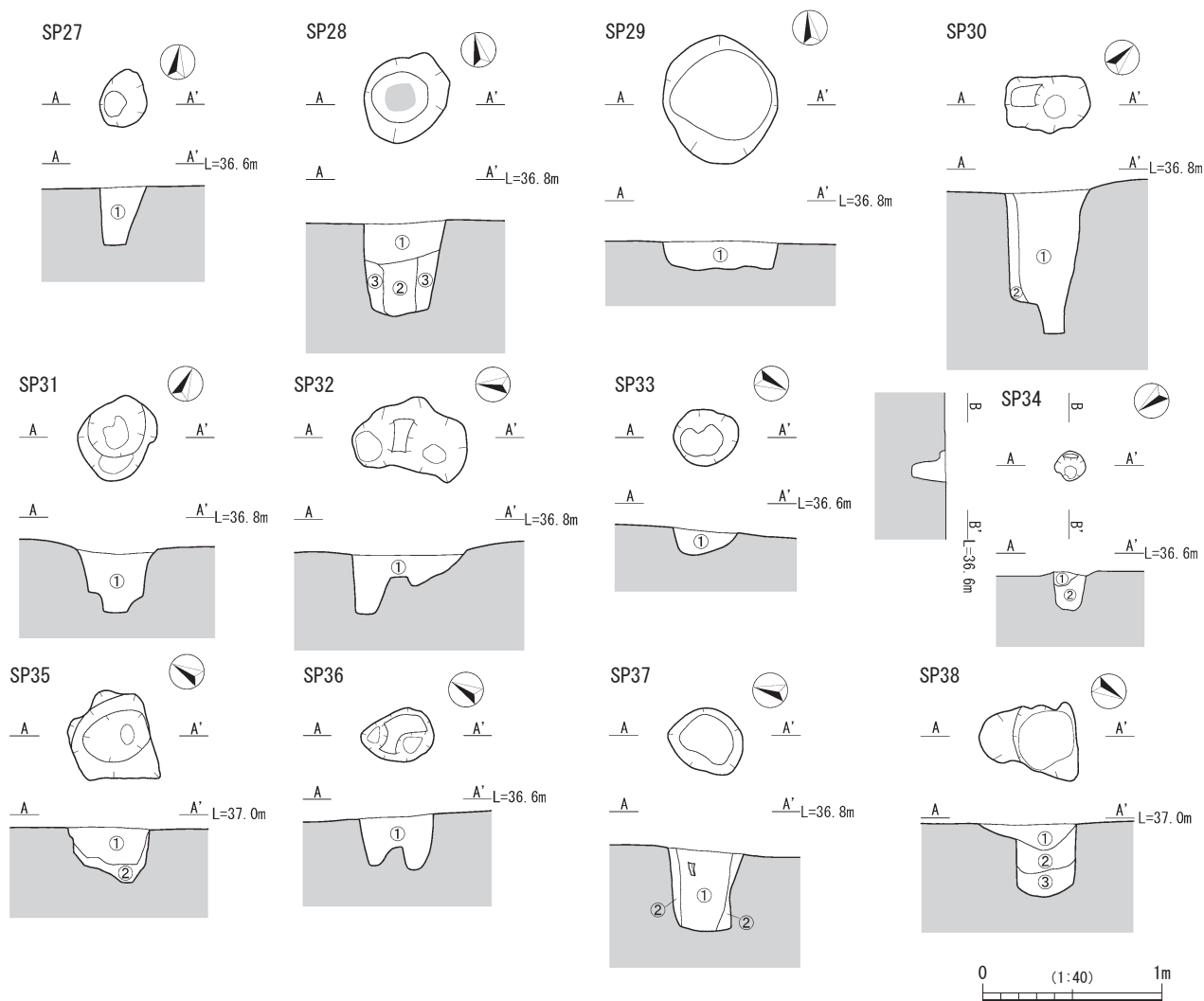
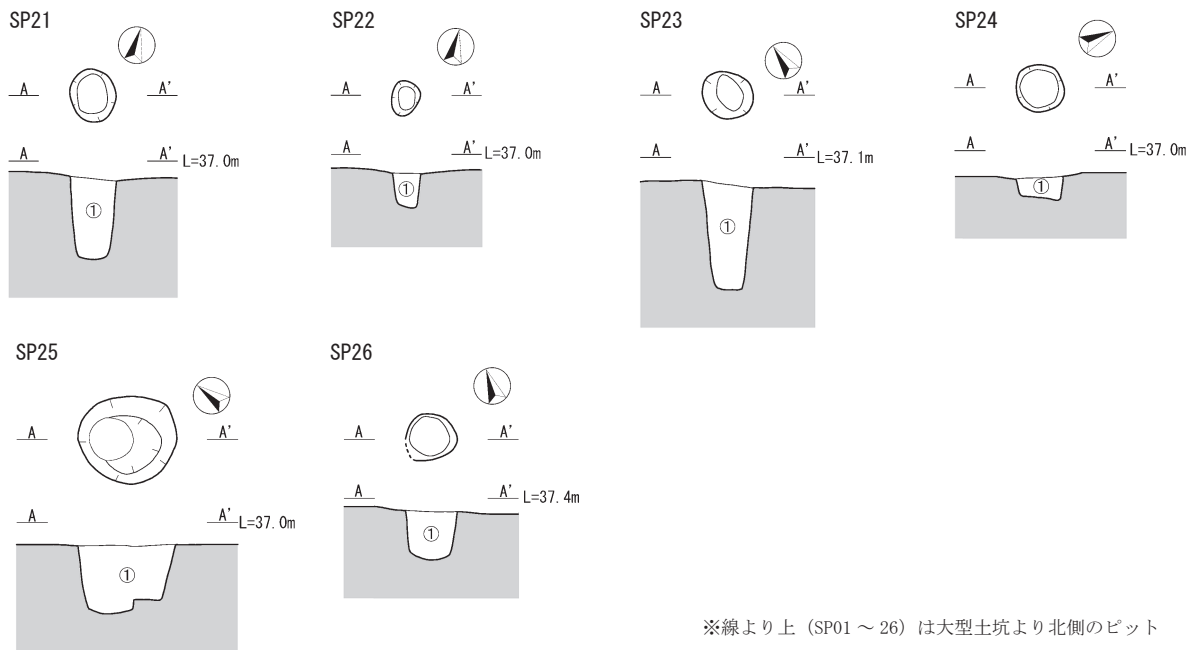
特徴や柱痕跡の有無については第8・9表に記載する。遺物を包含するピットはSP07・SP35・SP37・SP40・SP64・SP67・SP71・SP72の8基で，いずれも小片であった。青磁2点，青花1点，土師器1点，大型の礎石1点の計5点を図化した。



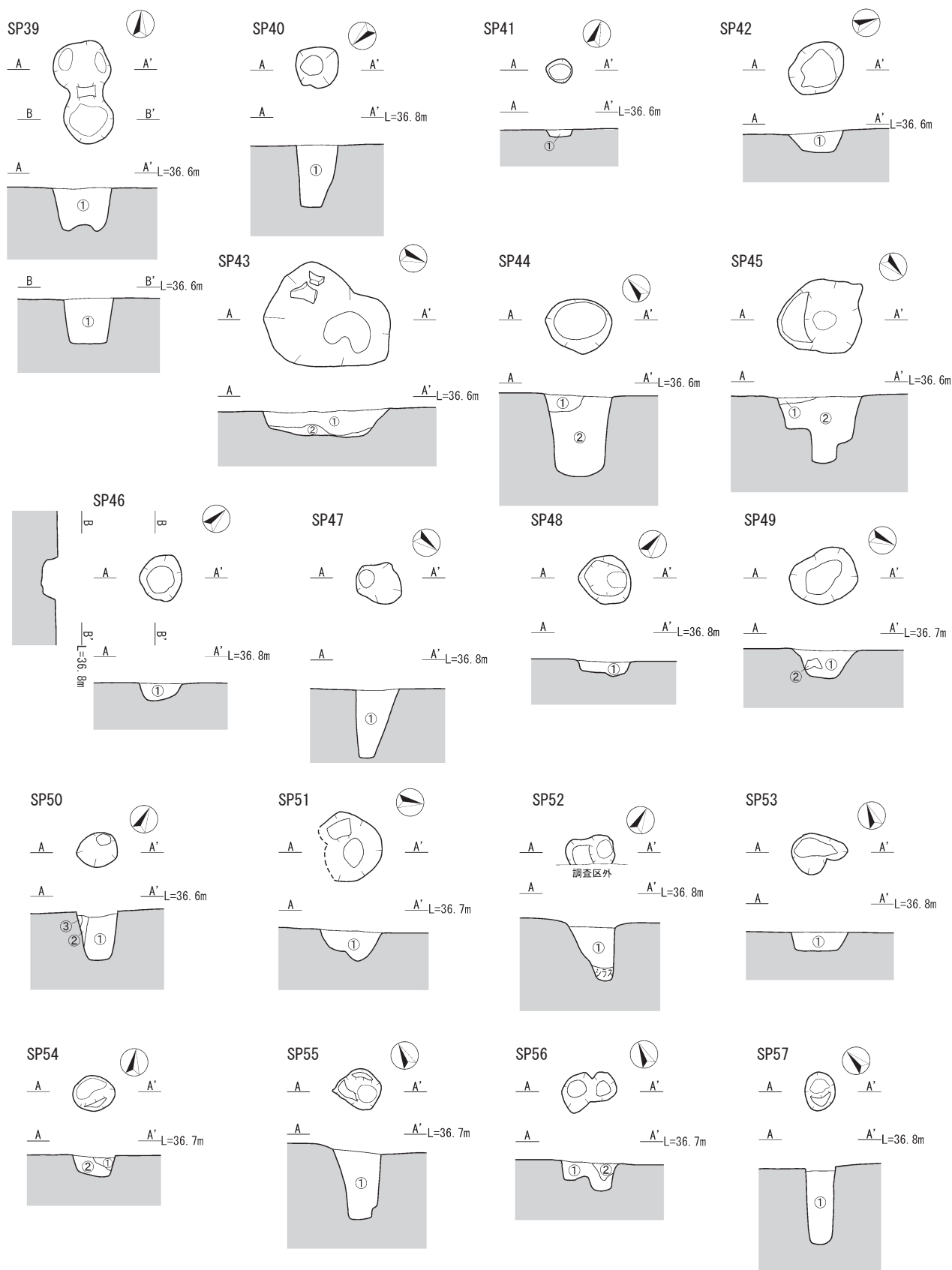
第29図 ピット配置図



第30図 西台地のピット(1)



第31図 西台地のピット(2)



0 (1:40) 1m

第32図 西台地のピット(3)

第9表 柱穴観察表②

掲載No	柱痕跡	埋土	遺物	備考
SP21	-	褐色(7.5YR4/6) しまりは強く、粘性弱い 黄色バミスブロックをわずかに含む	-	竹の根が少し入る
SP22	-	明褐色(7.5YR5/6) しまりは強く、粘性弱い 黄色バミスブロックを多く含む	-	竹の根少し入る
SP23	-	褐色(7.5YR4/4) しまりは強く、粘性やや弱い 白色バミスブロック、黒色バミスをわずかに含む	-	
SP24	-	褐色(7.5YR4/6) しまりは強く、粘性弱い	-	竹の根が多く入る
SP25	-	明褐色(7.5YR5/6) しまりとても強く、粘性弱い 黒色バミスを少量含む。混土	-	竹の根が多く入る
SP26	-	褐色(7.5YR4/4) しまりやや強く、粘性弱い 黄色バミスが3割ほど入る。	-	竹の根がわずかに入る
SP27	-	明褐色(7.5YR5/6) しまり粘性無し 砂質土 やや赤褐色の土が混全体的に混じる	-	
SP28	○	①褐色(7.5YR4/3) しまりがややあり、粘性ややある	-	
	○	②明褐色(7.5YR3/4) しまりが無く、粘性ややある 灰色のブロックが混じる	-	
	○	③明褐色(7.5YR5/6) しまりが無く、粘性がある	-	
SP29	-	褐色(7.5YR4/3) 硬くしまる	-	
SP30	○	①暗褐色(10YR3/4) しまり無く、粘性ややあり	-	竹の根が所々に入る
	○	②黄褐色(10YR5/8) しまりやや強く、粘性無し 砂質土 フカフカした土	-	
SP31	-	暗褐色(10YR3/4) しまり、粘性弱く 砂質土 黄褐色土が混じる	-	
SP32	-	にぶい黄褐色(10YR4/3) しまり弱く、粘性ややあり	-	
SP33	-	褐色(10YR4/6) しまり弱く、粘性あり	-	
SP34	-	①褐色(10YR4/4) 粘性弱い 砂質土	-	
	-	②黄褐色(10YR5/8) 粘性ややあり 砂質土	-	
SP35	-	①褐色(7.5YR4/4) 硬くしまる、粘性ややあり	青磁	掲載N051
	-	②褐色(7.5YR4/4) 硬くしまる、粘性ややあり シラスのブロックを含む		
SP36	-	明黄褐色(10YR6/8) しまり弱く、粘性無し 所々に黒褐色土。赤褐色土混じる	-	
SP37	○	①暗褐色(10YR3/4) しまり弱く、粘性ややあり	土師器	掲載N053
	○	②褐色(10YR4/6) しまり弱く、粘性弱い		
SP38	-	①暗褐色(10YR3/4) 硬くしまる、粘性弱い	-	
	-	②褐色(7.5YR4/4) しまり弱く、粘性ややあり	-	
	-	③褐色(10YR4/6) しまりややあり、粘性ややあり 下層にシラスのブロックが混じる	-	
SP39	-	明黄褐色(10YR6/8) しまり無く、粘りなし 砂質土 赤茶色+黒の焼土のような塊(石?)が少量混じる	-	
SP40	-	暗褐色(7.5YR3/4) しまり無く、粘性ややある	青磁	
SP41	-	明褐色(7.5YR5/6) しまり無く、粘性ややある	-	
SP42	-	黄褐色(10YR5/8) しまり弱く、粘性弱い 砂質土	-	
SP43	-	①暗褐色(10YR3/4) しまり弱く、粘性なし 砂質土	礫・炭化物	
	-	②明黄褐色(10YR6/8) しまり弱く、粘性なし 砂質土(シラス?)	礫・炭化物	
SP44	-	①暗褐色(10YR3/4) しまり弱く、粘性弱い 砂質土 所々に赤褐色のバミスが混じる(軟質である)	-	竹の根が多い
	-	②褐色(10YR4/6) しまりやや強い、粘性ややあり 焼土塊(4cm大)を含む 所々に赤褐色のバミス混じる	-	
SP45	-	①褐色(10YR4/6) しまり、粘性なし 砂質土 フカフカした土	-	竹の根が深く入る
	-	②褐色(10YR4/6) しまり強く、粘性ややあり	-	
SP46	-	褐色(10YR4/6) しまり弱く、粘性弱い 砂質土	-	
SP47	-	暗褐色(10YR3/4) しまり弱く、粘性ややあり 砂質土	-	
SP48	-	黄褐色(10YR5/8) しまり、粘性弱い 砂質土	-	
SP49	-	①暗褐色(10YR3/4) しまり弱く、粘性ややあり 粘性土	-	
	-	②黄褐色(10YR5/8) しまり弱く、粘性弱い 砂質土	-	
SP50	-	①暗褐色(10YR3/4) しまり弱く、粘性弱い 砂質土 床面近くに炭化物あり	炭化物	③の土質は不明
	-	②明黄褐色(10YR6/8) しまり弱く、粘性弱い 砂質土	-	
SP51	-	にぶい黄褐色(10YR4/3) しまりややあり、粘性ややあり	-	
SP52	-	褐色(10YR4/6)	-	
SP53	-	暗褐色(10YR3/4) 粘性ややあり所々に黄褐色土黒褐色土が混じる	-	
SP54	-	①褐色(10YR4/6) しまり弱く、粘性なし 砂質土	礎石?	
	-	②暗褐色(10YR3/4) しまりややあり、粘性あり		
SP55	-	暗褐色(10YR3/4) しまり無く、粘性弱い	-	
SP56	-	①明黄褐色(10YR6/8) しまり無く、粘性ややあり	-	
	-	②暗褐色(10YR3/4) しまり無く、粘性ややあり	-	
SP57	-	褐色(10YR4/6) しまりやや強く、粘質やや強い 黄褐色土が全体的に混じる	-	
SP58	-	①暗褐色(10YR3/4) しまりややあり、粘性ややあり 粘質土	-	
	-	②褐色(10YR4/6) しまりやや強く、粘性弱い 砂質土	-	
SP59	-	①明黄褐色(10YR6/8) しまりやや強く、粘性ややあり	-	
	-	②暗褐色(10YR3/4) しまりやや強く、粘性ややあり	-	
SP60	-	①暗褐色(10YR3/4) しまりややあり、粘性弱い 粘質土	-	
	-	②にぶい黄褐色(10YR5/4) しまりややあり、粘性弱い 粘質土	-	
	-	③赤褐色の焼土のような塊が入る	-	
SP61	-	暗褐色(10YR3/4) しまりややあり、粘性弱 粘質土	礫	
SP62	○	灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土	なし	
SP63	-	褐色(10YR4/6) しまりややあり、粘性弱い 砂質土	なし	
SP64	-	にぶい黄褐色(10YR4/3) しまり強く、粘性弱い 所々に炭化物が混じる	土師器・須恵器・青花	掲載N052
SP65	○	①暗褐色(10YR3/4) しまり弱く、粘性あり	-	
	○	②黄褐色(10YR5/8) しまり弱く、粘性弱い 砂質土	-	
SP66	-	①暗褐色(10YR3/4) しまり部分的にやや強い 粘性ややあり	-	
	-	②黄褐色(10YR5/8) しまりややあり 粘性ややあり	-	
SP67	-	暗褐色(10YR3/4) しまりややあり 粘性ややあり 砂質土	土師器・青磁	
SP68	-	暗褐色(10YR3/4) しまり弱い 粘質土	-	
SP69	-	灰黄褐色(10YR4/2) しまりなし シラス少量混じる	-	
SP70	-	灰黄褐色(10YR4/2) しまりなし 砂質土 シラス少量混じる	-	
SP71	○	褐色(10YR4/6) しまり弱く、粘性なし 一部黄褐色土のブロックが入る	礎石	掲載N054
SP72	-	①暗褐色(10YR3/4) しまり、粘性ともに弱い	-	
	-	②黄褐色(10YR5/8) しまり、粘性ともに弱い	近世陶磁器	上位より出土掲載N0367

50～51は龍泉窯系の青磁碗である。50はB 2類で14世紀末～15世紀前半に該当する。外面には片彫りの幅広蓮弁文を施し、内面上位に単線の細い波状文を巡らせる。SP40から出土した。51はD 2類で、14世紀後半～15世紀前葉に該当する。口縁端部は玉縁状に肥厚する。SP35から出土した。

52は16世紀代の青花の小杯の口縁部片である。口縁部はゆるく外反し、屈曲部あたりの内外面に淡い色調の呉須によって1条の線を巡らせる。SP64から出土した。

53は土師器皿の底部片である。底面には薄い煤が全面に付着するため、灯明皿として使用したことが窺える。15世紀後半～16世紀前半の遺物と考えられる。SP37から出土した。

54は最大長44.1cm、最大幅37.9cm、最大厚8.5cm、重量23.0gの大形礫で、SP71の埋土中位からほぼ水平に据えた状態で検出した。表面の中央部分は約25～30cmの範囲で擦れており、浅い凹みを形成する。裏面は広い範囲で弱く擦れている。

石材は地元産の安山岩を使用する。柱を支えた礎

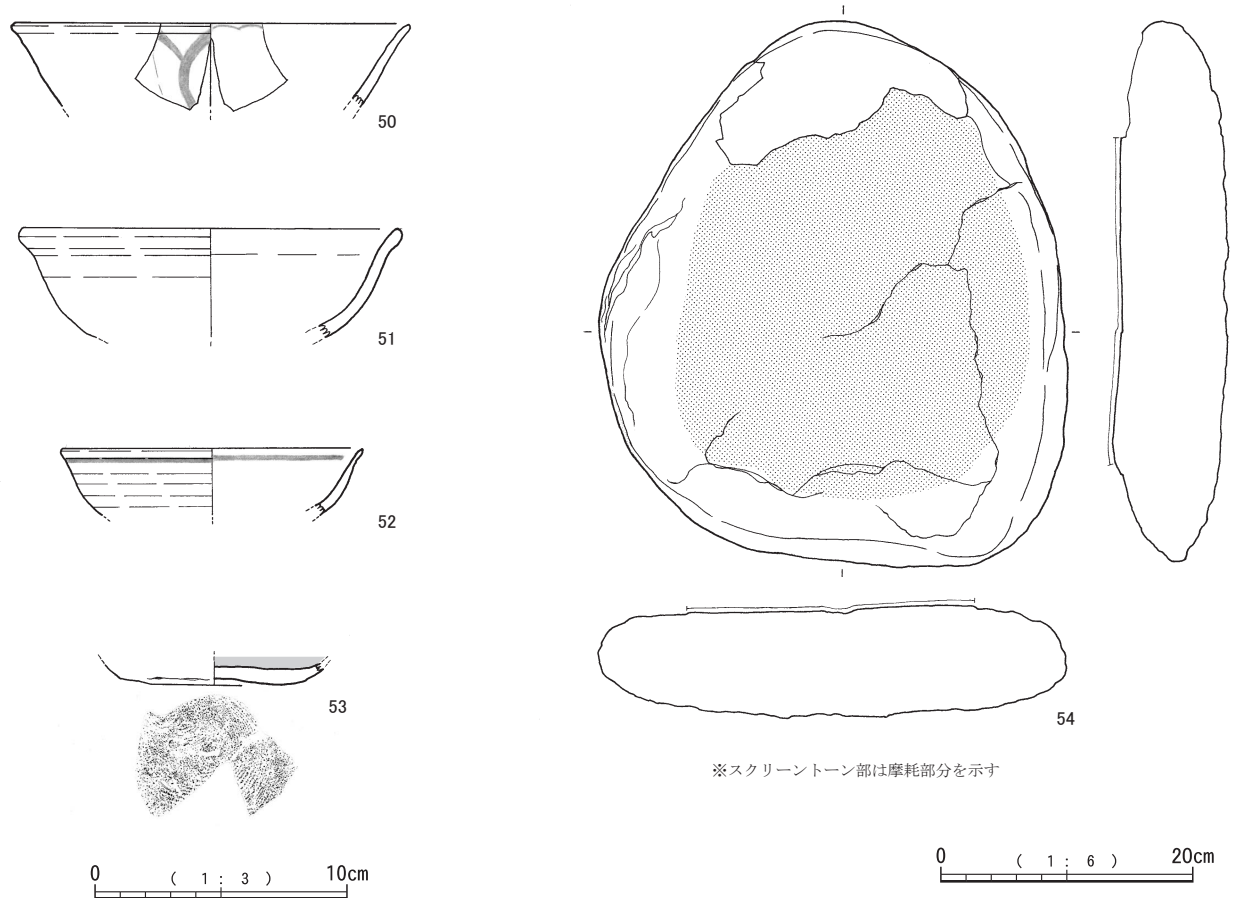
石の可能性が高いが、今回の調査ではSP71とともに掘立柱建物跡を構成する柱穴はみつからなかった。

溝状遺構(第35図)

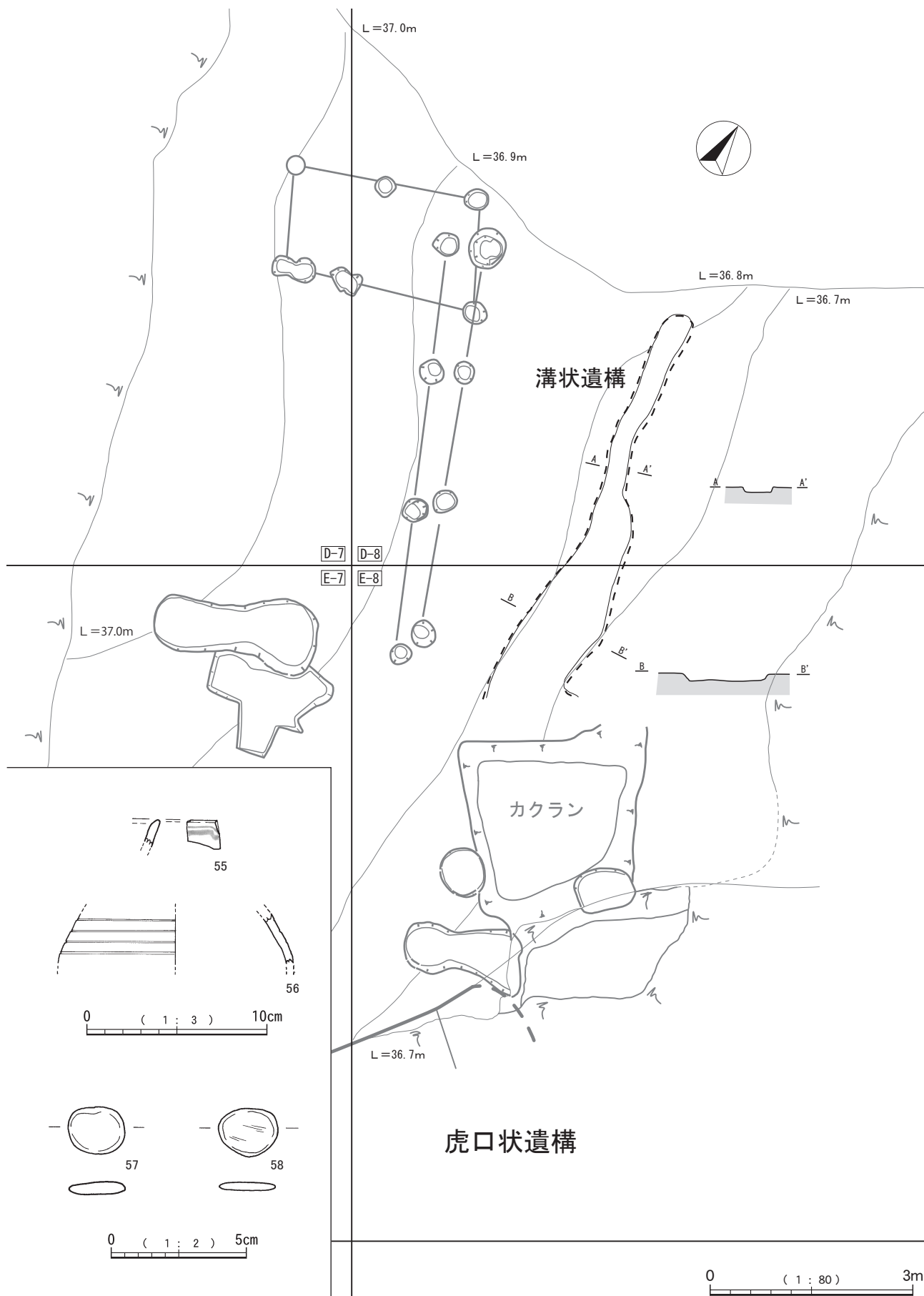
D・E－8区から、全長6.2m、最大幅1.2m、最小幅0.6mの明瞭な硬化面を検出した。掘り込みの深さは約10cm程度で床面はほぼ平坦である。断面形はごく浅い逆台形状である。

西台地の傾斜に沿うように位置し、大型土坑側からみると、北に向かい幅を狭めながら延びる。周辺からは掘立柱建物跡1号や柵列1・2、炉跡1～4号などが検出されている。遺物は青磁と薩摩焼の小片と、基石が2点出土した。

55は14世紀代の龍泉窯系青磁碗C類の口縁部片である。56は17世紀代の苗代川系の薩摩焼の壺あるいは徳利の肩部である。外面に多重の平行沈線を巡らせ、内面に白い化粧土を施す。57・58は基石である。径2.0cm程の扁平な小円礫を使用している。57はホルンフェルス製でよく使用されており光沢をもつ。58は頁岩製である。



第34図 ピット内出土遺物



第35図 溝状遺構および出土遺物

虎口状遺構(第36・37図)

E～G－7～9区で検出した。西台地上の大型土坑と、東谷へ下る斜面に位置する堀切状の通路状遺構で構成されている。

虎口状遺構と通路状遺構の埋土に切り合いはみられず、同時期に構築された一体の遺構であると判断した。根拠は後述するが、15世紀後半頃～16世紀代に機能し、その後埋没した遺構と考えられる。通路状遺構からは18世紀後半以降の遺物がより多く出土し、道として後の時代まで使用されている。そのため遺物は大型土坑と通路状遺構に分けて掲載・説明する。

また、大型土坑の北側の縁（E－8区）に西台地の北側へと上る階段状の遺構も検出したが、床面の遺物から近世以降に造られたものと判断した。近世の調査の項で説明する。

大型土坑

F・G－7・8区のⅡ層上面で検出した。大型土坑の平面形は隅丸方形を呈し、長軸13.0m×短軸11.2mである。掘り方は崩落しているため広がっており、検出面から床面までの深さは約2.6mである。床面は4.1m×4.4mで、平坦である。また、大型土坑と通路状遺構の境の入口近くには安山岩・凝灰岩・砂岩のこぶし～人頭大の亜円礫10数個による礫集中部（写真15）が確認された。入口付近のシラスの堆積状況は攪乱気味で意図的な埋め戻しを窺わせた。これらの礫はその行為によるものとも考えたが、加工や使用の痕跡は認められず、断定するには至らなかった。また、大型土坑側の入口近くの床面からオオトゲサンゴ科コオオトゲキクメイシと考えられる珊瑚が白色化した状態で1点出土した。

大型土坑の埋土は表土であるⅠ層～最下層であるⅨ層に分層できた。うちⅣ層は土質の違いによってさらにa～cの3層に分層した。

Ⅸ層からは炭化材が出土し、うち6点について放射性炭素年代測定を行った。うち5点は周囲のシラス層に由来すると考えられる旧石器時代（28,000calBC前後）の値が、1点は15世紀中頃～末頃（1436－1490calAD（95.4%））の結果を得た。遺物は出土していない。

Ⅸ層を覆う直上のⅧ層からは中世の遺物のみが出土した。そのうち最も新しい遺物は16世紀後半の青花である。

Ⅷ層以上はⅦ層・Ⅵ層・Ⅳa層のように明らかな崩落土がみられ、レンズ状に自然堆積する。そして

中世の遺物に肥前系陶磁器や薩摩焼などの近世の遺物が混在する。上面で炉跡などの遺構を切っている検出状況からも虎口状遺構の上部は長年の雨水等による浸食で広がっていることが窺え、本来は壁面がさらに急な角度であった可能性がある。

これらのことから、大型土坑はⅨ層（14世紀後半頃）の時期に構築され、Ⅷ層の時期（15世紀後半～16世紀代）まで機能し、その後埋没したと判断した。よって遺物はⅧ層と、Ⅰ～Ⅶ層に分けて報告する。

通路状遺構(堀切)

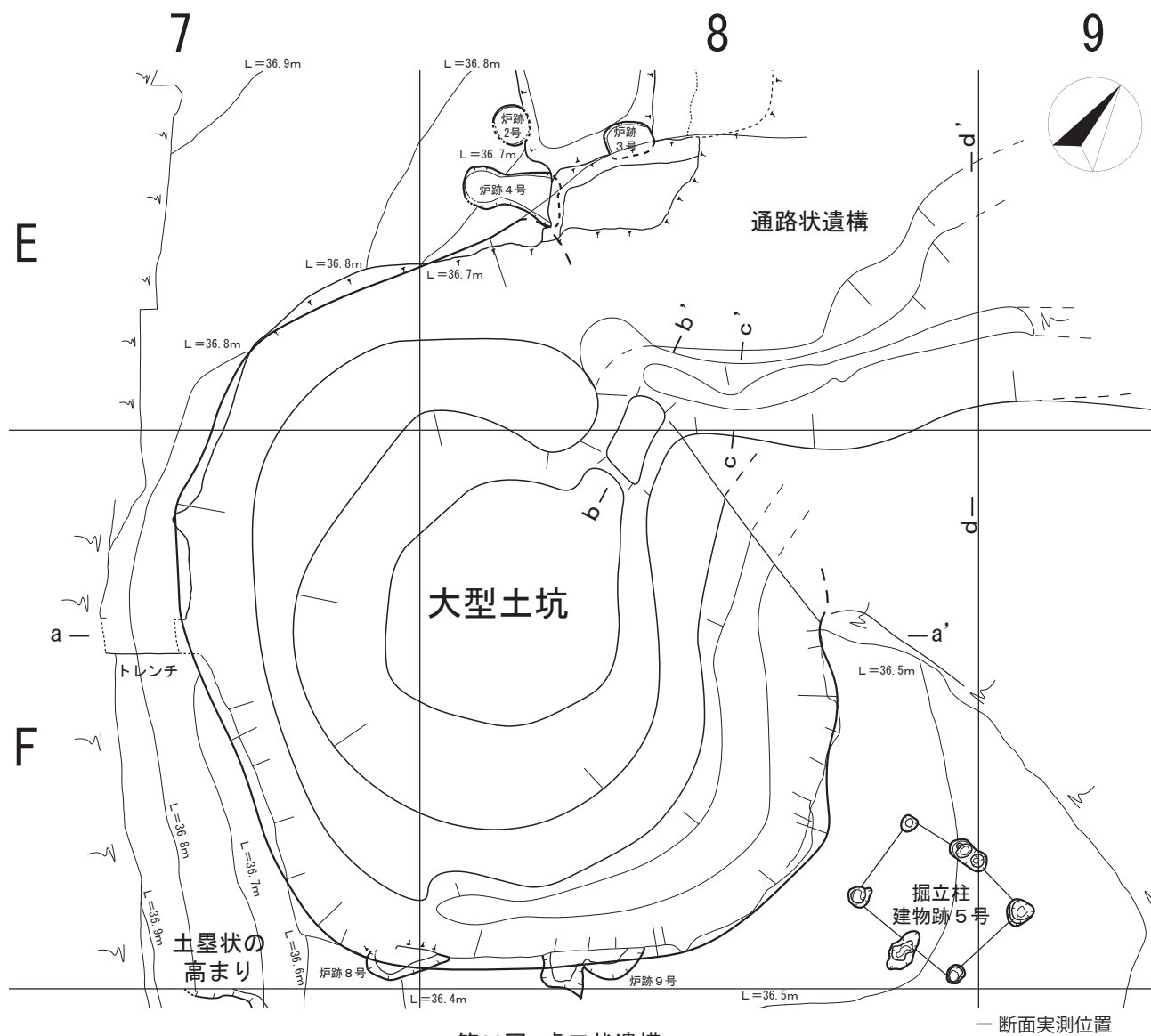
大型土坑から東谷へと降りる傾斜地で検出した。台地上では畑地としての利用による削平を受け、谷部では宅地造成のため9区より先を消失していた。傾斜に直交するように、断面形「V」字の堀切状の通路を設けて大型土坑へと接続させる。通路は大型土坑入口に近づくにつれて狭くなり、最も狭いところで検出面からの深さ1.6m、床面の幅20cmで、人1人が通ることも難しい状況である。削平を考慮すると本来の深さは約5mと推測される。通路は大型土坑の入口近くで折れ曲がり、大型土坑との境は一段高くなっている。全体的に蛇行するように構築されている。

埋土は断面d-d'の位置で観察した。最下層のⅤ層上面は硬く締まっていたが、それより上層に人工的に埋められた痕跡はみられず、長い年月をかけて徐々に埋没したと考えられる。

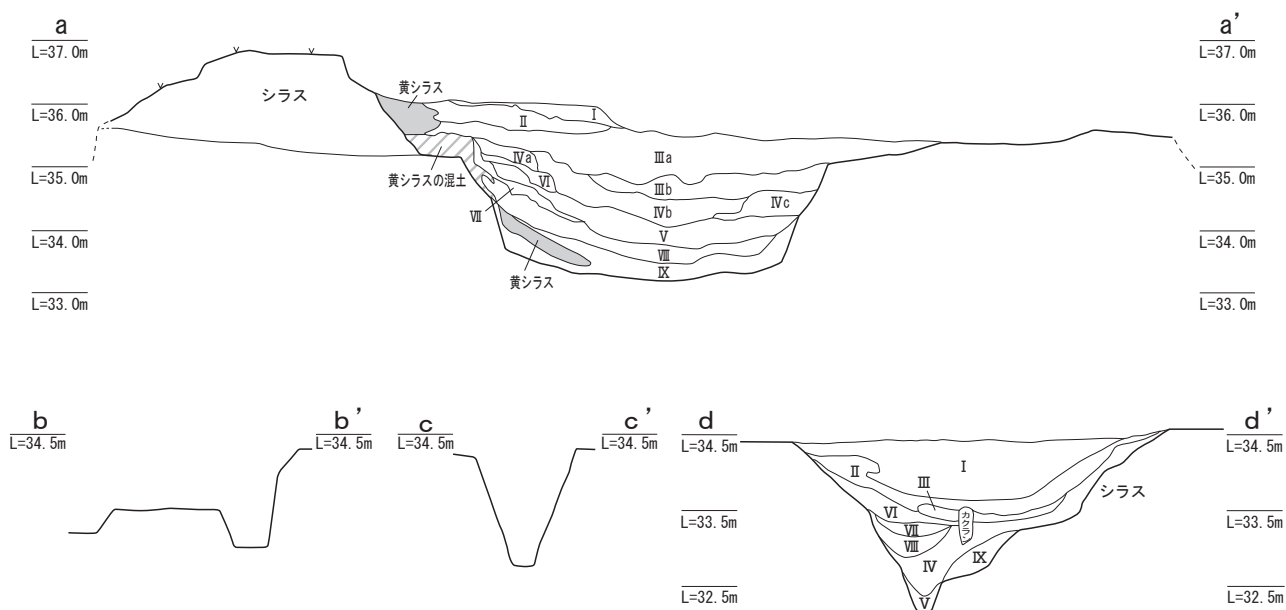
遺物による帰属時期の判断は難しかったが、最下層のⅤ層上面は硬化面が形成され、構築時期に近い道跡であることが推測される。



写真12 虎口状遺構航空写真



第36図 虎口状遺構



第37図 虎口状遺構埋土堆積状況

入口近くの底面付近で出土した炭化材は、放射性炭素年代測定の結果は1540-1635calAD (57.5%)の結果を得ており、樹種はスギであった。

遺物は大型土坑のものと比較すると近世以降の陶磁器や瓶などの生活雑器が多い。通路状遺構は、近

世まで使用された痕跡があり、中世後半期以降長い時期に渡って生活道として利用されていたことが窺われる。



写真13 大型土坑入口から通路状遺構を望む



写真14 通路状遺構埋土堆積状況



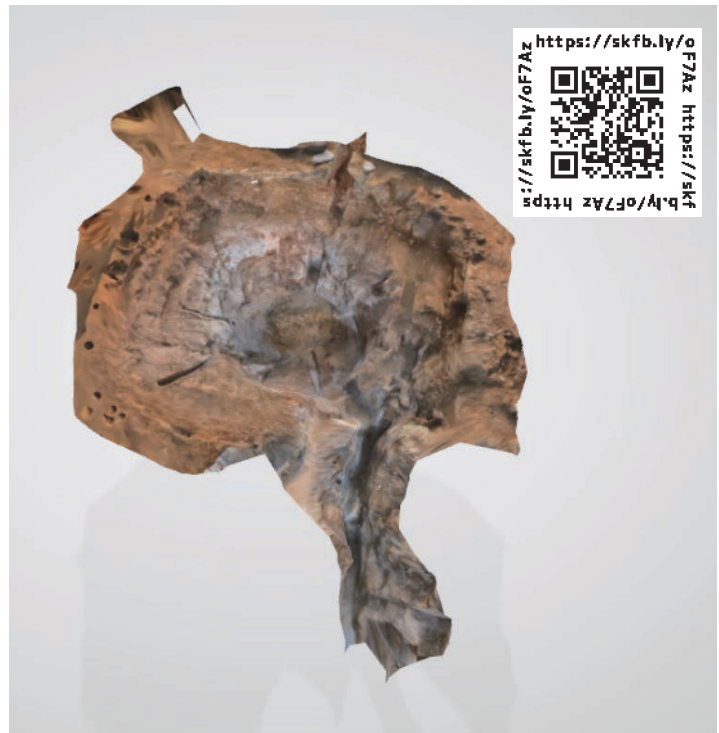
写真15 入口近くから出土した礫



写真16 入口近くから出土した珊瑚

【大型土坑 a-a' 断面埋土】黒褐色土(10YR2/3) しまり、粘性ほぼなし
 I 褐色土(7.5YR4/4) しまり弱い やや粘性あり
 II 暗褐色土(7.5YR3/4) しまりなし 粘性あり
 IIIa 褐色土(7.5YR4/3) しまり、粘性ともにややあり
 IIIb 褐色土(7.5YR4/3) しまり、粘性ともに弱い
 IVa 下層はVI層由来のピンクシラスブロックが混じる
 IVb 下層はVI層由来の土と二次シラスブロックが混じる
 IVc IVa, IVb層に似るが、二次シラスブロックがより多く混じる
 V 暗褐色土(7.5YR3/3) しまり、粘性ともにあり
 VI 黒褐色土が混じる
 VII 黒色粘質土混じる VI層のブロックか
 VIII 明褐色土(7.5YR5/6) シラス地山由来のピンクのブロックが混じる
 IX 橙色土(7.5YR6/6) シラス地山由来のピンクのブロックと暗褐色土が混じる。VIII層と比較してピンクのシラスが主体である

【通路状遺構 d-d' 断面埋土】
 I 灰白色土(2.5YR1/7)
 シラス埋立土 10YR8/6, 7/8, 8/8系のブロックを含む
 砂質土 硬く締まる
 II 暗褐色土(10YR4/4) 砂質土 粘性ややあり
 III 灰白色土(2.5YR1/7) シラス層の流れこみによる堆積層
 樹根による擾乱を受ける
 IV 暗褐色土(10YR4/4) しまり、粘性ともに弱い
 V 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱く固く締まる 最下層埋土に相当する
 VI 黄褐色土(10YR5/6)
 VII 黒色粘質土混じる VI層のブロックか
 VIII 明褐色土(7.5YR5/6) シラス地山由来のピンクのブロックが混じる
 IX 橙色土(7.5YR6/6) シラス地山由来のピンクのブロックと暗褐色土が混じる。VIII層と比較してピンクのシラスが主体である



第38図 虎口状遺構3D写真

大型土坑Ⅷ層の遺物(第39・40図)

59～61は青花である。59は景德鎮窯産の青花碗C群の口縁部片で、外面には蓮花文が描かれる。器壁は薄く、やや丸みを帯びながら開く。いわゆる蓮子碗と推測され16世紀前半～中葉に該当する。60は景德鎮窯産の青花皿E群の底部片で、見込みには鳳凰文、高台内には「天下太平」の文字が描かれる。見込みの釉はかすれ、被熱の痕跡が認められる。61は漳州窯産の小坏あるいは小壺でほぼ完形である。外面に渦巻き様のモチーフで花を表現した草花文を巡らせる。高台の畳付は無釉で、高台内には粗く釉がかかる。高台の内側に藁灰が付着する。口禿で、本来は蓋と組み合わせて使用する坏身である。16世紀後半の遺物である。

62・63は土師器皿である。ともに底部に糸切りを施し、大きく開く器形から15世紀後半～16世紀前半頃に帰属すると考えられる。外面には回転ナデ後ナデ調整を行う。62は口径8.2cmで、完形で出土した。胎土は白っぽく、褐色・黒色の粒と角閃石を含む。63は推定口径13.8cmである。胎土は精良で赤みが強い。回転ナデの凹凸を残す。外面に薄く煤が付着する。

64は須恵器の大甕の胴部最大径付近である。器壁は厚い。内外面にハケメを施す。外面には成形時の平行タタキの痕が確認できる。焼成が良く硬質で、灰色を呈し青花よりも古い時期の九州産の遺物の可能性がある。

65～68は土師質焼成色を呈する播鉢で、4点とも

に口縁端部を「コ」の字状に成形する。65・66は器壁が急な角度で直線的に立ち上がる。8本単位のやや太幅の櫛目が密に施され、軟質のため摩耗している。ともに内面や外面に煤が付着する。同一個体の可能性も考えられる。67・68は器壁は丸みを帯びながら大きく開く。ともに櫛目は8本単位で、硬質のためシャープに残る。胴部下位に指頭圧痕が多くみられる。67は口縁部の内側をわずかに張り出させる。外面に数本の右上→右下の細沈線が確認される。口縁部内面に煤が帯状に付着するため、天地を返した状態で火にかけて使用したことが推測される。68は外面に成形時のケズリの痕が残る。口縁部外面と口唇部に粗いハケメを巡らせる。内外面に煤が薄く付着する。

69は黒色のチャート製の使用・加工痕跡のある剥片である。左右両側縁に敲打による微細な連続剥離がみられる。火打石の可能性も考えられる。

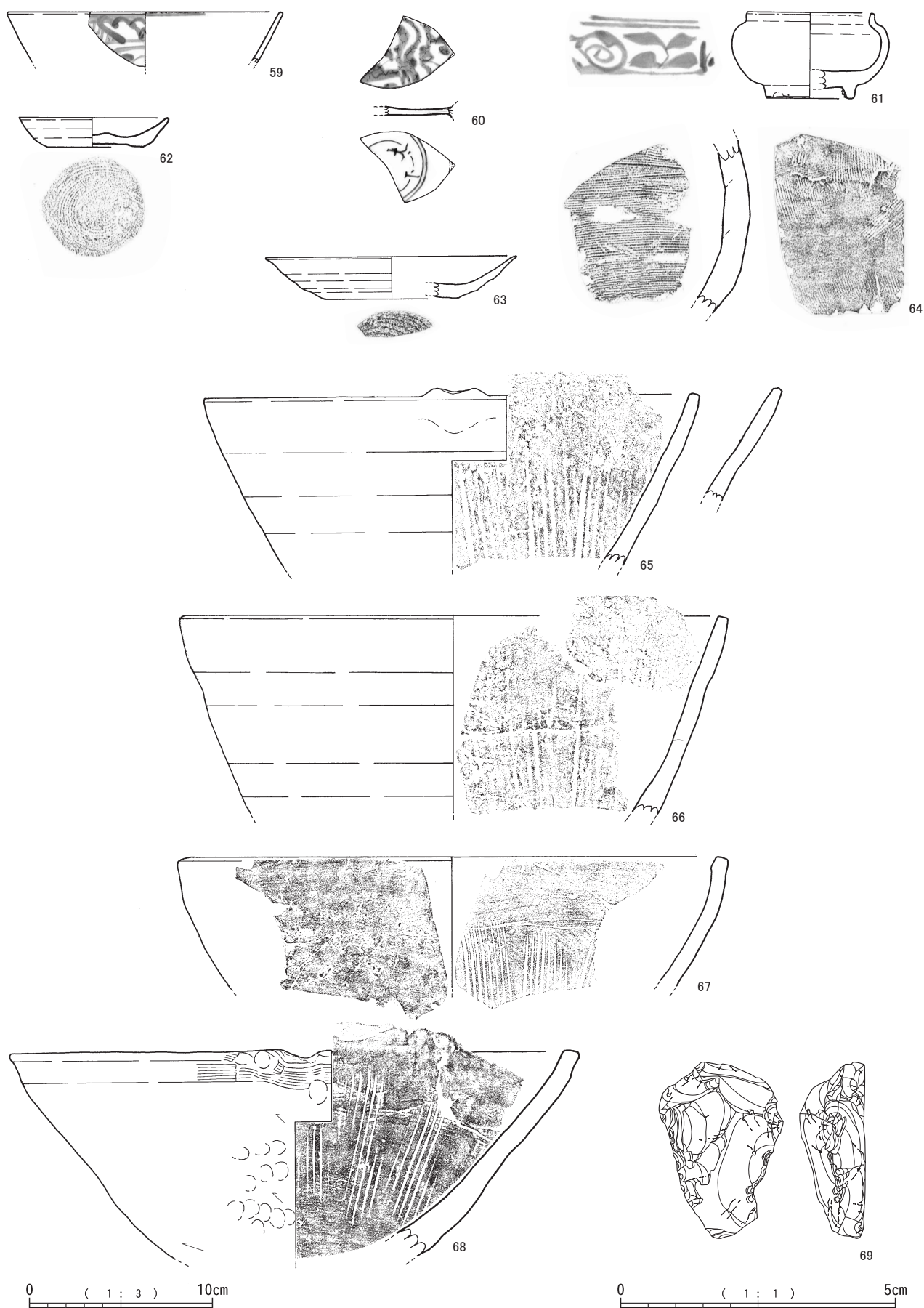
70は口径約17.4cm、胴部最大径は推測値が約40cmの大型の壺である。口縁部～肩部片と胴部下半片で、同一個体と判断した。肩部が大きく張り出し、底部にむかって急にすぼまる器形で、焼きひずみが見える。肩部に重ね焼きの目跡がみられ、胴部の最大径よりやや下に窯詰めではほかの製品と接したことによる円形の釉の剥がれが確認できる。沖縄分類の中国褐釉陶器大壺の5類(2007瀬戸ほか)に該当し、15世紀前半から半ば頃の遺物と考えられる。



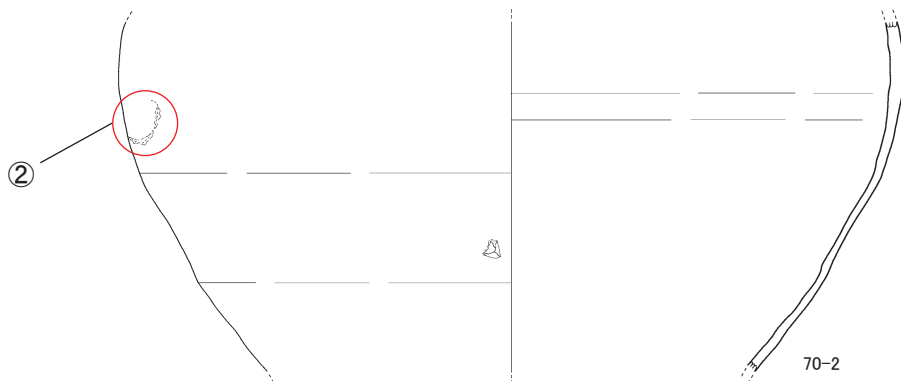
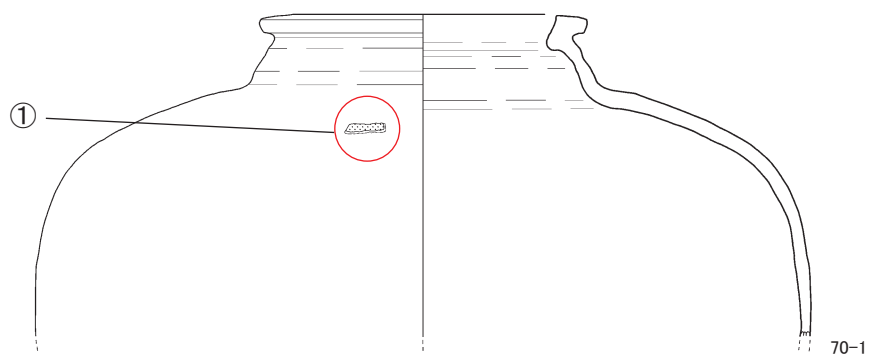
写真17 大型土坑土層断面(南側から)



写真18 中国産褐釉薬陶器壺(沖縄Ⅴ類)出土状況



第39図 大型土坑Ⅷ層出土遺物①

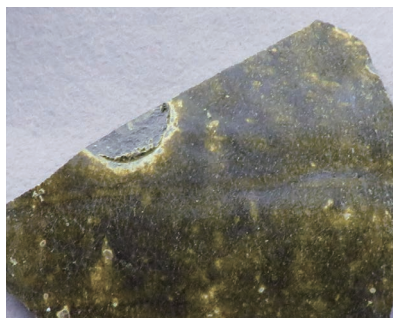


0 (1 : 4) 10cm

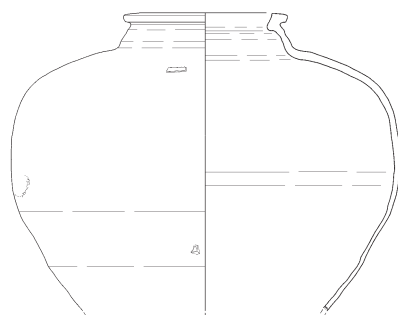
①肩部の目跡



②密接した状況で窯詰めしたことによる、釉の剥がれ



【70-1, 2より図上復元図】



0 (1 : 8) 10cm

第40図 大型土坑Ⅷ層出土遺物② (中国産褐釉大壺 沖縄Ⅴ類)

大型土坑Ⅰ～Ⅶ層の遺物(第41～56図)

青磁(第41図 71～95)

71～95は青磁である。

71～86は龍泉窯系の碗である。

71は碗A類である。体部は直線的に開く。内面上位に3条の櫛描きの圈線を巡らせる。釉調はやや暗く、オリーブ灰色を呈する。12～13世紀頃に帰属する。

72～79は外面に蓮弁文をもつ。72～74は鎗蓮弁を施す碗B1類で、13世紀中葉～14世紀前半頃に該当する。本遺跡から出土した青磁碗の中でもやや大型である。72・74は腰部で蓮弁が重なり合う。74は緩く外反しながら開く。釉調は73はやや暗いオリーブ灰色で、ほかは鮮やかな緑色を呈する。75は碗B2類で、片彫りの蓮弁文を有する。蓮弁の幅は広くB2類のなかでもやや古手で、14世紀後半の遺物である。釉は薄く均一に掛かる。76は碗B3類で丸彫りの蓮弁文を有する。胎土の色調がやや暗い。77～79は碗B4類で、線描蓮弁文をヘラ先で描く。3点とも弁先は圈線から離れ、蓮弁の表現を簡略化している。15世紀後半～16世紀前半に帰属する。

80～83は無文の口縁部～腰部片である。80の口縁部はやや玉縁状で、外反する。碗D1類に該当し、14世紀末頃～15世紀前半頃の遺物である。81～83は口縁部が直口のタイプで、碗E類に該当する。15世紀中葉～16世紀代に帰属する。なかでもやや腰部が張り出す器形の83は新しく、16世紀前半頃に帰属すると考えられる。外面上位に横位の短沈線を数条施す。

84・85は見込みに印花を有する底部片である。印花は84は十字花文、85は草花文である。84は高台が大きく、高台内は無釉である。14世紀後半～15世紀前葉頃の碗D1類の特徴をもつ。85は高台が小さく腰高である。畳付にも釉がかかる。高台内に蛇の目釉剥ぎを行う15世紀中葉～16世紀前半頃の碗E1類の特徴を有する。

86は15世紀後半～16世紀前半の碗の底部近くで、高台の一部が残る。胎土の色調は褐色を呈し、釉は濁る。焼成の悪い粗製品である。

87～88は小碗である。87は腰部に鎗蓮弁を巡らせる。高台内面は無釉で、畳付に釉剥ぎを行う。見込み中央部が凹む。やや焼成不良のため、釉調は黄色を呈する。15世紀前後の遺物と考えられる。88は丸みのある器形で、口縁部で大きく内湾する。外面に弁先に丸みのある丸彫りの蓮弁文を有する。透明感のある釉が薄く均一にかかるが、内面には露胎した

部分がわずかにみられる。15世紀中頃の碗B3類と考えられる。

89～95は小坏または皿である。89は玉縁状の口縁をもつ小坏である。14世紀後半～15世紀前半の遺物と考えられる。90は碁笥底の小坏であると推測される。15世紀後半～16世紀代の遺物である。91は14世紀前半頃の折縁皿である。小片のため図化が難しかったが内面稜以下に蓮弁を有すると推測される。92・93は稜花皿である。ともに内面の口縁部端に櫛描きの波状文を描き、93はその下位に草花文を描く。92は15世紀代の、93は15世紀後半～16世紀初頭の遺物と考えられる。94は92と形態が類似する稜花皿の胴部である。

95は皿の底部である。高台内は無釉で畳付には釉がかかる。被熱の痕跡が認められる。16世紀代の遺物であると考えられる。

白磁(第42図 96～106)

96～106は白磁である。

96は口禿碗の口縁部片で、13世紀後半～14世紀はじめ頃の碗IX類に該当する。101は同じくIX類の口禿皿の底部である。やや上底気味の平底を呈する。

97～100は端反皿で、102はその底部である。皿C群の範疇で、15世紀後半～16世紀前半の遺物である。総じて扁平な器形で、98・99は大きく外反し、高台のまわりに砂粒の付着が認められる。100・102は腰部に丸みを帯びる。

103は厚みのある幅広の高台で、高台径は小さい。体部下位と高台内と畳付には釉がまばらにかかる。外面の高台まわりの露胎部分の色調は橙色を呈する。接地面に藁灰が付着するため産地は漳州窯産であると考えられる。

104は白磁小片で、傾きから碗の底部近くと考えられる。外面が無釉であることから碗VIII類であると捉えると、12世紀中頃～後半頃の遺物となりほかと時期差のある中世前期の遺物となる。西台地からはVIII類の口縁部(315・316)も出土する。

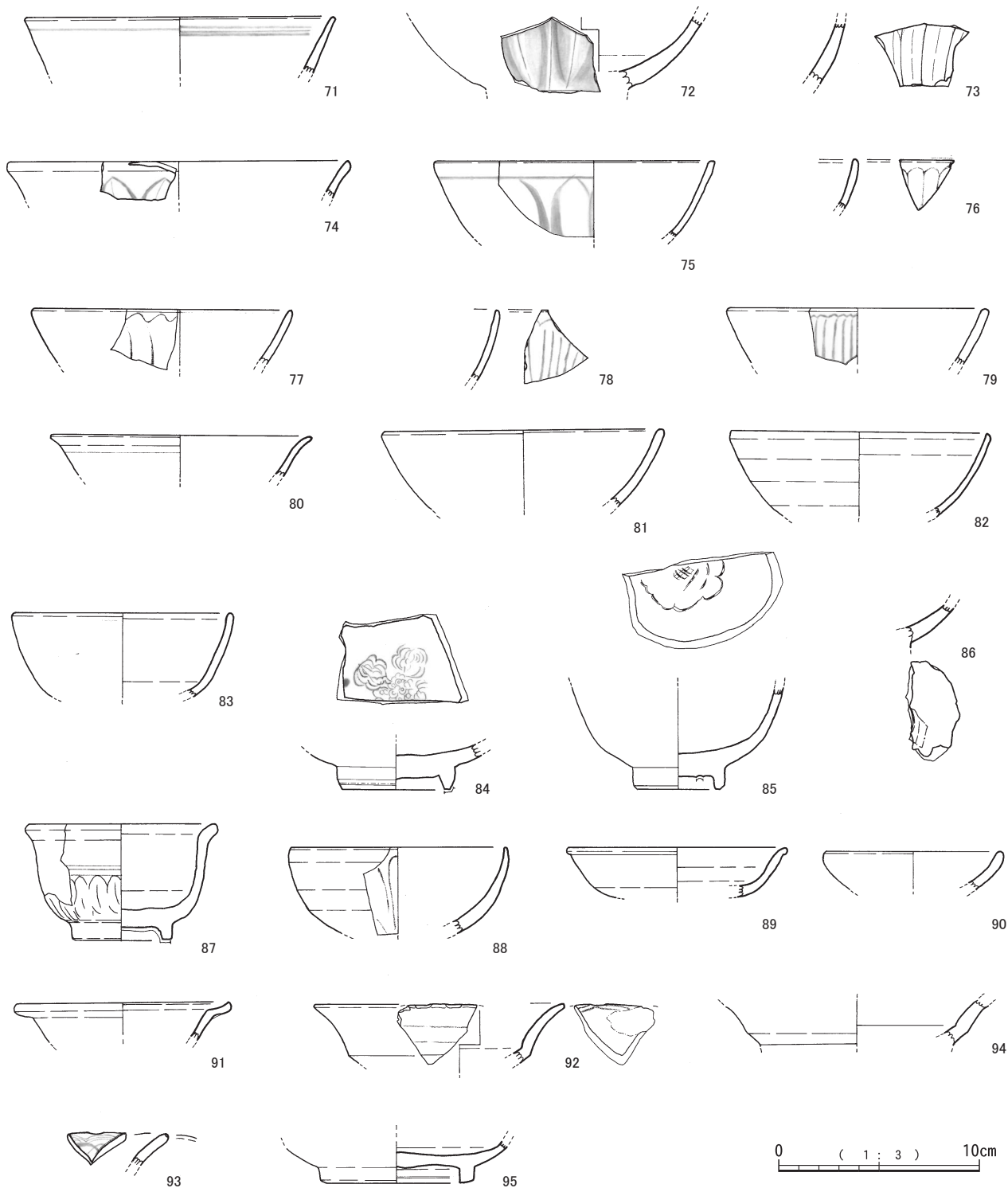
105と106は16世紀代の景德鎮窯産の白磁皿C群である。胎土が灰色を呈するため釉調は紫がかかる。口縁部の釉のかかりはややまばらで内面に釉垂れがみられる。接地面に釉剥ぎを行う。

青花(第42図 107～120)

107～120は青花である。

107～112は碗である。

107～109は染付碗C群のいわゆる蓮子碗である。

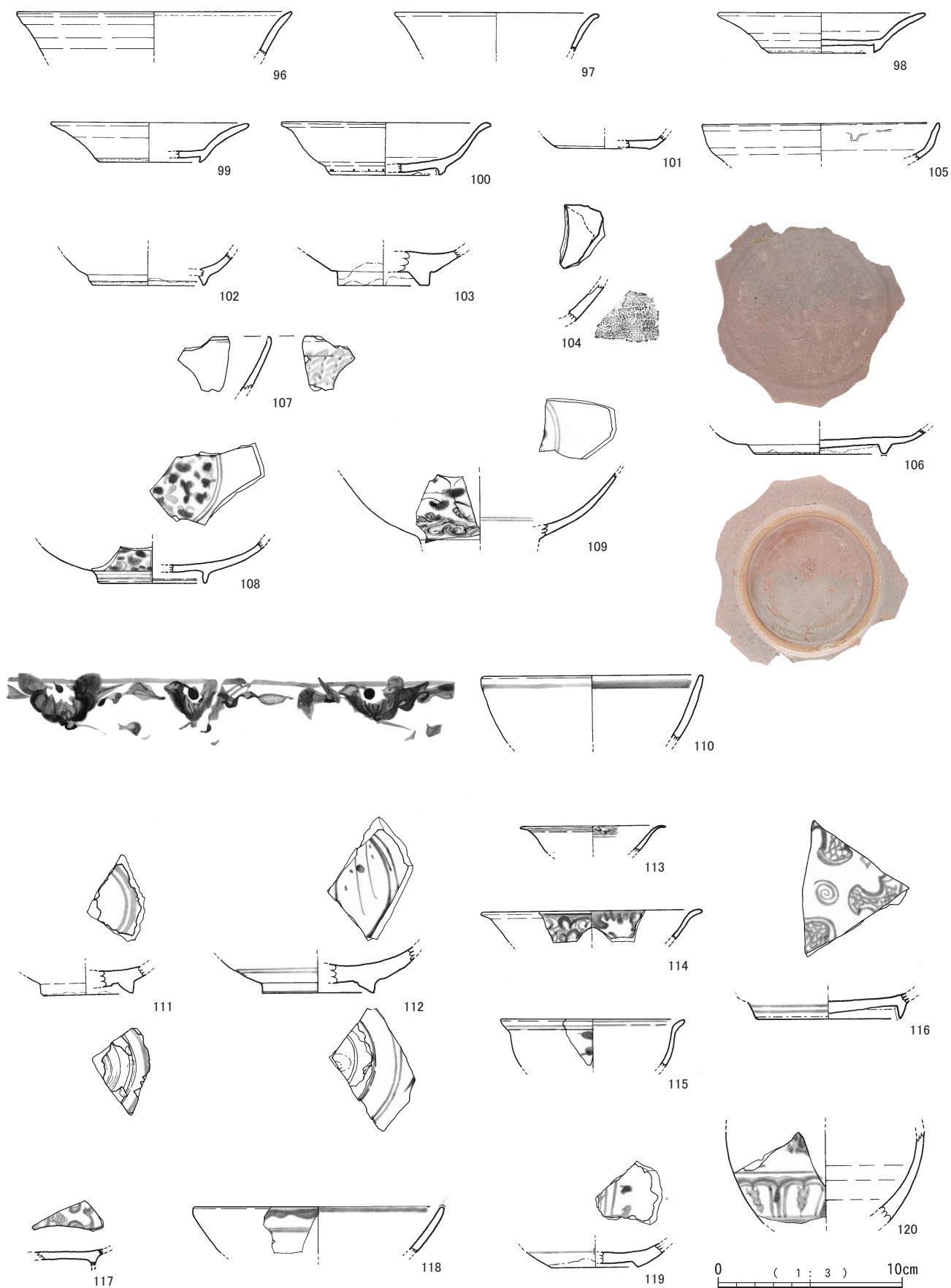


第41図 大型土坑出土遺物①(青磁)

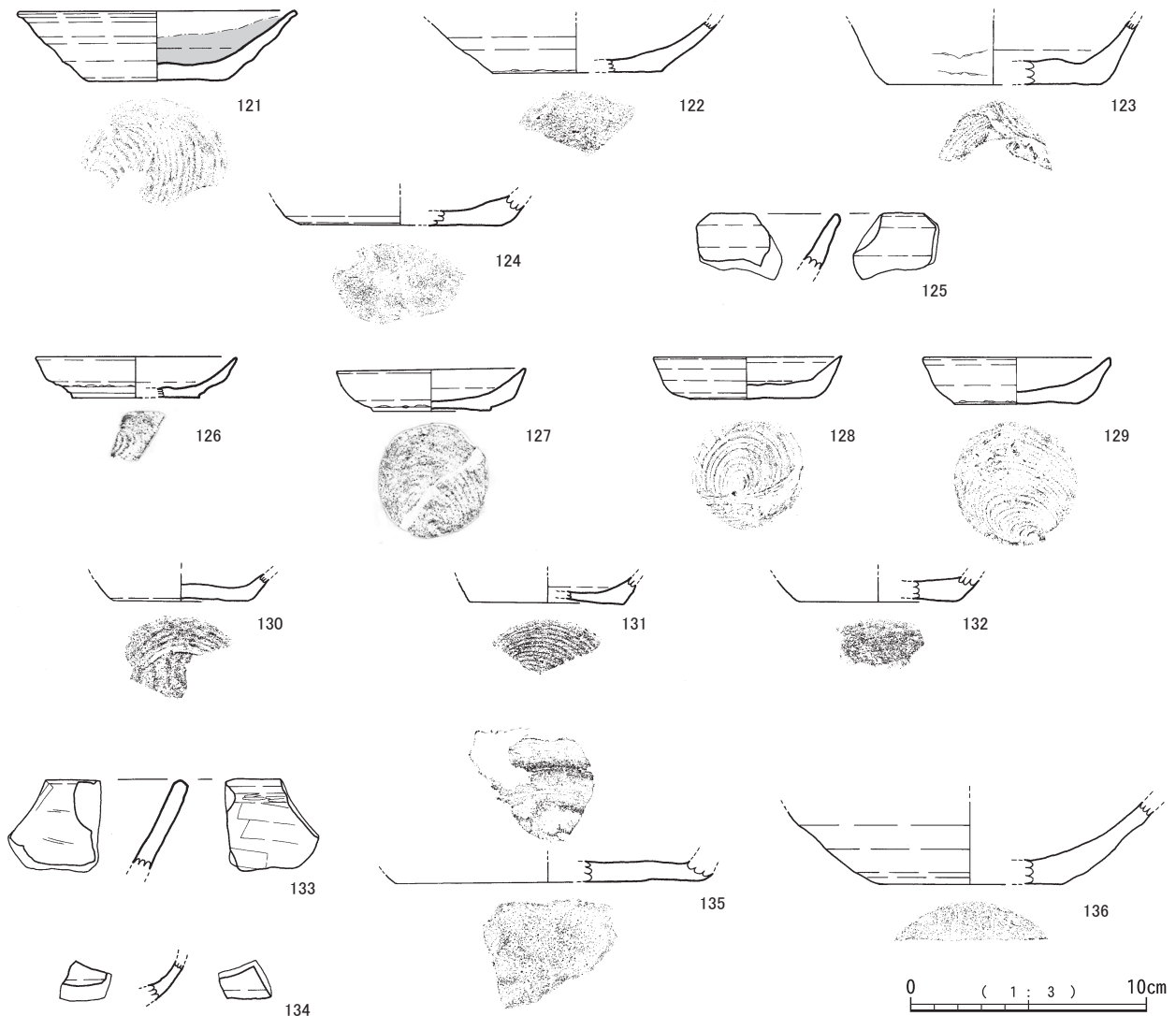
器壁は薄く、開いた器形である。帰属年代は概ね15世紀後半～16世紀初頭頃である。107は外面に波濤文を全面的に描く。漳州窯産で地の色はやや黄色く、呉須の色調は淡い。E群に該当する可能性もあり、16世紀後半頃まで時期の下る遺物の可能性も考えられる。108・109は景德鎮窯産である。地色は青

白く、呉須の発色も鮮やかである。108は外面と見込みに点と波状を組み合わせたような文様を密に描き、高台内に丁寧に釉をかける。108は外面に草花文を描く。

110～112は染付碗E群のいわゆる饅頭心形の一群である。16世紀中葉～16世紀後半に帰属する。3点



第42図 大型土坑出土遺物②(白磁・青花)



第43図 大型土坑出土遺物③(土師器)

ともに漳州窯産である。110は体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部外面に、厚みのある呉須で大ぶりの草花文を巡らせる。111・112は底部で、断面三角形の低い高台を有する。高台を篋状の工具によってケズリ出して形成した痕跡が高台内に残る。ともに高台内は無釉で、112には一部に釉がかかる。接地面に窯道具の押圧痕が傷様に付く。112の見込みには草花文が描かれる。

113～119は小坏や皿である。

113は16世紀後半頃の景德鎮窯産の小坏で、非常に薄く精緻な造りで呉須の発色も鮮やかな良品である。内面には四方襷文帯を巡らせる。

114～117は口縁部が端反の染付皿B群で、そのなかでも古手のB1群に該当する。15世紀後半～16世紀初頭に帰属する。4点とも景德鎮窯産である。114は外面に唐草文が描かれ、被熱の痕跡が窺える。115は坏に近いすばまった器形である。草花文が描かれる。116は見込みに十字花文を描く皿で、

断面三角形の低い高台の内外面に釉剥ぎを行う。

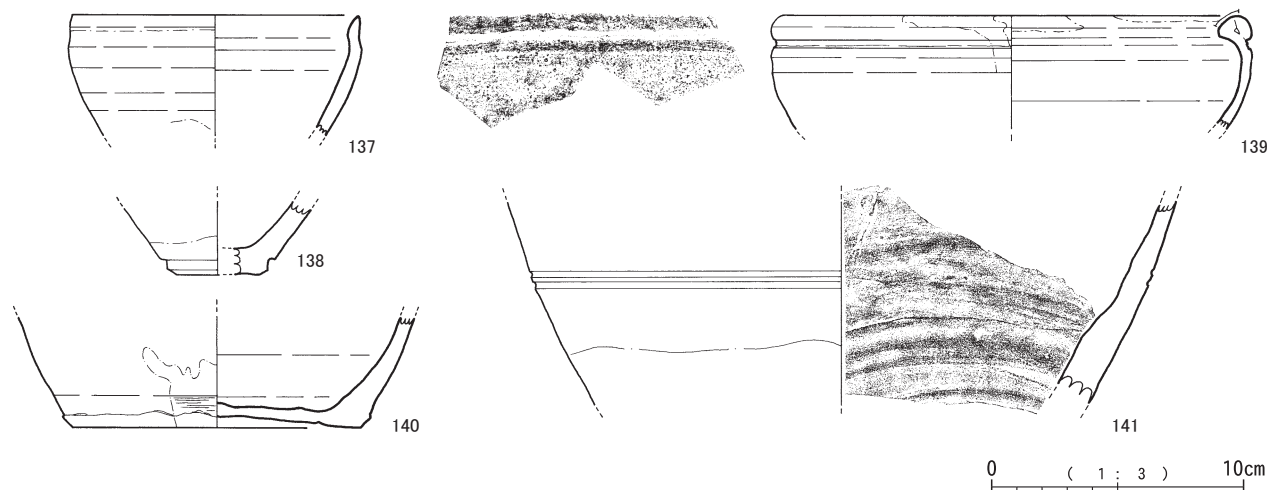
117は見込みに玉取獅子を描く。

118・119は漳州窯産の基筈底をもつ一群で、C群に該当する。規格、胎土、色調から同一個体の可能性も考えられる。118は口縁部外面に厚みのある釉で波状文を巡らせる。119は判読は難しいが、見込みに文字が描かれると推測される。接地面近くは無釉で高台内には釉がまばらにかかる。

120は16世紀代の景德鎮窯産の小壺の胴部下半片である。外面のラマ式蓮弁文は花卉同士の接線を一本化して描き、花卉は単位を保つ。明代の施文の特徴である。内面には粗いハケメが施される。

土師器(第43図 121～136)

121～136は土師器である。本遺跡から出土した壺と皿はすべてヘラ切底であり、ほかの遺物の出土状況からも、概ね中世に帰属すると判断した。混和材の少ない精良な胎土を使用するものが多い。



第44図 大型土坑出土遺物④(中国産陶磁器)

121～125は坏である。121・122・124は体部が大きく開く。底付きがよく、121・122は接地面の稜を角付ける。15世紀後半～16世紀前半の形態であると考えられる。121は器面に回転ナデによる凹凸を残し、内面に煤が付着するため灯明皿として使用したことが窺える。122は丁寧にナデて仕上げる。胎土には、黒色粒と角閃石が目立つ。123は、口縁端部を欠損する。体部は急な角度で立ち上がり、接地面は丸みを帯びる。器壁は厚く底面中央がやや盛り上がる。外面には輪積みや糸切りによって粘土が乱れた痕が残る。赤みの強い胎土である。125は123と同一個体の口縁部である。14世紀後半頃の形態であると考えられる。

126～132は皿である。132のみがやや大形で、ほかは底径8cm程度、器高2cm程度とほぼ同規格である。色調はやや白い傾向がみられる。

126～128は口縁部が残存し、口縁端部は先細る。126～128は底部を糸切後にその周囲を面取りしており、接地面にごく小さな段を形成する。外面の胴部下位に弱い稜を有する。129はやや接地面が丸い。15世紀後半～16世紀前半に帰属すると考えられるが、底面の形態の差はわずかな時期差を示す可能性も考えられる。

133～136は器種の特定ができなかった土師質の土器である。133～136は坏や皿と比較すると硬質で、混和材の粒子も大きい。鉢の可能性も考えられる。

133は口縁部直下にストロークの短い横位のミガキを施す。134は丸みのある破片で、内外面はミガキ後ナデ調整である。小型の壺の胴部で、古墳時代の遺物の可能性も考えたが、本遺跡では当該時期の遺物が見当たらないためここに含めた。

輸入陶器(第44図 137～141)

137～141は中国産の輸入陶器である。

137・138は黒釉の天目茶碗の体部と底部片である。胎土の混和材の粒子は138が大きく多いため別個体である。137の体部は直線的に開き、口縁部で軽く屈曲して開く。15世紀中頃～16世紀代に帰属する。138は高台脇を面取りし、上げ底を呈する。接地面近くは無釉である。

139は中国南部産の鉢である。口縁端部を外側に折り曲げ突帯様に成形する。胴部は丸みが強い。器壁は薄く、硬質である。胎土には大粒の黒色粒と白色粒が混ざる。全面に薄く黄釉をかけた後で、口唇部に釉剥ぎを行う。その後内側から褐釉を外面側に垂らす。15～16世紀代の遺物と考えられる。

140・141は沖縄分類による中国産褐釉陶器大壺のⅢ～Ⅳ類に該当するものの底部片で、15世紀代の遺物である。胎土は黄褐色を呈し、精良で褐色粒がわずかに確認できる程度である。140は底径11.4cmで、やや上げ底を呈する。残存部の内面は全面施釉で、外面は接地面近くのみ無釉である。141は胴部径26cmを超える壺で、外面には2条の沈線を巡らせる。外面の下位は無釉で、内面はハケメを施し薄い褐釉を塗布する。湿気を防ぐための施釉で、茶葉の入れ物として使用される例もある。

須恵器(第45図 142～153)

142～152は須恵器甕である。142～147は口縁部～胴部上位で、150～152は胴部下位～底部である。148・149は小片により部位不明の胴部である。器面の調整はハケメを施すものとタタキを施すものとがみられ、挿図と観察表中に示す。

142～144・147・150・151・152は器壁に厚みがある。灰色を呈する須恵質のものが143と152で、褐色を呈する土師質のものが142・144・147・151である。144と147は外面が膜状に灰色化する。146と150は器面は灰色に近い色調だが、断面は土師質の焼成色である。

145・147・148は須恵質で、器壁が薄く硬質である。145・149は暗紫色の混じる縞状の胎土である。

153は赤みがかった色調を呈し、混和材に白色粒が目立つ。備前系の須恵器系陶器の甕の底部片と考えられる。

須恵器はほかの遺物の状況から中世後半期に帰属すると考えられるが、146のように内外面にハケメを施すタイプは中世前半期に九州の須恵器系の窯で焼かれた焼き締め陶器にも類例がある。150も九州産の可能性がある。

播鉢(第46～48図 154～175)

154～175は播鉢である。

備前系須恵質陶器、須恵質、土師質、器面を燻した黒色瓦質の4種類がみられる。うち土師質のものは硬質で断面が黒色を挟んだ縞状のものと、軟質なものがみられる。櫛目は8～11本単位のものでほとんど、硬質なものほどシャープな拓影となった。

154～156は備前系陶器の播鉢で、赤みがかった色調で硬質である。154・155は胴部下位片で、外面に指頭による成形痕がみられる。156は底部片で外面の接地面近くを工具によって削り、面取りする。

157・158は須恵質焼成色の播鉢で、暗紫色を挟んだ縞状の胎土である。同一個体の可能性もある。口縁部は断面が「コ」の字状で口唇部に浅い溝を巡らせる。内面の口縁部直下に櫛描きの波状文を巡らせてそれより下に櫛目を施す。

159は瓦質の播鉢である。口唇部は外傾し、口縁端部を内側にわずかに張り出させる。

160～173は土師質の播鉢で、160～168は口縁部で、169～173は底部や接地面を含む破片である。

160～173は焼成が良好で硬質である。口縁部内面上位に工具による横ナデを施す傾向がみられる。160～162は器壁が直線的に開くもので、口縁部の断面形は「コ」の字状でしっかりと角付けられる。口唇部は外傾し、浅い溝を巡らせる。外面には成形時の指頭圧痕が多く残る。胎土は3点ともにやや赤みの強い褐色である。160は半分近くが残存するが、歪である。外面の接地面近くに面取りを施す。163～166は口縁部近くがやや内湾するものである。胎

土は明るい色調である。164～166は内面上位に煤が付着するため上下を返して火にかけた可能性が考えられる。165・166は同一個体の可能性がある。

167・168は軟質なもので、体部は直線的に立ち上がる。同様のタイプは、小片も含めて総じて櫛目の幅が太い。口縁端部は丸みを帯びる。胎土の色調はやや白い。

底部片については169は硬質で、170～172は軟質である。外面の接地面近くに工具による面取りを施す傾向がみられる。

なお、土師質の播鉢のなかで、硬質で色調の明るいものは断面の芯部が黒く縞状である傾向がみられる。

174・175は規格・器形がほかの播鉢と共通するが内面に櫛目が確認できなかったものである。174は硬質な土師質で、175は須恵質の焼成色で、胎土に白粒を多く含む。捏鉢の可能性もある。

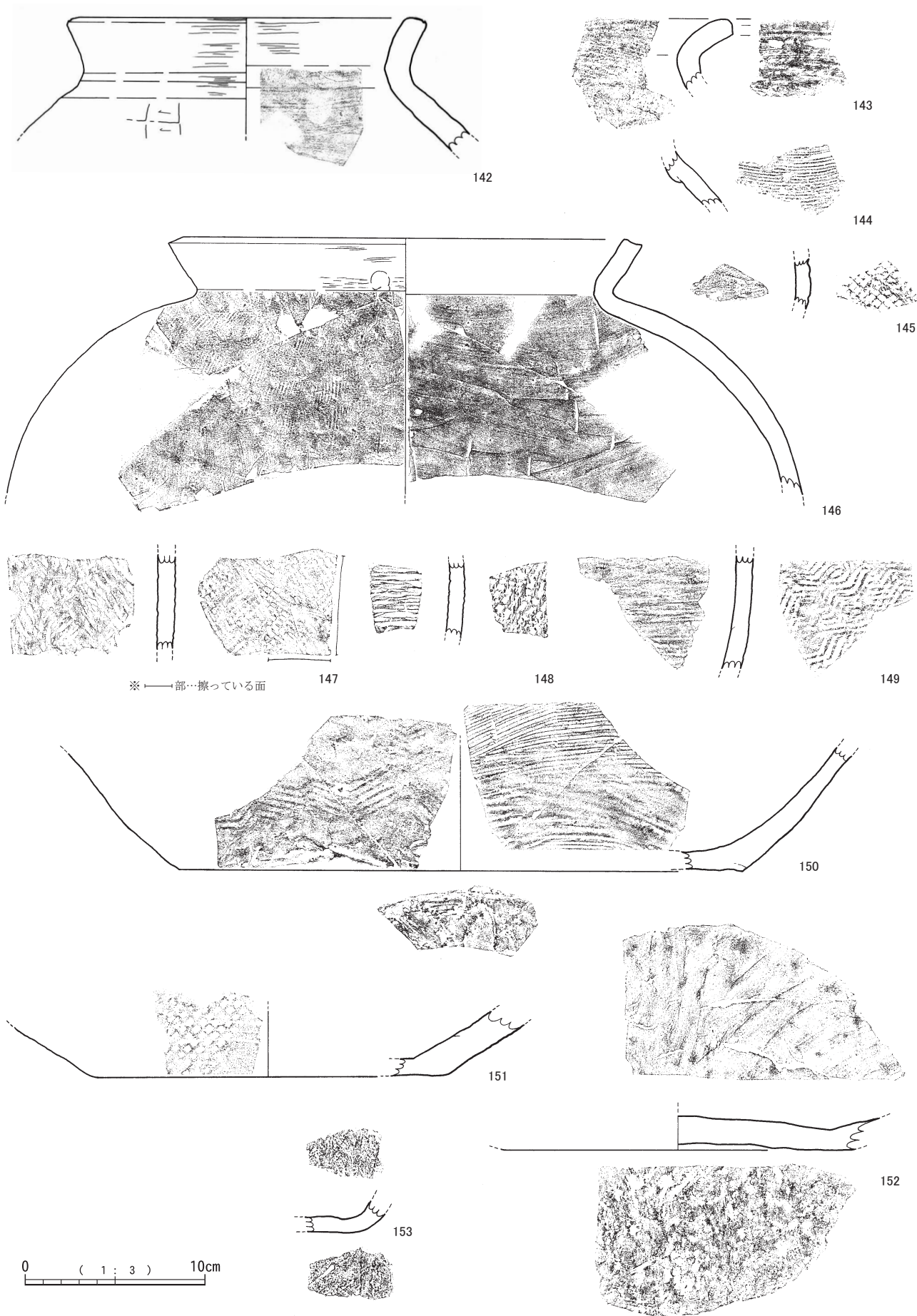
瓦質土器(第49・50図 176～188)

176～188は瓦質土器である。器種としては火鉢が多く出土したが残存率が低い。焼成色は土師質の褐色のものがほとんどだが、須恵器のように焼成がよく硬質である。概ね15世紀代の遺物と考えられる。

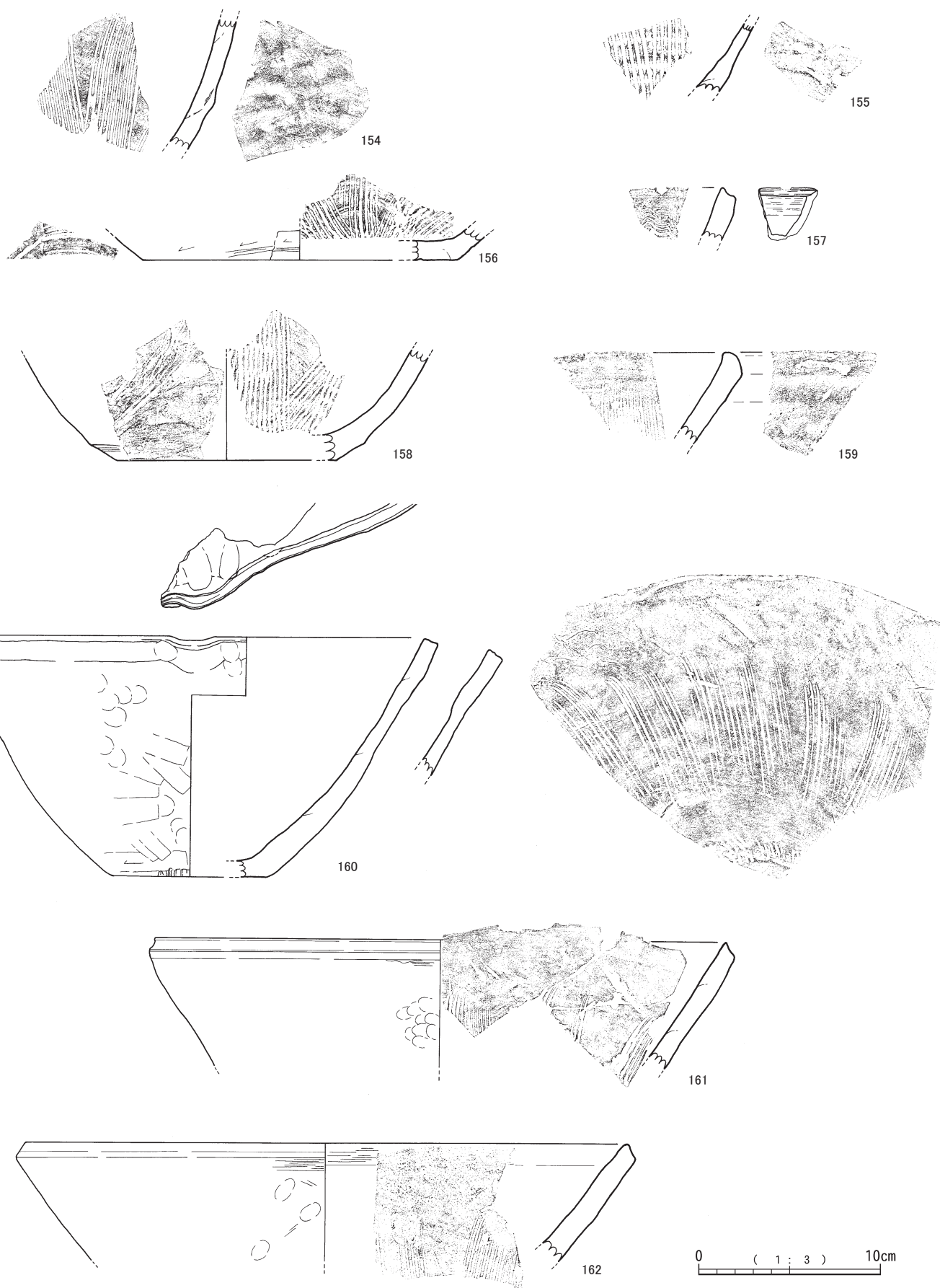
176～184は火鉢である。176・177の体部は浅い鉢状である。177は丸みを帯びた形態で、脚が付く可能性がある。

178～183は奈良火鉢である。178・179は深鉢形の口縁部片であると推測され、外面に幾何学文様のスタンプを巡らせる。口唇部の突起や口縁部直下の突帯で装飾する。180は浅鉢形であると推測され、口縁部は逆さ「L」字状で、内面側に屈曲する。181～183は胴部下位および底部片である。外面の接地面近くに断面三角形の突帯を1～2条巡らせる。181の外面にはケズリが施される。182のみが内外面を黒色に燻す。184～186は底部～脚部である。184は三つ脚になると推測される。残存部の状況から胴部は丸みをもちながら立ち上がることが推測される。風炉の可能性もある。15世紀中頃の遺物と考えられる。186は袴状の高脚で、わずかに残存する底面は黒色を呈する。内外面に工具ナデを施す。187は底部片で底付きは悪い。器壁は厚く、芯部の黒い縞状の断面である。小片により器種の推測が難しいが、脚を有する火鉢の可能性もある。

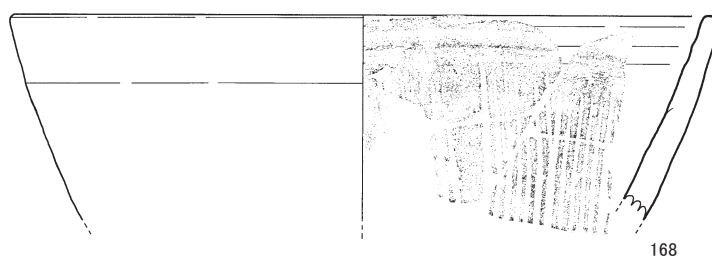
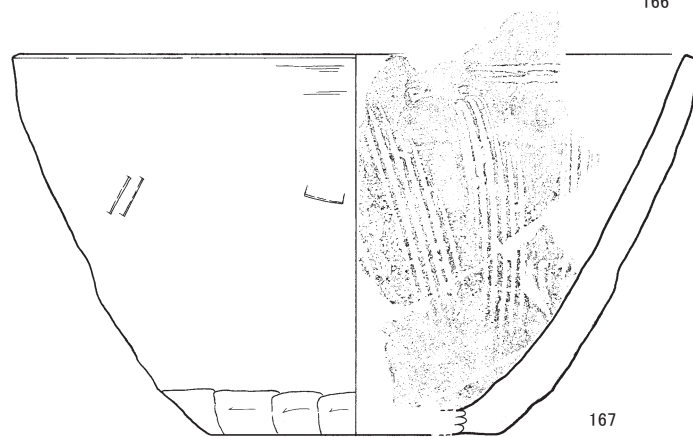
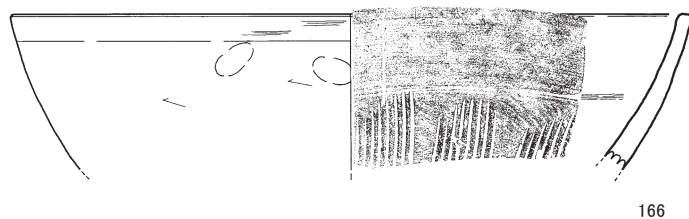
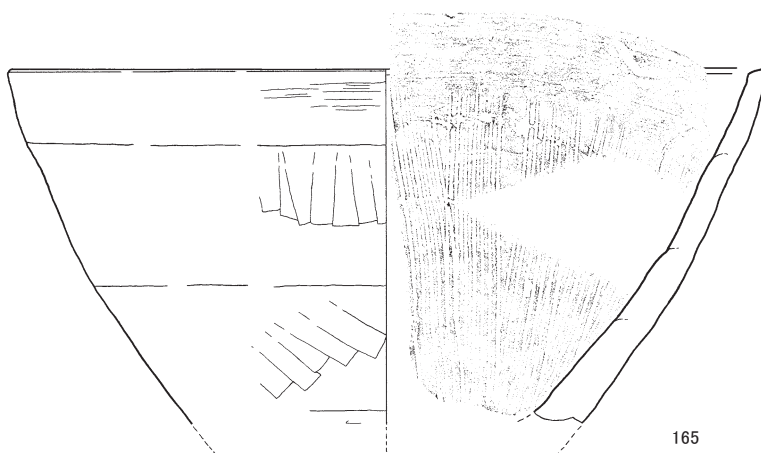
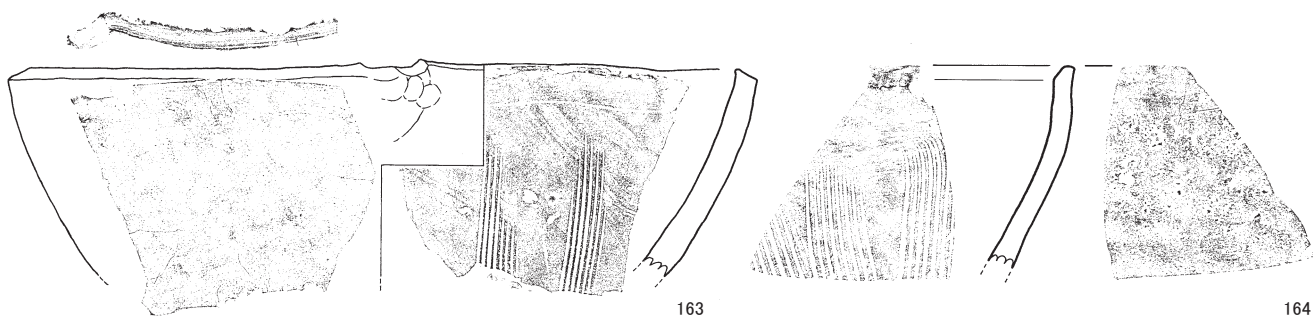
188は天地や傾きは不明の棒状の土製品で中空である。形状からは脚や把手の可能性も考えられる。摩滅が著しい。



第45図 大型土坑出土遺物⑤(須恵器)

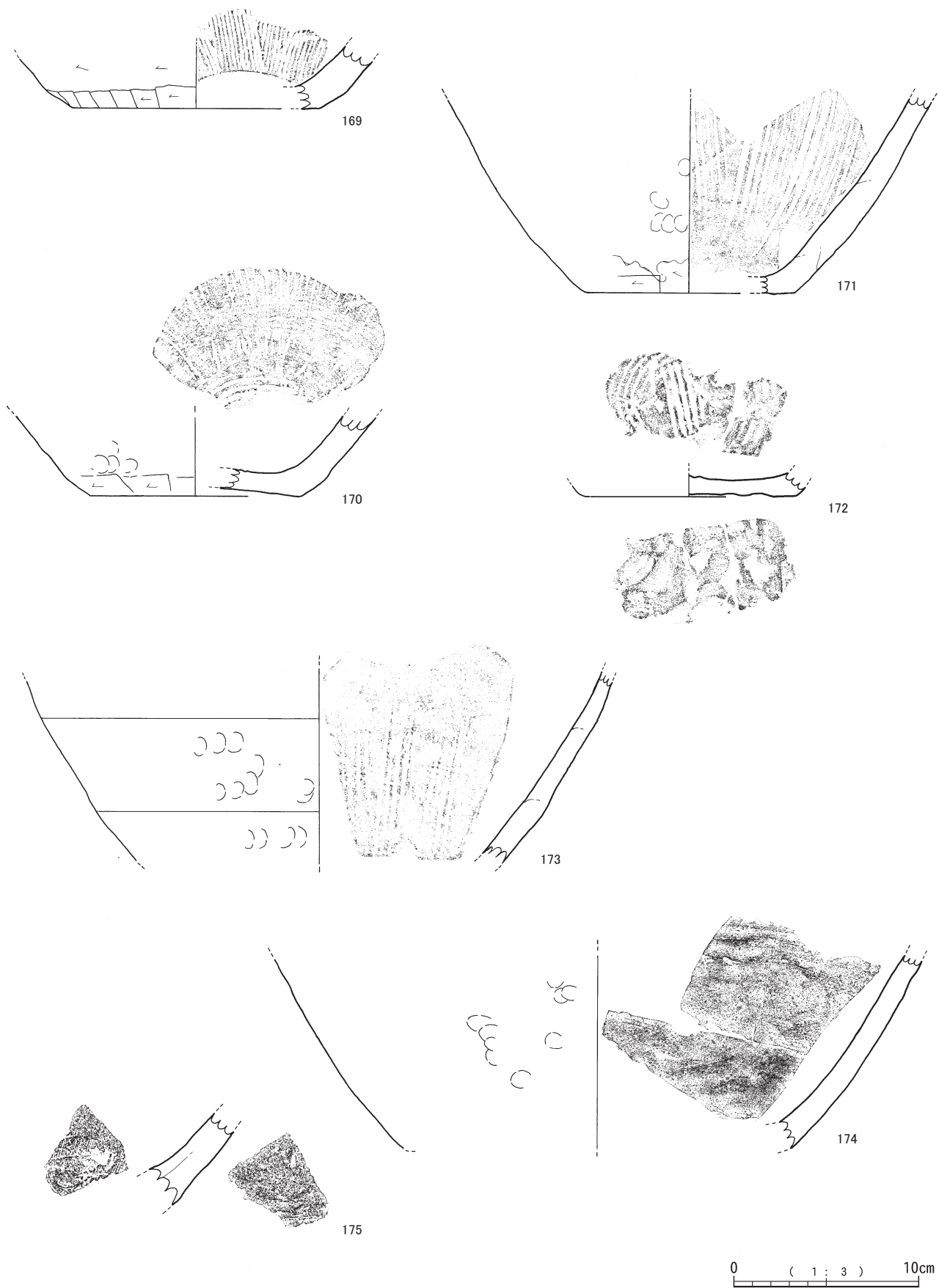


第46図 大型土坑出土遺物⑥(擂鉢①)

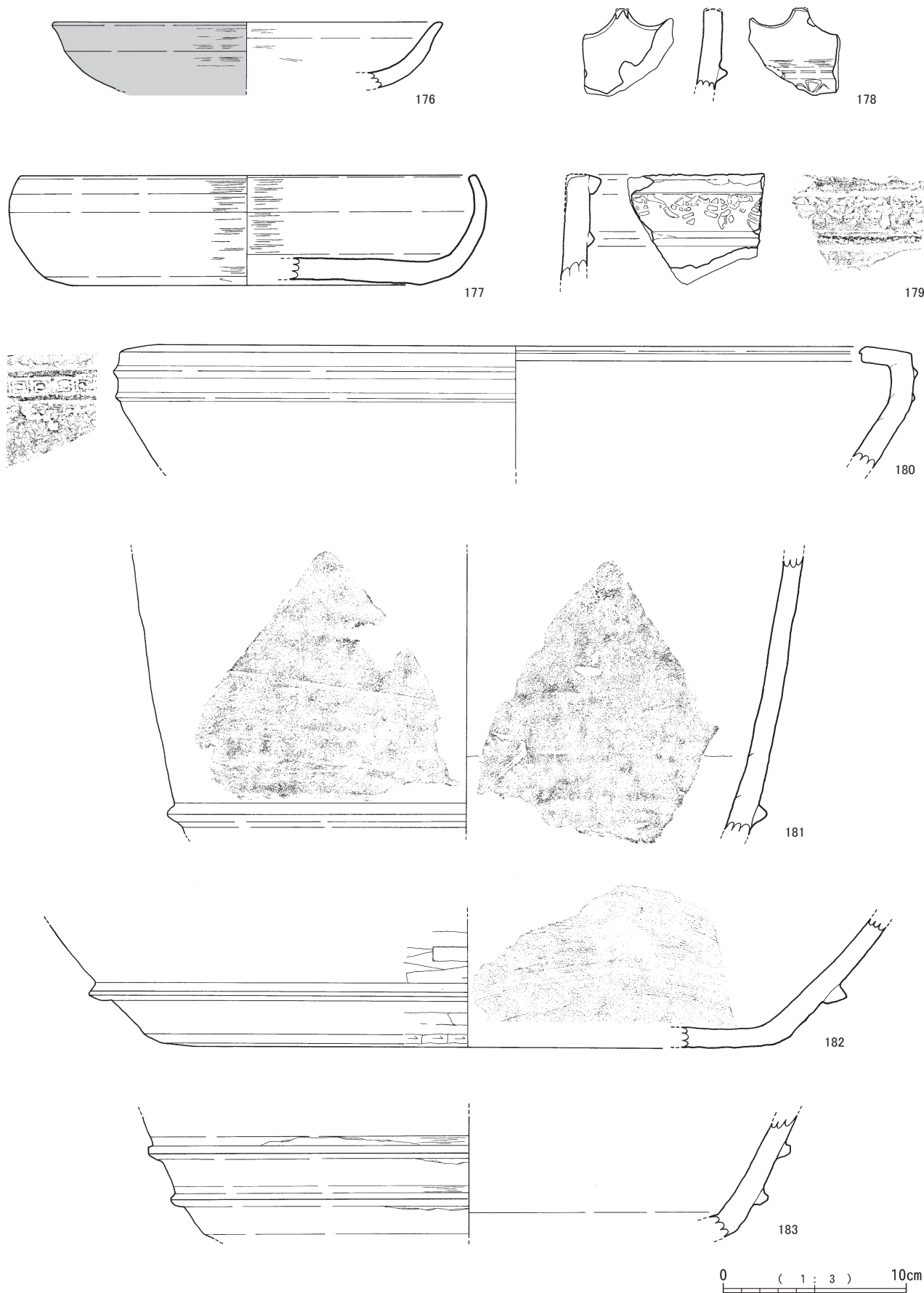


0 (1 : 3) 10cm

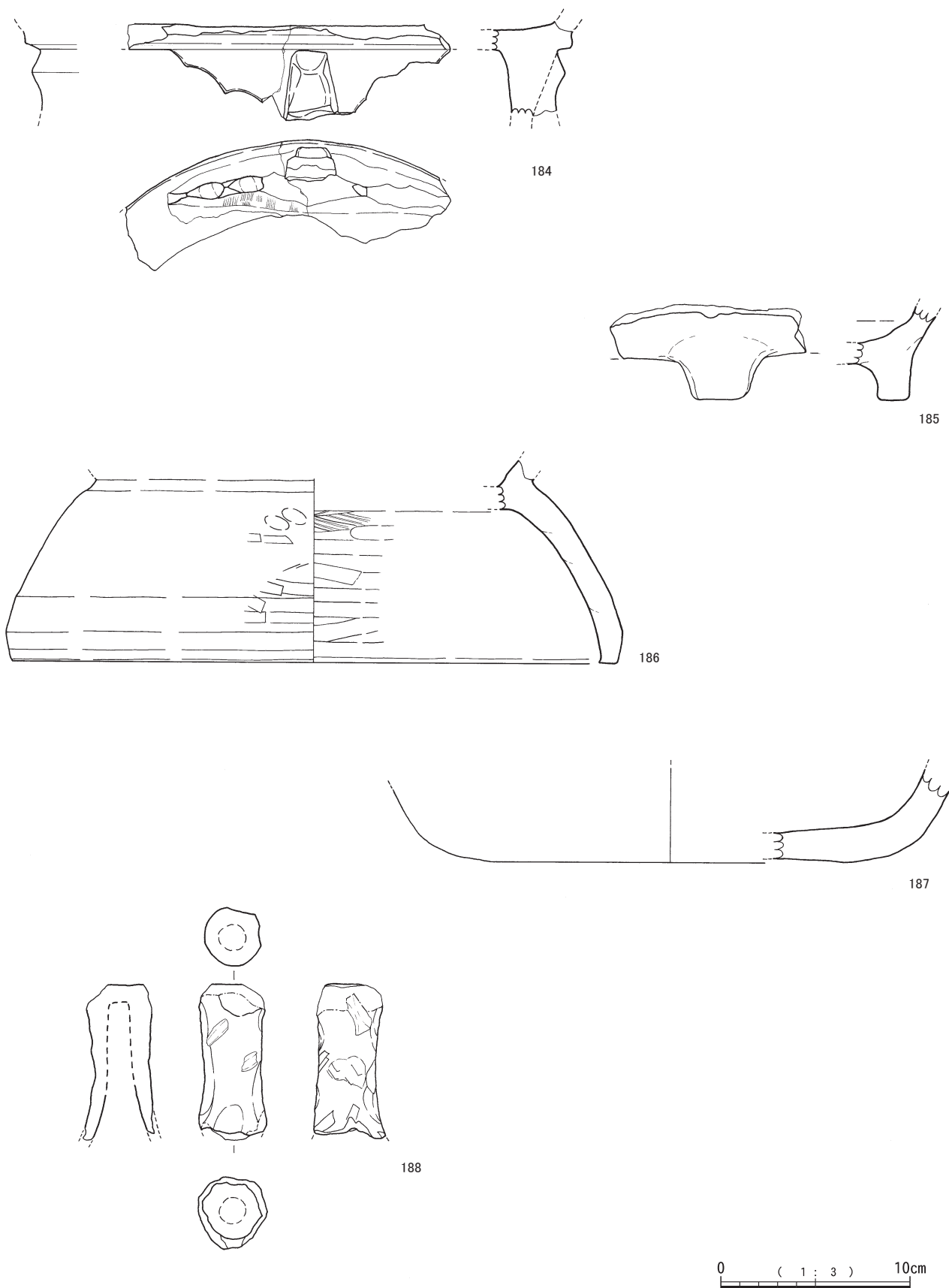
第47図 大型土坑出土遺物⑦(擂鉢②)



第48図 大型土坑出土遺物⑧(擂鉢③)



第49図 大型土坑出土遺物⑨(瓦質土器①)



第50図 大型土坑出土遺物⑩(瓦質土器②)

近世以降の磁器(第51・52図 189～211)

189～199は近世の肥前系陶器である。産地が分かるものは記載するが、それ以外は地元産の可能性をもつ。文様の特徴は観察表中に記す。

189～191は碗である。189は1820～1860年代の粗製品である。190は幕末頃の端反碗でコバルトで文様を描いていることから明治期に下る可能性も考えられる。

192～195は皿である。192～194は18世紀後半頃の染付皿で肥前産である。194は残存部の状況から蛇の目凹形高台を有すると推測される。195は波佐見産の青磁皿で胎土は精良で釉調は明るい。見込みに陰刻による草花文を施す。碁笥底で内面接地面に砂が付着する。

196～198は小碗である。196は18世紀後半の肥前産である。197・198は白磁である。ともに内面接地面に砂が付着する。

199は1850年前後に作られた端反碗の蓋で、薄くて精緻なつくりである。200は器壁が非常に薄い白磁で、蓋の一部の可能性が考えられる。

201～211は明治期以降の磁器である。器種は201～205は碗, 206～208は皿, 209・210は小杯, 211は筒形碗である。209は無文の白磁で、底部に突起を有し、口縁端部が短く内側に張り出すため供膳具ではない可能性もある。施文の技法は203は型紙摺絵, 207・211は銅版転写でそのほかはプリントである。青の顔料はコバルトを使用する。

近世以降の陶器(第53図 212～230)

212～230は近世以降の陶器である。そのうち212～216は県外産と考えるものである。

212・213は碗である。212は肥前系の口縁部片で、釉調は明るい黄褐色で、外面には白土によるハケメが施される。18世紀後半～19世紀前半頃の遺物である。213は1630年代頃の肥前産の灰釉焼の底部である。低い高台を削りだして成形し、接地面にハケメを施す。外面の腰部以下は無釉である。214は口縁部外面に突帯を巡らせる口縁部片で、碗か皿と推測される。産地・時期は不明であるが近世の遺物の多い上層から出土したためここに含める。

215は外面に鉄釉、内面に白釉を施した肥前系の鉢である。

216は19世紀以降の蓋で、詳細な産地は不明だが関西系の技術を持って制作されたと考えられる。胎土は灰色を呈し、精良である。返しのまわりと天井部は無釉である。

217～229は薩摩焼である。概ね18世紀後半頃から19世紀代に帰属すると考えられる。

本遺跡から出土したものは苗代川系と龍門司系に限られ、苗代川系の点数が多い。器種は、碗は龍門司系に、壺・鉢・土瓶は苗代川系に限定される。両系統とも胎土は赤みの強い褐色であるが、龍門司系は水籤の回数がより多いためきめ細かく、苗代川系は白い粒子を含む。

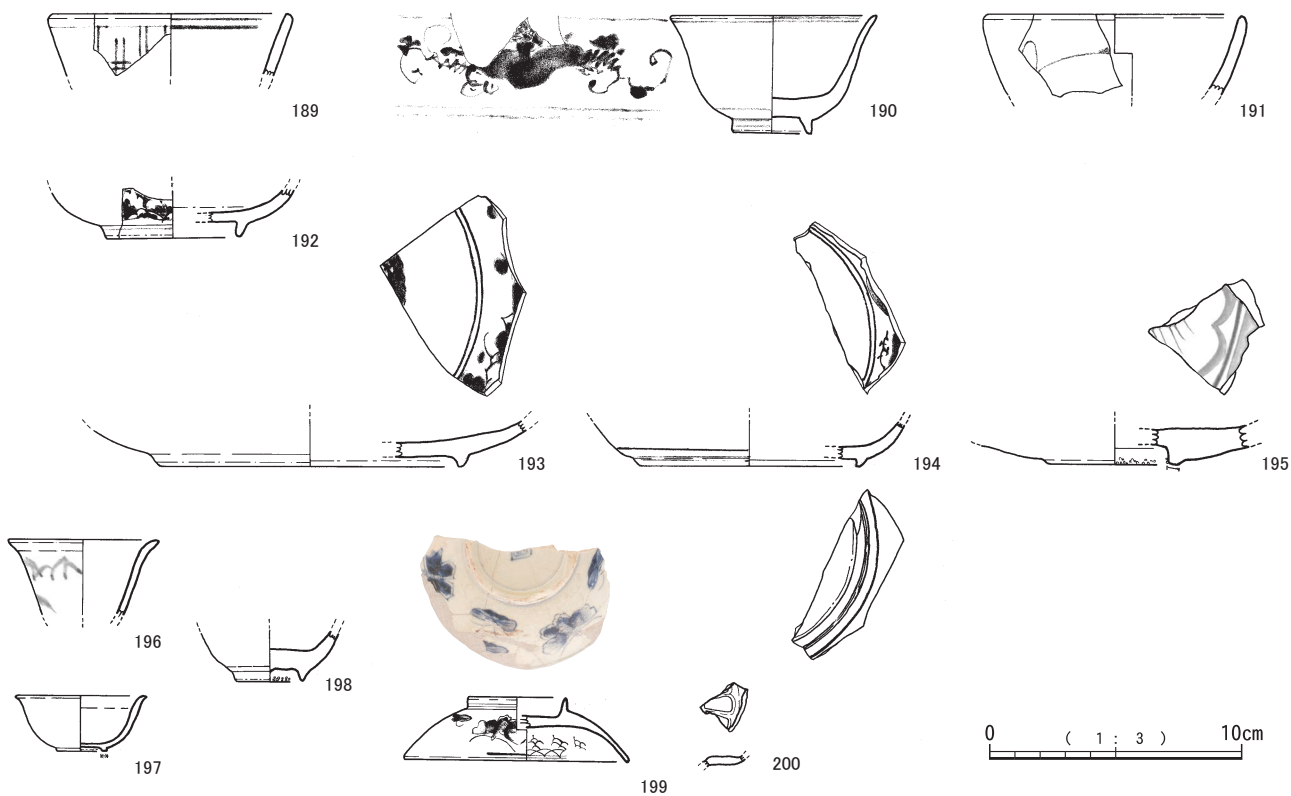
217は18世紀後半の碗である。内外面は鉄釉を施し、鮫肌である。218～220は壺である。218は口唇部に釉剥ぎを行い口縁部と頸部との境目にハケメを巡らせる。219は鉄釉が厚くかかり、頸部内面に指頭圧痕がみられる。17世紀代に帰属すると考えられ、やや古い。220は胴部片である。

221～223は播鉢である。221は口唇部はほぼ水平で、釉剥ぎを行う。外面には粗い横位のハケメを施す。222は体部接地面近くで、223は底面の破片である。櫛目は密に施される。

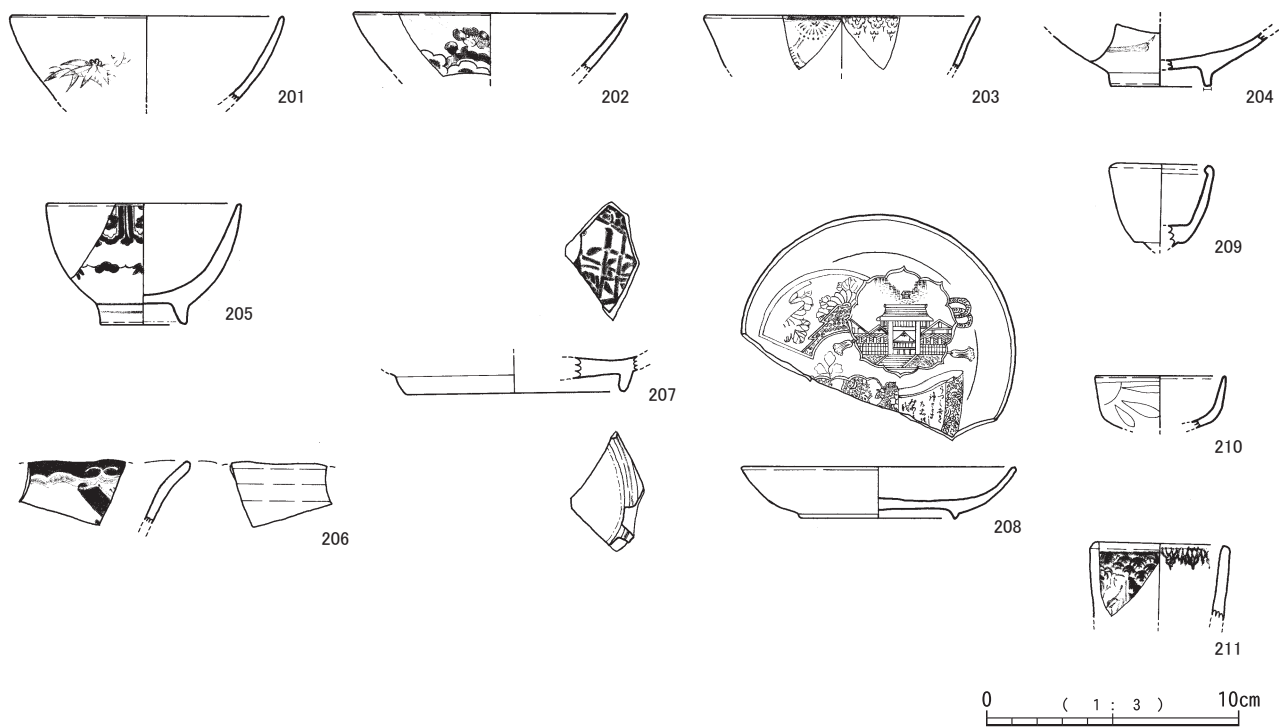
224～226は土瓶である。224は脚の一部が残存し、三つ脚であると推測される。3点ともに胴部下位は無釉である。

227～229は苗代川系の白薩摩で、228は蓋で、227・229は同一個体の水注の口縁部と胴部である。3点ともに薄くて精緻なつくりで、釉には陥入がみられる。

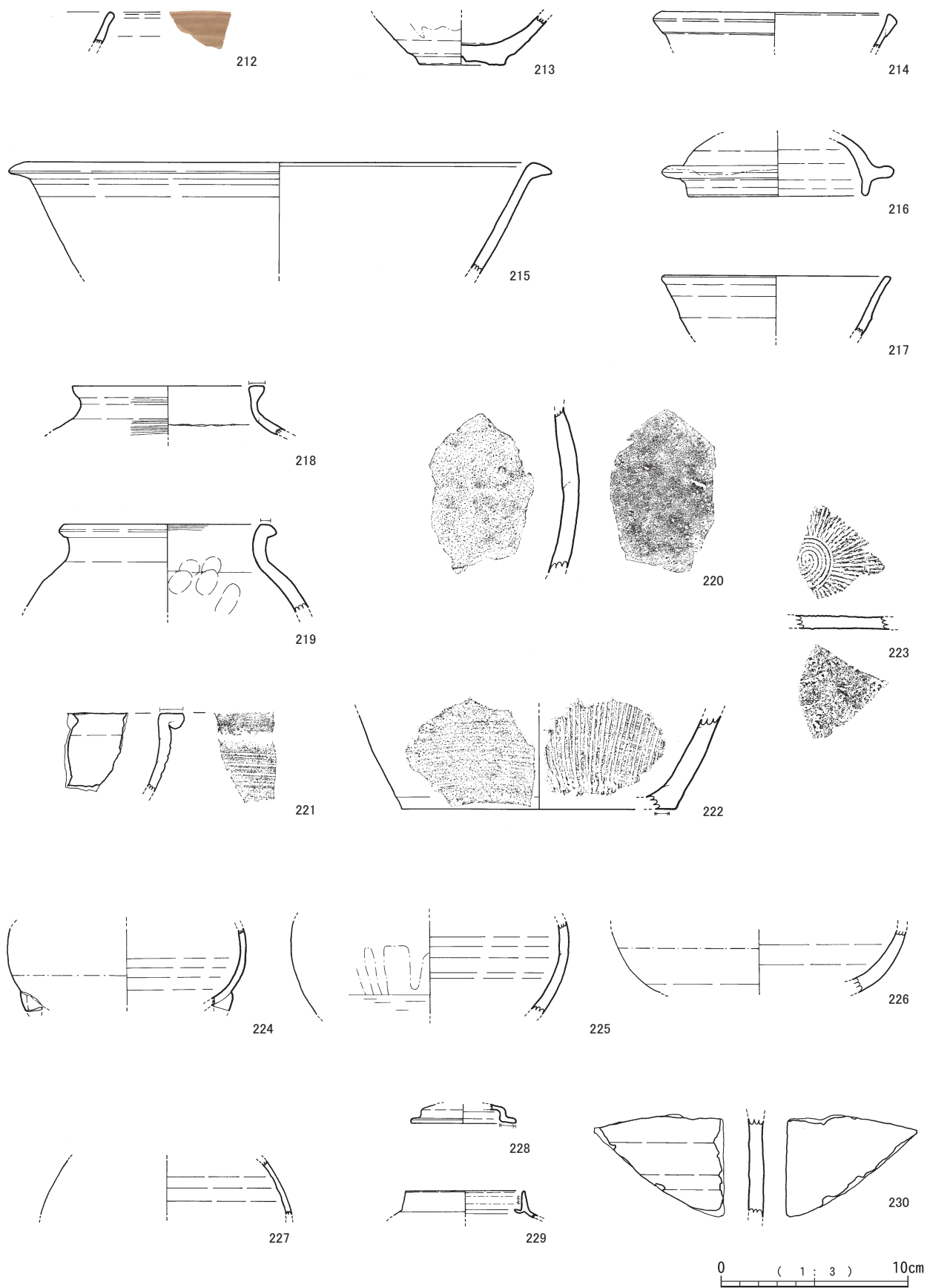
230は、産地不明の胴部片である。器種は胴部径が推測できないほどの平たい破片であることから大甕などの大形品であることが考えられる。胎土は灰色で黒色の小粒子が若干混じる。近世のものが多く出土した表層からの出土のためここに含めた。



第51図 大型土坑出土遺物⑪(近世以降の磁器)



第52図 大型土坑出土遺物⑫(近代の磁器)



第53図 大型土坑出土遺物⑬(近世以降の陶器)

土製品・瓦(第54図 231～240)

231～240は埋土のⅦ層以上から出土した土製品等で、陶磁器類と同様に中世～近世の遺物が混在すると考えられる。帰属時期の判断は難しい。出土層は観察表中に記す。

231～235は土錘である。規格は様々である。丸みのある小型の231は黒色を、細長い形状の232・235は橙色を、俵状の形状の233・234は明るい褐色を呈する。

236・237は磁器製の馬の尻繫（しりがい）である。236は白色で、237は明るい緑色である。236は完形に近く孔径は8mmで、最大径は1.4cm程である。中央部にわずかに膨らみをもたせる。近世の遺物である。

238は用途不明の土製品である。内面は剥落し、外面には細かなハケメを施す。胎土は暗い褐色を呈し、精良である。

239は平瓦で、240は丸瓦である。240は裏面に布目圧痕が残る。

鉄製品・取鍋・轡の羽口(第55図 241～250)

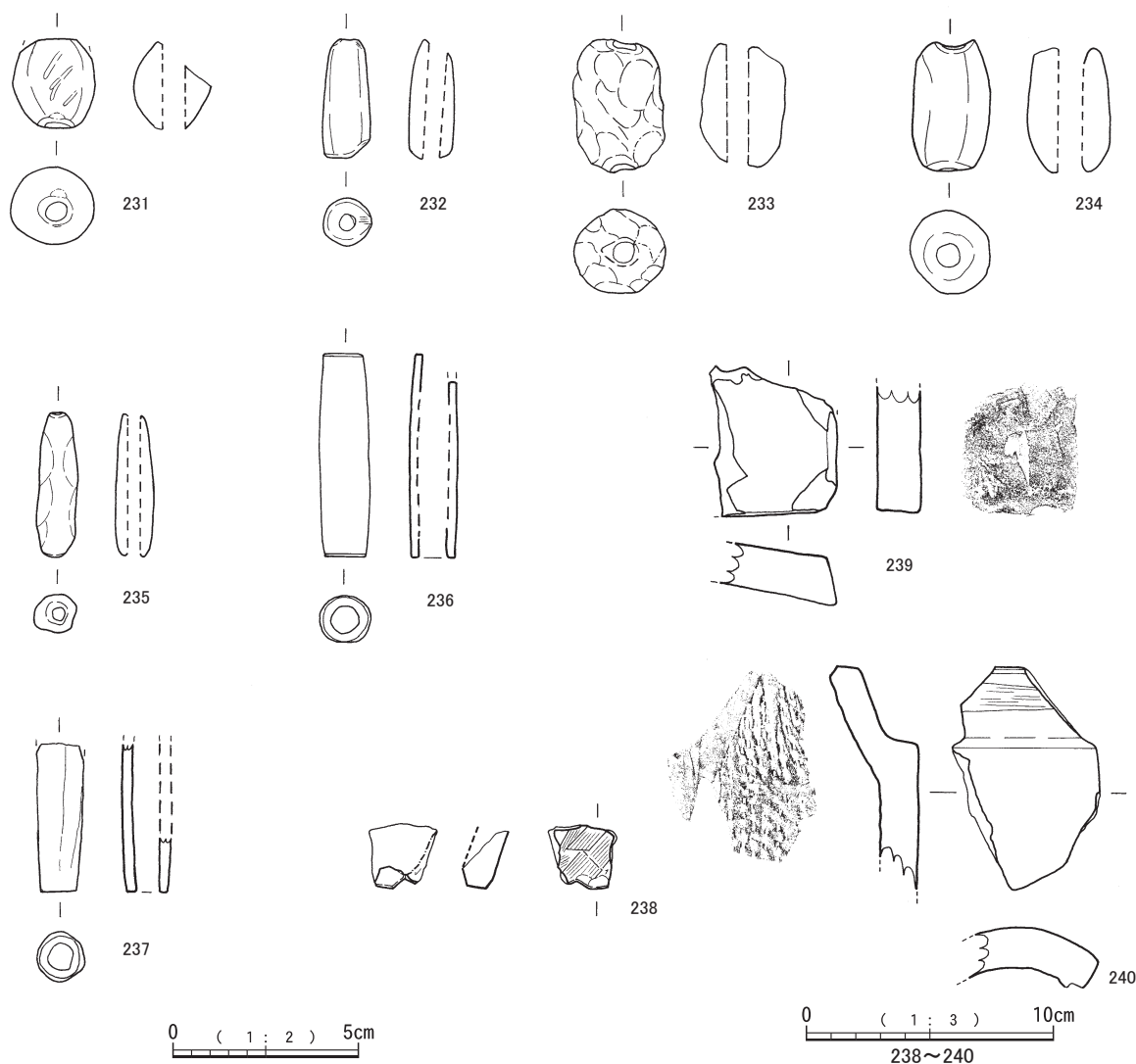
241～248は鉄製品である。

241は雁股鋸で刃部先端を左右ともに欠損する。基部には木質が残る。

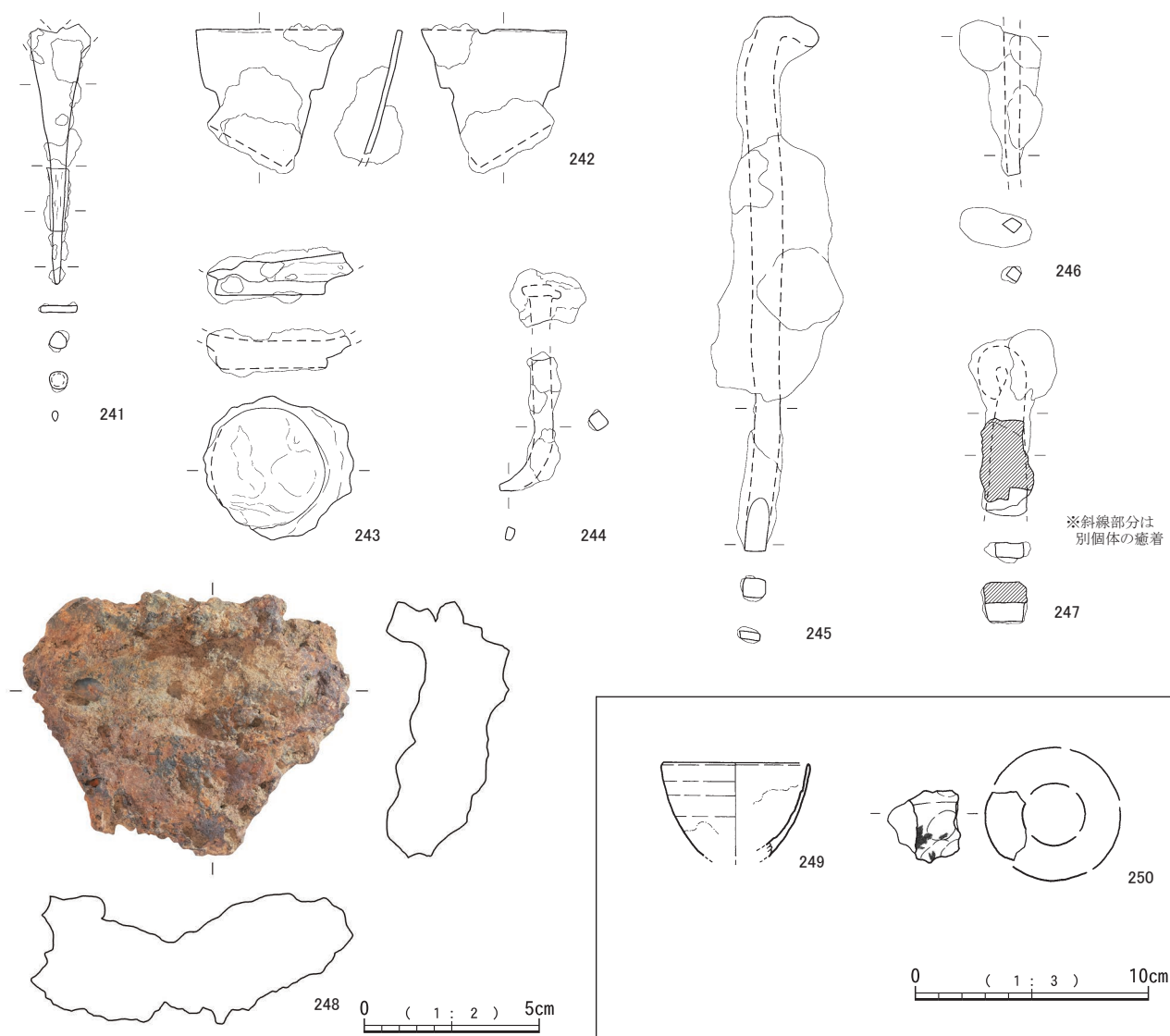
242・243は鑄造の鍋である。242は口縁部片である。243は底部片で、底面中央部に径3cm程のボタン状の突起を有する。

244・245は折れ釘である。ともに断面は四角形状である。246も棒状で同様の断面形である。

247は鑄造品で、先を曲げた板状の製品に同じ形状と考えられる別製品の一部（斜線部）が癒着している。248は鍛冶炉の炉底滓で、碗形を呈する。磁力はわずかに残る。



第54図 大型土坑出土遺物⑭(その他の遺物)



第55図 大型土坑出土遺物⑮(鉄製品・取鍋・轆の羽口)

249は取鍋である。器壁はごく薄く、陶磁器の小杯の転用品と考えられる。付着した金属は、蛍光X線分析の結果、銅や鉛の含有率が高かった。

250は轆の羽口の小片で、外面は強い被熱により灰色化し、先端部に近い部位であることが窺える。送風孔の内径は2.6cm程度である。椀形滓(248)も出土しているため、規模は定かではないが西台地での鍛冶活動が想定される。

石製品(第57図 251～261)

251は滑石製品で全面的に打ち搔いて面取りを行っていて、外面には鋭利な工具による傷がランダムに入る。本来の鍋の面も一部に残る。

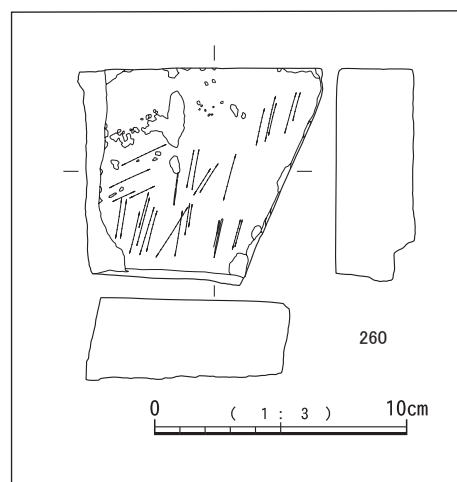
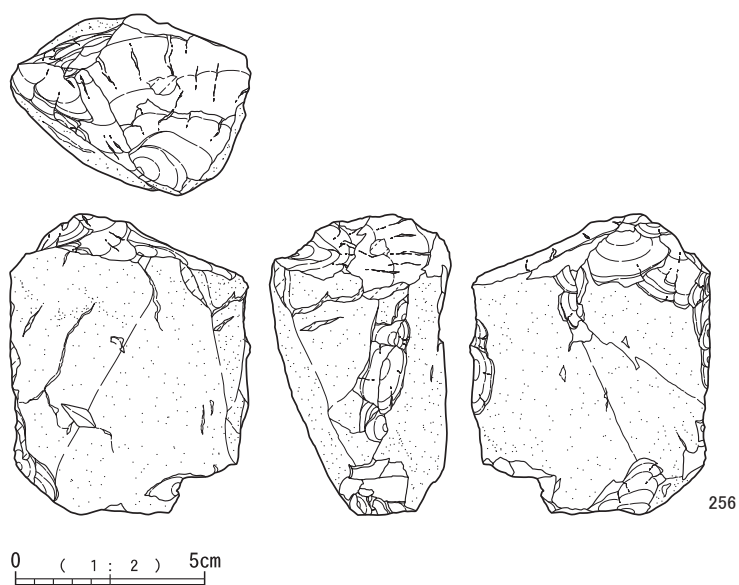
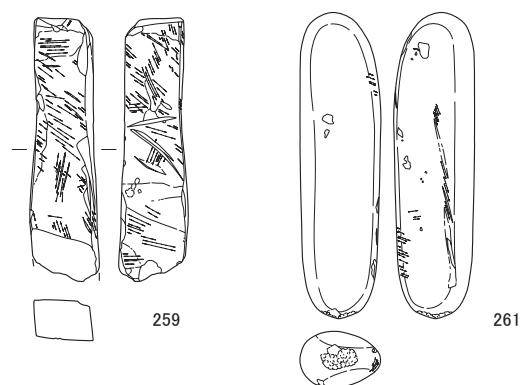
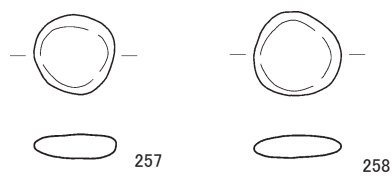
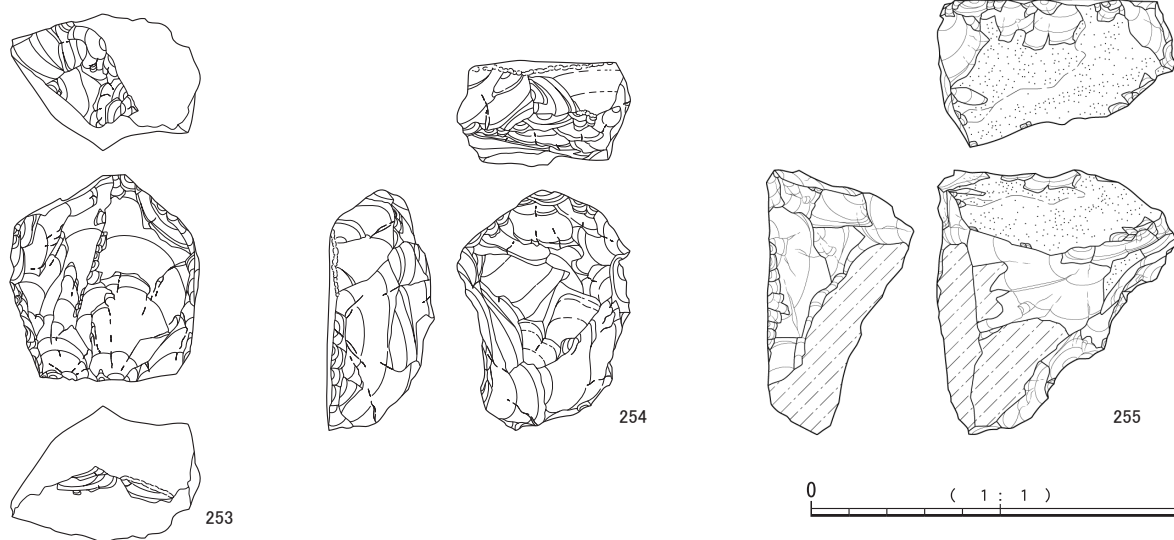
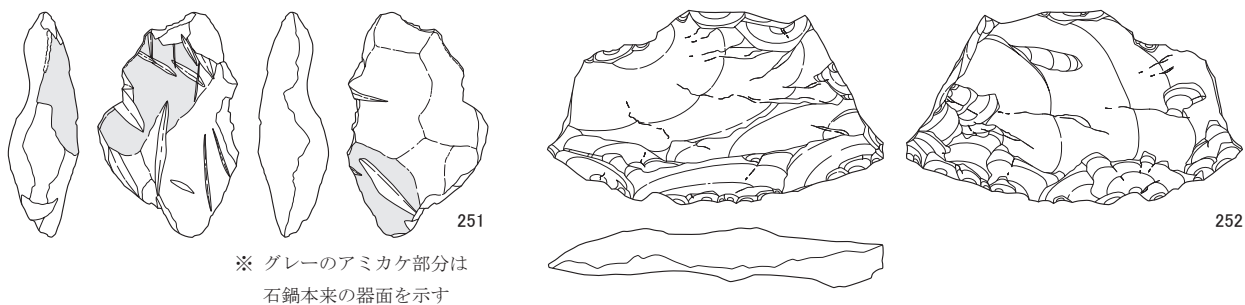
252～255は黒色のチャート製の二次加工や使用痕のある剥片である。252は下辺を表裏両側から打ち

欠いて刃部様に成形する。左右両側縁を欠損するが、右側縁には欠損後に再加工を行った痕跡がみられる。253～255は残核状の形状で両部の一部に敲打による微細な剥離痕がみられる。火打石の可能性も考えられる。

256は明るい褐色のチャート製礫器である。稜部に敲打による剥離痕がみられる。上面は珪質化しており、よく使用される。火打石の可能性もある。257は頁岩製の、258はホルンフェルス製の基石である。

259・260は粒子の細かな頁岩製の砥石である。259は頁岩製の提砥石である。260は煉瓦状の形状で、主に表面を使用する。

261はホルンフェルス製の棒状の叩石である。下面を敲打に使用する。左側面にわずかに擦痕が確認できる。



第56図 大型土坑出土遺物⑩(石製品)

通路状遺構の遺物(第57・58図 262～303)

262～263は通路状遺構から出土した遺物である。

虎口状遺構本体と比較するとやや新しい時期の遺物が多く、18世紀後半頃中世に構築されて以来、近世・近代にいたるまで西台地へ登る生活道として利用されていたことを示す遺物の出土状況である。

262～266は中世の陶磁器である。

262～264は青磁である。262は碗D 2類の大形の碗で、器壁は厚く口縁部は玉縁状である。内面に印花文を施す。14世紀後半～15世紀前半頃の遺物で、見込みに釉剥ぎを行う「佐敷タイプ」に類似する。263は15世紀頃の稜花皿である。264は15世紀頃の小杯である。内面に幅広の線彫りにより蓮弁を施す。

265・266は青花である。265は薄手の端反皿で、16世紀頃の染付皿B 2群に該当する。外面は淡い水色である。白く、黒色の微粒子をわずかに含む胎土から景德鎮窯産と考えられるが、内面の口縁部直下の圏線の呉須の色調がややぼんやりとしているため、近世の国産品の可能性もある。266は漳州窯産の染付碗E群である。高台の内側接地面に藁灰が付着する。見込みには花文が描かれ、中央部がやや盛り上がる饅頭心型で、16世紀末～17世紀初頭に帰属する。

267は土師器の坏の底部片で、器形は大型土坑から出土した15世紀後半～16世紀頃の器壁が大きく開くタイプと類似すると推測される。

268・269は須恵器である。明るい灰褐色を呈する。268は大甕の口縁部片で、269は浅い鉢であると考える。2点ともにやや土師質の焼成色である。

270・271は備前系須恵質陶器の播鉢の底部片である。

272・273は産地不明の陶器で、光沢のない褐釉がかかる。272は推定底径約28cmの大甕の底部片である。釉は内外面にかかる。胎土は白粒が目立ち非常に明るい橙色を呈する。273は蓋である。摩滅が著しく、外面には部分的に釉が残る。天井部と返しは無釉である。胎土は精良で黄褐色を呈する。

274～278は近世の磁器である。274・275は染付の碗で、274は外面に縦位のヘラ彫りを巡らせ、それより上位に文様を有する。高台脇を面取りしており、天目形になる可能性がある。肥前産で1610～1630年代頃の遺物である。

277は白磁の皿である。内面に櫛目がみられる。

278は肥前産の火入れである。18世紀後半～幕末頃の遺物である。内面下位に泥漿を塗布する。

279は同様の蓋が虎口状遺構埋土からも出土しているが(199)、別個体である。

280～285は明治期以降の磁器である。280～282は染付碗、283は白磁碗、284は白磁皿、285は染付の小皿である。文様を描く技法は、280は手書き、281・282は型紙摺絵、285は銅版転写で顔料はコバルトを使用する。

286～294は近世以降の陶器である。

286・287は碗である。286は肥前内野山産の口縁部で、外面には銅釉が横位の縞状に施される。17世紀後半～18世紀前半に帰属する。287は17世紀末～184世紀前半頃の肥前産の呉器手の碗の底部で、釉調は玉子手である。

288は18世紀後半頃の白化粧を施した龍門司系薩摩焼の瓶で、底部は碁笥底風に削りだして成形する。外面の接地面近くと内面は無釉である。

289・290は播鉢である。289は1630～1650年代の肥前産で口縁にのみ鉄釉が掛かる。290は苗代川系薩摩焼である。口縁部は「L」字状で内外面に横位のハケメを施す。目幅の広い櫛目を、密に口縁部近くまで施す。19世紀代の遺物と考えられる。

291は苗代川系薩摩焼の片口鉢の注口部である。

292は18世紀後半頃の苗代川系薩摩焼の土瓶である。胴部が大きく張り出し、そろばん玉状の器形であると推測される。293は同様の土瓶の耳である。

294は非常に薄くつくられた急須の胴部片である。胎土は精良で褐色を呈する。口に鉄釉を施し、外面にもまた鉄釉で筆描きによる文様を施す。産地の同定にはいたらなかったが、関西系の可能性もあり、その場合は19世紀以降の遺物である。

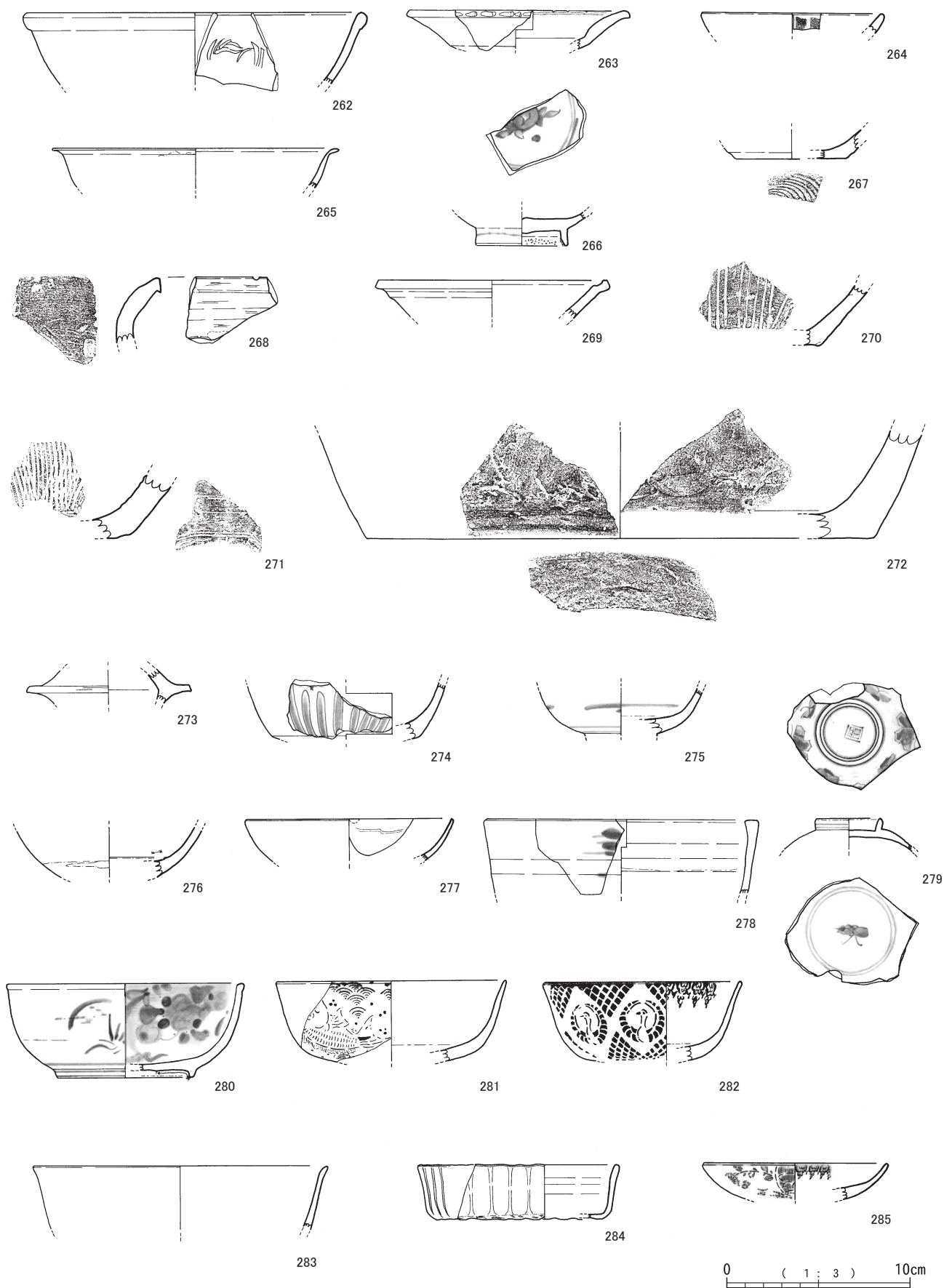
295～298は近代以降の瓦であると考えられる。

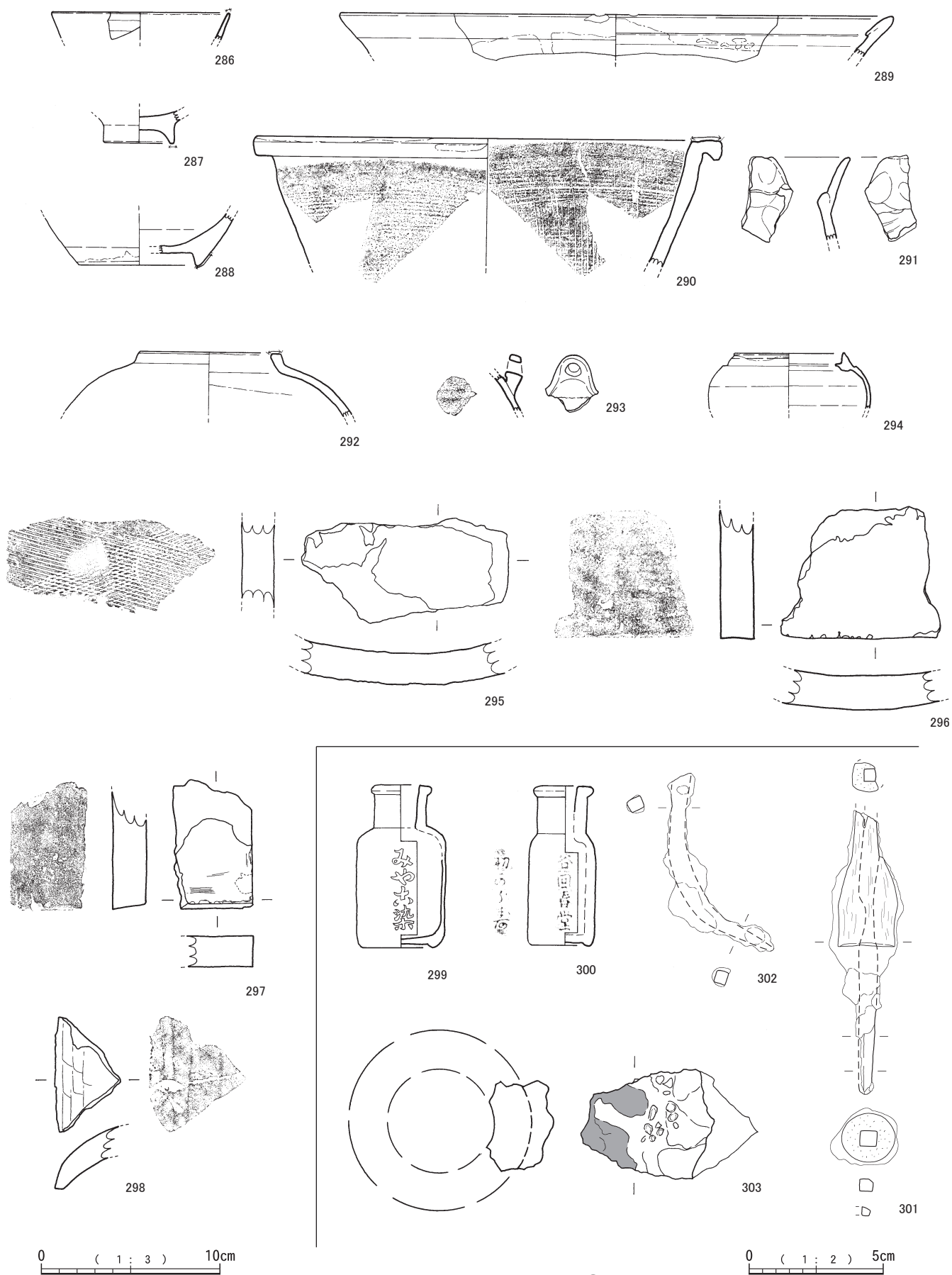
295～297は平瓦で298は丸瓦である。

299・300は瓶である。299は透明無色で「みや古染」、300は透明青で「谷回春堂」の銘が確認できる。明治時代～昭和初期頃の遺物と考えられる。

301は虎口状遺構入口近くの埋土から出土した錐状の工具で木製の柄が残る。軸の断面形は四角形である。放射性炭素年代測定を試みたが測定不能であった。樹種は広葉樹の可能性が高い。江戸時代以前の遺物であると考えられる。302は断面形が四角形の近世以前の釘である。

303は轆の羽口の先端部分で、送風孔の内径は推定で4cm程度である。外面には砂礫を含むガラス質の溶解物が付着する。





第58図 通路状遺構出土遺物②

西台地から出土した中世の遺物(第59～61図 304～356)

西台地からは12世紀頃～16世紀代に帰属する青磁・白磁・青花などの陶磁器、土師器、須恵器、瓦質や土師質の播鉢、瓦質の火鉢などが出土したがほとんどが小片であった。また、15世紀後半頃～16世紀半ば頃までの遺物が特に多く、それ以前のものはごく少数であった。

なお土製品・石製品・鉄製品の帰属時期については層位による帰属時期の判断が難しく、近世以降の調査の項にて説明する。

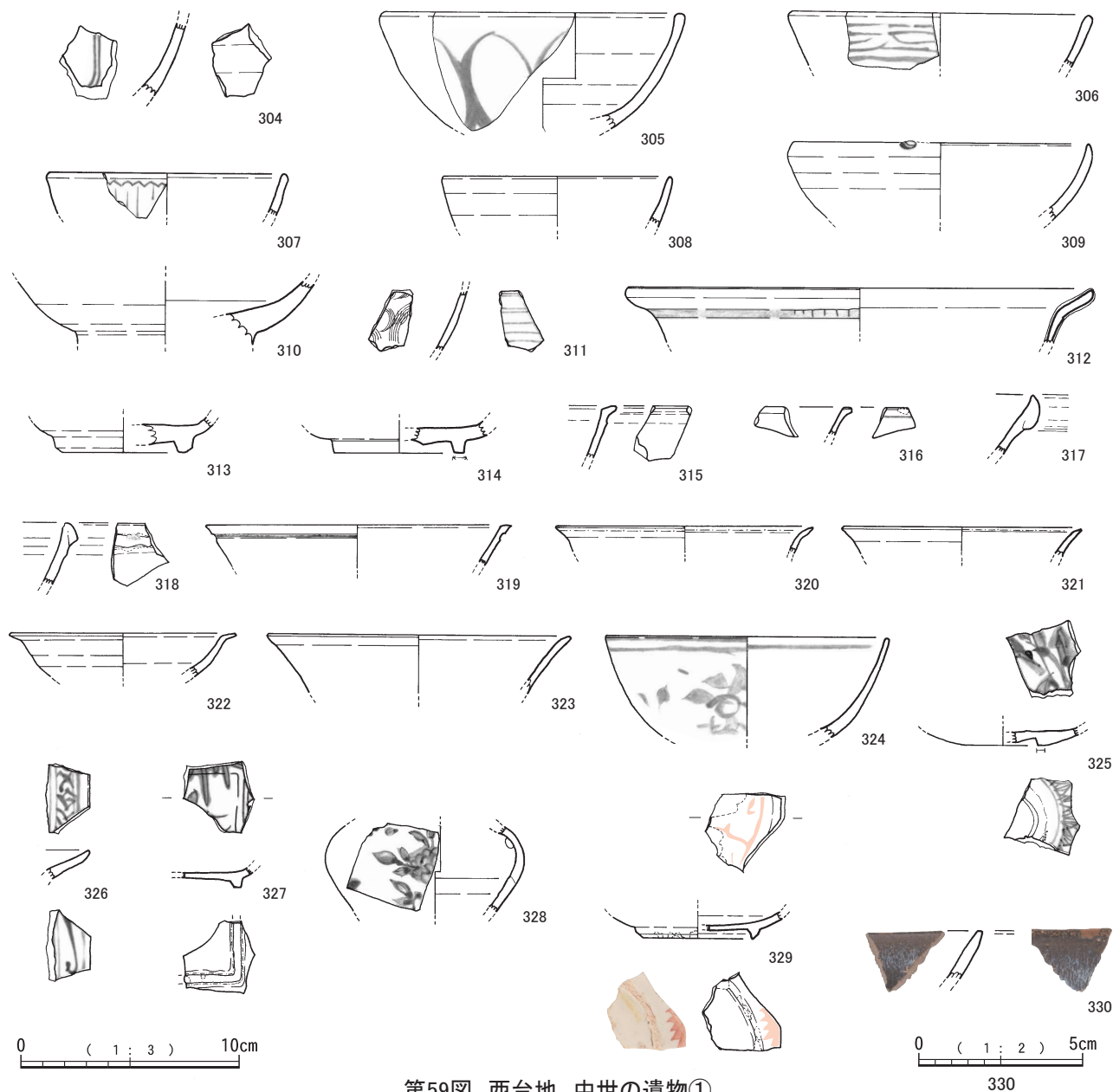
陶磁器(第59図 304～330)

304～314は青磁である。

304～310は龍泉窯系の碗である。304は碗A 4類で

12世紀後葉～13世紀初頭頃に帰属する。305は14世紀末～15世紀中頃の碗B 2類で、片彫りの幅広蓮弁文を有する。釉調はやや暗めのオリーブ灰色である。腰はあまり張らず、体部はやや内湾気味に立ち上がる。306は15世紀前半～中頃の碗C 2類で口縁部外面に崩れた印象の雷文帯をもつ。口縁部は直線的に立ち上がる。307はへら描きの蓮弁文を有する碗B 4類で、15世紀後半～16世紀前半頃の遺物である。文様の線は細い。308・309は無文の碗で、小片のため分類は難しいが概ね15世紀後半頃～16世紀代に該当すると考えられる。釉葉の色は濁り褐色を帯びる。粗製品である。

311～314は皿と盤である。311は同安窯系皿で12世紀後葉～13世紀初め頃の遺物である。櫛描き文を有する。312は盤で外面頸部あたりを始点とし、上



第59図 西台地 中世の遺物①

から下に削るようにくびれを成形しているため外面稜部に帯状に釉が溜まる。口縁は短く外反し、稜は緩い。續伸一郎氏の編年（2022）による16世紀以降の形態であると考ええる。

313・314は15世紀後半～16世紀中頃の稜花皿の底部である。313は、接地部分の内外面を面取りする。釉は畳付にまでかかり、高台内面を釉剥ぎする。314は台形状の高台で接地面にのみ釉剥ぎを行う。底部中央が浅く凹む。

315～323は白磁である。

315～318は碗である。315・316は碗Ⅷ類の口縁部片で、口縁端部で短く外反する。内面の稜は角付けられる。317は碗Ⅳ類に、318は碗Ⅱ類に該当し、玉縁状の口縁部をもつ。11世紀後半～12世紀前半に帰属する。

319～323は皿である。319は腰折皿の口縁部片である。口縁部外面に細いへう彫りの単線を巡らせる。320・321は口禿の皿で、13世紀後半～14世紀初頭頃のⅨ類に該当する。322・323は端反皿である。322はC 1 群で、15世紀後半に、323はC 2 群に該当し16世紀前半に帰属する。

324～328は青花である。324は16世紀後半の漳州窯系のE 群の碗である。外面に草花文を描く。325は基筈底の皿で、見込みには草花文、底面には芭蕉葉文が描かれる。高台内は丁寧に施釉され、接地面のみ釉剥ぎを行う。景德鎮窯産のC 1 群に該当する。

326は景德鎮窯産の鏝皿F 群の口縁端部小片で、上面に幾何学文による文様帯をもつ。16世紀末～17世紀初頭頃の遺物である。

327は16世紀代の景德鎮窯産の角型高台の皿である。

328は景德鎮窯産の小壺である。胴部下位で粘土を継いだ痕跡がみられる。

329は明代（16世紀代）の景德鎮窯産の草花文の赤絵皿の底部片である。器面の摩滅により判然としないが本来は緑色の顔料も用いると推測される。断面三角形の低い高台を有する。

330は灰色の胎土から中国産の鉄釉の天目茶碗の口縁部片と判断される。

土師器(第60図 331～342)

331～340は土師器である。

331～335は坏である。331は底径が大きく、体部は直線的に立ち上がる。扁平なプロポーションで、口縁端部で緩く外反する。14世紀後半頃の形態であると考えられる。外面の調整は粗く工具痕を残す。

暗い褐色を呈する。332・333は体部に丸みを帯びながら大きく開く。器面の調整が丁寧である。胎土は明るい褐色を呈する。332の外面には煤が付着する。15世紀後半～16世紀中頃の形態であると考えられる。334は底部の糸切り後に、接地面を面取りし低い高台状に成形する。体部は丸みを帯びながら立ち上がり器壁が厚い。胎土はやや暗めの褐色を呈する。335・336は333など同様の形態であると推測される。

337・338は皿である。337は大型土坑上層から出土した皿（126・128など）と規格・形状が似る。内外面には横位のハケメを施す。胎土には淡い褐色と明るい橙色の粒子が混じり、角閃石もわずかに確認できる。搬入品の可能性もある。338は小型の皿である。器壁が薄く精緻なつくりである。

339は内黒の壺の底部片で、小片のため器形の推測が難しい。340は内面に刻書を有する坏である。「兄」などの漢字の部首の「にんよう」又は「ひとあし」のようなハネが確認できるが判読はできない。339・340は特徴から古代の遺物である可能性が高いがここに掲載した。

341・342は同一個体の土師質土器で、やや深い鉢状の器形になると推測される。口縁部片の341は内外面に、胴部片の342は外面にのみ煤を付着させて丁寧なミガキを施し光沢をもつ。産地・帰属年代・用途は不明である。

須恵器(第60図 343～349)

343～349は須恵器である。

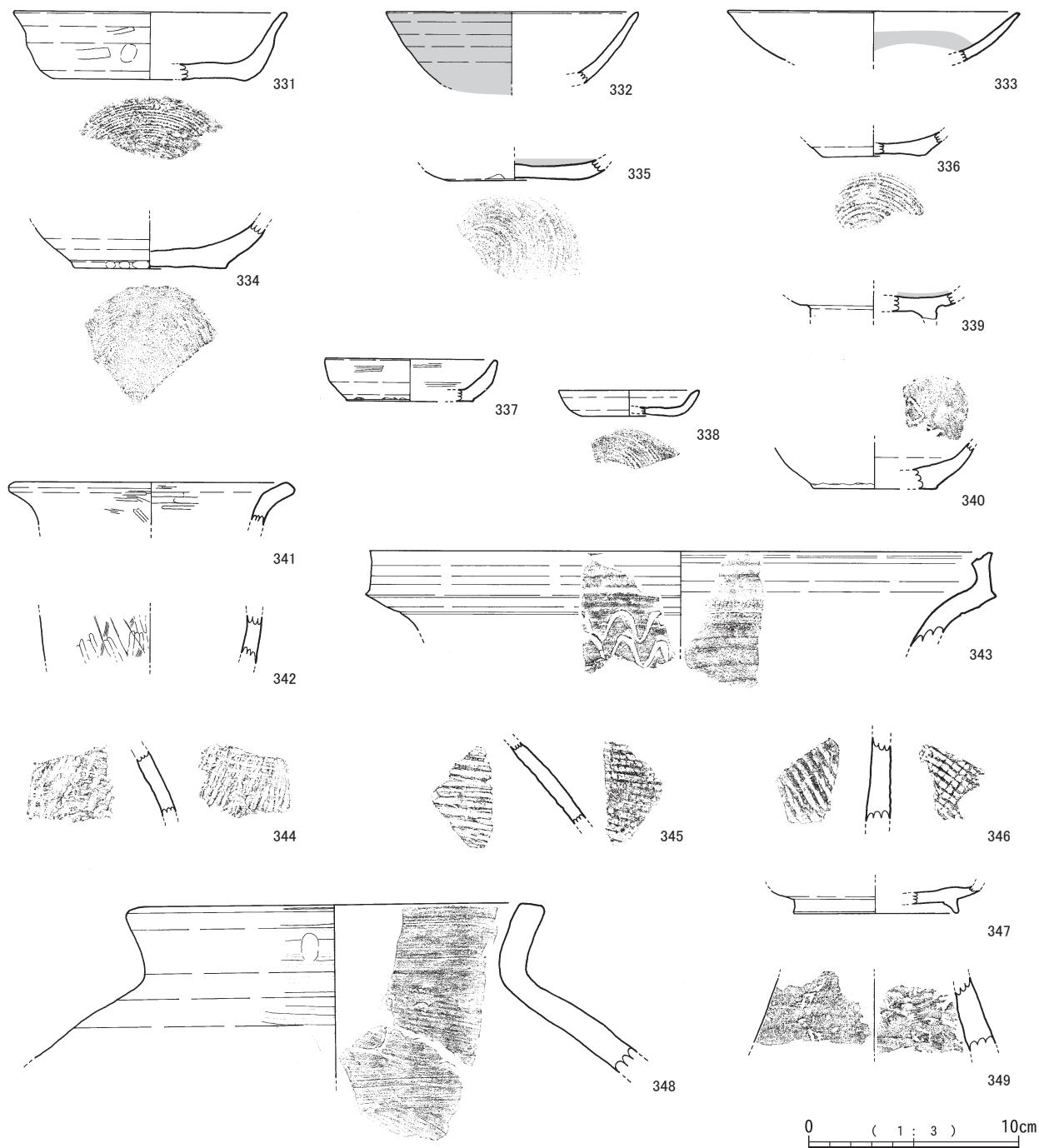
343は二重口縁の大甕の口縁部片である。頸部にはへう描きの波状文を巡らせる。胎土は灰褐色で、やや土師質の焼成色である。器面は赤みの強い褐色を呈する。344～346は大甕の胴部片で343と同じような焼成色と色調である。344は外面には平行線状タタキ、内面には同心円状タタキを施す。345・346は外面には格子目状タタキを、内面には平行線状タタキを施す。

347は壺の底部で、焼成色や色調は343に近い。

348は土師質焼成の須恵器の大甕である。343と比較すると器壁は厚く、より土師質の焼成色である。断面は芯部が黒く縞状である。349は器種および天地不明の土師質焼成色の須恵器片である。

擂鉢・鉢・火鉢(第61図 350～356)

350～353は擂鉢である。350は灰色を呈する擂鉢で、やや土師質の焼成色を残す。口縁端部は面取りされ、口唇部に浅い溝を形成する。口縁部内面に工



第60図 西台地 中世の遺物②

具による横ナデを施す。櫛目はシャープである。351・352は土師質焼成で、硬質であり櫛目はシャープである。352は非常に明るい橙色を呈する。外面に成形時のユビオサエの痕を多く残す。

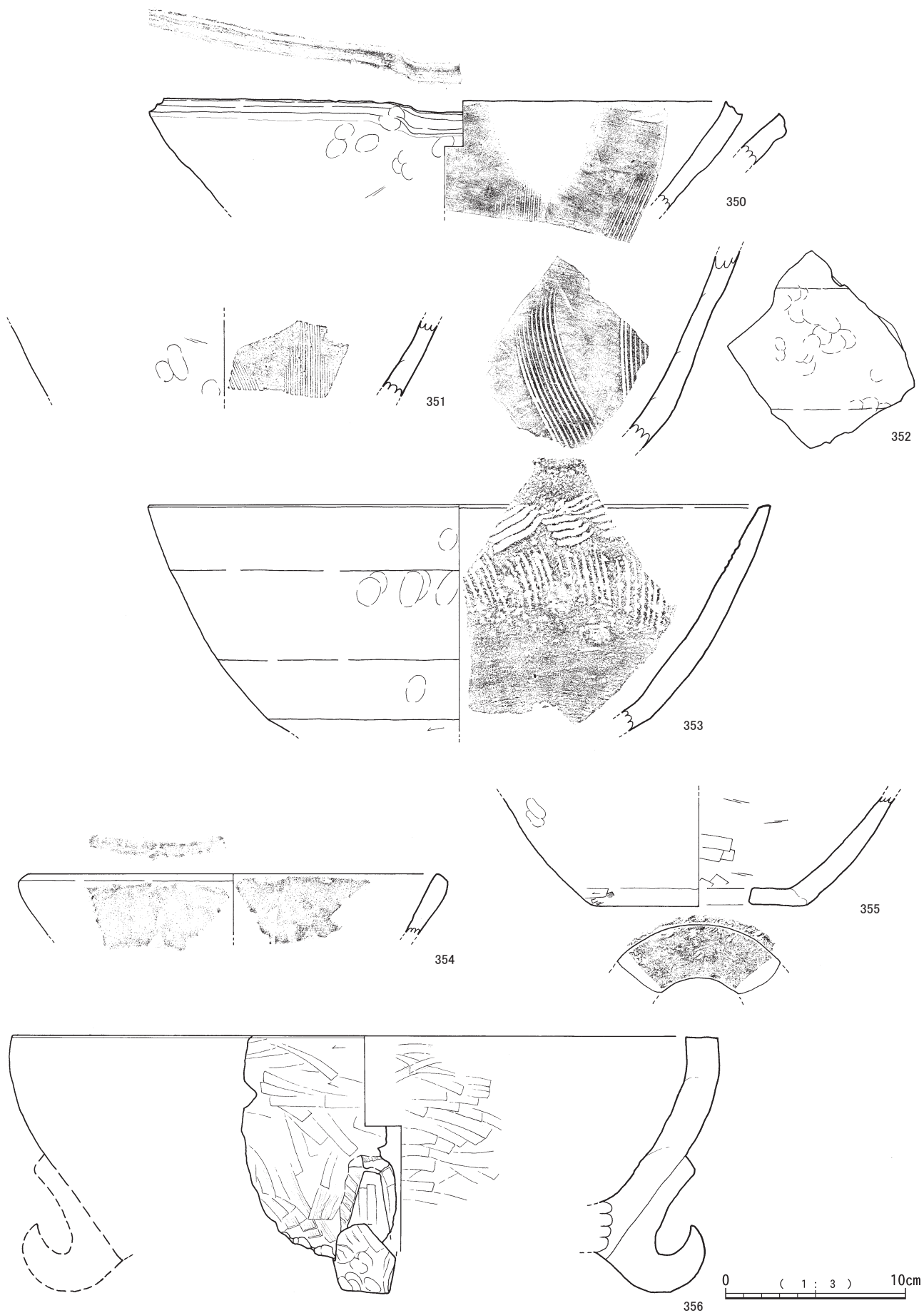
353は土師質で軟質である。体部は丸みを帯びながら開き、口縁端部はわずかに内傾する。櫛目の幅は太く、上位は短いストロークで波状に施す。

354は土師質でやや硬質である。口縁端部を肥厚

させる。櫛目が確認できないため捏鉢の可能性も考えられる。

355は大きく開く器形で平底を呈する。底部中央に推定径6cmの孔を有する。外面は薄く黒色化する。用途は不明で、被熱の可能性もある。

356は15世紀頃の瓦質の火鉢で、三つ脚のうち1本が残存する。内外面および脚には工具ナデの痕跡が明瞭に残る。



第61図 西台地 中世の遺物③

(2) 近世以降の調査成果

西台地上における近世の遺構は虎口状遺構の北側に位置する階段1か所と、調査区北側で発見した炉跡1基である。Ⅰ・Ⅱ層からは多くの近世以降の遺物が出土したが、後世の畑としての土地利用により本来あった位置から移動していることが窺える。

なお、土製品・鉄製品・石製品等は帰属年代の判断が難しく、本項目の末に記載する。

遺構

階段(第62図)

近世の西台地には虎口状遺構が自然に埋まり、浅いくぼ地になりながらもなお存在し、通路状遺構も東谷から西台地に登る生活道として利用され続けていたことが窺える。この時期には虎口状遺構の北側の壁面に、ステップ状の段を数段造り、足がかりを半月状に掘りこんだ簡易な階段(写真19)を構築している。階段は通路状遺構の延長線上に続いて設置

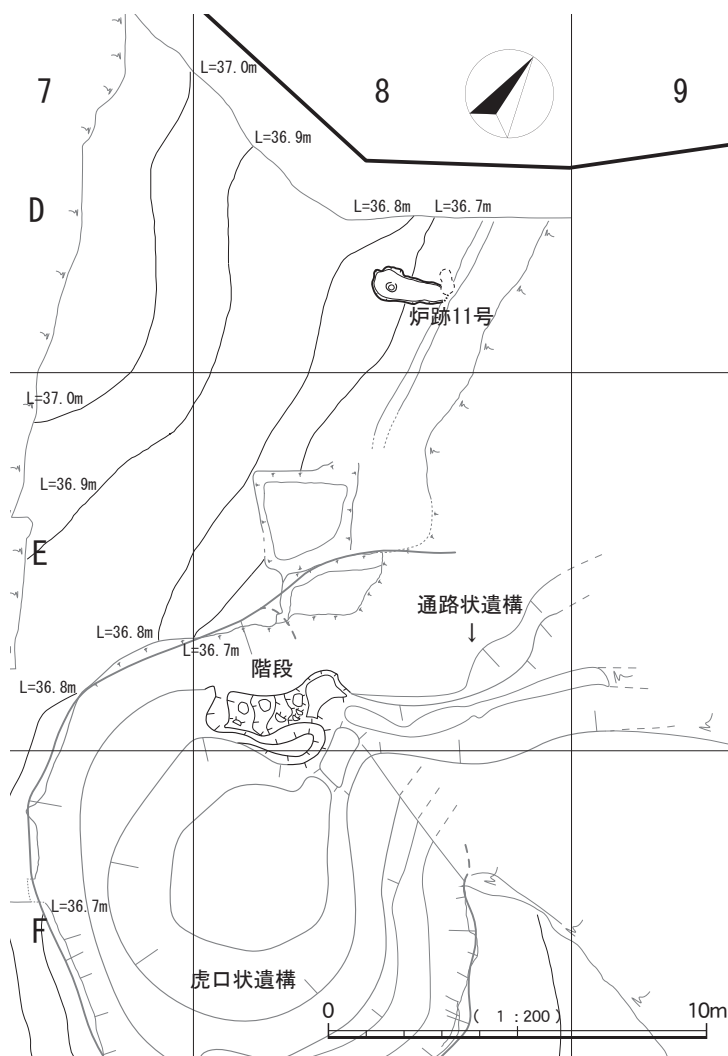
される。構築時期は床面から出土した陶磁器から18世紀後半～19世紀初め頃であると考えられる。

357は1780～1820年代頃の肥前嬉野産の志田焼の皿である。見込みに竹が描かれ、底面のへたりを防ぐ針支えの痕がみられる。床面から出土した。

炉跡11号(第64図)

D-8区で検出した。平面形はひょうたん形に近く、長軸約2.0m×最大幅0.9mである。燃烧部は西側に位置する。主軸は磁北から東に65°傾く。東側を先行トレンチと樹痕によりわずかに切られる。燃烧部中央に径約25cmの椀状の浅いピットを有する。床面は凹凸が激しく、検出面からの深さは最深部で約10cmで、本来の掘り込みはさらに深いと推測される。埋土は単一である。

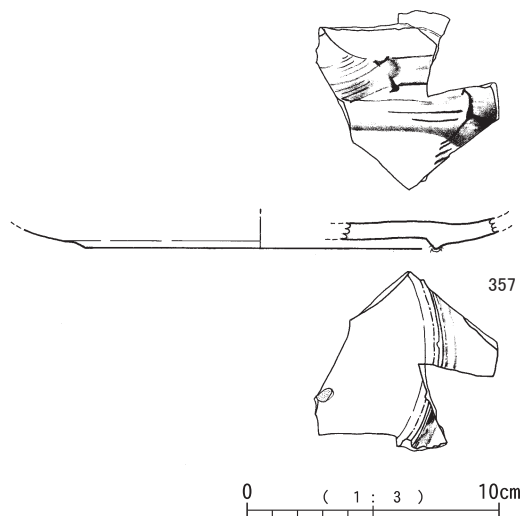
床面全体に炭化物が付着するものの、明確な焼土域はみられない。部分的に炭化物が多く残り、中央部分の炭化物層直下に赤色化がみられた。埋土中の



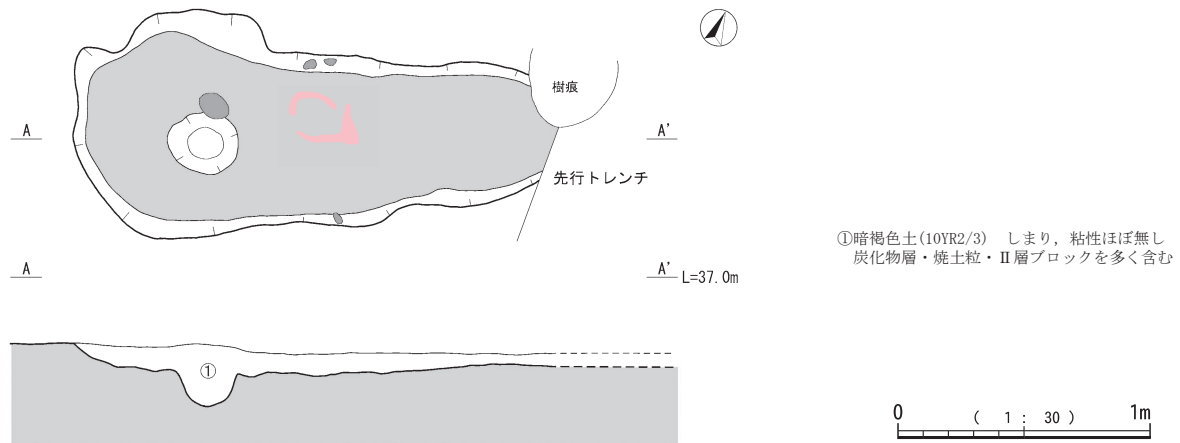
第62図 西台地遺構配置図(近世以降)



写真19 階段完掘状況



第63図 階段床面出土遺物



第64図 炉跡11号

炭化材の放射性炭素年代測定値は暦年較正 2σ で $1729-1789\text{calAD}$ (47.16%) で、18世紀代の値を得た。

遺物(第65～67図)

358～367は磁器で、368～381は陶器である。

358～361は近世の肥前産染付碗である。358は18世紀後半頃の厚手の丸碗で、外面に一重網目文を描く。胎土は灰色を呈する。359は波佐見焼で、厚く胎土は灰色を呈する。見込みに砂目がみられる。360は19世紀前半～19世紀中葉の肥前系の碗である。

362～364は染付皿である。362・363は近世の、364は近代の遺物である。362・363は肥前系だが詳細な産地の特定は難しかった。18世紀代の遺物と考えられる。364の文様は銅版転写による。見込みの漢詩様の文字列は意味を為さず判読できない。

365は珉平焼(兵庫)で、鮮やかな緑釉が外面にかかる。小片により器種は不明である。19世紀代～20世紀に入る頃の遺物である。

366は近世の青磁で、径の推測が難しい扁平な小片のため大皿の可能性を考える。稜部を鉄釉で飾る。

367は白磁の徳利の首で、産地・年代は不明である。

368～377は陶器である。

368・369は県外産の遺物である。368は18世紀代の京焼風の皿で、見込みに上絵付によって草花文を描く。369は肥前内野山産の鉢の口縁部片で銅釉と褐釉を組み合わせ横位の縞状に仕上げる。

370～377は概ね18世紀代に帰属すると考えられる薩摩焼である。372は苗代川系の白薩摩の坏で、外面下位は無釉である。371は苗代川系の甕の頸部である。370・373は龍門司系で370は碗、373は口縁部を外側に折り返した鉢である。375は龍門司系で、

そのほかは苗代川系である。374は播鉢、375～377は甕である。378～380は土瓶の蓋、注口部、型押し成形の耳である。381は大型かつ縦長で、薩摩で「山茶家」と呼ばれる窯の耳である。

382・383は瓦である。382は明るい褐色の軒先瓦で印刻による文様が型押される。383は近代以降の瓦である。

384～388は土製品である。384は土錘である。385～387は円盤状の加工品(メンコ)で、385は薩摩焼、386は須恵質土器の外周を擦って円形に加工したものである。385は外面に浅い円形の凹みを作る。387は瓦質焼成の土器片を打ち搔いて加工し、表面に格子目を刻み付ける。3点ともに用途は不明である。

388は土製の人形の一部と考えられ、土の玉を芯として薄い粘土を巻いて成形する。胎土精良である。

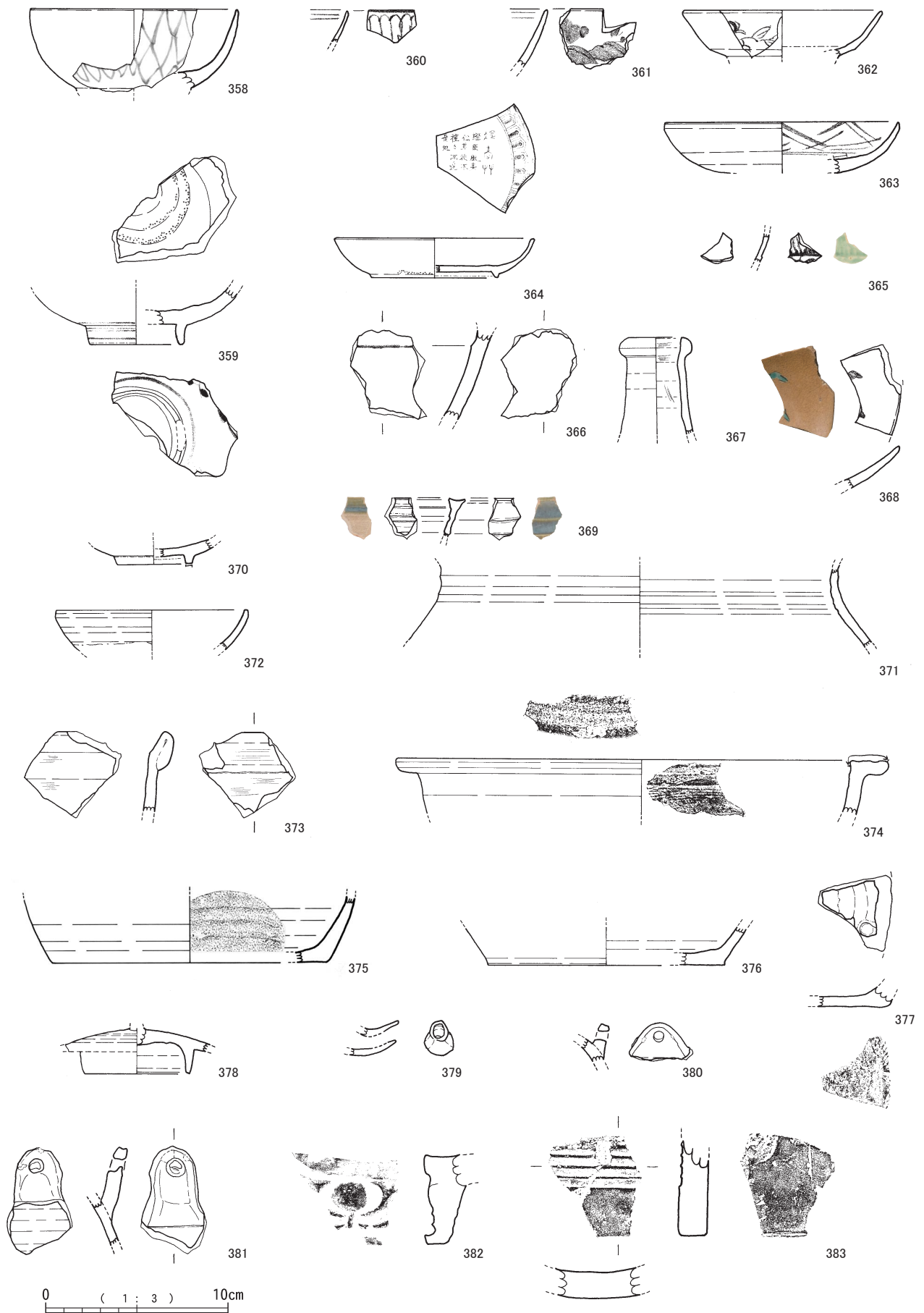
389は専用品として作られた取鍋の小片である。内面には熔解物がガラス質化し付着する。蛍光X線分析の結果、銅を多く含んでいる。

390は無色透明のガラス瓶である。

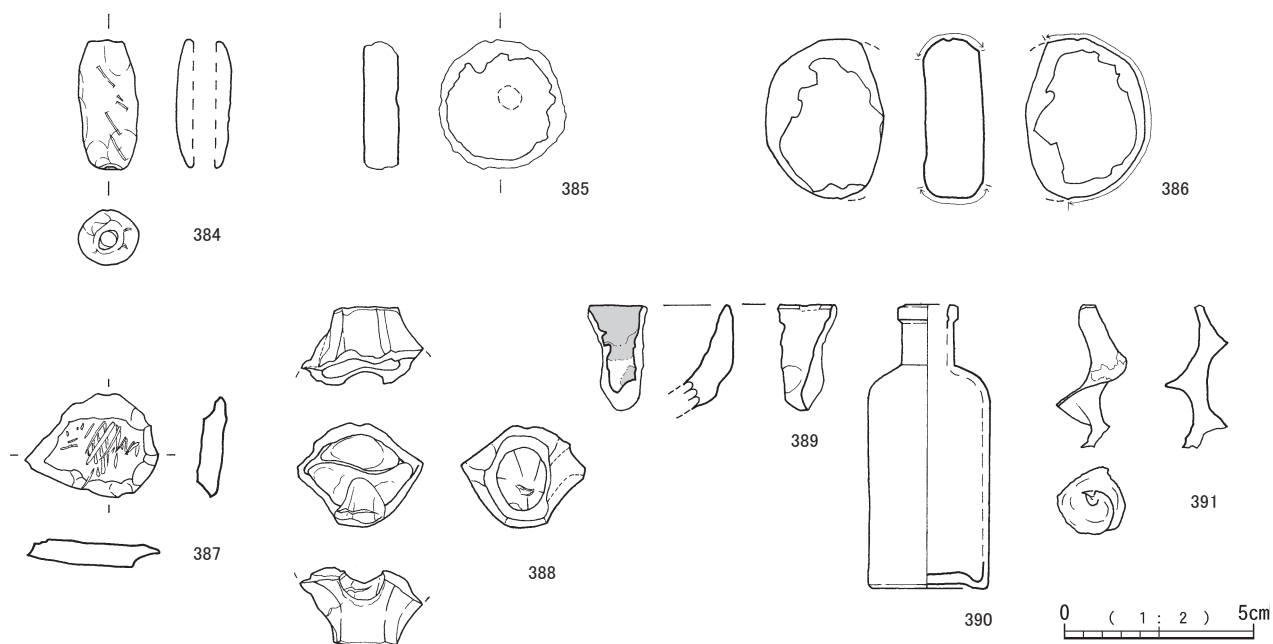
391は巻貝の芯である。加工痕は判然としない。

392～395は鉄製品である。392は鑿である。先端部を欠損する。393は器種不明で先端部を折り曲げる。394は鑄造の鍋で、長形状の孔を有する。395は釘や鋸の一部で断面は丸みを帯びる。

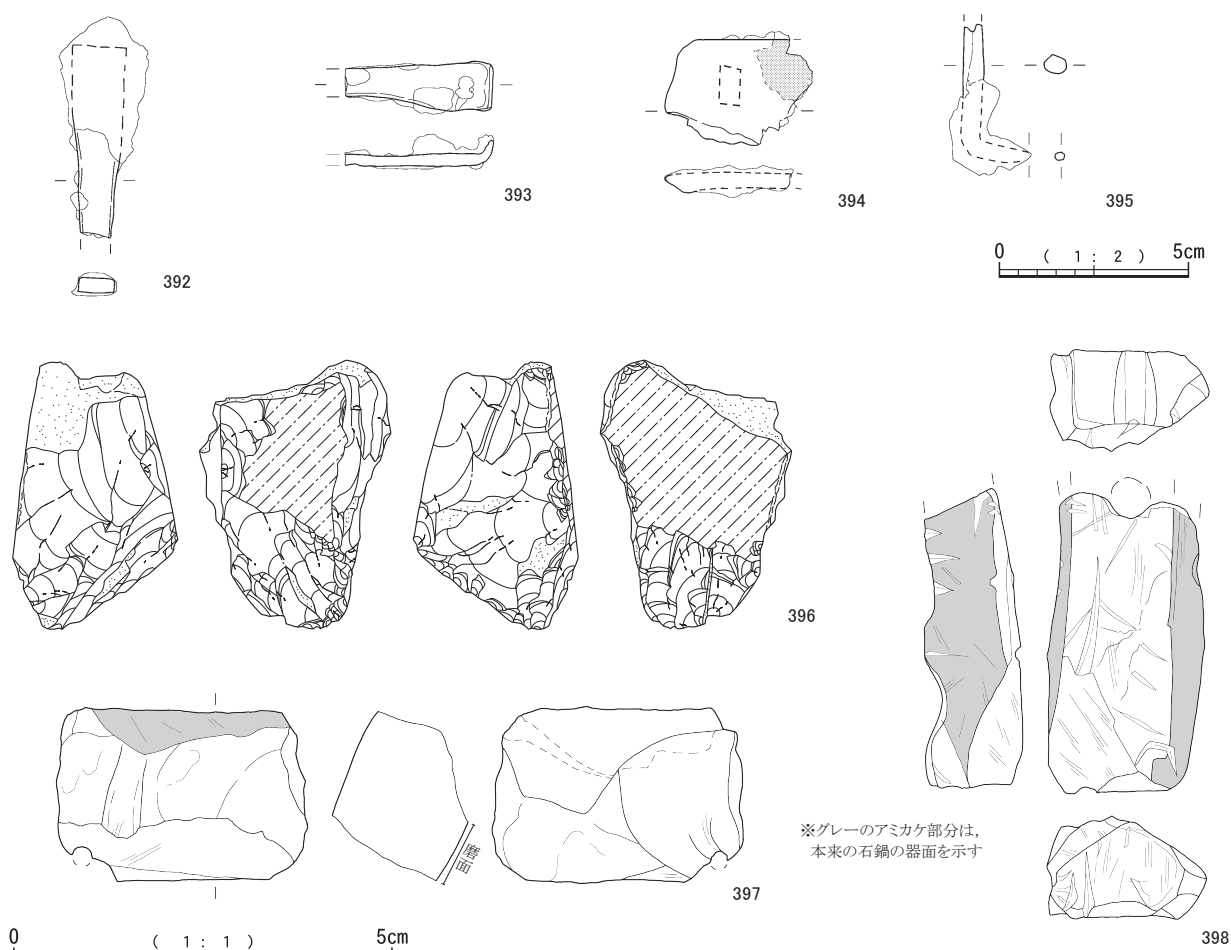
396～398は石製品である。396は69などと同様の加工・使用痕跡のみられる剥片で、同質のチャート製である。火打ち石の可能性はある。397・398は滑石製品である。ともに半円状の浅い溝がみられ、細い棒状の工具による研ぎ痕である可能性が考えられる。本来の鍋の器面を残す。398は鋭利な工具による傷が多数確認できる。



第65図 西台地 近世以降の遺物①



第66図 西台地 近世以降の遺物②



第67図 西台地から出土した鉄製品・石製品

第3節 東谷の調査

1 発掘調査の概要

東谷は、7区～10区に該当し、南側を谷頭とし、北に向かって開けた谷である（第68図）。西台地からは10区あたりで急な斜面を下り、平坦な地形となる。ここから東台地まではほとんど平坦であり約100m離れている。14・15区周辺は発掘調査当時「沼地」と呼称していたほどの低湿地で、水田の放棄地であった。また、西台地に近い11区は宅地であったために一段高い造成地となっていた。

調査区は、12～13区を南北に通る里道を挟んで西側と東側の2か所に設置した。

重機で沼地部分である12～16区の表土剥ぎを行ったところ、厚さ1m程の造成土を確認した。このことは予想外であり、土量、湧水が大量に出ることが想定されたため、全面掘り下げではなく下層確認トレンチを入れて調査計画を立てることにした。表土・造成土を重機で掘削後、10・11区に2か所、13・14区に2か所のトレンチを設置し、遺物包含層の堆積状況と層厚を確認した。下層確認は層の状況を把握しながら重機と人力で掘削作業を行った。

調査の結果、11区の平坦地形は後世の宅地造成による埋め立てによるもので、谷は西台地直下まで広がっていたことが判明した。層序については後述するが、各トレンチの最下層であるⅥ層が小河川による堆積層であると判断された。各トレンチでは、木杭や中～近世の陶磁器等の小片が少数確認されるのみで明確な遺構の検出はなかったことから、遺物包

含層は流出したと判断した。また、安全面も考慮してⅥ層上位で調査を終了した。各トレンチは、土層断面実測後、重機によって埋め戻した。

2 層序

東側調査区は地点によって層の堆積状況が異なるため、次項の発掘調査の成果においてトレンチごとに層序と土質の特徴を示す。

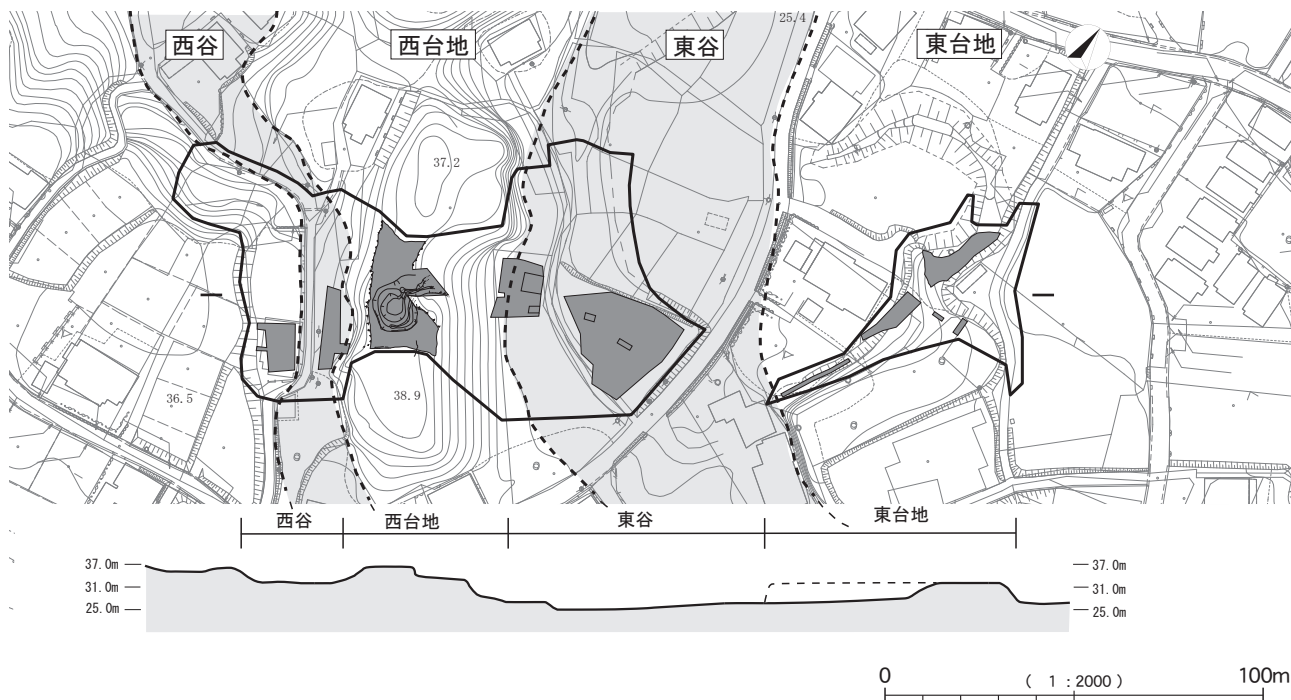
東谷の形成時期は定かではないが、昭和40年頃までは水田として利用されていたことが周辺住民への聞き取り調査によって分かっている。Ⅱ層のシラス造成土はトレンチによって層厚が大きく異なり、Ⅲ層～Ⅴ層は粘質土で、旧水田由来の層である。

Ⅵ層は砂、シラス、粘質土の互層で小河川による堆積物と判断されるが、湧水があり掘り下げ困難のため層厚は不明である。

また、2トレンチにはⅢ～Ⅴ層がみられない。後世の削平か流出した可能性がある。

第10表 東谷基本層序

層序	色調・土質	層厚	備考
I	表土	5 cm	—
II	シラス造成土	100cm	—
III	灰褐色粘質土	20cm	旧表土
IV	灰褐色粘質土、砂	20cm	水田床土
V	黄褐色粘質土	30cm	—
VI	砂、シラス、黄褐色粘質土の互層	80cm ～	小河川の堆積物 15C後半の杭出土



第68図 周辺地形および調査範囲図

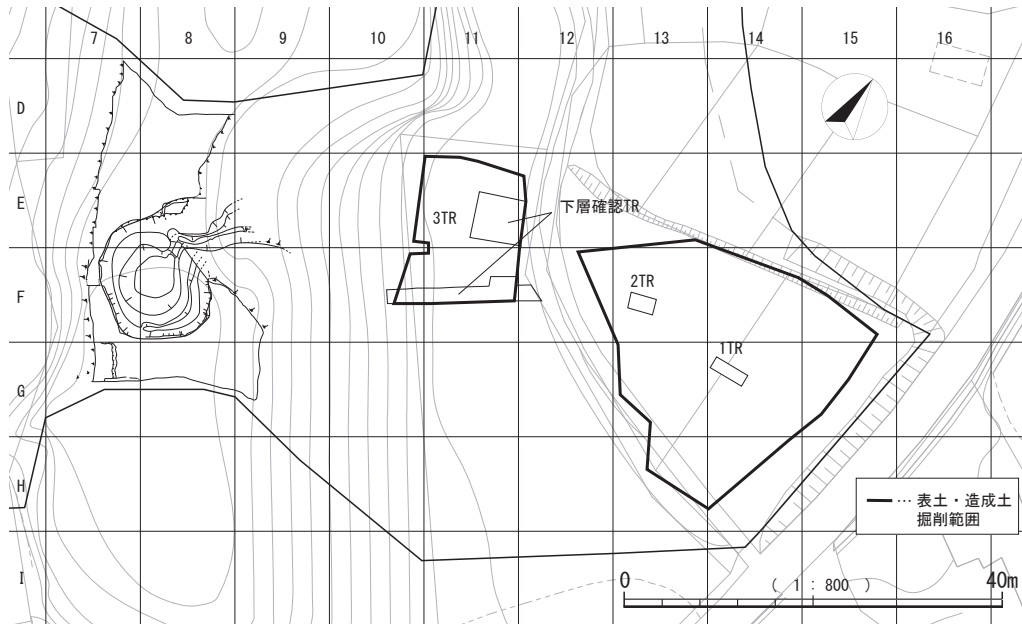
3 発掘調査の成果

東谷の発掘調査の成果について、トレンチごとに報告する。トレンチの位置については第69図に示す。

東谷の調査における最下層のⅥ層は、ラミナ層が複雑に堆積し流水が多かったことから、小河川の堆積物と考えられる。なお、Ⅵ層から遺物が出土して

いるのは2トレンチのみで、遺物は木製品と青磁小片である。

ほかの遺物は表土からの遺物である。



第69図 東谷トレンチ位置図



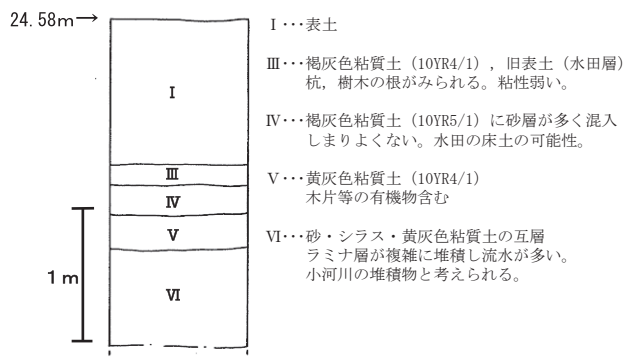
写真20 東谷調査前風景



写真21 造成土除去作業風景



写真22 旧水田層(Ⅲ層)検出状況



第70図 1TR土層 柱状模式図

(1) 1トレンチの調査

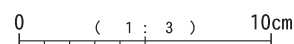
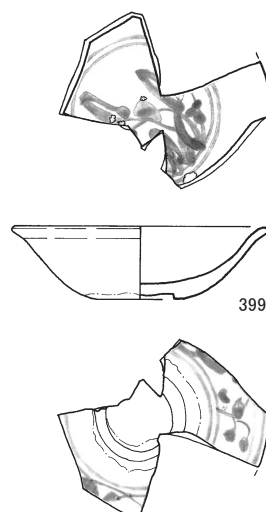
G-14区に位置する。1.4×3.8mの範囲を調査した。層序と土質は第70図のとおりである。

遺物は青花皿, 土師器皿, 青磁小片が出土し, うち2点を図化した。また, VI層で杭が出土しているが時期不明のため図化には至らなかった。

遺物

399 は漳州窯系青花皿C群である。口縁部はゆるく外反し, 基筒底である。接地面に釉剥ぎを施す。外面と見込みに草花文を描く。精良な胎土を使用する。400 は底径約 6.0cm の土師器皿の底部片である。

器壁が大きく開きながら立ち上がる。橙色を呈し, 赤色粒を少量含む精良な胎土を使用する。15世紀後半～16世紀代の形態であると考えられる。

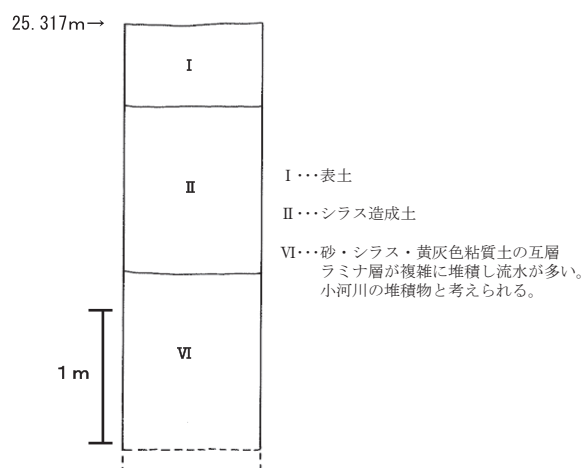


第71図 1TR出土遺物

(2) 2トレンチの調査

F-13区に位置する。3.0×1.8mの範囲を調査した。層序は第72図のとおりで, 土質は1トレンチと同様である。

造成土であるII層の下は, 1トレンチと同様の小河川の堆積物層であり, III～V層はみられなかった。VI層からは杭などの木製品が出土し, 4点を図化し, 放射性炭素年代測定を実施した。



第72図 2TR土層 柱状模式図



1トレンチ土層写真



2トレンチ土層写真①



2トレンチ土層写真②

遺物

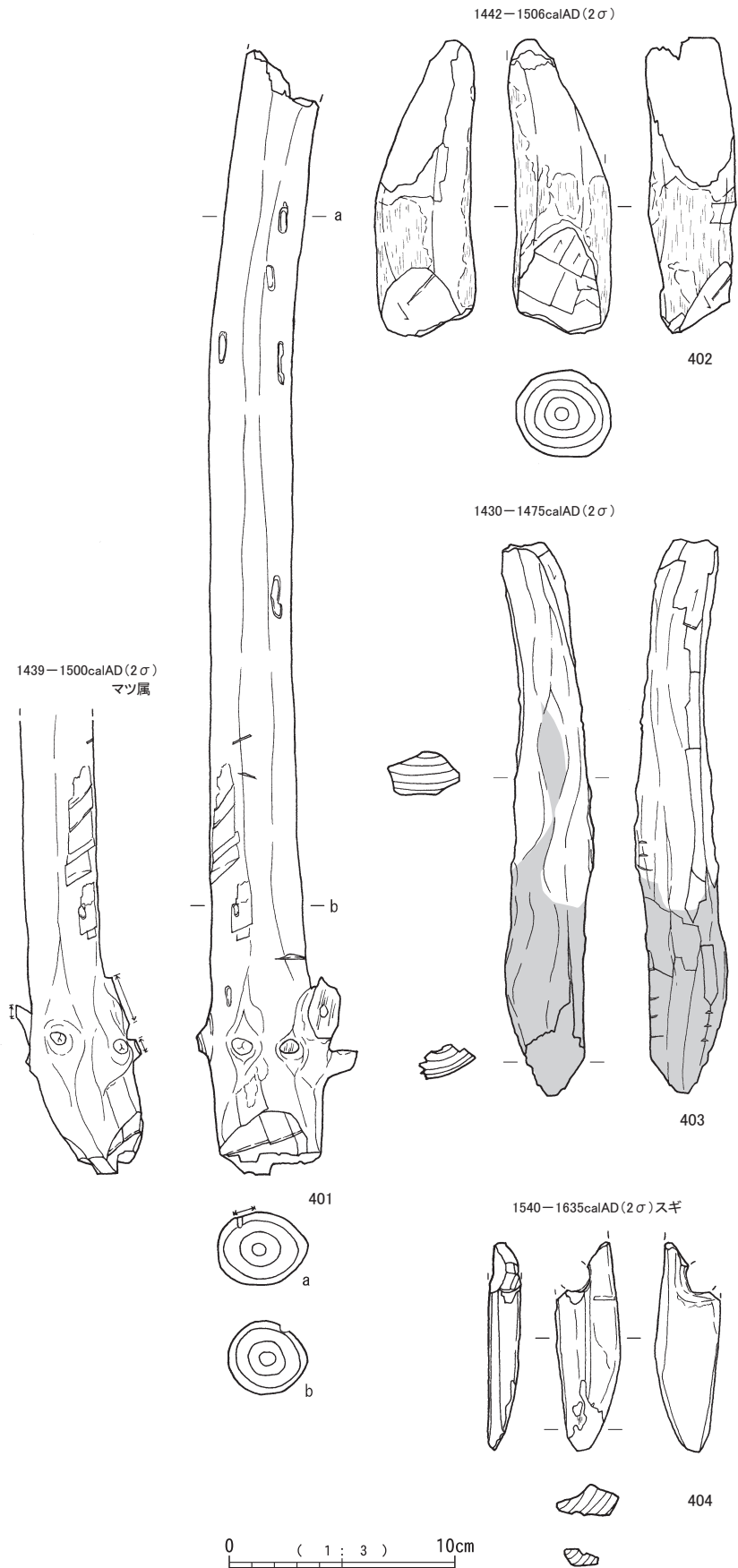
401・402 は芯持材を使用した丸杭である。下面を鋭利な刃物によって両側から削り、先端を尖らせる。ともに下端はつぶれている。401 は、残存部の長さが 49.45cm、最大径は 6.9cm である。樹皮はほぼ残らず、上方から下方に向けて皮を剥いだ痕跡が残る。放射性炭素年代測定値は暦年較正 2σ で 1439 - 1500calAD (90.4%) で、15 世紀中頃～16 世紀初頭の値を得た。樹種はマツ属であった。

402 は残存部の長さが 13.0cm、最大径は 4.35cm である。樹皮が残る。放射性炭素年代測定値は暦年較正 2σ で 1442 - 1506calAD (85.4%) で、15 世紀中頃～16 世紀初頭の値を得た。

403 は芯持材を縦に割り裂いている。最大長 24.4 cm、最大幅 3.65 cm、最大厚 1.9 cm である。下端部を欠損しており、そのためにとがった形状となっている。裏面に割裂いた後に多少のハツリを施した痕跡がみられるのみで、自然の形状が残る。下端部は被熱によって黒色化している。放射性炭素年代測定値は暦年較正 2σ で 1430 - 1475calAD (95.4%) で、15 世紀中頃の値を得た。

404 は柁目材を加工した用途不明の木製品である。孔が 1 か所確認できる。表面は中央に稜を形成し、裏面は平坦である。板状で先端部分は先細る。放射性炭素年代測定値は暦年較正 2σ で 1540 - 1635calAD (57.5%) で、16 世紀中頃～17 世紀初め頃の値を得た。樹種はスギであった。

なお、VI 層から出土した木杭については杭列である可能性を考えたが今回の調査では明らかにすることができなかった。



第73図 2TR出土遺物(木製品)

(3) 3トレンチの調査

E・F-10・11区に位置する。平坦面を選び、約23.5×19mの範囲にロングトレンチを設定し調査した。また、さらにトレンチ内に2か所で下層の確認を行った。層序は第74図のとおりで、土質は1トレンチと同様である。

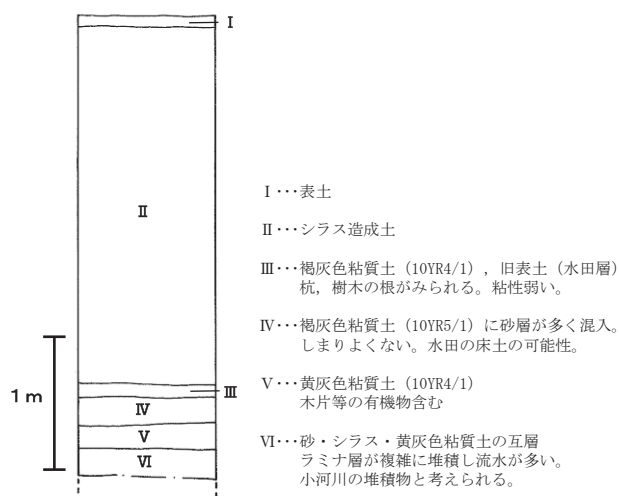
遺物は瓦質土器、薩摩焼が出土した。

遺物

405・406は瓦質の火鉢である。405は口縁部片である。口縁端部外面をわずかに肥厚させ、口唇部は

平坦である。胴部は膨らみをもつことが想定される。外面上位に「く」の字状の意匠をへら先を浅く押し付けて巡らせる。赤色粒が入る橙色の胎土で内外面は黒く燻される。406は火鉢の底部片で、内面は黒色である。色調はやや白く、土師質に近い。江戸時代の遺物の可能性がある。2点ともに硬質であり、胎土が精良なため、近世の遺物と考えられる。

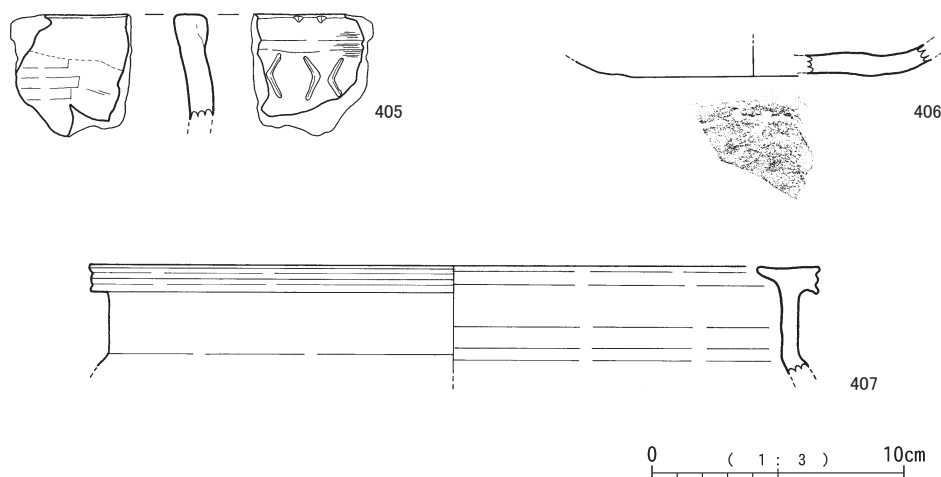
407は苗代川系の薩摩焼の甕の口縁部片である。推定口径は29cmである。内外面に鉄釉がかかり、被熱の痕跡が窺える。18世紀頃に該当する。



第74図 3TR土層 柱状模式図



3トレンチ土層写真



第75図 3TR出土遺物

第4節 東台地の調査

1 発掘調査の概要

東台地は、調査区の東側に位置する標高約30mのシラス台地であり、西台地とは、東谷を挟んで位置している。ここに新城があったと言われているが、宅地造成と、シラス取りによって台地全体が削られ、一部のみ残存しており、旧地形は不明である。

遺構は存在しないことを予想していたが、西台地で虎口状遺構が発見されたため、トレンチ調査を行った（第77図）。

トレンチは、重機および人力で表土を剥ぎ取った後、5か所設定した。各トレンチは包含層および遺物の出土状況を確認しながらシラス層まで掘り下げた。各トレンチで確認されたいずれの層も攪乱で新旧の遺物が混じる状態であったので、出土遺物は、3トレンチの層位を基準に層ごとに一括で取り上げた。出土した遺物としては、中近世の青磁、青花、陶器等が出土した。また、遺構は、部分的に残っていた集石1基の図化作業を手実測で行った。

遺構が残っている可能性はトレンチ調査の状況から低いと判断し、調査はトレンチ部分のみを行い終了した。調査が終了したトレンチは、重機による埋

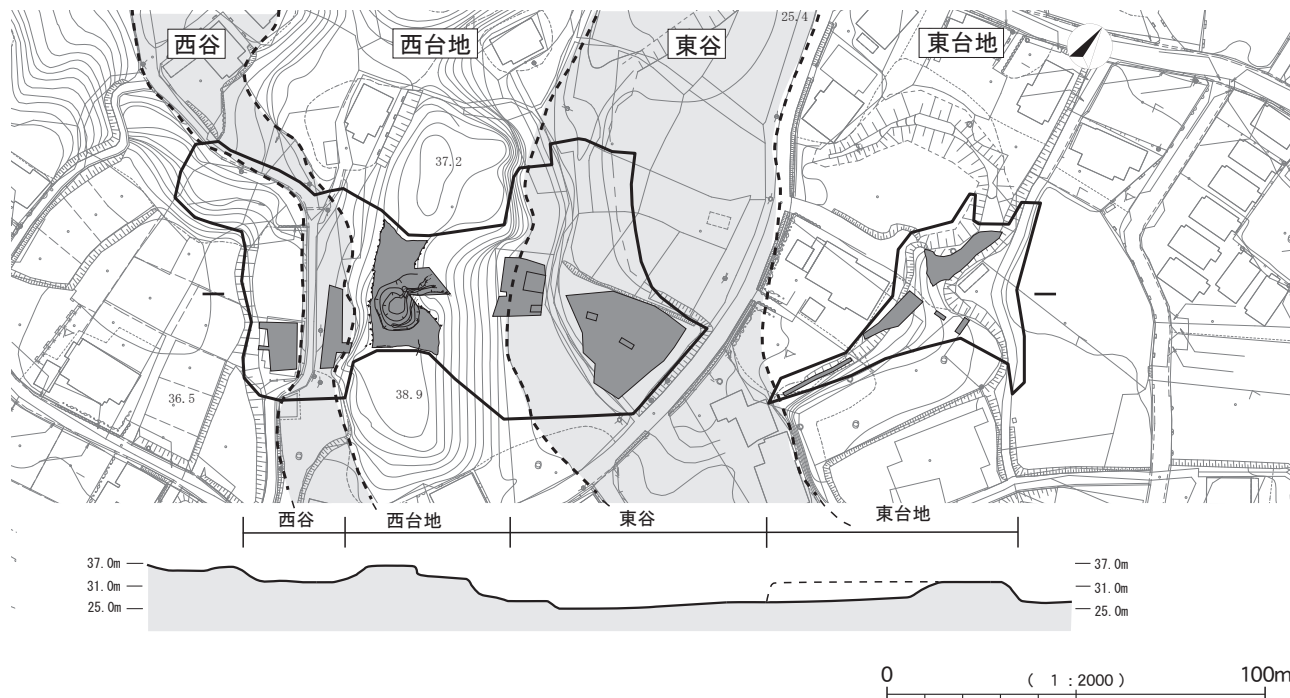
め戻しを行った。なお、傾斜地であることから、土嚢による土砂流出対策を行った。

2 層序

東台地の基本層序は第11表の通りである。5か所あけたトレンチのうち最も堆積状況のよかった3トレンチの層位である。4つの層に分層しているが、Ⅰ～Ⅲ層までは、中世から現代までの遺物が混じって出土する攪乱層であった。西台地のⅡ層（シラス）に対応する層はⅣ層になる。

第11表 東台地基本層序

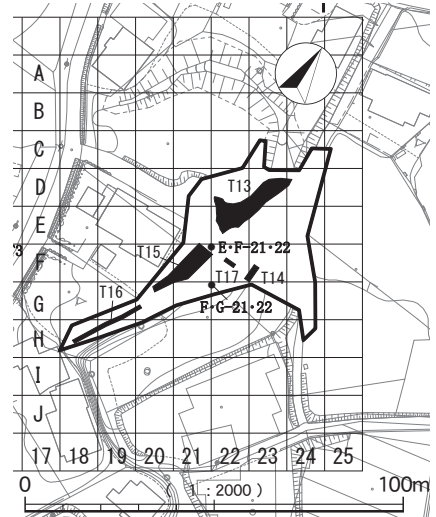
層名	土色・土質	特徴
Ⅰ層	暗褐色土耕作土	表土中世～現代の遺物が出土
Ⅱ層	褐色砂質土	攪乱層 部分的に白色シラスの水成堆積が見られる。
Ⅲ層	暗褐色砂質土	攪乱層 中世～現代の遺物が出土
Ⅳ層	にぶい黄橙色砂質土	シラス



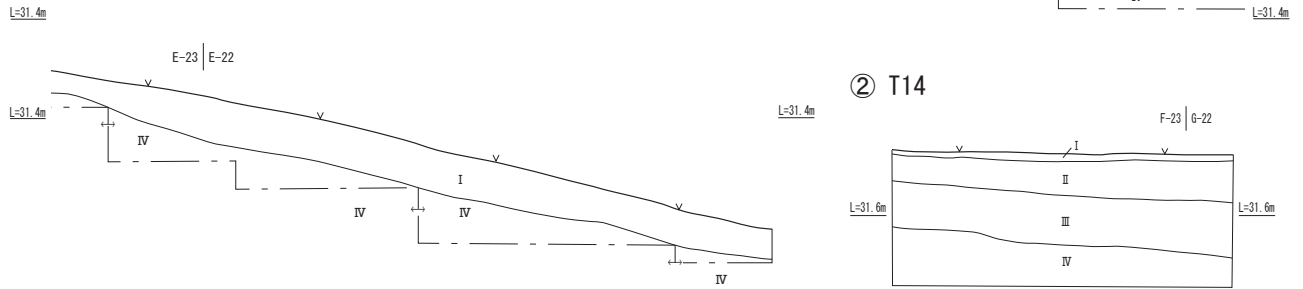
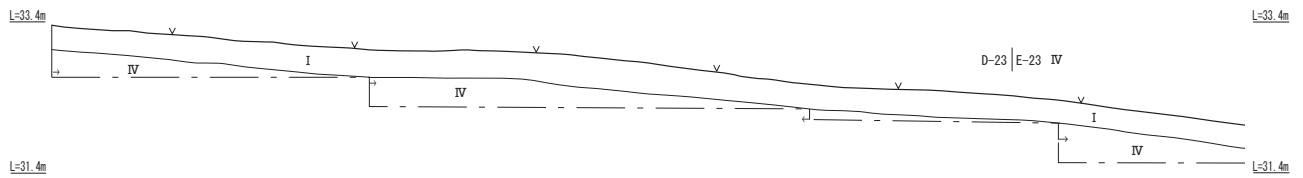
第76図 周辺地形および調査範囲図

第 12 表 東台地トレンチ規模表

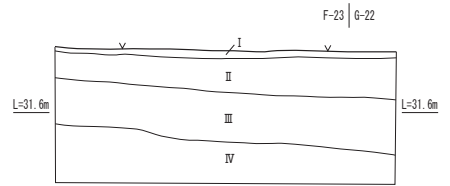
トレンチ No	長さ×幅×深さ (m)	遺構
T13	25 × 1 × 0.6	なし
T14	4.5 × 1.5 × 1.8	なし
T15	8 × 5 × 1.4	集石1基
T16	20 × 1 × 0.7	なし
T17	3 × 1 × 1.4	なし



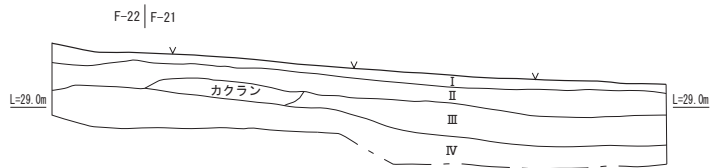
① T13 東壁



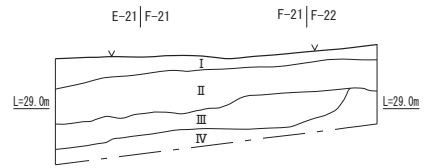
② T14



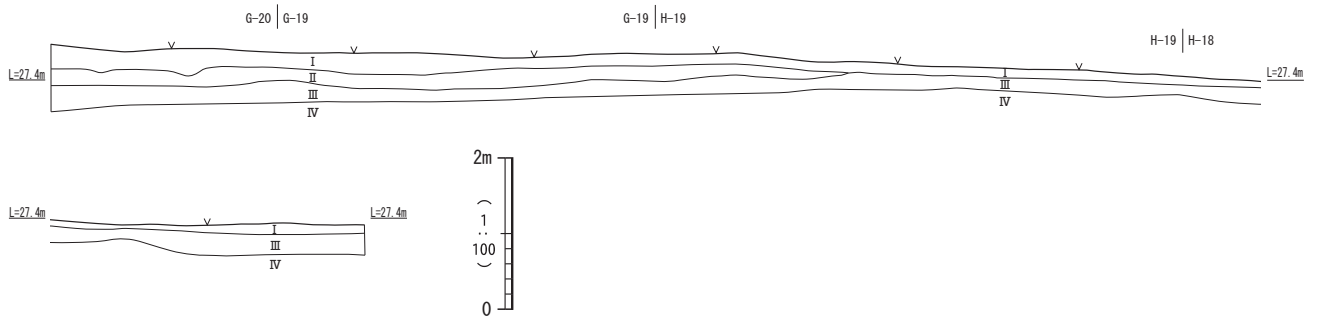
③ T15 東壁



④ T15 北壁



⑤ T16 東壁



第77図 東台地土層断面図

3 発掘調査の成果

東台地の遺物は、攪乱層で出土した。現位置を保っていないため、時期別に分けて報告する。また、東台地から出土した石製品、鉄製品の帰属時期については、出土層位による判断が難しく、近世以降の調査の後にまとめて報告する。

(1) 中世の調査の成果

遺物(第78～81図 408～453)

青磁・白磁(第78図 408～418)

408～415は龍泉窯系の青磁である。408～410は青磁碗B 1類(13世紀後半～14世紀前半)の鎗蓮弁文の碗で、口縁部片である。411・412は青磁碗B 2類(14世紀後半～15世紀初め)の碗である。411は口縁部片で、口縁が玉縁状を呈する。412は底部片で、外面には幅広の蓮弁文が、見込みには印花文がみられ、外底の釉薬が輪状に削り取られている。413は青磁碗B 4類の底部片で、外面にはヘラ先細蓮弁を施し、内面にはわずかにヘラ書きの文様が見られる。高台が直立し、高台内の釉が剥ぎ取られている。

414・415は皿である。414は口縁部片で、口縁部が外反している。415は底部片で、見込みに草花文が見られ、高台と皿付は無釉である。

416・417は盤の底部片である。416は底が碁笥底で、見込みに線刻の蓮弁文が見られ、緑色釉を高台内面までかけたあとで剥ぎ取っている。417は碁笥底で、高台内に目胎土が残っている。

418は白磁である。白磁皿B群(15世紀前半)の小皿片で、高台に挟りが入り、内面に目跡が見られる。

青花(第78図 419～421)

419～421は青花である。419・420は染付碗C群(15世紀3/4～16世紀1/4)の蓮子碗の底部片である。419は景德鎮窯系で焼成不良である。420は漳州窯系で高台に刳殻が付いている。421は景德鎮窯系の皿の底部片で、外面は芭蕉葉文が高台脇にあり、内面にネジ花の模様が見られる。

国産陶器(第78図 422～424)

422～424は国産陶器である。422は甕の胴部である。胎土は砂質で、平安末から鎌倉時代と考えられる。423は常滑焼の甕である。外面には自然釉がかかっており、内面には無釉でユビオサエの痕が見られる。424は古瀬戸の瓶子か四耳壺の胴部片であ

る。外面は灰釉で、薄い黄緑色を呈している。

土師器(第79図 425～434)

425～434は土師器である。器種としては坏と皿が見られる。425は内黒の埴の胴部片である。古代の遺物の可能性がある。

426～428は坏である。426～428は口縁部片で、内外面に回転横ナデを施しているが、摩滅が著しい。

429～434は皿の底部片である。内外面回転横ナデを施し、底部外面に回転糸切り痕が残る。429は底部片で、回転糸切り痕が残る。

須恵器(第80図 435～447)

435～447は須恵器で、甕の細片である。435～437は口縁部片である。435は外面下位に綾杉状のタタキが見られる。436の口縁部は磨滅しており、胴部に格子目タタキが見られ、内面は横ナデが施されている。437は胎土に白色砂粒が入る。外面は摩耗が著しく、口縁内面にハケメが施されている。

438～444は甕の胴部片である。438は外面に平行線状のタタキ、内面は同心円状の当具痕が残る。439・440は外面に格子目のタタキ、内面は平行線状のハケメが施されている。441・443は外面に格子目状タタキが施される。内面は摩滅のため不明である。442は外面に格子目タタキ、内面は当具痕が残る。444は外面に綾杉状のタタキ、内面に平行線状の当具痕が残る。

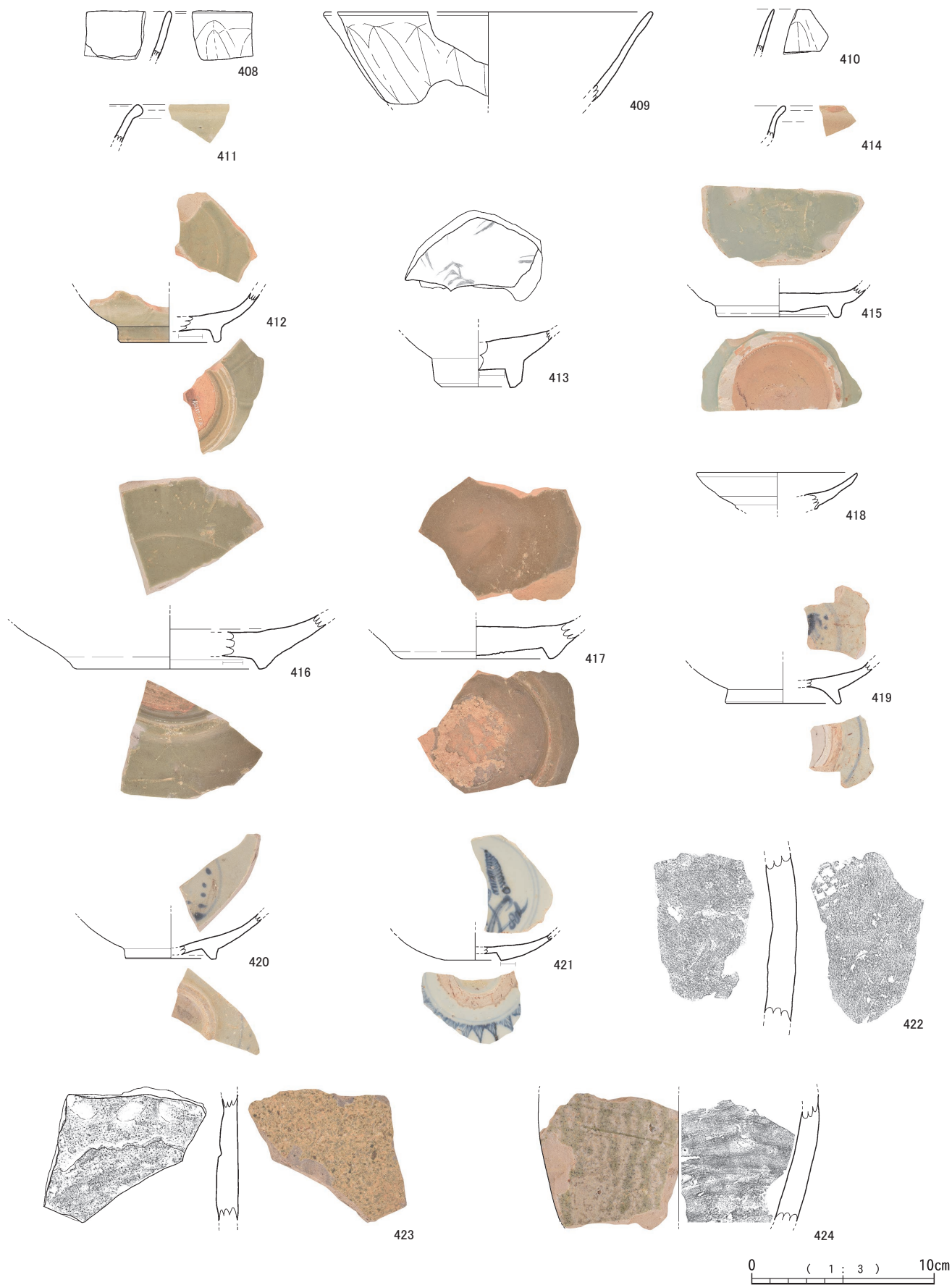
445～447は鉢である。445は口縁部片である。外面に工具ナデ、内面に平行線状のタタキが施されている。

446・447は同一個体と見られる。446は口縁部片で、外面はナデ調整とユビオサエ、内面はナデで仕上げる。447は胴部片で外面はナデ調整、内面にはハケメが施されている。

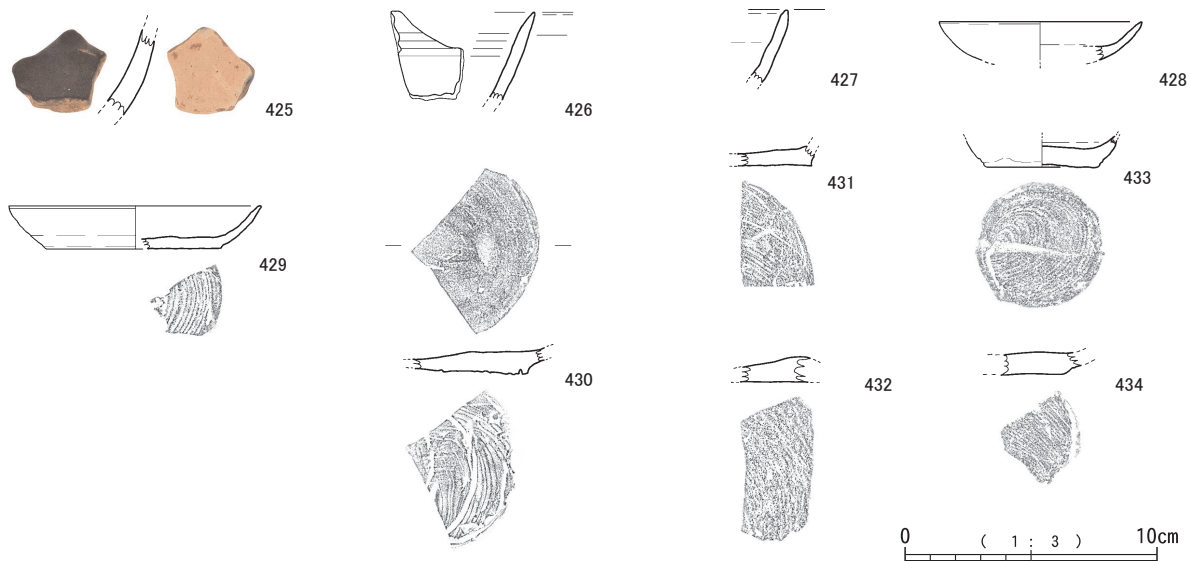
擂鉢(第81図 448～453)

448～453は擂鉢である。448～451は口縁部片で、448・449は瓦質焼成である。448の外面は摩耗が著しく、内面にハケメを施す。449は外面上位にススが付着し、内面の櫛目は磨滅で見にくい。450は内面に櫛目が7本単位で施されている。451は土師質で、外面は摩耗が著しく、内面にハケメを施す。

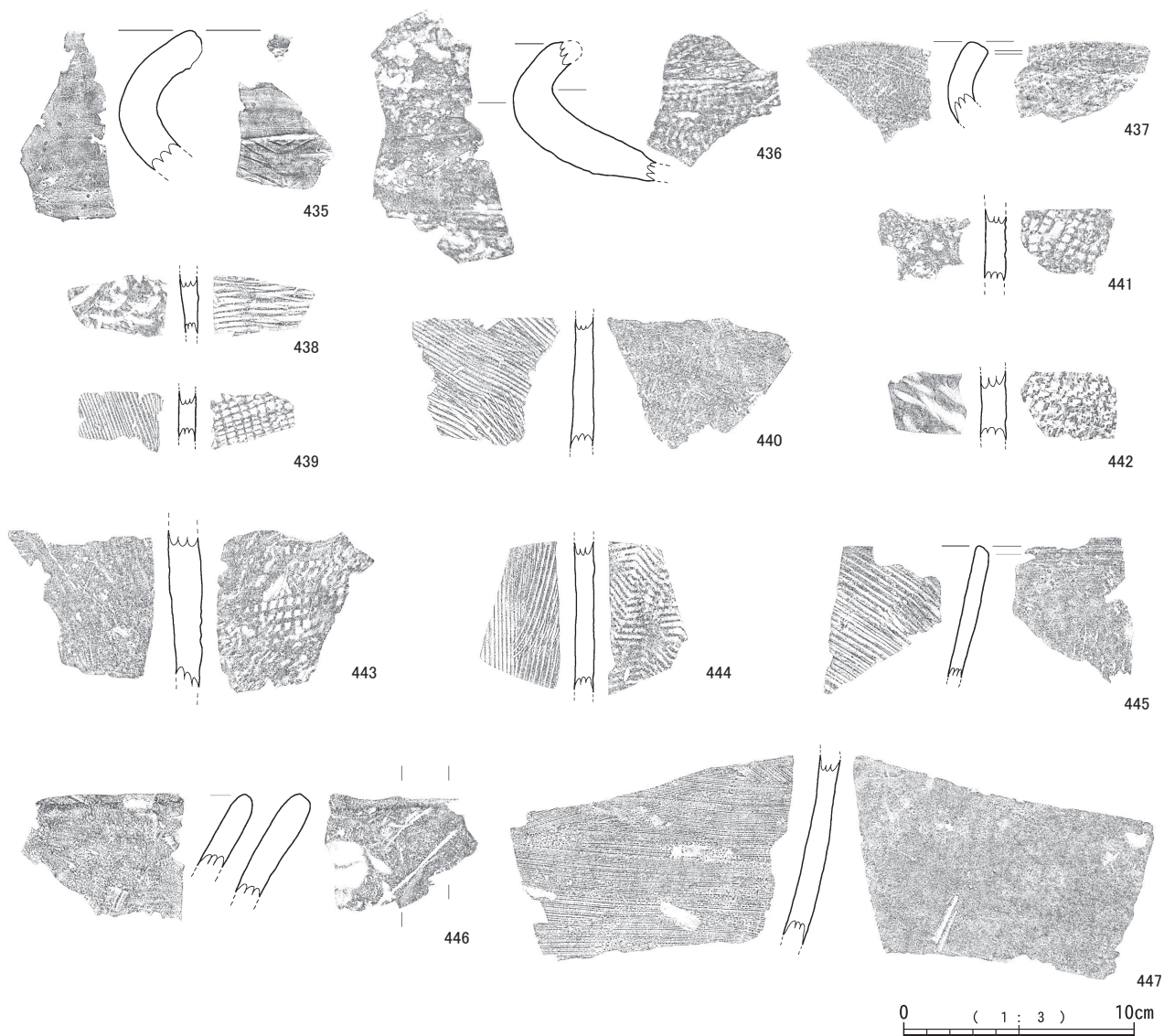
452・453は備前系擂鉢の底部である。452は内面に櫛目が10本単位で見られ、外面にユビオサエの痕が見られる。453は内面に櫛目が9本単位で見られる。



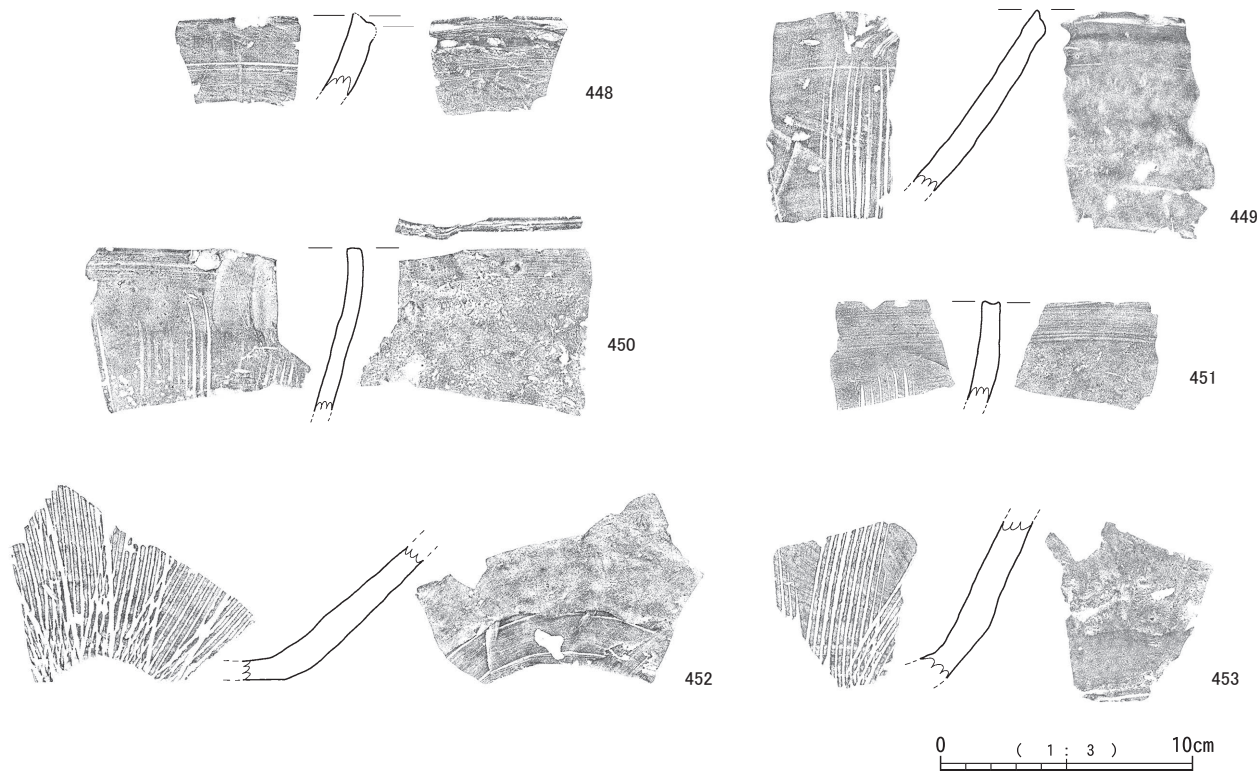
第78図 東台地の遺物①(中世陶磁器)



第79図 東台地の遺物②(土師器)



第80図 東台地の遺物③(須恵器)



第81図 東台地の遺物④(播鉢)

(2) 近世以降の調査の成果

遺 構

集石1号(第82図)

検出状況 15トレンチ内の北東の一角で検出した。検出面はIV層上面である。北側から緩やかに傾斜している部分に位置する。

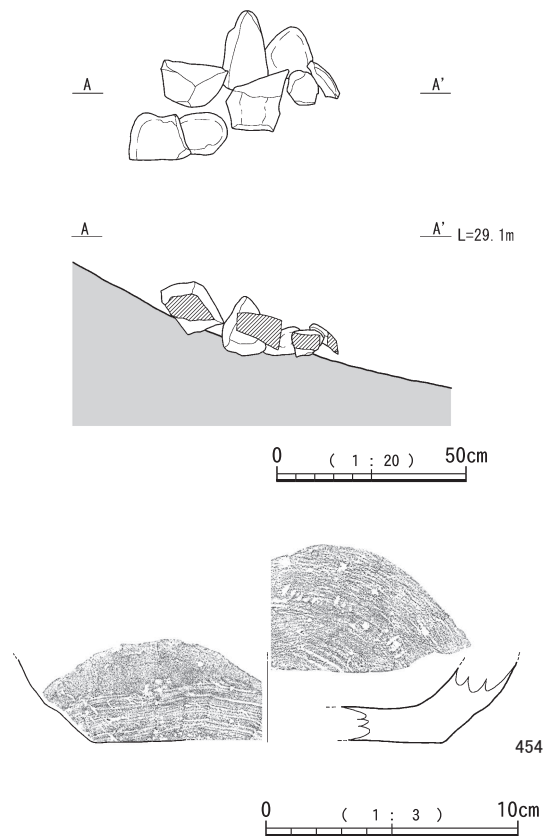
規 模 約40cm×55cmの範囲内に礫7点と播鉢1点が出土した。構成礫のうち、石材は安山岩3点、砂岩4点で、うち2点は被熱している。攪乱層に覆われているため、時代は不明である。

出土遺物 454は播鉢である。瓦質焼成で、破断面の中心部が灰色になっており、内外面にハケメが施される。



写真23 集石1号検出状況

集石1号



第82図 集石1号および出土遺物

遺物(第83～88図 455～499)

青磁・白磁・染付(第83図 455～460)

455は青磁である。器種、産地不明で、把手部分と考えられる。

456・457は白磁である。456は肥前系の小杯である。457は壺の口縁部片で、口縁部が玉縁になっている。

458～460は染付である。458は碗の口縁部片である。在地産の茶飲み碗と推測される。

459は肥前有田焼の皿である。皿の内面に芭蕉葉の模様が見られる。1660～1670年代に海外への輸出用に焼かれた皿である。

460は肥前系の蓋である。外面に松の模様、見込みに岩波文がみられる。19世紀前半と考えられる。

陶器・瓦質土器(第84図 461～475)

461～473は陶器である。461～463は碗である。461は肥前系で、外面に白い化粧土を施し焼成した陶胎染付の碗である。18世紀頃につくられたものである。462・463は九州産である。463は焼成不良で、外面にケズリ、内面はナデ調整である。

464は肥前系の皿である。外面には回転ナデを施し、見込みは蛇の目釉剥ぎを行った後、泥漿を塗付する。

465～468は甕である。465は沖縄産壺屋焼の胴部片である。アラヤチと呼ばれる焼き締めの陶器で、近世以降のものである。466は肥前系の古武雄の胴部片である。鉄釉と銅緑釉で、松の模様を表す二彩手である。467, 468は産地不明の甕の破片で、467は内外に鉄釉が施されており、内外面を横ナデによって仕上げる。どちらも近世以降のものである。

469は、白い釉薬のかけ方や胎土から関西系の壺の口縁部片である。蓋とセットであると推測される。18世紀から19世紀のものと推測される。

470は肥前系の瓶である。内面には横ナデを施

す。18世紀前半につくられたものである。471は九州産の瓶の腰部片である。18世紀後半につくられたものである。

472・473は涼炉である。472は口縁部が内側に張り出す。どちらも19世紀後半のものと推測される。

474・475は瓦質土器である。474は火鉢である。胴部は丸く、外面下位にケズリを行う。475は甕の胴部片で、外面に突帯を巡らせる。摩耗が著しい。

薩摩焼(第85図 476～483)

476～483は薩摩焼である。476～480は胎土の特徴から苗代川系である。

476・477は甕である。476は頸部で、外面に沈線文が3条あり、上胴部に2条の突帯を施す。内外面ともにナデ調整である。477は底部片で、内外面ともに鉄釉がかかる。

478は鉢の口縁部片である。口縁上面の釉剥ぎを行い、口縁部が「L」字になっている。外面上部に1条の突帯を施し、内外面にナデ調整を行う。

479は播鉢である。口縁部上面の釉剥ぎを行い、内面は露胎である。内面に櫛目を施す。

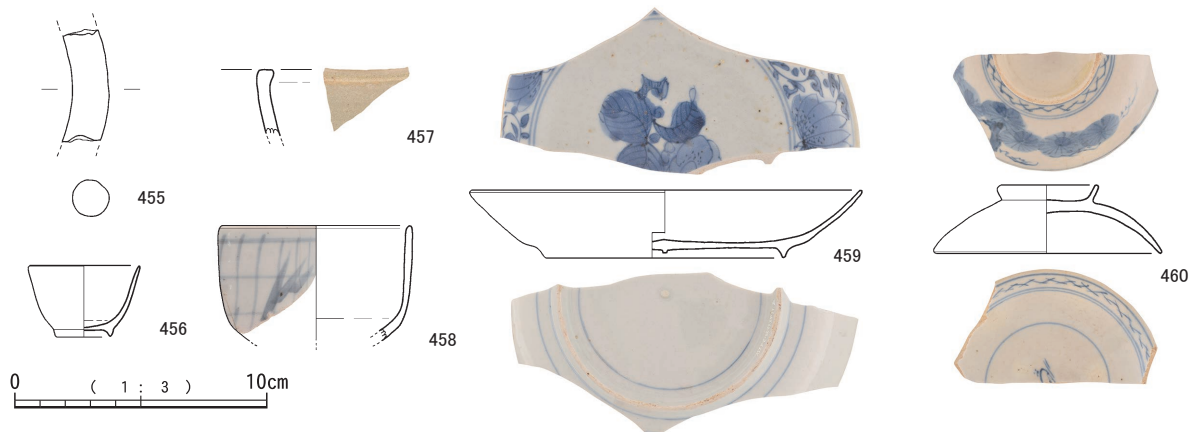
480は急須である。注口が欠損しており、把手を付ける部分に穴が開いた耳が2つ付いている。外面下位にケズリを施す。18世紀前半のものである。

481・482は白薩摩である。481は小鉢で内面と畳付は無釉である。482は小碗である。「協賛會」の印字が外面下部に印字されている。記念品としてつくられた可能性が高い。高台内底部はケズリを施し薄く、硬く緻密な胎土である。

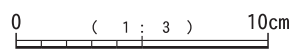
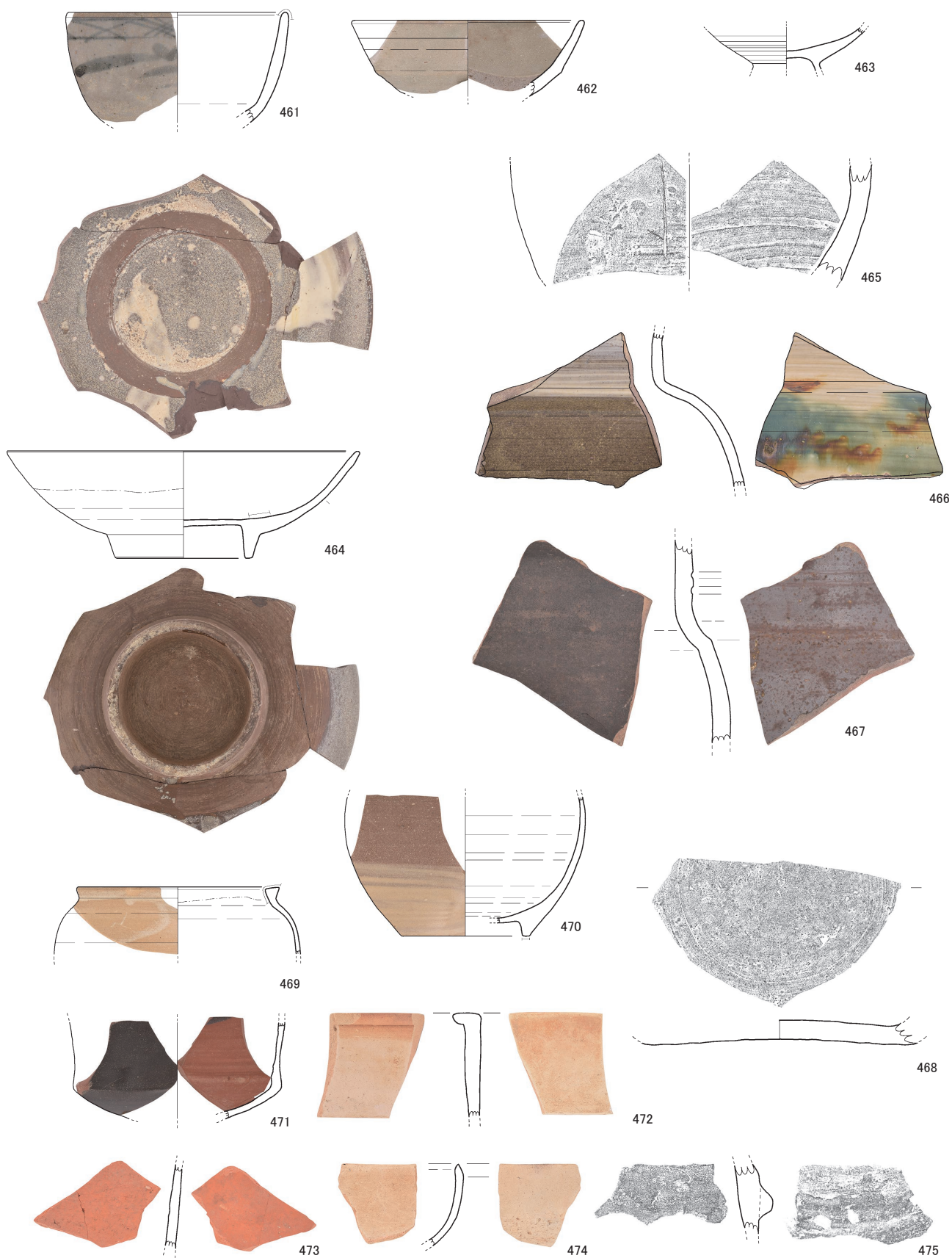
483は黒ものと呼ばれる袋物の胴部片である。焼成が悪い。

瓦(第86図 484・485)

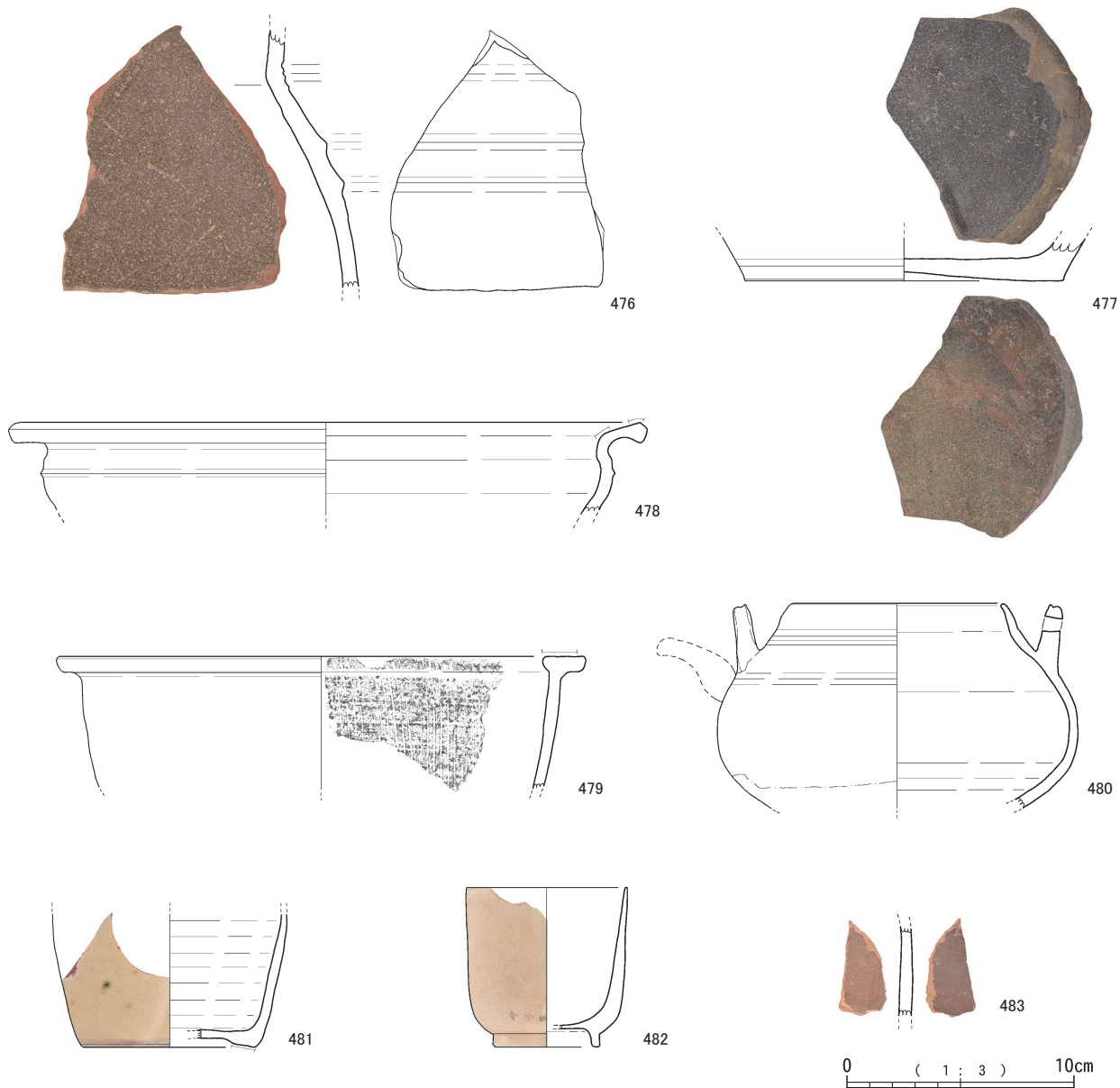
484・485は瓦である。484は軒棧瓦または軒平瓦端である。花文が陽刻されている。485は丸瓦である。



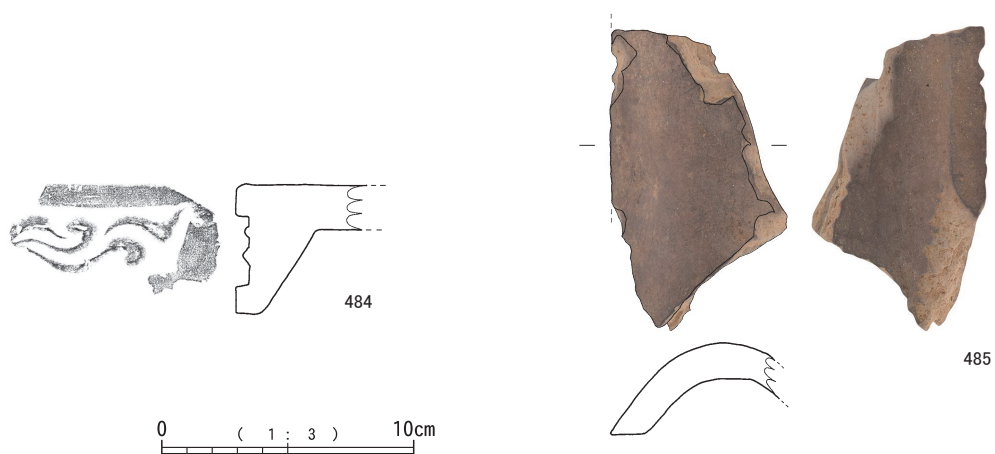
第83図 東台地の遺物⑤(青磁・白磁・染付)



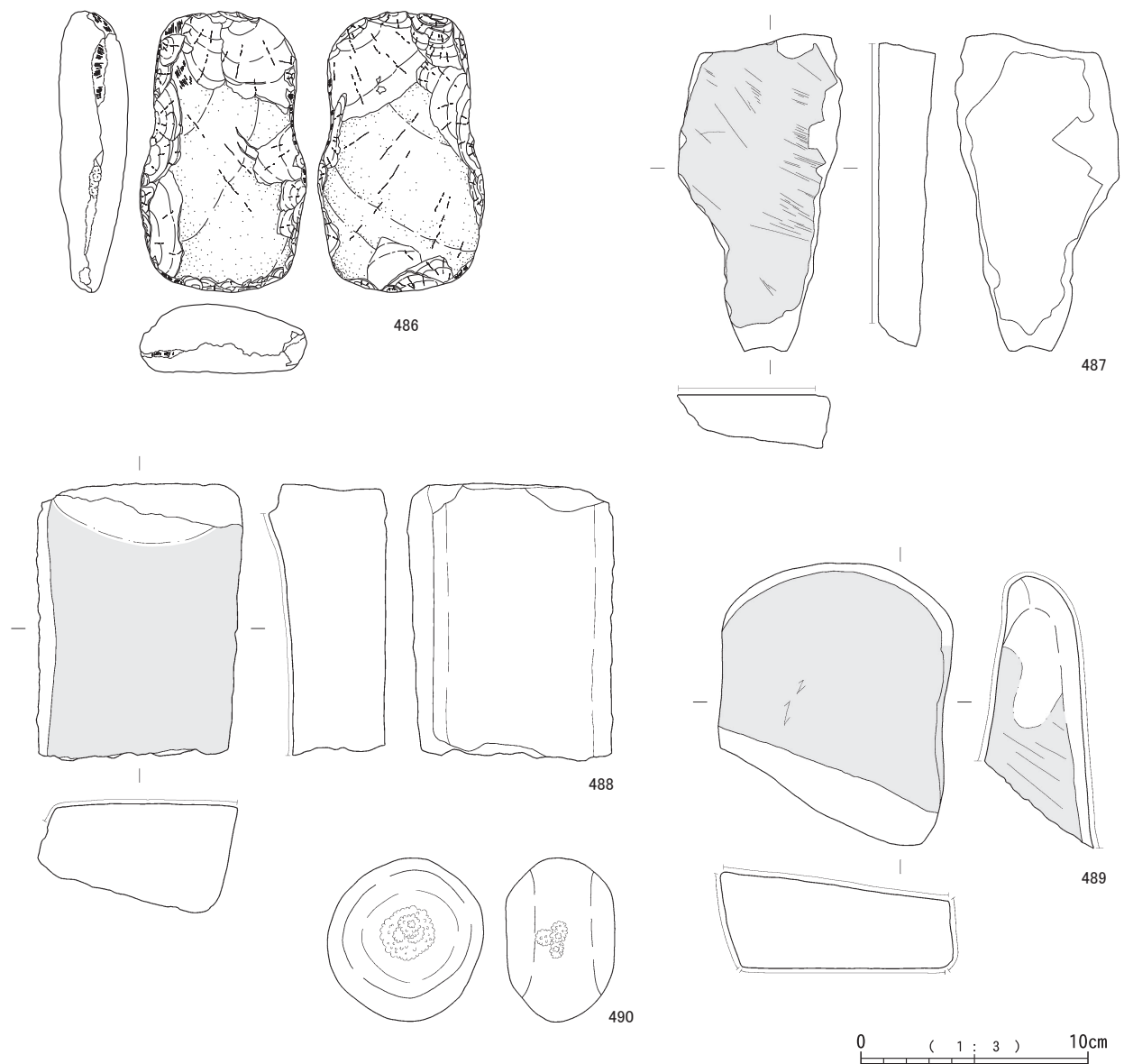
第84図 東台地の遺物⑥(陶器・瓦質土器)



第85図 東台地の遺物⑦(薩摩焼)



第86図 東台地の遺物⑧(瓦)



石製品(第87図 486～493)

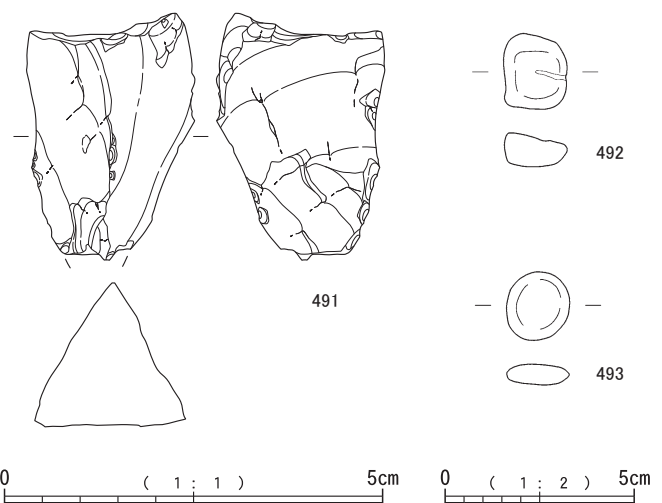
486は安山岩製の打製石斧である。扁平な礫の両側に二次加工を行い形を整えており、左右両側に浅い抉りを入れてある。

487～489は砥石である。487は安山岩で、砥面右側に擦痕が多くみられる。488は変成流紋岩（天草砥石）の砥石で、上部部に刃物の研ぎ痕がみられる。489は砂岩製の砥石で、4面全て使用している。

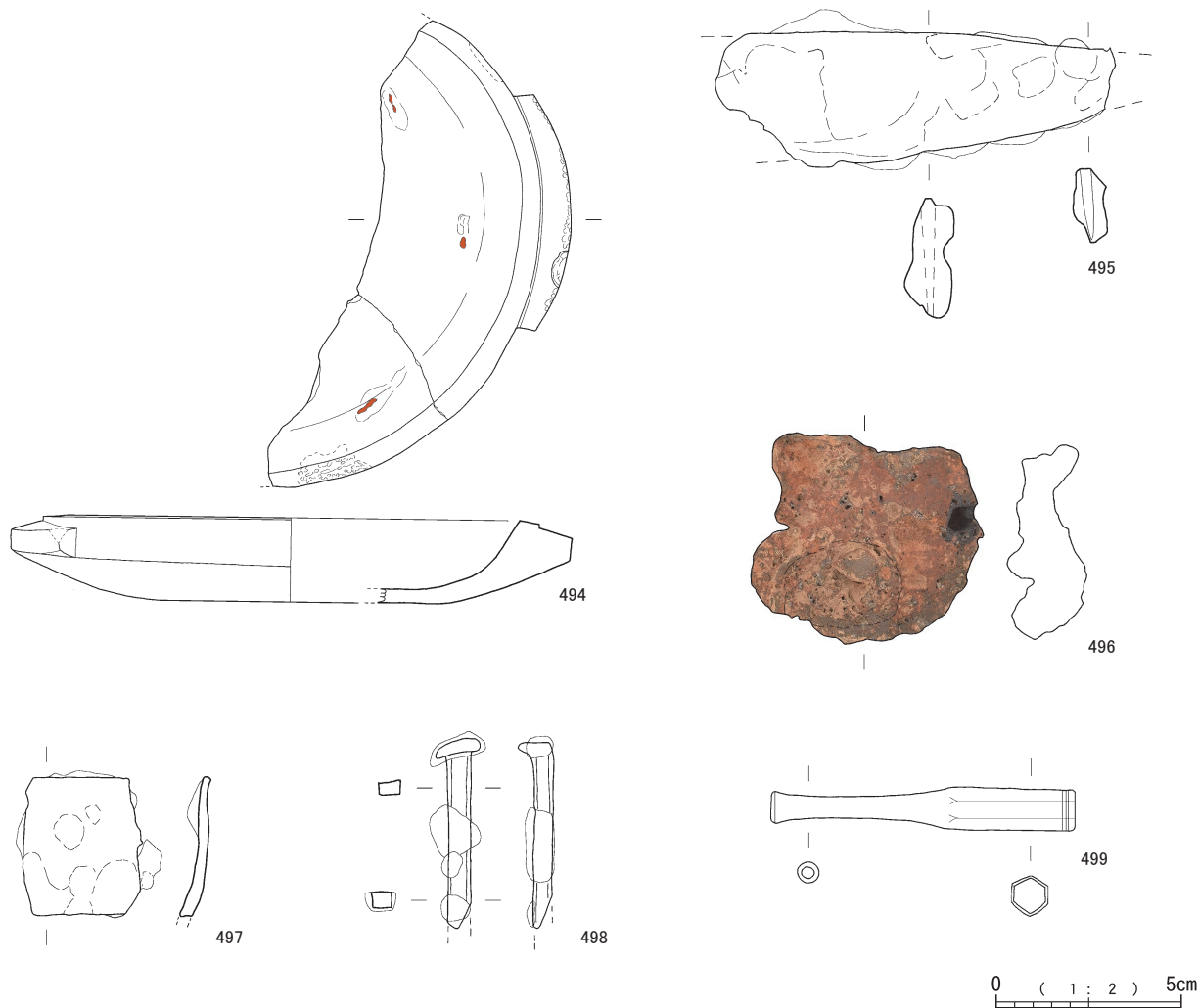
490は磨敲石である。表面中央部分が敲打により凹んでおり、右側にも敲打痕がみられる。

491はチャート製の二次加工剥片である。裏面右下に潰れた痕跡があり、火打ち石として使われた可能性がある。

492・493は基石である。頁岩の小さな扁平礫を利用している。



第87図 東台地の遺物⑨(石製品)



第88図 東台地の遺物⑩(石皿・鉄製品)

鉄製品・その他(第88図 494～499)

494は朝鮮半島で使用されるいわゆる「ビビンバ鍋」に似た形態の石皿である。器高が低く扁平な器形である。削り出して成形される。把手を2つ有すると推測される。底面にはこげ付いた痕跡が3か所みられ、火にかけて使用したことが窺える。石材は肉眼観察すると砂岩に近いが、触るとわずかなぬめりが感じられる。

この石皿片と、比較試料としての砂岩製品と滑石製品数点の蛍光X線分析を行った結果、滑石に近い石材であることが分かったが、同定するにはいたらなかった(第V章参照)。韓国の長水郡で「長水石」と呼ばれる角閃石の一種を使用している可能性も考えられる。19世紀前後のものと推測される。

495は包丁の刃部である。基部と先端部が欠損している。

496は鉄滓である。表面に小さな気泡があり、茶味を帯びた色調である。497は鉄鍋の口縁部片である。

498は、頭部が「L」字状に曲がり、断面が四角形状の角釘である。

499は青銅製の煙管の吸い口である。柄との接続部分の断面形が六角形になっており、転がりにくくなっている。

第 13 表 陶磁器觀察表 (1)

地点	掘 出 番 号	掲 出 番 号	遺 物 番 号	種 別	器 種	出土 区	遺 構 名	層	口 径 (cm)	底 径・ 高台 径 (cm)	器 高 (cm)	軸 調	胎土の色調	産地	時期	時 期 (層 番)	歴 分 類	他 の 分 類	時代	文 様	備 考	
西 谷		1	-	青磁	皿	E〜G 6	-	I	-	-	(4.8)	10V7/1 灰白	10V7/1 灰白	同安窯	12C 後葉〜 13C 初葉	II	同安窯系 血	大宰府0類 森田・横 田I類	中世	(外) 櫛点描文		
		2	-	青磁	皿	E〜G 6	-	-	-	-	-	10GY7/1 明緑灰	10V 7/1 灰白	龍泉窯	14C 前半	III	蓮弁文 瀬戸皿	瀬戸IV類	中世	(内) 双魚文		
		3	-	白磁	小碗	E〜G 4・5	-	I	-	4.4	-	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	15C 後半〜 16C 前半	V	白磁碗 C群	森田 E 群	中世		見込み蛇の目軸刺ぎ 高台内は釉薬がまばらにか かる	
		4	-	青花	端反皿	E〜G 6	-	I	(11.2)	-	-	10GY8/1 明緑灰	10V8/1 灰白	漳州窯	15C 後半〜 16C 中葉	V	染付皿 B1・B2 群	小野 B1・ B2 群	中世	(外・内) 口縁部に圈線 巡る		
		5	-	青花	碁箱底 皿	E〜G 6	-	I	-	(5.0)	-	5GY8/1 灰白	7.5Y 8/1 灰白	漳州窯	15C 後半〜 16C 初葉	V	染付皿 C群	小野 C 群 (C2)	中世	(外) 不明 (内) 文字「寿」か?		
		6	-	青磁	碗	E-6	-	I	(16.0)	-	-	-	5GY7/1 明オリブ 灰	10V7/1 灰白	龍泉窯	13C 半ば〜 14C 前半	III	青磁碗 B1 類	森田・横田 II b 類 瀬戸II	中世	(外) 鎗蓮弁文	透明度の高い釉が厚くか かる
		8	-	染付	碗	E〜G 6	-	I	(11.6)	-	-	7.5GY8/1 明緑灰	7.5Y 8/1 灰白	肥前系	18C 後半	-	-	-	近世	(外) 花文		
		9	-	染付	碗	E〜G 6	-	I	(12.0)	-	-	-	N7/ 灰白	7.5Y7/1 灰白	肥前系	明治期以降	-	-	-	近代	(外・内) 笹文	コバルト使用
		10	-	染付	皿	E〜G 6	-	I	-	(8.6)	-	-	N8/ 灰白	N8/ 灰白	肥前系	明治期以降	-	-	-	近代	(内) 意絵草花文	型紙描絵コバルト使用
		11	-	染付	鉢	E〜G 6	-	I	(18.7)	-	-	-	5Y8/1 灰白	N8/ 灰白	肥前系	明治期以降	-	-	-	近代	(外) 鞠文 (内) 意絵草花文	型紙描絵
		12	-	染付	小杯	E-6	-	I	5.6	2.2	3.2	-	N8/ 灰白	N8/ 灰白	肥前系	明治期以降	-	-	-	近代	(内) 梅花文	プリント
		13	-	染付	小杯	E〜G 6	-	I	5.1	1.8	2.8	-	N8/ 灰白	N8/ 灰白	国産	昭和	-	-	-	近代	(外) 銘「皇紀二千六百年」 (内) 見込みに浅黄「有薫」	(外) 型押し (内) 筆書き コバルト使用昭和 15 年頃 製作か
		14	-	陶器	鉢	E-6	-	I	(16.0)	-	-	-	5Y6/3 オリブ2 黄	2.5V7/3 黄	関西系	19C 代	-	-	-	近世〜 近代		外面上位に貝殻復縁による 圧痕がみられる
		15	-	薩摩焼	碗	E〜G 4・5	-	I	-	(5.4)	-	-	2.5YR4/3 にふい赤褐	5YR6/6 にふい赤褐	龍門司	18C 後半	-	-	-	近世		見込み蛇の目軸刺ぎ白化 粧+髹絵の二様手
		16	-	薩摩焼	壺	E〜G 6	-	I	-	(9.0)	-	-	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/1 灰	苗代川	18 C 後半	-	-	-	近世		
	西 台 地	34	15	19	-	青磁	碗	G-8	SB2 P3	埋	(16.0)	-	-	5GY7/1 明緑灰	5Y8/1 灰白	龍泉窯	15C 代	IV b V	青磁碗 D2 類	上田 D2 瀬戸IV	中世	
		16	22	24	青磁	碗	G-8	SB3 P3	埋	-	-	-	5GY 6/1 オリブ 灰	10V8R/ 灰白	龍泉窯	15C 前半	IV b	青磁碗 B2 類	瀬戸V類 上田 B2 類	中世	(外・内) ラマ式蓮弁文	幅広蓮弁文
		18	24	-	青花	小杯	G 8・9	SB4 P3	埋2	(6.2)	-	-	5GY8/1 灰白	7.5Y8/2 灰白	景德鎮	16C 後半	VI	-	-	中世		外面に円形の玉水様の文 様帯を巡らす
		19	35	-	青花	皿	F-8	SB5 P4	埋	-	(9.2)	-	7.5GY8/1 明緑灰	10V8R/1 灰白	景德鎮	16C 前後	V	染付皿 B群	小野 B 群	中世	(外) (内) 草花文	良品
		36	-	白磁	小碗	D-7	SK1	埋	(8.6)	-	-	-	N8/ 灰白	5Y8/1 灰白	-	15C 前半	IV b	白磁皿 B群	森田 D 群	中世		体部下位は無釉か
		37	-	青磁	碗	D-7	SK1	埋	-	(6.5)	-	-	10VR6/2 オリブ2 灰	10VR8/1 灰白 2.5YR7/6 橙	龍泉窯	15C 半ば	IV b	青磁碗 C2 類	上田 C2 類 瀬戸V類	中世	(外) ラマ式蓮弁文 (内) 草花文	雷文の碗か
		22	38	-	白磁	皿	G-8	SK2	埋	-	-	-	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	-	15C 後半〜 16C	V	白磁皿 C群	森田 C 群	中世		
		24	41	-	白磁	端反皿	E-7	SK3	埋	(9.0)	-	-	7.5Y8/1 灰白	N8/ 灰白	-	15C 後半	V	白磁皿 C群	森田 E-Ⅱ a 類	中世		
		50	88	青磁	碗	G-8	SP40	埋1	(15.8)	-	-	-	5Y5/2 灰オリブ	5Y5/1 灰	龍泉窯	14C 末〜 15C 前半	IV a	青磁碗 B2 類	大宰府II b瀬戸II b 類上田 B1 類	中世	(外) 幅広蓮弁文 (内) 波状文	被熱の痕跡が窺える
		51	-	青磁	碗	G-8	SP35	埋2	(15.0)	-	-	-	5Y6/3 オリブ3 黄	2.5Y 7/1 灰白	龍泉窯	14C 後半〜 15C 前半	IV a	青磁碗 D2 類	瀬戸IV 類 上田 D2 類	中世		外反・玉縁口縁
		52	-	青花	小杯	G-8	SP64	埋1	(12.0)	-	-	-	5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	漳州窯	16C 代	V VI	染付皿 B群	小野B 2 群	中世	(外・内) 口縁部に圈線 巡る	外反
		55	-	青磁	碗	D・E 8	溝状 遺構	埋	-	-	-	-	2.5GY7/1 明オリブ 灰	10V 7/1 灰白	龍泉窯	14C 代	III IV a	青磁碗 C 類	-	中世	(外) 波状の2本線を巡ら せる	
		56	-	薩摩焼	壺德利	D・E 8	溝状 遺構	埋	胴部 (11.6)	-	-	-	5Y5/1 灰	5Y7/3 浅黄	苗代川	17C 代	-	-	-	近世	(外) 平行沈線文 (内) 白釉がかかる	
		59	-	青花	碗	E・F 7・8	大型土 坑	Ⅶ	(15.0)	-	-	-	7.5GY8/1 明緑灰	2.5GY8/1 灰白	景德鎮	16C 前半〜 中葉	V VI	染付碗 C 群	-	中世	(外) 蓮華文	蓮子碗
		60	-	青花	皿	E・F 7・8	大型土 坑	Ⅶ	-	-	-	-	5GY8/1 灰白	N8/ 灰白	景德鎮	16C 中葉〜 後半	VI	染付皿 E 群	-	中世	(底) 銘「天下太平」 (内) 鳳凰文	
		61	-	青花	小杯小 壺	E・F 7・8	大型土 坑	Ⅶ	(7.0)	5.0	4.7	-	10V6/2 オリブ灰	7.5YR8/ 3 浅黄橙	漳州窯	16C 後半	VI	-	-	中世	(外) 草花文	
41	70 ①	30 32 130 131 134 135 137 138 139 141 151	陶器	沖繩V 類大壺	F-7	大型土 坑	Ⅰ Ⅱ Ⅲ b Ⅴ Ⅵ Ⅶ 入口	-	17.4	-	胴部 (41.5)	-	10VR2/3 黒褐	10VR6/2 灰黄褐	中国 南部	15C 前半〜 半ば	IV b	-	沖繩分類 大壺V類		(外) 鎗蓮弁文	中国栴軸陶器大壺 口縁部
	70 ②																				中国栴軸陶器大壺 胴部	
	71	-	青磁	碗	E〜G 7・8	大型土 坑	Ⅲ I	(15.4)	-	-	-	10V5/2 オリブ灰	2.5Y6/1 黄灰	龍泉窯	12C 〜 13C	II	青磁碗 A類	大宰府碗 Ⅲ類	中世		掻花文の一群 内面上位に3条の圈線巡る	
	72	48	青磁	碗	F-8	大型土 坑	II	-	(6.5)	-	-	5CY6/1 オリブ灰	10V8/1 灰白	龍泉窯	13C 中葉〜 14C 前半	III	青磁碗 B1 類	瀬戸Ⅱ類	中世	(外) 鎗蓮弁文		
	73	-	青磁	碗	E・G 7・8	大型土 坑	IV	-	-	-	-	7.5Y6/2 灰オリブ	7.5Y7/1 灰白	龍泉窯	13C 中葉〜 14C 前半	III	青磁碗 B2 類	大宰府II -a 類瀬 戸II類	中世	(外) 鎗蓮弁文		
	74	-	青磁	碗	F 7・8	大型土 坑	IV	(17.0)	-	-	-	-	10V6/2 オリブ灰	10V7/1 灰白	龍泉窯	13C 中葉〜 14C 前半	III	青磁碗 B1 類	森田横田 II a 類 瀬戸II 類	中世	(外) 鎗蓮弁文	
	75	82	青磁	碗	F-8	大型土 坑	II	(14.0)	-	-	-	7.5GY6/1 明緑灰	10V8R/1 灰白	龍泉窯	14C 後半	IV a	青磁碗 B2 類	瀬戸Ⅲ類 (古)	中世	(外) 片彫り 幅広蓮弁文		
	76	70	青磁	碗	F-8	大型土 坑	IV	(14.2)	-	-	-	5YR5/3 灰 オリブ	2.5Y7/2 灰黄	龍泉窯	15C 中頃	IV b	青磁碗 B3 類	上田 B3 類 瀬戸II類	中世	(外) 九彫り蓮弁文		
	77	82	青磁	碗	E・F 7・8	大型土 坑	II	(13.0)	-	-	-	-	10V6/2 オリブ灰	10V7R/1 灰白	龍泉窯	15C 後半〜 16C 前半	V	青磁碗 B4 類	瀬戸V類 (新)	中世	(外) 九彫り蓮弁文	
	78	46	青磁	碗	F-8	大型土 坑	II	-	-	-	-	-	7.5Y6/3 オリブ黄	7.5Y8/1 灰白	龍泉窯	15C 後半〜 16C 前半	V	青磁碗 B4 類	上田 B4 類 瀬戸VI類	中世	(外) 九彫り蓮弁文	
79	-	青磁	碗	E・F 7・8	大型土 坑	Ⅶ	(13.0)	-	-	-	-	10V6/2 オリブ灰	10V7R/2 にふい黄橙	龍泉窯	15C 後半〜 16C 前半	V	青磁碗 B4 類	瀬戸VI類	中世	(外) 九彫り蓮弁文		

第14表 陶磁器観察表(2)

地点	挿図番号	掲載番号	遺物番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	口径 (cm)	底径・ 高台径 (cm)	器高 (cm)	軸調	胎土の色調	産地	時期	時期 (歴博)	歴博 分類	他の 分類	時代	文様	備考	
西 台 地	41	80	-	青磁	碗	E～G 7・8	大型土坑	Ⅲ	(13.0)	-	-	10Y6/2 オリ-ブ灰	10YR7/1 灰白	龍泉窯	14C 末～ 15C 前半	IV a	青磁碗 D1 類	上田 B4 瀬戸Ⅳ類 (新)	中世		端反碗	
		81	-	青磁	碗	F 7・8	大型土坑	Ⅳ	(14.0)	-	-	10Y5/2 オリ-ブ灰	2.5Y5/3 黄褐	龍泉窯	15C 中葉～ 16C 代	IV b V	青磁碗 E 類	瀬戸Ⅴ類 (古)	中世			
		82	-	青磁	碗	F-8	大型土坑	Ⅱ	(13.0)	-	-	10Y7/1 灰白	10Y8/1 灰白	龍泉窯	15C 中葉～ 16C 代	IV b V	青磁碗 E 類	瀬戸Ⅴ類 (古)	中世			
		83	107	青磁	碗	F-8	大型土坑	Ⅶ	(11.0)	-	-	7.5GY6/1 明緑灰	10Y8/1 灰白	龍泉窯	16C 前半	V	青磁碗 E 類	瀬戸Ⅴ類 (新)	中世			
		84	-	青磁	碗	E・F 7・8	大型土坑	Ⅲ b	-	5.4	-	7.5GY7/1 明緑灰	7.5Y7/1 灰白	龍泉窯	14C 後半～ 15C 前半	IV a	青磁碗 D1 類	瀬戸Ⅳ類	中世	見込みに印花を施す 十字文		
		85	-	青磁	碗	E・F 7・8	大型土坑	Ⅶ	-	4.0	-	10Y6/2 オリ-ブ灰	10Y8/1 灰白	龍泉窯	15C 中葉～ 16C 前半	V	青磁碗 E1 類	瀬戸Ⅴ類 (古)	中世	見込みに印花による花文 高台内蛇の目軸刺ぎ 高台ゴマ付着		
		86	-	青磁	碗	E・F 7・8	大型土坑	Ⅵ Ⅶ	-	(8.2)	-	10Y7/2 灰白	2.5GY8/4 淡黄	龍泉窯	15C 後半～ 16C 前半	V	-	-	中世		焼成不良	
		87	120	青磁	小杯 小碗	E・F 7・8	大型土坑	Ⅵ Ⅶ	(9.6)	5.0	5.8	2.5Y6/3 にぶい黄	10YR8/4 浅黄橙	龍泉窯	15C 位	Ⅳ	-	-	中世	(外) 鎔蓮弁文	焼成不良腰部に鎔蓮弁文	
		88	-	青磁	碗	E・F 7・8	大型土坑	Ⅳ b	(10.8)	-	-	7.5GY7/1 明緑灰	10YR8/1 灰白	龍泉窯	15C 中頃	IV b	青磁碗 B3 類	瀬戸Ⅳ類 (古)	中世	(外) 丸彫り蓮弁文		
		89	-	青磁	小杯	E～G 7・8	大型土坑	Ⅱ	(11.0)	-	-	7.5GY6/1 明緑灰	10YR8/1 灰白	龍泉窯	14C 後半～ 15C 前半	IV a	-	-	中世			
		90	-	青磁	小杯	F-8	大型土坑	Ⅱ a	(9.0)	-	-	10Y6/2 オリ-ブ灰	10Y7/2 にぶい黄橙	龍泉窯	15C 後半～ 16C	V	蕃笥底皿	-	中世		蕃笥底	
		91	27	青磁	折縁皿	F-8	大型土坑	I	(10.8)	-	-	10Y6/2 オリ-ブ灰	7.5Y7/1 灰白	龍泉窯	14C 前半頃	Ⅲ	折縁皿	-	中世			
		92	-	青磁	桜花皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅵ	(12.0)	-	-	10Y6/2 オリ-ブ灰	10YR8/1 灰白	龍泉窯	15C 代	IV b V	桜花皿	瀬戸Ⅴ類	中世			
		93	-	青磁	桜花皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅳ	-	-	-	10Y6/2 オリ-ブ灰	10YR7/2 にぶい黄橙	龍泉窯	15C 後半～ 16C 初め	V	桜花皿	瀬戸Ⅴ類	中世	(内) 櫛描き波状文		
		94	-	青磁	桜花皿	E～G 7・8	大型土坑	Ⅳ	-	-	-	10Y6/2 オリ-ブ灰	10YR7/2 にぶい黄橙	龍泉窯	15C 後半～ 16C 初め	V	桜花皿	瀬戸Ⅴ類	中世		腰折皿	
		95	57	青磁	皿	F-7	大型土坑	Ⅳ	-	(7.6)	-	2.5Y7/2 灰黄	10YR5/2 灰黄褐	龍泉窯	16C 頃	V Ⅵ	-	-	中世			
	42	96	28	白磁	口壳碗	F-8	大型土坑	I	(15.0)	-	-	10YR7/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	13C 後半～ 14C 初頃	Ⅲ	白磁碗 IX類	森田口壳 碗IX類	中世			
		97	57	白磁	端反皿	E～G 7・8	大型土坑	Ⅲ	(11.0)	-	-	7.5Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	-	13C 後半～ 14C 初め	Ⅲ	白磁皿 C 群	森田皿E群	中世			
		98	-	白磁	端反皿	E・F 7・8	大型土坑	一括	(11.2)	(6.0)	2.2	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	15C 後半～ 16C 前半	V	白磁皿 C 群	森田皿E群	中世		高台砂粒が付く	
		99	-	白磁	端反皿	F・G 7・8	大型土坑	Ⅱ a	(10.8)	(5.6)	2.1	10Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	-	15C 後半～ 16C 前半	V	白磁皿 C 群	森田皿E群	中世			
		100	122 81	白磁	端反皿	F 7・8	大型土坑	Ⅶ Ⅲ	(11.4)	(6.0)	2.9	2.5GY8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	15C 後半～ 17C 前半	V	白磁皿 C 群	森田皿 E 群	中世		高台砂粒が付く	
		101	-	白磁	口壳皿 底部	E・F 7・8	大型土坑	V	-	(5.0)	-	10YR7/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	13C 後半～ 14C 初頃	Ⅲ	白磁皿 IX類	森田皿 IX類	中世		底面は部分的に軸刺ぎ やや上げ底	
		102	-	白磁	端反皿 底部	E～G 7・8	大型土坑	I	-	(6.0)	-	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 淡黄	-	15C 後半～ 16C 前半	V	白磁皿 C 群	森田皿E群	中世			
		103	-	白磁	皿?	D・E 11	大型土坑	一括	-	(5.0)	-	-	7.5GY7/1 明緑灰	10Y8/1 灰白	漳州窯	16C 頃	-	-	-	中世		高台内に粉痕が付く
		104	-	白磁	碗	F-8	大型土坑	Ⅱ a	-	-	-	10Y8/4 浅黄橙	10Y8/4 浅黄橙	-	12C 中頃～ 後半	I Ⅱ	白磁碗 Ⅶ類?	大宰府 Ⅶ類?	中世			
		105	-	白磁	皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅵ	(13.0)	-	-	2.5GY6/1 オリ-ブ灰	N6/1 灰	景德鎮	16C 代	Ⅵ	-	-	中世		106と同一個体	
		106	-	白磁	皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅶ	-	7.2	-	7.5YR7/1 明褐灰	10YR7/2 にぶい黄橙	景德鎮	16C 代	Ⅵ	-	-	中世		105と同一個体	
		107	-	青花	碗	F-8	大型土坑	Ⅱ	-	-	-	5GY7/1 明オリ-ブ灰	2.5GY8/1 灰白	漳州窯	15C 後半～ 16C 前半	V Ⅵ	染付碗 C 群	小野 C 群	中世	(外) 波濤文	蓮子碗の口縁部	
		108	-	青花	碗	E・F 7・8	大型土坑	Ⅶ	-	(6.0)	-	5B7/1 明青灰	7.5GY8/1 明緑灰	景德鎮	15C 後半～ 16C 前半	V Ⅵ	染付碗 C 群	小野 C 群	中世		蓮子碗	
		109	-	青花	碗	E・F 7・8	大型土坑	Ⅶ	-	-	-	10GY8/1 明緑灰	2.5GY8/1 灰白	景德鎮	15C 後半～ 16C 前半	V Ⅵ	染付碗 C 群	小野 C 群	中世	(外) 草花文	蓮子碗	
		110	-	青花	碗	E・F・G 7・8・10	大型土坑 通路状 遺構	Ⅶ	12.0	-	-	-	2.5GY7/1 明オリ-ブ灰	N8/1 灰	漳州窯	16C 中葉～ 後半	Ⅵ	染付碗 E群	小野E群	中世	(外) 草花文	万頭芯
	111	-	青花	碗	E・F 7・8	大型土坑	Ⅱ	-	(5.0)	-	10Y7/1 灰白	10Y8/4 浅 黄橙	漳州窯	16C 中葉～ 後半	Ⅵ	染付碗 E群	小野E群	中世		万頭心		
	112	-	青花	碗	E・F 7・8	大型土坑	Ⅶ	-	(6.0)	-	2.5GY8/1 灰白	5Y8/1 灰白	漳州窯	16C 中葉～ 後半	Ⅵ	染付碗 E群	小野E群	中世	(内) 草花文	万頭芯 高台に切高台の痕が付く		
	113	-	青花	小杯	E・F 7・8	大型土坑	I	(8.0)	-	-	5GY8/1 灰白	N8/ 灰白	景德鎮	16C 後半	Ⅵ	-	-	中世	(内) 四方櫛文	上質		
	114	-	青花	皿	E・F 7・8	大型土坑	I	(12.0)	-	-	5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	景德鎮	15C 後半～ 16C 初頃	V	染付皿 B1 群	小野皿 B1 群	中世	(外) 唐草文	被熱の痕跡が窺える		
	115	-	青花	皿	F-8	大型土坑	Ⅱ	(10.0)	-	-	10GY7/1 明緑灰	2.5GY8/1 灰白	景德鎮	15C 後半～ 16C 中葉	V Ⅵ	染付皿 B 群	小野皿 B 群	中世	(外) 草花文			
	116	-	青花	皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅱ	-	(7.8)	-	N7/ 灰白	10Y9/1 灰白	景德鎮	15C 後半～ 16C 初頃	V	染付皿 B1 群	小野皿 B1 群	中世	(内) 十字花文	高台内面天井部中央に円 形の工具痕がみられる		
	117	-	青花	皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅶ	-	-	-	N8/ 灰白	2.5Y8/2 灰白	景德鎮	15C 末～ 16C 前半	V	染付皿 B1 群	小野皿 B1 群	中世	(内) 玉取獅子			
	118	-	青花	皿	F 7・8	大型土坑	Ⅳ	(13.6)	-	-	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/4 浅黄	漳州窯	15C 後半～ 16C 初頃	V	染付皿 C 群	小野皿 C 群	中世	(外) 波のような文様を巡ら せる	蕃笥底となるか 119と同一個体の可能性		
	119	-	青花	蕃笥底 皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅳ	-	(4.6)	-	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/3 淡黄	漳州窯	16C 後半	Ⅵ	染付皿 C 群	小野皿 C 群	中世	見込みに文字?	高台内に軸がまばらにかかる 118と同一個体の可能性		
	120	-	青花	壺 水注	E・F 7・8	大型土坑	Ⅶ	-	胴部 (10.5)	-	7.5GY8/1 明緑灰	2.5GY8/1 灰白	景德鎮	16C 代	V Ⅵ	-	-	中世	(外) ラマ式蓮弁文	明代に該当		
44	137	49	輸入 陶器	天目碗	F-8	大型土坑	Ⅱ	(11.4)	-	-	7.5YR1.7/1 黒	2.5Y8/3 淡黄	中国	15C 半ば～ 16C 代	V Ⅵ	-	-	中世		胎土精良		
	138	-	輸入 陶器	天目碗	F-8	大型土坑	I	-	(3.0)	-	2.5Y2/1 黒	2.5Y6/2 灰黄	中国	15C 半ば～ 16C 代	V Ⅵ	-	-	中世		胎土 137 より若干粒子粗い		
	139	152 106	輸入 陶器	鉢	F-8	大型土坑	Ⅶ	19.0	-	-	(外) 10YR6/6 明黄褐 (内) 2.5YR4/2 灰赤	10YR7/2 にぶい黄橙	中国 南部	15C 代	IV b V	-	-	中世		口縁部を折り曲げて成形黒 色粒・白色粒を含む 混和剤の粒子が大きい硬 質		
	140	-	輸入 陶器	壺	E・F 7・8	大型土坑	Ⅳ b	-	11.4	-	7.5YR4/3 褐	10YR6/3 にぶい黄橙	中国 南部	15C 代	IV b V	-	沖縄: 中国産 褐釉素壺 Ⅲ～Ⅳ類	中世		底面無軸		
	141	-	輸入 陶器	壺	E・F 7・8	大型土坑	Ⅶ	-	胴部 (26.0)	-	10YR4/4 褐	10YR7/3 にぶい黄橙	中国 南部	15C 代	IV b V	-	沖縄: 中国産 褐釉素壺 Ⅲ～Ⅳ類	中世		胴部下位無軸 内面ヘケス内面薄く褐釉が かかる		

第 15 表 陶磁器観察表 (3)

地点	挿図番号	掲載番号	遺物番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	口径 (cm)	底径・ 高台径 (cm)	器高 (cm)	軸調	胎土の色調	産地	時期	時期 (歴博)	歴博 分類	他の 分類	時代	文様	備考
西 台 地	52	189	-	染付	碗	F・G 7・8	大型 土坑	I a	(9.8)	-	-	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	肥前系	1820～ 1860代	-	-	-	近世	(外)格子文	被熱の痕跡が窺える
		190	-	染付	碗	E～G 9	大型 土坑	一括	8.2	3.2	4.7	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	肥前系	幕末頃	-	-	-	近世	(外)草花文コバルト使用	ほぼ完形 コバルト使用被 地面軸刺ぎ
		191	-	染付	碗	F 7・8	大型 土坑	II	(10.4)	-	-	2.5GY7/1 明オリブ灰	2.5GY7/ 灰白	肥前波 佐見系	18C 後半	-	-	-	近世	紐のような文様	
		192	-	染付	皿	E・F 7・8	大型 土坑	VII	-	(5.4)	-	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	肥前系	18C 前半	-	-	-	近世	見込み蛇の目軸刺ぎ	
		193	-	染付	皿	E～G 7・8	大型 土坑	III	-	(12.0)	-	5BG7/1 明青灰	5Y8/1 灰白	肥前	18C 後半	-	-	-	近世	(見込み)草花文	高台接地面軸刺ぎ 8
		194	-	染付	皿	E・F 7・8	大型 土坑	I	-	(8.8)	-	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/2 灰白	肥前	18C 後半	-	-	-	近世	(見込み)草花文	大型蛇の目高台 高台内無軸泥景を塗る
		195	42	磁器 (青磁)	皿	F-7	大型 土坑	II	-	(5.0)	-	7.5GY8/1 明緑灰	10YR8/1 灰白	肥前波 佐見系	1630～ 1640代	-	-	-	近世	(見込み)草花文	幕藩期高台内ゴマ付着
		196	-	陶器	小碗	F-8	大型 土坑	II	(6.0)	-	-	2.5GY7/1 明オリブ灰	N8/ 灰白	肥前	18C 後半	-	-	-	近世	(外)竹葉文	
		197	-	白磁	小碗	F 7・8	大型 土坑	I	(5.2)	(2.0)	2.2	N8/1 灰白	N8/ 灰白	肥前系	18C 代か	-	-	-	近世		高台内面軸刺ぎ
		198	-	磁器 (白磁)	小碗	F-8	大型 土坑	-	-	2.8	-	7.5GY8/1 明緑灰	2.5Y8/2 灰白	肥前系	18C 代か	-	-	-	近世		接地面軸刺ぎゴマ付着
		199	-	染付	蓋	E～G 7・8	大型 土坑	I II	(9.0)	つま 4.0	2.5	7.5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	肥前系	1820～ 1860代	-	-	-	近世		端反碗蓋 通路状遺構 279 と同規格
		200	-	白磁	蓋?	E・F 7・8	大型 土坑	I	-	-	-	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	肥前系	18C 代か	-	-	-	近世	花卉様の文様を型押す	
		201	-	染付	碗	E・F 7・8	大型 土坑	I	(11.0)	-	-	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)竹葉文	型紙摺絵 コバルト使用
		202	-	染付	碗	F 7・8	大型 土坑	I	(11.0)	-	-	5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)梅花文	手書き コバルト使用
		203	-	染付	碗	F 7・8	大型 土坑	I	(11.0)	-	-	10Y8/1 灰白	10YR8/1 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)菊花文(内)輪宝	型紙摺絵 コバルト使用
		204	-	染付	碗	F 7・8	大型 土坑	I	-	(4.1)	-	5GY8/1 灰白	N8/ 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)不明	文様プリント
		205	-	染付	碗	F 7・8	大型 土坑	I	(7.8)	3.5	4.8	5GY8/1 灰白	N8/ 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)区画桜花文	口縁端部 口紅型紙摺絵コバルト使用
		206	-	染付	皿	E～G 7・8	大型 土坑	I	-	-	-	2.5GY8/1 灰白	N8/ 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)波文	桜花皿風 コバルト使用
		207	-	染付	皿	E～G 7・8	大型 土坑	I	-	(8.8)	-	2.5GY8/1 灰白	5Y8/2 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(見込み)葱杵竹文	銅版転写 コバルト使用
		208	-	染付	皿	E・F 7・8	大型 土坑	I	11.0	6.2	2.1	2.5GY8/1 灰白	5Y8/1 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(見込み)絵巻物柄	文様プリント 接地面軸刺ぎ
		209	-	磁器 (白磁)	小杯	F 7・8	大型 土坑	I	(4.2)	-	-	N8/ 灰白	N8/ 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代		
		210	-	磁器	小杯	E～G 7・8	大型 土坑	I	(5.2)	-	-	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	文様劣化 緑色顔料確認できる	プリント
		211	-	染付	筒形碗	E～G 7・8	大型 土坑	I	(5.6)	-	-	2.5GY8/1 灰白	5Y8/2 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)葱絵草花文 (内)輪宝	銅版転写 コバルト使用
		212	-	陶器	碗	E～G 7・8	大型 土坑	I	-	-	-	5Y5/4 オリブ	10YR7/3 黄緑	肥前	18C 後半～ 19C 前半	-	-	-	近世		抱軸+白軸の横線状
		213	-	陶器	灰釉碗	E～G 7・8	大型 土坑	II	-	4.6	-	10GY6/4 にぶい黄緑	10GY6/2 灰黄褐	肥前	1630代	-	-	-	近世		胴部下位と高台天井部 無軸 量付にハケメ
		214	-	陶器	碗小鉢	F 7・8	大型 土坑	II	(13.0)	-	-	5Y5/3 暗オリブ	2.5Y6/4 にぶい黄	不明	-	-	-	-	近世		
		215	-	陶器	鉢	E～G 7～9	大型 土坑	II 入口	(29.0)	-	-	N1.5/ 黒	10YR8/4 浅黄緑	肥前系	-	-	-	-	近世		外面脱肌 口唇・内面に 白釉がのびる
		216	-	陶器	蓋	E・F 7・8	大型 土坑	II	(12.4)	-	-	5Y5/2 灰オリブ	2.5Y6/1 黄灰	関西系 か	19C～	-	-	-	近世		内面無軸
		217	-	薩摩焼	碗	F～G 7・8	大型 土坑	II	(12.2)	-	-	5YR5/3 暗赤褐	5YR6/4 にぶい橙	龍門司	18C 後半	-	-	-	近世		
		218	-	薩摩焼	壺	E～G 9	大型 土坑	-	(10.2)	-	-	5Y4/2 灰オリブ	5Y4/2 灰オリブ	苗代川	18C 後半～ 19C	-	-	-	近世		口唇軸刺ぎ
		219	-	薩摩焼	壺	E～G 7・8	大型 土坑	II	(11.6)	-	-	10YR3/2 黒褐	10YR3/1 黒褐	苗代川	17C 代	-	-	-	近世		被熱の痕跡が窺える口唇 軸刺ぎ
		220	-	薩摩焼	壺	E・F 7・8	大型 土坑	VII	-	-	-	5Y3/1 オリブ黒	N8/ 灰	苗代川	18C 後半～ 19C	-	-	-	近世		
		221	-	薩摩焼	描鉢	E・F 7・8	大型 土坑	IV	-	-	-	2.5YR3/2 暗赤褐	5YR2/2 黒褐	苗代川	18C 後半～ 19C	-	-	-	近世		口唇軸刺ぎ
		222	-	薩摩焼	描鉢	E・F 7・8	大型 土坑	I	-	(14.6)	-	10YR4/3 にぶい黄褐	2.5YR5/6 明赤褐	苗代川	18C 後半～ 19C	-	-	-	近世		内面罫目が密に施される 底面無軸
		223	-	薩摩焼	描鉢	F-8	大型 土坑	-	-	-	-	2.5Y7/3 浅黄	2.5YR5/6 明赤褐	苗代川	18C 後半～ 19C	-	-	-	近世		
		224	-	薩摩焼	土瓶	E・F 7・8	大型 土坑	VII	-	胴部 (12.8)	-	5YR3/3 暗赤褐	5YR3/1 黒褐	苗代川	18C 後半～ 19C	-	-	-	近世		煤付着
		225	-	薩摩焼	土瓶	E～G 7・8	大型 土坑	I	-	胴部 (14.8)	-	7.5YR4/3 褐	7.5YR3/2 黒褐	苗代川	18C 後半～ 19C	-	-	-	近世		耳の貼り付け痕あり
		226	-	薩摩焼	土瓶	F～G 7・8	大型 土坑	II	-	-	-	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/2 灰黄褐	苗代川	18C 後半～ 19C	-	-	-	近世		
		227	-	白薩摩	水注	E～G 7・8	大型 土坑	I II	-	-	-	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	苗代川	19C 代	-	-	-	近世		
		228	-	白薩摩	蓋	F～G 7・8	大型 土坑	I	(5.6)	-	-	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	苗代川	19C 代	-	-	-	近世		傘の返し部に軸刺ぎ
		229	-	白薩摩	水注	D～G 7・8	大型 土坑	I	(6.4)	-	-	5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 灰白	苗代川	19C 代	-	-	-	近世		
		230	-	陶器	甕?	F 7・8	大型 土坑	I	-	-	-	7.5YR2/2 黒褐	10YR5/3 にぶい黄褐	不明	近世か	-	-	-	近世		
57	57	262	-	青磁	碗	F-9	通路状 遺構	堀切	(18.8)	-	-	7.5GY6/1 明緑灰	10YR8/1 灰白	龍泉窯	14C 後半～ 15C 前半	IV a	青磁碗 D2 類	瀬戸IV 類	中世	(内)印花による草花文	見込みに軸刺ぎを行う座 敷タイプとなると推測される 玉縁状口縁
		263	-	青磁	腰折皿	E～G 10	通路状 遺構	堀切	(12.1)	-	-	10YR4/3 オリブ灰	10YR4/3 にぶい黄緑	龍泉窯	15C	IV b V	稜花皿	-	中世		
		264	-	青磁	小杯	E～G 10	通路状 遺構	堀切	(10.0)	-	-	7.5GY6/1 明緑灰	10YR8/1 灰白	龍泉窯	15C	IV b V	-	-	中世	(内)幅広の線による蓮弁 文	
		265	-	青花	端反皿	F-9	通路状 遺構	堀切	(15.6)	-	-	10CY8/1 明 緑灰	2.5GY8/1 灰 白	景徳鎮	16C	V VI	染付皿 B2 群	小野 B2 群	中世	(内)圏線巡る	
		266	-	青花	碗	E～G 10	通路状 遺構	堀切	-	5.0	-	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	漳州窯	16C 末～ 17C 前半	VI	染付碗 E 群	小野 E 群	中世	(見込み)花文	万頭心型 高台内側に薬灰が付着
		273	-	陶器?	蓋	E～G 10	通路状 遺構	堀切	(9.0)	-	-	10YR4/2 灰黄褐	10YR7/6 明黄褐	不明	中世か	-	-	-	中世		(外・内)工具ナデ、ナデ 傘部上面に施軸 マダツ著しい

第 16 表 陶磁器観察表（４）

地点	挿図 番号	掲載 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	口径 (cm)	底径・ 高台径 (cm)	器高 (cm)	釉調	胎土の色調	産地	時期	時期 (歴博)	歴博 分類	他の 分類	時代	文様	備考		
57			274	-	染付	碗	E・F 7・8	通路状 遺構	入口	-	-	-	7.5GY8/1 明緑灰	5Y8/ 灰白	肥前	1610～ 1630代	-	-	-	近世	(外)不明		
			275	-	染付	碗	E-10	通路状 遺構	堀切	-	-	-	2.5GY7/1 明オリブ灰	N8/ 灰白	肥前系	18C後半 以降	-	-	-	近世	(外)不明	見込み蛇の目軸刺ぎ 泥痕塗布	
			276	-	薩摩焼	碗	E・F 7・8	通路状 遺構	入口	-	-	-	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/6 橙	龍門司	18C後半～ 19C	-	-	-	近世		見込み蛇の目軸刺ぎ	
			277	-	磁器 (白磁)	皿	F-8	通路状 遺構	入口	(11.4)	-	-	2.5GY8/1 灰白	5Y8/1	肥前	江戸期	-	-	-	近世	外面上位に平行沈線による 波状文		
			278	-	染付	火入れ	E・F 7・8	通路状 遺構	入口 埋I	(15.0)	-	-	2.5GY7/1 明オリブ灰	N7/ 灰白	肥前	18C後半～ 幕末	-	-	-	近世	(外)不明		
			279	-	染付	蓋	E～G 10	通路状 遺構	堀切	-	3.5	-	7.5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	肥前系	1820～ 1860代	-	-	-	近世		燗反皿蓋 大型土坑出土 199 と同規格	
			280	-	染付	碗	E・F 7・8	通路状 遺構	入口	(13.0)	(7.4)	5.2	2.5GY8/1 灰白	N8/ 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(外・内) 草花文	文様手書き コバルト使用 内面に磁道具痕付着 高台内蛇の目軸刺ぎ	
			281	-	染付	碗	E・F 7・8	通路状 遺構	入口 埋II	(12.6)	-	-	7.5Y8/1 灰白	10YR8/3 浅黄橙	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)魚文(鯛)	文様型紙摺絵 見込み蛇の目軸刺ぎ	
			282	-	染付	碗	E・F 7・8	通路状 遺構	入口 埋I	(11.0)	-	-	10YR8/1 灰白	5YR8/1 灰白	肥前系	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)団鶴菊花文 (内)輪宝	文様型紙摺絵 見込み蛇の目軸刺ぎ	
			283	-	磁器 (白磁)	碗	F-9	通路状 遺構	堀切	(16.0)	-	-	7.5GY8/1 明緑灰	N8/ 灰白	-	明治期 以降	-	-	-	近代			
			284	-	磁器 (白磁)	皿	E・F 7・8	通路状 遺構	入口	(11.0)	(9.0)	3.0	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)型押しによる蓮弁文		
			285	-	染付	皿	E・F 7・8	通路状 遺構	入口 埋I	(10.2)	-	-	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	明治期 以降	-	-	-	近代	(外)窓輪草花文 (内)輪宝	銅板転写	
	58			286	-	陶器	碗	E～G 10	通路状 遺構	堀切	(10.0)	-	-	10G6/1 緑灰	10GY8/1 灰白	肥前 内野山	17C末～ 18C前半	-	-	-	近世		
				287	-	陶器	碗	E～G 10	通路状 遺構	堀切	-	(4.0)	-	2.5Y7/4 浅黄	10YR8/3 浅黄橙	肥前	17C末～ 18C前半	-	-	-	近世		形から呉器手 輪から玉子手
			288	-	薩摩焼	瓶	E・F 7・8	通路状 遺構	入口 埋I	-	(6.8)	-	10GY8/1 灰白	10YR4/3 赤褐	龍門司	18C後半	-	-	-	近世			
			289	-	陶器	播鉢	E～G 10	通路状 遺構	堀切	(33.0)	-	-	7.5YR3/3 暗褐	10YR4/1 褐灰	肥前	1630～ 1650代	-	-	-	近世		口縁部に鉄軸かゝる	
			290	-	薩摩焼	播鉢	F-9	通路状 遺構	堀切	(26.2)	-	-	2.5Y7/2 灰黄	10YR5/6 赤	苗代川	19C代	-	-	-	近世～ 近代		櫛目6本	
			291	-	薩摩焼	播鉢 注口部	E-8	通路状 遺構	入口	-	-	-	2.5YR4/3 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	苗代川	18C後半	-	-	-	近世		片口の播鉢	
			292	-	薩摩焼	土瓶	E～G 9	通路状 遺構	堀切	(8.0)	-	-	10YR3/3 暗褐	5YR6/4 明赤褐	苗代川	18C後半	-	-	-	近世		内面上位と口唇部釉刺ぎ	
			293	-	陶器	土瓶耳	E・F 7・8	通路状 遺構	入口	-	-	-	7.5YR3/4 黒褐	7.5YR7/6 橙	苗代川	19C後半	-	-	-	近世		型作り	
			294	-	陶器	万古 (急須)	E～G 10	通路状 遺構	堀切	6.0	-	-	5YR3/2 暗赤褐	5YR4/1 褐灰	関西系	19世紀 以降	-	-	-	近世～ 近代	(外)鉄軸による文様	器壁薄い 胎土精良	
59				304	-	青磁	碗	F・G 7・8	-	I	-	-	-	10Y7/1 灰白	10Y9/1 灰白	龍泉窯	12C後半～ 13C初頭	II	青磁碗 A類4	大宰府 I～I類 瀬戸I類	中世	(外)平行沈線文	
			305	I	青磁	碗	G-9	-	I	(14.0)	-	-	10Y6/2 オリブ灰	7.5Y6/1 灰	龍泉窯	14C末～ 15C半ば	IV	青磁碗 B2類	上田 B1",B2類 瀬戸III～ IV類	中世	(外)片彫り 幅広蓮弁文	内湾	
			306	-	青磁	碗	D・E 7・8	-	I	(14.0)	-	-	7.5GY7/1 明緑灰	10Y 7/1 灰白	龍泉窯	15C前半～ 半ば	IV b	青磁碗 C2類	瀬戸V類 (古) 上田 C2類	中世	(外)雷文	直口	
			307	-	青磁	碗	F・G 7・8	-	-	(11.0)	-	-	2.5G7/1 オリブ灰	2.5Y8/2 灰白	龍泉窯	15C後半～ 16C前半	V	青磁碗 B4類	上田B4類 瀬戸V類	中世	(外)剣先蓮弁文	直口	
			308	-	青磁	小碗	D・E 7・8	-	I	(10.6)	-	-	2.5GY7/1 明オリブ灰	N8/ 灰白	龍泉窯	16C代	V VI	-	-	中世		直口 胎土の色調により灰 色がかる	
			309	-	青磁	碗	G-9	-	I	(14.0)	-	-	5GY7/1 明オリブ灰	7.5Y 灰白	龍泉窯	15C半ば～ 16C前半	V	青磁碗 E1類	上田E類	中世	口縁端部に貼り付け様の突 起一か所あり	内湾	
			310	-	青磁	碗	D・E 7・8	-	I	-	(8.0)	-	10Y6/2 オリブ灰	10Y7/1 灰白	龍泉窯	15C半ば～ 後半	V	青磁碗 D2類	上田D2類 瀬戸IV類	中世			
			311	-	青磁	皿	F・G 7・8	-	I	-	-	-	7.5Y8/1 灰白	7.5Y7/2 灰白	同安窯	12C後葉～ 13C初頭	II	同安窯系 碗B類	大宰府 V類	中世	(内)櫛書文		
			312	-	青磁	盤	F・G 7・8	-	I	(21.5)	-	-	2.5GY5/1 オリブ灰	10YR8/2 オリブ灰	龍泉窯	16C以降	V VI	-	遠藤II C 類續V類 末	中世		縁折れ	
			313	-	青磁	皿	F・G 7・8	-	I	-	(5.6)	-	10Y5/2 オリブ灰	10Y6/4 にぶい赤橙	龍泉窯	15C後半～ 16C中頃	V	稜花皿	瀬戸VI類	中世		高台内軸刺ぎ	
			314	-	青磁	皿	D・E 7・8	-	I	-	(6.0)	-	7.5Y5/3 灰オリブ	7.5Y 灰白	龍泉窯	15C半ば～ 後半	V	稜花皿	瀬戸VI類	中世		高台中央部に凹みあり 畳付のみ軸刺ぎ	
			315	-	白磁	碗	E・G 7・8	-	I	-	-	-	7.5GY3/1 明緑灰	7.5Y8/1 灰白		12C中～ 後半	II	白磁碗 VIII類	大宰府 白磁碗 V～4d類	中世		燗反	
			316	-	白磁	碗	D・E 7・8	-	I	-	-	-	7.5Y8/1 灰白	10Y7/1 灰白		12C半ば～ 後半	II	白磁碗 VIII類	大宰府 V～4類	中世		燗反	
			317	-	白磁	碗	D・E 7・8	-	I	-	-	-	7.5Y7/3 浅黄	7.5Y8/1 灰白		11C後半～ 12C前半	I II	白磁碗 IV類	大宰府 IV類	中世		玉縁	

第 17 表 陶磁器観察表（5）

地点	挿図 番号	掲載 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	口径 (cm)	底径・ 高台径 (cm)	器高 (cm)	釉調	胎土の色調	産地	時期	時期 (歴博)	歴博 分類	他の 分類	時代	文様	備考
59	328	-	青花	小壺	F・G 7・8	-	I	胴部 (9.2)	-	-	-	5Y7/1 明オリブ灰	5Y8/1 灰白	景徳鎮	16C	V VI	-	-	中世	(外)草花文	
	329	-	磁器	赤絵皿	D・E 7・8	-	I	-	-	(5.0)	-	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	景徳鎮 か	16C 末～ 17C 初頭	VI	-	-	中世	(外・内)草花文	
	330	-	陶器	天目碗	F・G 7・8	-	I	(8.0)	-	-	-	10YR2/1 黒	10YR5/1 褐灰	中国	15 世紀	V VI	-	-	中世		精緻なつくり
63	357	-	染付	皿	E・F 7・8	大型 土坑	階段	-	(14.0)	-	-	5BG7/1 明青灰	5Y8/1 灰白	肥前 志田焼	1780～ 1820 代	-	-	-	近世	(見込み)竹林文	床面に針支えの痕がある
65	358	-	染付	碗	F・G 7・8	-	I	(11.0)	-	-	-	10Y8/1 灰白	10Y7/1 灰白	肥前	18C 後半	-	-	-	近世	(外)一直綱目文	呉須の色調が暗い
	359	-	染付	碗	E～G 7・8	-	I	5.2	-	-	-	7.5GY 明緑灰	5Y8/1 灰白	肥前 波佐見	18 世紀代	-	-	-	近世	(外)草花文	見込みを軸剥ぎ 砂が輪状に付く
	360	-	染付	碗	E・F 7・8	-	I	(11.0)	-	-	-	10Y8/1 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	肥前系	19 世紀前半 ～中葉	-	-	-	近世	(外)菊花文? (内)二重の圈線	
	361	-	染付	碗	E・F 7・8	-	I	(12.0)	-	-	-	10Y8/1 灰白	10Y7/2 灰白	肥前系	18C 後半	-	-	-	近世	(外)笹文 (内)二重の圈線	産地は異外と考えられる
	362	-	染付	皿	F-8	-	I	(11.0)	(6.0)	(2.5)	-	7.5GY8/1 明緑灰	7.5Y8/1 灰白	肥前系	18C 後半	-	-	-	近世	(外)草花文	見込み蛇の目軸剥ぎ
	363	-	染付	皿	F・G 7・8	-	I	(13.0)	-	-	-	7.5GY8/1 明緑灰	7.5Y8/1 灰白	肥前系	18C 後半	-	-	-	近世	(内)格子目文	見込み蛇の目軸剥ぎ
	364	-	染付	皿	F・G 7・8	-	I	(10.4)	(7.0)	2.2	-	7.5GY8/1 明緑灰	5Y8/1 灰白	肥前系	19 世紀 以降	-	-	-	近代	(内)漢詩 四言絶句様	文様型紙摺絵による
	365	-	染付	碗か皿	F・G 7・8	-	I	-	-	-	-	7.5GY8/1 明緑灰	7.5Y 8/2 灰白	飛前焼 (兵庫)	19 世紀 以降	-	-	-	近代	(外)鮮やかな緑釉 (内)透明釉薬	
	366	-	青磁	盤	G-9	SP72 埋土 上位	埋2	-	-	-	-	5G5/1 緑灰	10YR6/2 灰黄褐	国内産	17C 以降	-	-	-	近世		国内産青磁 内面腰部に褐色釉
	367	-	白磁	徳利	F・G 9	-	I	(4.0)	-	-	-	7.5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	肥前系	18C 後半	-	-	-	近世		
	368	-	陶器	皿	E～G 9	-	I	-	-	-	-	透明釉	10YR8/4 褐灰	関西系	18C 後半	-	-	-	近世	(見込み)草花文	京風陶器皿 文様上絵付
	369	-	陶器	鉢?	F・G 7・8	-	I	-	-	-	-	あざやかな 青、緑	10Y7/1 灰白	肥前 内野山	18C 後半	-	-	-	近世	緑と青の釉による縞状	内面は上位にのみ施釉
	370	-	薩摩焼	碗	F・G 7・8	-	I	-	(4.0)	-	-	5Y1.7/1 黒	10YR6/4 にぶい黄褐	龍門司	18C 後半	-	-	-	近世		高台内軸剥ぎ
	371	-	薩摩焼	甕	F・G 7・8	-	I	頸部 (21.6)	-	-	-	10YR5/3 にぶい黄褐	2.5YR4/2 灰赤	苗代川	18C 代	-	-	-	近世		
	372	-	薩摩焼 (白磁率)	坏	E 7・8	-	I	(10.4)	-	-	-	7.5YR 8/6 浅黄褐	10YR 8/3 浅黄褐	苗代川	18C 後半	-	-	-	近世		外面にクロコ目が明瞭に残る 外面腰部以下無釉
	373	-	薩摩焼	鉢	D・E 7・8	-	I	-	-	-	-	2.5YR3/2 暗赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	龍門司	18C 後半	-	-	-	近世		口唇軸剥ぎ
	374	-	薩摩焼	描鉢	D～G 7・8	-	I	(27.0)	-	-	-	10YR3/3 暗褐	5YR4/4 にぶい赤褐	苗代川	18C 後半	-	-	-	近世		内外面ハケメ
	375	-	陶器	甕	G-7	-	I	-	(16.0)	-	-	7.5GY3/2 黒緑	10YR6/4 にぶい黄褐	龍門司	18C 後半	-	-	-	近世		底部片
	376	-	薩摩焼	甕	F・G 7・8	-	I	-	(13.0)	-	-	5Y6/2 灰オリブ	2.5YR5/4 にぶい赤褐	苗代川	18C 後半	-	-	-	近世		底部片
	377	-	薩摩焼	甕	F・G 7・8	-	I	-	-	-	-	N1.5/ 黒	10R4/2 黒	苗代川	18C 後半	-	-	-	近世		底部片 内面に胎土目が付く
	378	-	薩摩焼	土瓶蓋	D・E 7・8	-	I	(6.0)	-	-	-	5YR3/4 暗赤褐	5YR6/4 にぶい橙	苗代川	18C	-	-	-	近世		返し部、内面無釉
	379	-	薩摩焼	土瓶 注口部	F・G 7・8	-	I	孔 0.8	-	-	-	7.5YR1.7/1 黒	7.5YR5/3 にぶい褐	苗代川	18C	-	-	-	近世		
	380	-	薩摩焼	土瓶耳	F・G 7・8	-	I	-	-	-	-	5Y3/1 オリブ黒	7.5YR6/3 にぶい褐	苗代川	18C	-	-	-	近世		型押し成型
	381	-	薩摩焼	土瓶耳	E・F 7・8	-	I	-	-	-	-	10YR4/3 にぶい黄褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	苗代川	18C	-	-	-	近世		型押し成型
71	399	-	青花	基筒 底皿	F 13・14	-	I	(10.2)	3.5	2.9	-	5G7/1 明緑灰	5Y8/1 灰白	漳州窯	15C 後半～ 16C 初頭	V	染付皿 C 群	小野 C1 類	中世	(外・見込み)草花文	接地面軸剥ぎ 高台内まばらにかかる
75	407	-	薩摩焼	甕	D～F 11	-	I	(29.0)	-	-	-	N2/1 黒	2.5YR3/2 暗赤褐	苗代川	18C	-	-	-	近世		外面に被熱の痕跡 内面絞肌軸
東 台 地	408	-	青磁	碗	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	-	5Y 5/2 灰オリブ	5Y 6/3 オリブ黄	龍泉窯	13c 初頭～ 前半	Ⅲ	青磁碗 B Ⅰ類	瀬戸碗 Ⅱ類	中世	(外)片取りの縞蓮弁文	
	409	-	青磁	碗	F・G 20・21	T15	表土	(18.0)	-	-	-	7.5GY 7/1 明緑灰	7.5Y 7/1 灰白	龍泉窯	13c 初頭～ 前半	Ⅲ	青磁碗 B Ⅰ類	瀬戸碗 Ⅱ類	中世	(外)片取りの縞蓮弁文	
	410	-	青磁	碗	G・H 18～20	T16	表土	-	-	-	-	2.5GY6/1 灰オリブ	7.5GY 5/3 灰オリブ	龍泉窯	13c 初頭～ 前半	Ⅲ	青磁碗 B Ⅰ類	瀬戸碗 Ⅱ類	中世	(外)片取りの縞蓮弁文	
	411	-	青磁	碗	F・G 20・21	T15	Ⅲ	-	-	-	-	10Y7/2 灰白	7.5Y 7/1 灰白	龍泉窯	14 C 末～ 15 C 初頭	Ⅳb	青磁碗 D Ⅰ類	上田 D Ⅱ類	中世		玉縁状口縁
	412	-	青磁	碗	F・G 20・21	T15	表土	-	(4.0)	-	-	5Y5/3 灰オリブ	10YR 8/3 浅黄褐	龍泉窯	15 C 後半	V	青磁碗 B 2類	上田 B Ⅳ類	中世	(外)細蓮弁文 (内)印花	高台が直立 高台内軸剥ぎ
	413	-	青磁	碗	F・G 20・21	T15	表土	-	(5.6)	-	-	10Y6/2 オリブ灰	7.5GY 5/3 灰オリブ	龍泉窯	15 C 半ば	Ⅳ a	青磁碗 B 4類	上田 B Ⅱ類	中世	(外)ヘラ先細蓮弁文 (見込み)ヘラ描文	外底を輪状に削る
	414	-	青磁	皿	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	-	2.5Y6/2 灰黄色	10YR 6/3 にぶい黄橙	龍泉窯	15 頃	V	端反皿	-	中世		
	415	-	青磁	皿	D・E 22・23	T13	表土	-	(6.6)	-	-	7.5GY7/1 明緑灰	7.5Y 7/1 灰白	龍泉窯	15 C前半 まで	V	端反皿か	-	中世	(見込み)草花文	高台、甕付は無釉
	416	-	青磁	盤	D・E 22・23	T13	表土	(15.0)	-	-	-	10Y5/2 オリブ灰	7.5GY 5/3 灰オリブ	龍泉窯	14 C 末～ 15 C前半	-	盤	-	中世	(見込み)線取りの蓮弁文	基筒底 高台内面軸剥ぎ
	417	-	青磁	盤	F・G 20・21	T15	Ⅲ	-	(10.6)	-	-	5Y 5/3 灰オリブ	10YR 7/3 にぶい黄橙	龍泉窯	15 C頃	-	盤	-	中世		基筒底、内底は蓮子型 高台内に目積みされた胎 土が残る
	418	-	白磁	小皿	G・H 18～20	T16	表土	(8.6)	-	-	-	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	15 C前半	Ⅳb	白磁皿 B 群	森田 D 類	中世		切り高台の痕が付く 内面に目跡有
	419	-	青花	碗	F・G 20・21	T15	表土	-	(6.3)	-	-	10Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	景徳鎮 窯	16 C	V	染付碗 C 群	小野 C 群	中世		蓮子碗、焼成不良
	420	-	青花	碗	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	-	10Y7/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	漳州窯	16 C 前半～ 後半	V	染付碗 C 群	小野 C 群	中世		蓮子碗 高台に髹漆の灰付着
	421	-	青花	皿	G・H 18～20	T16	表土	-	(2.8)	-	-	5BG7/1 明青灰	7.5Y7/1 灰白	景徳鎮 窯	16 C 前半～ 中頃	V	青花皿 C 群	小野 C 群	中世	(外)芭蕉葉文 (内)ねじ花文	基筒底
	422	-	国産 陶器	瓷	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	-	2.5Y8/3 淡黄	美濃 地方	平安末～ 鎌倉	-	-	-	-	中世		甕の下部片 胎土は砂質 外面にタタキの痕跡有
	423	-	国産 陶器	瓷	D・E 22・23	T13	表土	-	-	-	-	7.5Y7/1 灰白	常滑	鎌倉	-	-	-	-	中世		肩部片、常滑焼か?
	424	-	国産 陶器	瓶	D-23	-	表土	-	-	-	-	10Y6/2 オリブ灰	7.5Y7/1 灰白	瀬戸	平安～ 鎌倉	-	-	-	中世		古瀬戸・瓶子か 四耳壺 自然釉で薄い黄緑色 良質 ではない
83	455	-	青磁	取っ手	D・E 22・23	T13	表土	-	-	-	-	2.5Y 4/2 暗灰黄	7.5GY 5/3 灰オリブ	-	近世	-	-	-	近世		国産青磁 器種、産地不明

第 18 表 陶磁器観察表（6）

地点	挿図 番号	掲載 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	口径 (cm)	底径・ 高台 径 (cm)	器高 (cm)	軸調	胎土の色調	産地	時期	時期 (歴博)	歴博 分類	他の 分類	時代	文様	備考
東 台 地	83	456	-	白磁	小杯	F・G 20・21	T15	表土	(4.4)	(2.3)	(2.8)	透明釉	7.5Y 7/1 灰白	肥前	18 C頃	-	-	-	近世		
		457	-	白磁	壺	D-23	-	表土	-	-	-	2.5GY7/1 明オリブ灰	7.5GY 8/1 灰白	-	近世	-	-	-	近世		口縁部片 口縁部僅かに外反
		458	-	染付	碗	F・G 20・21	T15	表土	(7.6)	-	-	透明釉	10Y 8/1 灰白	肥前系	1820～ 1860 代	-	-	-	近世		地元産か
		459	-	染付	皿	D・E 22・23	T13	表土	(15.4)	9.2	2.8	透明釉	10YR8/3 浅黄橙	肥前 (有田)	1660～ 1670 代	-	-	-	近世		ヨーロッパに輸出を始めた 時期の高級品 針支えの痕 あり
		460	-	染付	蓋	F・G 20・21	T15	表土	(9.0)	-	-	透明釉	10YR8/4 浅黄橙	肥前 (武雄)	1810～ 1840 代	-	-	-	近世	(外) 松 (見込み) 岩波文	碗の蓋
	84	461	-	国産 陶器	碗	F・G 20・21	T15	表土	(12.0)	-	-	透明釉	5Y6/1 灰	肥前系	18 C	-	-	-	近世		陶胎染付 白い化粧土を施す
		462	-	国産 陶器	碗	G・H 18～20	T16	表土	(12.5)	-	-	2.5GY6/1 オリブ灰	7.5Y 7/1 灰白	九州産 か	19 C	-	-	-	近世		
		463	-	国産 陶器	小碗	F・G 20・21	T15	Ⅲ	-	-	-	Hue5Y8/1 灰白	10YR8/3 にぶい黄橙	九州産 か	20 C	-	-	-	近世		焼成不良 調整は外面ケズリ内面ナデ
		464	-	国産 陶器	皿	F・G 20・21	T15	表土	18.9	7.4	5.8	5YR5/1 褐灰	5YR6/2 灰褐	肥前	18C 代	-	-	-	近世		ハケメの皿 見込みに混漿
		465	-	国産 陶器	胴部	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	透明釉	10R4/3 赤褐	沖縄 (壺屋)	近世 以降	-	-	-	近世		胴部片、荒焼（アラヤチ）
		466	-	国産 陶器	小甕	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	2.5Y8/1 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	肥前 (武雄)	17C 頃	-	-	-	近世	(外) 松の葉文	古武雄二彩手
		467	-	国産 陶器	壺・甕	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	10R3/2 暗赤褐	2.5YR7/4 淡赤褐	不明	19C 頃	-	-	-	近世		産地不明 鉄釉がかかる国 産 大甕 内外面横ナデ
		468	-	国産 陶器	甕	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y7/2 灰黄	不明	近世	-	-	-	近世		底部片 産地不明 鉄釉国 産 大甕 内外面横ナデ
		469	-	国産 陶器	壺	F・G 20・21	T15	表土	(10.8)	-	-	2.5Y7/4 浅黄	10YR8/4 浅黄橙	関西系	江戸後期	-	-	-	近世		口縁部片、蓋もの
		470	-	国産 陶器	瓶	G・H 18～20	T16	表土	(6.8)	-	-	2.5Y7/2 浅黄	7.5YR6/4 にぶい褐	肥前	18C 前半	-	-	-	近世		ハケメの瓶 口縁に鉄釉 (口紅)か
		471	-	国産 陶器	瓶	D・E 22・23	T13	表土	-	-	-	7.5YR3/1 黒褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐	九州産 か	18 C	-	-	-	近世		瓶の腰あたり
		472	-	国産 陶器	涼炉	G・H 18～20	T16	表土	-	-	-	10YR8/1 灰白	10YR8/4 浅黄橙	-	19 C	-	-	-	近世		涼炉（りょうろ）
		473	-	国産 陶器	涼炉	F・G 20・21	T15	Ⅱ・ 表土	-	-	-	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	-	19 C	-	-	-	近世		二重構造になる涼炉
	85	476	-	薩摩焼	甕	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	N3/ 暗灰	2.5YR6/6 橙	-	-	-	-	-	近世	沈線3条	胴部片
		477	-	薩摩焼	甕	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	7.5Y4/2 灰オリブ	7.5Y6/1 灰	-	-	-	-	-	近世		底部片、内外面施釉 外 面下部ケズリ 白色粒入る
		478	-	薩摩焼	鉢	G・H 18～20	T16	表土	(28.2)	-	-	2.5GY3/1 暗オリブ灰	10R5/4 赤褐	-	-	-	-	-	近世		口縁部片、口縁部外側は 無釉 内側は霜釉
		479	-	薩摩焼	播鉢	F・G 20・21	T15	表土	(23.2)	-	-	2.5Y8/3 淡黄	2.5YR4/4 にぶい赤褐	-	-	-	-	-	近世		口縁部片 口唇部釉剥ぎ
		480	-	薩摩焼	急須	F・G 20・21	T15	表土	(9.4)	-	-	7.5Y6/2 灰オリブ	2.5YR4/4 にぶい赤褐	苗代川 系	18C 前半	-	-	-	近世		糸目土胚
		481	-	薩摩焼	小鉢	G・H 18～20	T16	表土	-	(7.6)	-	7.5Y8/2 灰白	5YR4/2 灰褐	-	-	-	-	-	近世		底部片 高台内面畳付は 無釉
	482	-	薩摩焼 (白薩摩)	小碗	F・G 20・21	T15	表土	(7.0)	(4.6)	(7.0)	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	苗代川 系	近代	-	-	-	-	近世		白薩摩「協賛会」印字 記念品か 高台内の底が非 常に薄く焼しまりが強い
	483	-	薩摩焼	袋もの	E・F 23	-	表土	-	-	-	2.5YR4/2 灰赤	7.5YR7/4 にぶい褐	-	-	-	-	-	近世		胴部片黒もの 焼成が甘い	

第 19 表 土師器・須恵器・瓦質土器・播鉢観察表（1）

地点	挿図 番号	掲載 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	口径 (cm)	底径 高台 径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土	時代	年代	備考	
西 谷	9	7	-	土師器	埴	E・G 6	-	I	-	(9.5)	-	(外) 回転ナデ (内) ナデ	(外) 10YR8/4 浅黄橙 (内) 10YR8/6 黄橙	石英(多)・黒色粒(多)	古代	12C～13C 初頭か		
	15	20	-	土師器	坏	G-8	SB2 P4	埋 2	(11.6)	-	-	(外・内) 回転ナデ	(外・内) 7.5YR 8/4 浅黄橙	石英・黒色粒・ 白色雲母	中世	15C 後半～ 16C 前半	岩元 坏 10 段階	
		21	-	瓦質 土器	播鉢	G-8	SB2 P3	埋	胴部 (26.0)	-	-	(外) ユビオサエ、ナデ (内) 工具ナデ後ナデ	(外) 7.5YR6/6 橙 (内) 5YR 5/4 にぶい赤褐	石英・黒色粒	中世	-	欄目 10 本 搬入品か	
	16	23	-	瓦質 土器	鉢	G-8	SB3 P3	埋	-	-	-	(外) ナデ (内) 工具ナデ	(外) 10YR4/1 褐灰 (内) 7.5YR 3/1 黒灰	石英・黒色粒	中世	-	破壊後被熱 1	
		25	-	土師器	坏	G 8・9	SB4 P3	埋 2	(14.0)	-	-	(外・内) 回転ナデ	(外) 7.5YR7/3 にぶい橙 (内) 7.5YR7/4 にぶい橙	石英・白色粒・黒色粒・ 角閃石・赤色粒(少)	中世	15C 後半～ 16C 半ば	岩元 坏 10 段階	
	18	26	-	土師器	坏	G 8・9	SB4 P3	埋 2	(9.0)	-	-	(外) 回転ナデ、ナデ (内) 回転ナデ	(外) 10YR7/4 にぶい黄褐 (内) 7.5YR8/4 浅黄橙	石英・黒色粒・角閃 石	中世	15C 後半～ 16C 半ば	岩元 坏 11 段階	
		27	-	須恵器	大甕	G-8	SB4 P7	埋 2	-	-	-	(外) 平行線状タタキ (内) 同心円状タタキ	(外・内) 2.5Y6/2 灰黄	石英・黒色粒・黒雲 母(多)	中世	-	瓦質的焼成	
	22	39	-	土師器	皿	G-8	SK2	埋	(14.0)	(7.2)	2.6	(外・内) 回転ナデ	(外・内) 7.5YR8/3 浅黄橙	石英・白色粒・黒色粒・ 褐色粒	中世	15C 後半～ 16C 前半	底面糸切岩元 坏 11 段階	
	西 台 地	23	40	SL1 ～1	瓦質 土器	播鉢	E 7・8	SL1 大型 土坑	埋 埋 4	(34.0)	-	-	(外) ナデ、ユビオサエ (内) ナデ	ケズリ (外) 7.5YR5/3 にぶい褐 (内) 10YR4/1 褐灰	石英・白色粒・黒色粒・ 褐色粒	中世	-	欄目 10 本 くぼ地4層と接合
		24	42	-	土師器	坏	E-7	SK3	埋	(12.4)	-	-	(外・内) 回転デ	(外) 10YR8/3 浅黄橙 (内) 10YR 7/3 にぶい黄橙	石英・黒色粒・褐色 粒	中世	15C 後半～ 16C 前半	岩元坏9～10 段階位か 外面煤付着
43			-	土師器	坏	E-7	SK3	埋	-	-	6.4	(外・内) 回転ナデ	(外・内) 10YR8/2 灰白	石英・黒色粒・褐色 粒	中世	15C 後半～ 16C 前半	底面糸切岩元 坏 10 段階	
44			-	瓦質 土器	大甕	E-7	SK3	埋	(25.0)	-	-	(外) ハケメ (内) ハケメ、ナデ	ユビオサエ (外) 10YR7/4 にぶい黄橙 (内) 10YR6/3 にぶい黄橙	石英・黒色粒	中世	-		
45		-	瓦質 土器	播鉢	E-7	SK3	埋	-	-	(9.8)	(外) 工具ナデ、ナデ、 (内) ナデ	ケズリ (外・内) 10YR8/2 灰白	石英(少)・黒色粒(少)	中世	-	欄目 7 本		
25		47	-	備前 陶器	播鉢	E-8	SL3	埋	-	-	-	(外) ナデ (内) 工具ナデ後ナデ	(外) 7.5YR5/3 にぶい褐 (内) 10YR4/1 褐灰	石英(粒子細かい)	中世	-	備前系か 欄目 7 本以上	
		48	-	瓦質 土器	火鉢	E 7・8	SL4 大型 土坑	埋 埋 4・ 入口	-	(19.0)	-	(外) 回転ナデ、ナデ (内) ナデ	(外) 7.5YR6/4 にぶい橙 (内) 10YR7/3 にぶい黄橙	石英・褐色粒(多) 角閃石(多)	中世	-	底面ナデ 数物の痕がつく	
34		53	-	土師器	灯明皿	G-8	SP37	埋	-	6.0	-	(外・内) 回転ナデ	(外) 7.5YR7/4 にぶい橙 (内) 7.5YR8/4 浅黄橙	石英(多)・黒色粒	中世	15C 後半～ 16C 前半	底面糸切 岩元 坏 11 段階 煤付着	
39		62	128	土師器	皿	F-8	大型 土坑	Ⅳ	8.2	5.6	1.6	(外・内) 回転ナデ	(外・内) 10YR8/2 灰白	石英・白色粒・黒色粒・ 褐色粒・角閃石	中世	15C 後半～ 16C 前半		

第 20 表 土師器・須恵器・瓦質土器・擂鉢観察表（2）

地点	挿図番号	掲載番号	遺物番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	口径 (cm)	底径 高台径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土	時代	年代	備考
西 台 地	39	63	-	土師器	皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	(13.8)	(7.2)	2.4	(外・内) 回転ナデ	(外) J7.5YR7/4 に近い黄褐色粒・角閃石 (少)	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒・角閃石 (少)	中世	15C 後半～16C 前半	外面に薄く煤付着 胎土精良
		64	-	須恵器	大甕	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	-	-	-	(外) 平行線状タタキ ハケメ・ナデ (内) ハケメ	(外・内) J10YR7/1 灰白	白色糠・黒色粒	中世	-	九州産・焼成良好
		65	-	瓦質土器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	(27.0)	-	-	(外) ナデ・ユビオサエ (内) マメツ	(外・内) J7.5YR8/4 浅黄褐色	石英・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	-	欄目8本 内外面に煤付着
		66	83	瓦質土器	擂鉢	F-8	大型土坑	Ⅱ Ⅷ	(30.0)	-	-	(外) ナデ・ユビオサエ (内) マメツ	(外) J7.5YR8/3 浅黄褐色 (内) J10YR8/3 浅黄褐色	白色粒・黒色粒・角閃石	中世	-	欄目8本 外面に煤付着
		67	-	瓦質土器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	(30.0)	-	-	(外) ナデ・ハケメ (内) 工具ナデ・ナデ	(外) J2.5Y8/3 淡黄褐色 (内) J2.5Y8/2 灰白	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒	中世	-	外面に細沈線を縦位に巡らせる 内面上位に帯状に煤付着 欄目8本
		68	-	瓦質土器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	(31.0)	-	-	(外) ケズリ後ナデ ユビオサエ、ハケメ (内) ナデ	(外) J10YR8/3 浅黄褐色 (内) J10YR8/4 浅黄褐色	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒	中世	-	欄目8本 内外面に煤付着
	43	121	98	土師器	坏	E～G 7・8	大型土坑	Ⅱ Ⅲ	(11.8)	6.0	3.0	(外) 回転ナデ (内) ナデ	(外) J7.5YR7/4 に近い黄褐色粒	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒	中世	15C 後半～16C 前半	灯明皿として使用 岩元環 10 段階 内面に煤付着
		122	-	土師器	坏	E～G 7・8	大型土坑	Ⅲ	-	(7.0)	-	(外・内) 回転ナデ	(外・内) J7.5YR8/3 浅黄褐色	石英・黒色粒・角閃石	中世	15C 後半～16C 前半	岩元環 10 段階
		123	-	土師器	坏	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	-	(9.0)	-	(外・内) 回転ナデ	(外) J7.5YR7/6 褐色粒 (内) J2.5YR6/6 褐色	石英・黒色粒・褐色粒	中世	14C 後半	岩元環 8 段階 125 とは同一個体胎土精良
		124	-	土師器	坏	F 7・8	大型土坑	Ⅱ	-	(8.6)	-	(外・内) 回転ナデ	(外・内) J10YR8/3 浅黄褐色	石英・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	15C 後半～16C 前半	岩元環 10 段階
		125	-	土師器	坏	E～G 7・8	大型土坑	I	-	-	-	(外・内) 回転ナデ	(外) J7.5YR6/6 褐色粒 (内) J7.5YR6/8 褐色	石英・黒色粒・褐色粒	中世	14C 後半	岩元環 8 段階 123 とは同一個体胎土精良
		126	-	土師器	皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	(8.4)	(5.4)	1.7	(外・内) 回転ナデ	(外・内) J7.5YR8/3 浅黄褐色	石英・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	15C 後半～16C 前半	岩元環 10 段階
		127	-	土師器	皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	8.0	5.0	2.3	(外・内) 回転ナデ	(外・内) J10YR8/2 灰白	石英・黒色粒・褐色粒	中世	15C 後半～16C 前半	岩元環 10 段階
		128	127	土師器	皿	F-8	大型土坑	Ⅷ	8.0	4.3	1.8	(外・内) 回転ナデ	(外・内) J7.5YR8/3 浅黄褐色	石英・黒色粒・褐色粒 (少)	中世	15C 後半～16C 前半	岩元環 10 段階
		129	114	土師器	皿	F-8	大型土坑	Ⅷ	8.0	5.2	2.0	(外・内) 回転ナデ	(外) J7.5YR8/4 浅黄褐色 (内) J7.5YR7/3 に近い黄褐色	石英・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	15C 後半～16C 前半	混和粒子大きい 岩元環 10 段階
		130	-	土師器	皿	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	-	(6.0)	-	(外・内) 回転ナデ	(外・内) J10YR8/2 灰白	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒	中世	15C 後半～16C 前半	岩元環 10 段階
		131	-	土師器	皿	F・G 7・8	大型土坑	Ⅱ	-	(6.4)	-	(外・内) 回転ナデ	(外・内) J10YR8/3 浅黄褐色	石英・黒色粒・褐色粒	中世	15C 後半～16C 前半	岩元環 10 段階
		132	-	土師器	皿	F 7・8	大型土坑	Ⅱ	-	(7.0)	-	(外・内) 回転ナデ	(外・内) J10YR8/2 浅黄褐色	石英	中世	15C 後半～16C 前半	岩元環 10 段階 胎土精良
		133	-	土師器	鉢?	F 7・8	大型土坑	Ⅱ	-	-	-	(外) 工具ナデ後ナデ, ミガキ (内) ナデ	(外・内) J10YR7/4 に近い黄褐色	石英・黒色粒	中世?	-	焼成良好で硬質
		134	-	土師器	壺?	E～G 7・8	大型土坑	I	-	-	-	(外) ミガキ, ナデ (内) ナデ	(外・内) J2.5YR8/3 淡黄褐色	石英・白色粒・黒色粒	中世?	-	丸みが強く 小型の壺か
		135	-	土師器	鉢?	F 7・8	大型土坑	Ⅷ	-	-	-	(内) 回転ナデ (底面) ナデ	(外・内) J7.5YR7/6 褐色粒	石英・黒色粒・褐色粒	中世	-	瓦質土器の底部の可能性もある
		136	-	土師器	鉢?	F 7・8	大型土坑	Ⅷ	-	(7.8)	-	(外) 回転ナデ (内) マメツ	(外・内) J2.5YR7/2 灰黄褐色	石英・白色粒・黒色粒・亜鉛燐	中世	-	焼成良好で硬質
	45	142	-	須恵器	大甕	E・F 7・8	大型土坑	IV b	(20.0)	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, 粗いハケメ	(外) J10YR6/6 明黄褐色 (内) J10YR7/6 明黄褐色	石英	中世	-	断面縞状
		143	-	須恵器	大甕	E～G 7・8	大型土坑	I	-	-	-	(外) ナデ, タタキ (内) ハケメ, ナデ	(外・内) N5/ 灰	石英・黒色粒・褐色粒 (小)	中世	-	
		144	-	須恵器	壺	F 7・8	大型土坑	Ⅱ	-	-	-	(外) ハケメ (内) マメツ	(外) J10YR6/1 褐灰色 (内) J7.5YR7/6 に近い黄褐色	石英・白色粒・黒色粒	中世	-	土師質焼成色
		145	-	須恵器	甕	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	-	-	-	(外) 格子目状タタキ (内) ハケメ	(外) J2.5YR5/1 黄灰色 (内) J2.5YR6/1 黄灰色	石英・白色粒・雲母 (少)	中世	-	芯部に土師質の色わずかに残る胎土は褐灰色を呈する
		146	104	須恵器	大甕	E～G 7・8	大型土坑	I Ⅲ Ⅷ	(26.2)	胴部 (44.0 +)	-	(外) ハケメ ユビオサエ (内) ハケメ	(外) J10YR5/2 灰黄褐色 (内) J10YR5/4 に近い黄褐色	石英・白色粒	中世	-	胎土は褐灰色を呈する胎土精良
		147	93	須恵器	大甕	F-8	大型土坑	V	-	-	-	(外) 格子目状タタキ (内) 同心円状タタキ	(内) J10YR7/2 に近い黄褐色 (内) J10YR6/2 灰黄褐色	石英・黒色粒・褐色粒	中世	-	左側辺と右側辺の一部を擦る褐色粒鉄分多く黒色に近い石英はあまり目立たない
		148	-	須恵器	大甕	F 7・8	大型土坑	Ⅱ	-	-	-	(外) 格子目状タタキ (内) 平行線状タタキ	(外) J2.5YR6/2 灰黄褐色 (内) J10YR7/1 灰白	石英・黒色粒・褐色粒	中世	-	褐色粒鉄分多く黒色に近い混和材少ない
		149	102	須恵器	大甕	F-8	大型土坑	Ⅱ	-	-	-	(外) 綾形状タタキ (内) ハケメ	(外・内) N5/ 灰	石英・黒色粒	中世	-	
		150	76	須恵器	大甕	E～G 7・8	大型土坑	I Ⅲ	-	(31.2)	-	(外) 平行線状タタキ (内) ハケメ, ナデ (底) ケズリ	(外・内) J5YR6/1 灰	白色粒・黒色粒 赤色粒	中世	-	
		151	-	須恵器	大甕	E・F 7・8	大型土坑	Ⅲ a	-	(20.0)	-	(外) 格子目状タタキ (内) マメツ (底) ナデ	(外) J7.5YR7/4 に近い黄褐色 (内) J2.5YR5/1 黄灰色	石英・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	-	混和材多量石英の粒子が大きい
		152	-	須恵器	大甕	E・F 7・8	大型土坑	Ⅷ	-	(19.5)	-	(内) ナデ (底) タタキ, ナデ	(内) N5/1 灰 (底) N4/1 灰	石英・黒色粒・小礫	中世	-	
		153	-	須恵器	甕?	F 7・8	大型土坑	Ⅱ	-	-	-	(内) ユビオサエ, ナデ (底) 工具ナデ, ナデ	(内) J2.5YR6/4 に近い黄褐色 (底) J10YR5/4 に近い黄褐色	石英・黒色粒	中世	-	備前系の陶器の可能性もある 焼成色茶褐色胎土粗い
	46	154	-	備前陶器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	Ⅵ	-	-	-	(外) ナデ, ユビオサエ (内) ハケメ後ナデ	(外) J5YR5/3 に近い赤褐色 (内) J5YR4/2 灰褐色	-	中世	-	胎土精良
		155	-	備前陶器	擂鉢	E～G 7・8	大型土坑	I	-	-	-	(外・内) ナデ	(外) J5YR3/1 黒褐色 (内) J2.5YR4/3 に近い赤褐色	石英・黒色粒	中世	-	混和材少ない
		156	-	備前陶器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	-	-	(17.4)	-	(外) ケズリ (内) 工具ナデ後ナデ (底) ナデ	(外) J10YR3/2 黒褐色 (内) J10YR5/2 灰黄褐色	石英・白色粒・黒色粒	中世	-	欄目8本
		157	-	須恵器	擂鉢	E～G 7・8	大型土坑	Ⅲ	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ	(外・内) N6/1 灰	白色粒・黒色粒	中世	-	内面上位に櫛描波状文胎土精良
		158	109	須恵器	擂鉢	F-8	大型土坑	Ⅶ	-	(12.0)	-	(外) 工具ナデ, ユビオサエ (内) ナデ	(外・内) N5/ 灰	石英・赤色粒	中世	-	焼成特に良好
		159	-	瓦質土器	擂鉢	E～G 7・8	大型土坑	Ⅲ	-	-	-	(外・内) ナデ	(外・内) N3/ 暗灰	石英・白色粒・黒色粒	中世	-	器面を黒く塗す 断面土師質焼成色で縞状
		160	85 99	瓦質土器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	Ⅲ	(27.0)	(8.6)	(13.0)	(外) 工具ナデ後ナデ ユビオサエ (内) ケズリ後ナデ	(外) J7.5YR7/4 に近い黄褐色 (内) J7.5YR7/6 に近い黄褐色	石英 (多)・白色粒 黒色粒	中世	-	断面4本×2条単位 接地面際に棒状工具による押圧を巡らせる
		161	-	瓦質土器	擂鉢	E～G 7・8	大型土坑	Ⅱ Ⅲ a	(32.0)	-	-	(外) ナデ, ユビオサエ (内) ナデ	(外) J7.5YR6/6 褐色 (内) J7.5YR7/6 褐色	白色粒・赤色粒	中世	-	欄目6本 赤色粒鉄分多く黒ずむ 混和材少ない、内面煤付着
		162	94 84	瓦質土器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	Ⅱ Ⅲ	(34.0)	-	-	(外) ナデ, ユビオサエ (内) 工具ナデ後ナデ	(外) J10YR6/4 に近い黄褐色 (内) J10YR6/3 に近い黄褐色	石英・白色粒・黒色粒	中世	-	
47	163	-	瓦質土器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	-	(29.6)	-	-	-	(外) 工具ナデ, ユビオサエ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) J10YR8/4 浅黄褐色 (内) J2.5YR8/3 浅黄褐色	白色粒・黒色粒	中世	-	欄目7本 胎土精良 断面縞状 外面煤着
	164	-	瓦質土器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	Ⅶ	(30.0)	-	-	-	(外) ケズリ後ナデ (内) ナデ	(外・内) J10YR8/2 灰白	石英・白色粒・黒色粒	中世	-	混和材少ない、内面煤付着

第 21 表 土師器・須恵器・瓦質土器・擂鉢観察表（3）

地点	挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	口径 (cm)	底径 高台径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土	時代	年代	備考	
西 台 地	47	165	9 10	瓦質土器	擂鉢	F・G 7・8	大型土坑	I II	(30.0)	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 10YR8/3 浅黄橙 (内) 10YR8/2 浅黄橙	石英・黒色粒・褐色粒	中世	-	櫛目 7 本
		166	-	瓦質土器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	VII	(27.0)	-	-	(外) 工具ナデ, ケズリ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 10YR8/2 灰白 (内) 10YR8/3 浅黄橙	石英・白色粒・褐色粒・白色内襖	中世	-	内外面に煤付着
		167	3 16 17 144	瓦質土器	擂鉢	E～G 7・8	大型土坑	I II VII	(27.4)	(11.4)	15.1	(外) 工具ナデ後ナデ (内) ナデ	ケズリ (外) 7.5YR7/4 に近い橙 (内) 7.5YR8/4 浅黄橙	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒	中世	-	赤色粒粒子大きい
		168	31 34 40	瓦質土器	擂鉢	F 7・8	大型土坑	I II	(28.0)	-	-	(外) ナデ (内) 回転横ナデ (工具による)	(外・内) 10YR8/3 浅黄橙	石英・黒色粒・褐色粒	中世	-	櫛目 7 本
	48	169	-	瓦質土器	擂鉢	E～G 7・8	大型土坑	III	-	-	-	(外) ケズリ後ナデ (内) ナデ	(外・内) 10YR8/2 灰白	石英・黒色粒・褐色粒	中世	-	櫛目 12 本 淡い褐色の小粒が多く入る
		170	-	瓦質土器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	VII	-	(11.6)	-	(外) ナデ, ユビオサエ (内) ナデ (底) 工具ナデ後ナデ	ケズリ (外) 10YR8/3 浅黄橙 (内) 10YR8/2 灰白	石英・白色粒・褐色粒	中世	-	
		171	38	瓦質土器	擂鉢	E～G 7・8	大型土坑	I II VII	-	(11.4)	-	(外) ナデ・ユビオサエ (内) ナデ	ケズリ (外) 10YR8/4 浅黄橙 (内) 10YR8/3 浅黄橙	石英・褐色粒	中世	-	櫛目 7 本
		172	-	瓦質土器	擂鉢	F・G 7・8	大型土坑	I	-	(11.6)	-	(内) ナデ (底面工具ナデ後ナデ)	(外・内) 10YR8/3 浅黄橙	石英・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	-	
		173	111	瓦質土器	擂鉢	F-8	大型土坑	VII	-	-	-	(外) 工具ナデ後ナデ (内) マメツ	タタキ (外・内) 10YR8/3 浅黄橙	石英・黒色粒・褐色粒	中世	-	混和材少ない外面煤付着
		174	-	瓦質土器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	VI VII	-	-	-	(外) ナデ・ユビオサエ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 2.5Y6/2 灰黄 (内) 10YR6/4 に近い黄橙	石英	中世	-	
		175	-	須恵器	擂鉢	E・F 7・8	大型土坑	VII	-	-	-	(外・内) ハケメ後ナデ	(内) 5Y6/2 灰オリーブ (外) 5Y5/1 灰	石英・白色粒・褐色粒	中世	-	白色粒多い褐色粒少ないが大粒
	49	176	-	瓦質土器	火鉢	E・F 7・8	大型土坑	III a	(21.4)	-	-	(外) 工具ナデ後ナデ (内) ナデ	(内) 7.5YR8/4 浅黄橙 (外) 7.5YR7/3 に近い橙	石英・黒色粒・褐色粒	中世	15C 代	外面煤付着
		177	90	瓦質土器	火鉢	F-7	大型土坑	V	(24.8)	(19.0)	6.0	(外・内) ハケメ後ナデ (底) ケズリ後ナデ	(外) 10YR8/3 灰白 (内) 10YR8/2 灰白	石英・黒色粒・褐色粒	中世	-	混和材少ない断面縞状
		178	-	瓦質土器	火鉢	E～G 7・8	大型土坑	II	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ後ナデ	(外) 5Y4/1 灰 (内) 10YR6/1 褐灰	石英・黒色粒	中世	15C 代	外面に草花文を型押しで巡らす
		179	62	瓦質土器	火鉢	F-8	大型土坑	II	-	-	-	(外) 工具ナデ後ナデ (内) ナデ	(外) 7.5YR7/4 に近い橙 (内) 7.5YR7/6 橙	石英・黒色粒	中世	15C 代	外面に草花文を型押しで巡らす
		180	-	瓦質土器	火鉢	E・F 7・8	大型土坑	VII	(43.0)	-	-	(外) ナデ (内) 工具ナデ後ナデ	(外・内) 10YR8/2 灰白	石英・白色粒・褐色粒・角閃石 (多)・金色雲母	中世	15C 代	外面に雷門を型押しで巡らす口唇煤付着
		181	96	瓦質土器	火鉢	E-7	大型土坑	III	-	-	-	(外) ナデ, ケズリ後ナデ (内) 工具ナデ後ナデ	(外) 10YR7/2 に近い黄橙 (内) 10YR7/3 に近い黄橙	石英・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	15C 代	
182		-	瓦質土器	火鉢	E・F 7・8	大型土坑	III b	-	(33.8)	-	(外) 工具ナデ, ケズリ ナデ (内) ハケメ, ナデ	(外・内) 10YR6/2 灰黄褐	石英・黒色粒・角閃石 (多)	中世	15C 代	突帯巡る混和材多い 全面煤付着	
183		142	瓦質土器	火鉢	E～G 7・8	大型土坑	III VII	-	-	-	(外) マメツ (内) ナデ	(外・内) 10YR8/3 浅黄橙	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	15C 代		
50		184	-	瓦質土器	風炉	E・F 7・8	大型土坑	VI	-	(29.0)	-	(外・内) ナデ 部分的にハケメ	(外・内) 7.5YR7/4 に近い橙	石英・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	15C 代	底部～脚
		185	-	瓦質土器	火鉢	E・F 7・8	大型土坑	VII	-	-	-	(外・内) ナデ	(外・内) 10YR8/2 灰白	石英・褐色粒・角閃石	中世	15C 代	脚
	186	-	瓦質土器	火鉢	E・F 7・8	大型土坑	III b	-	-	-	(外・内) 工具ナデ後ナデ	(外) 7.5YR8/4 に近い橙 (内) 7.5YR7/4 浅黄橙	石英・黒色粒・褐色粒	中世	15C 代	底部～脚	
	187	-	瓦質土器	火鉢	E・F 7・8	大型土坑	-	-	(19.0)	-	(外・内) ナデ (底) ケズリ後ナデ	(外・内) 7.5YR8/4 浅黄橙	石英・黒色粒・褐色粒	中世	15C 代	底部脚が付くと考えられる	
	188	-	瓦質土器	不明	E・F 7・8	大型土坑	VII	最大径 8.7, 最大幅 3.7 最大径 3.5 cm			-	(外・内) 2.5Y8/3 淡黄	白色粒・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	15C 代	中空 把手あるいは装飾か胎土精良	
	267	-	土師器	坏	F-9	通路状遺構	掘切	-	(6.0)	-	(外・内) 回転ナデ	(外・内) 10YR8/3 浅黄橙	石英・白色粒・褐色粒	中世	15C 後半～16C 前半	岩元 坏 10 段階	
57	268	-	須恵器	大甕	F-9	通路状遺構	掘切	-	-	-	(外) 回転ナデ (内) ナデ	(外・内) 10YR7/2 灰褐	石英・黒色粒	中世	-		
	269	-	須恵器	鉢?	E・F 7・8	通路状遺構	入口	(10.0)	-	-	(外・内) 回転ナデ	(外) 10YR6/1 褐灰 (内) 10YR5/1 褐灰	石英・黒色粒・褐色粒	中世	-	混和材少ない土師質焼成色が残る	
	270	-	備前陶器	擂鉢	E・F 7・8	通路状遺構	入口	-	(18.0)	-	(外) 工具ナデ (内) ナデ	(外) 7.5YR7/1 暗褐 (内) 10YR7/1 灰白	白色粒・黒色粒	中世	-	櫛目 5 本 焼成やや不良	
	271	-	備前陶器	擂鉢	E・F 7・8	通路状遺構	入口	-	(17.4)	-	(外) 工具ナデ (内) ナデ	(外) 10YR4/1 褐灰 (内) 10YR5/4 に近い黄褐	白色粒 (少)・黒色粒	中世	-	櫛目 10 本 胎土縞状	
	272	-	国産陶器	大甕	E～G 10	通路状遺構	入口	-	(28.0)	-	(外・内・底) ナデ	(外) 2.5YR5/3 に近い赤褐 (内) 2.5YR5/2 灰赤	石英 (多)	中世?	-	胎土非常に赤い	
	60	331	-	土師器	坏	E 7・8	-	I	(13.0)	(9.0)	3.2	(外) 回転ナデ, 工具ナデ (内) ナデ	(外・内) 5YR6/6 橙	石英・黒色粒・褐色粒	中世	14C 後半	底面糸切 岩元 坏 9 段階
332		19	土師器	坏	G-8	-	I	(12.0)	-	-	(外) 回転ナデ (内) ナデ	(外) 10YR6/3 に近い黄橙 (内) 10YR8/4 浅黄橙	石英 (多)・黒色粒・褐色粒 (少)・軽石	中世	15C 後半～16C 前半	岩元 坏 10 段階 外面と内面上位に煤付着	
333		19	土師器	坏	G-8	-	I	(14.0)	-	-	(外) 回転ナデ後ナデ (内) ナデ	(外) 5YR7/4 に近い橙 (内) 5YR7/6 橙	石英 (多)・褐色粒 (少)	中世	16C 後半	岩元 坏 11 段階 内面下位に煤付着 灯明皿か	
334		-	土師器	坏	E 7・8	-	I	-	(7.4)	-	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ, ナデ	(外) 7.5YR6/6 橙 (内) 10YR6/6 明黄褐	石英 (多)・黒色粒・褐色粒	中世	14C 後半～15C 前半	底面糸切 充実高台風 岩元 坏 8E～9段階	
335		-	土師器	坏	E 7・8	-	I	-	(7.0)	-	(外・内) 回転ナデ	(外) 10YR7/6 明黄褐 (内) 10YR7/4 に近い黄橙	石英・白色粒	中世	15C 後半～16C 前半	底面糸切岩元 坏 10 段階	
336		-	土師器	皿	F・G 8	-	I	-	(5.0)	-	(外・内) 回転ナデ	(外・内) 10YR7/4 に近い黄橙	石英	中世	15C 前半	岩元 坏 9 段階	
337		-	土師器	皿	D・E 7・8	-	I	(8.3)	(6.0)	-	(外・内) 回転ナデ後ナデ ハケメ	(外) 7.5YR8/3 浅黄橙 (内) 7.5YR8/4 浅黄橙	石英・黒色粒・褐色粒・角閃石	中世	14C 後半～15C 前半	底面糸切 岩元 坏 8E～9段階 褐色粒鮮やかな色調 搬入品の可能性もある	
338		-	土師器	皿	G-8	-	I	(6.6)	(4.8)	1.3	(外・内) 回転ナデ	(外) 10YR6/1 褐灰 (内) 10YR6/3 に近い黄橙	石英・黒色粒 白色雲母小片	中世	15C 後半～16C 前半	底面糸切 岩元 坏 10 段階	
339		-	土師器	内黒土器器境	F・G 7・8	-	I	-	(6.0)	-	-	(外) 回転ナデ (内) ナデ	(外) 5YR4/1 灰 (内) 10YR4/8 浅黄橙	石英・褐色粒 白色雲母微 (多)	古代	10C 後半	岩元 埴 3 類 10C 後半 胎土精良
340		-	土師器	坏	F・G 7・8	-	I	-	(6.0)	-	(外) ナデ (内) 回転ナデ (底) ヘラ切りか	(外) 10YR8/6 黄橙 (内) 7.5YR8/6 浅黄橙	石英 (多)・黒色粒・褐色粒	古代	9C 中葉	岩元 坏 49C (中葉) 内面に刻書部首「ひとあし」をもつ漢字か	
341		-	土師質土器	鉢?	D・E 7・8	-	I	(13.6)	-	-	(外・内) ナデ・ミガキ	(外・内) 10YR1.7/1 黒	石英・黒色粒 火山ガラス	中世?	-	342 は同一個体 胎土精良 外面にミガキを施す	
342		-	土師質土器	鉢?	D・E 7・8	-	I	胴部 (10.5)	-	-	(外) ハケメ後ナデ・ミガキ (内) 工具ナデ	(外) 10YR5/1 褐灰 (内) 10YR3/1 黒	石英・黒色粒 火山ガラス	中世?	-	341 は同一個体 胎土精良 外面にミガキを施す	
343		35	須恵器	大甕	E～G 7・8	-	I	(30.0)	-	-	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ, ナデ	(外) 10YR6/3 に近い黄褐 (内) 5YR5/2 灰褐	石英・黒色粒 褐色粒 (角張る)	中世?	-	土師質の色調 外面茶褐色を呈する 口縁部外面に底状のヘラ書き文	
344		-	須恵器	甕	D・E 7・8	-	I	-	-	-	(外) 平行線状タタキ (内) 同心円状タタキ	(外) 2.5Y6/3 に近い黄 (内) 2.5Y6/2 灰黄	石英・黒色粒 褐色粒	中世	-	土師質の色調 外面茶褐色を呈する	
345		-	須恵器	甕	F・G 7・8	-	I	-	-	-	(外) 格子目状タタキ (内) 平行線状タタキ	(外) 2.5Y6/3 に近い黄 (内) 10YR5/3 に近い黄褐	石英 黒色粒 (亜円形, 多)	中世	-	土師質の色調 外面茶褐色を呈する	

第 22 表 土師器・須恵器・瓦質土器・擂鉢観察表（4）

地点	調査 番号	掲載 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	口径 (cm)	底径 高台径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土	時代	年代	備考		
西 台 地	60	346	-	須恵器	大甕	F・G 7・8	-	I	-	-	-	(外) 格子目状タタキ (内) 平行線状タタキ	(外) J5Y6/3 オリーブ黄 (内) J2.5Y5/3 黄褐	石英・黒色粒 褐色粒 (多)	中世	-	土師質の色調外面淡い灰色を呈する		
		347	-	須恵器	埴	D・E 7・8	-	I	-	(8.0)	-	(外) J10YR7/6 明黄褐 (内) J10YR6/3 にぶい黄褐	石英 (多) 黒色粒 (多)	中世	-	土師質の色調外面茶褐色を呈する			
		348	-	須恵器	大甕	D・E 7・8	-	I	(20.0)	-	-	(外・内) 工具ナデ、ハケメ ナデ	(外) J10YR7/4 にぶい黄褐 (内) J10YR6/3 にぶい黄褐	石英	中世	-	瓦質の焼成色胎土織状		
		349	-	須恵質 土器	壺?	D・E 7・8	-	I	頸部 (11.6)	-	-	(外) ハケメ後ナデ (内) ハケメ後ナデ ユビオサエ	(外・内) J2.5Y7/2 浅黄	石英 (少) 黒色粒 (少)	中世?	-	陶器の可能性もある		
	61	350	-	須恵器	擂鉢	E 7・8	-	I	(33.0)	-	-	(外) ナデ、ユビオサエ (内) 工具ナデ	(外) J2.5Y7/4 浅黄 (内) J2.5Y4/1 黄灰	小円礫 (少)	中世	14C 後半	灰色を呈するも土師質焼成色が残る 欄目 10 本 精緻なつくり 東播磨とすると第Ⅲ期第3段階位か		
		351	-	瓦質 土器	擂鉢	E 7・8	-	I	胴部 (21.6)	-	-	(外) ナデ、ユビオサエ (内) 工具ナデ、ナデ	(外) J10YR4/8 浅黄褐 (内) J10YR8/6 黄褐	石英 (大)	中世	-	欄目 11 本 焼成良好 土師質の焼成色		
		352	18	瓦質 土器	擂鉢	G-8	-	I	-	-	-	(外) ナデ、ユビオサエ (内) 工具ナデ、ナデ	(外) J2.5YR6/8 橙 (内) J5YR7/6 橙	石英黒色粒	中世	-	欄目 10 本 焼成良好、内面明るい褐色		
		353	6	瓦質 土器	擂鉢	G-7	-	I	(34.6)	-	-	(外) ケズリ、ナデ、ユビオサエ (内) ケズリ、ナデ	(外・内) J7.5YR7/4 にぶい黄	石英・黒色粒	中世	-	内面上位は横位の欄目 欄目7本 やや軟質 内面ややマメツ		
		354	33	瓦質 土器	擂鉢 程鉢	F-8	-	I	(24.0)	-	-	(外) ナデ、ユビオサエ (内) 工具ナデ後ナデ	(外) J2.5Y8/2 灰白 (内) J2.5Y8/3 淡黄	石英 (多) 黒色粒 (多)	中世	-			
		355	87	瓦質 土器	植木鉢	F-8	-	I	-	(12.0)	-	(外) 工具ナデ、ナデ ユビオサエ (内) 工具ナデ、ナデ	(外) J2.5Y6/1 黄灰 (内) J2.5Y6/2 灰灰	石英・黒色粒 火山ガラス (多)	中世?	-	底面に径約 6 cm の孔あり		
		356	45 53	瓦質 土器	火鉢	G-7	-	I	(39.0)	(26.5)	14.2	(外) (内) 工具ナデ (脚) 工具ナデ、ユビオサエ	(外) J10YR8/4 浅黄褐 (内) J10YR8/6 黄褐	石英 (多)	中世	15 世紀	SB4 周辺から出土 三つ脚となると推測		
	東 谷	71	400	-	土師器	皿	G 14・15	-	I	-	(6.0)	-	(外・内) 回転ナデ	(外・内) J5YR6/6 橙	石英・褐色粒 (多)	中世	15C 後半～ 16C 後半	底面糸切 岩元 坏 10 ～ 11 段階	
			75	405	-	瓦質 土器	火鉢	E-11	-	I	-	-	-	(外) (内) 工具ナデ、ナデ	(外・内) J10YR4/2 灰黄褐	石英・黒色粒・褐色粒 (多) 角閃石 (少)	近世	-	口縁部外面に「く」の字状のスタンプ を連続させる
				406	-	瓦質 土器	火鉢	D ～ F 11	-	I	-	(10.0)	-	(外) (内) 回転ナデ、ナデ (底) ナデ	(外) J2.5Y4/1 黄灰 (内) J10YR8/3 浅黄褐	石英・黒色粒	近世	-	内面黒色を呈する瓦質の焼成 硬質
79		425	-	土師器	内黒土 師器皿	G・H 18 ～ 20	T16	表土	-	-	-	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) J10YR7/3 にぶい黄褐 (内) J10YR2/1 黒	褐色粒 金色雲母 (微量)	中世	-	胴部片、胎土は乳白色を呈し、内面 は黒色を呈する。		
		426	-	土師器	坏	D・E 22・23	T13	表土	-	-	-	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外・内) J7.5YR8/3 浅黄褐	石英・白色粒 黒色粒・褐色粒	中世	-	口縁部片		
		427	-	土師器	坏	F・G 20・21	T15	Ⅲ	-	-	-	(外) マメツ (内) 回転ナデ	(外・内) J5YR6/8 橙	白色粒 (多) 褐色粒・角閃石	中世	-	口縁部片		
		428	-	土師器	坏	D・E 22・23	T13	表土	(8.0)	-	-	(外) 回転ナデ、マメツ (内) 回転ナデ、マメツ	(外) J5YR8/3 淡橙 (内) J5YR7/6 橙	白色粒・黒色粒 褐色粒	中世	-	口縁部片、磨減が著しい		
		429	-	土師器	皿	D・E 22・23	T13	表土	(10.0)	-	1.7	(外) 回転ナデ、マメツ (内) 回転ナデ	(外・内) J5YR3/8 淡橙	白色粒・黒色粒 褐色粒	中世	-	底部片、底部糸切り		
		430	-	土師器	皿	D・E 22・23	T13	表土	-	-	-	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外・内) J10YR8/2 灰白	石英・黒色粒 角閃石	中世	-	底部片、底部糸切り、やや大型、 胎土白い		
		431	-	土師器	皿	F・G 20・21	T15	Ⅲ	-	(4.7)	-	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外・内) J7.5YR5/4 にぶい褐	白色粒・黒色粒 褐色粒	中世	-	底部片、底部糸切り・胎土精良		
		432	-	土師器	皿	D・E 22・23	T13	表土	-	-	-	(外) 回転ナデ (内) マメツ	(外・内) J5YR6/8 橙	白色粒 (多)・黒色粒 褐色粒 (多)	中世	-	底部片、底部糸切り 焼成やや不良		
		433	-	土師器	皿	F・G 20・21	T15	表土	-	(4.6)	1.2	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外・内) J5YR5/8 明赤褐	白色粒・黒色粒 褐色粒 (多)	中世	-	底部片、底部糸切り		
		434	-	土師器	皿	G・H 18 ～ 20	T16	表土	-	-	-	(外) 回転ナデ (内) マメツ	(外) J2.5YR6/6 橙 (内) J5YR6/6 橙	白色粒・黒色粒 褐色粒	中世	-	底部片、底部糸切り		
		80	435	-	須恵器	甕	F 22・23	T 14	表土	-	-	-	(外) タタキ、ナデ (内) 工具ナデ、ナデ	(外) J10YR7/1 灰白 (内) J10YR6/1 褐灰	石英	中世	-	胎土精良、胎土織状	
			436	-	須恵器	甕	D-23	-	表土	-	-	-	(外) マメツ・タタキ (内) 横ナデ	(外) J10YR7/2 にぶい黄褐 (内) J10YR7/4 にぶい黄褐	石英・白色粒 黒色粒	中世	-		
			437	-	須恵器	甕	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	(外) ナデ、マメツ (内) ナデ、ハケメ	(外・内) JN5/ 灰	白色粒・黒色粒 小礫	中世	-	口縁部片	
			438	-	須恵器	甕	F・G 20・21	T 15	表土	-	-	-	(外) 平行線状タタキ (内) 同円状タタキ	(外) J2.5Y7/1 灰白 (内) J2.5Y5/1 黄灰	白色粒	中世	-	胴部片	
			439	-	須恵器	甕	F 22・23	T14	表土	-	-	-	(外) 格子目タタキ (内) 平行線状タタキ	(外・内) J5Y7/1 灰白	白色粒・黒色粒	中世	-	胴部片	
			440	-	須恵器	甕	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	(外) ナデ、格子目タタキ (内) 平行線状タタキ	(外) J2.5Y6/2 灰黄 (内) J2.5Y6/1 黄灰	石英・白色粒 黒色粒	中世	-	胴部片	
			441	-	須恵器	甕	G・H 18 ～ 20	T16	表土	-	-	-	(外) 格子目タタキ (内) マメツ	(外) J10YR5/1 褐灰 (内) J10YR6/1 褐灰	石英・白色粒・黒色粒・ 褐色粒・角閃石 (多)	中世	-	胴部片内側は磨減が激しい	
442			-	須恵器	甕	F 22・23	T14	表土	-	-	-	(外) 格子目タタキ (内) タタキ	(外) J2.5Y7/2 灰黄 (内) J2.5Y7/1 灰白	黒色粒	中世	-	胴部片		
443			-	須恵器	甕	D・E 22・23	T13	表土	-	-	-	(外) 格子目タタキ (内) マメツ	(外) J5YR7/6 橙 (内) J10YR5/1 褐灰	石英・白色粒 黒色粒	中世	-	胴部片		
444	-		須恵器	甕	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	(外) 綾杉状タタキ (内) 欄目	(外・内) J2.5Y5/1 黄灰	白色粒 (多)	中世	-	胴部片・胎土赤みが残る			
445	-		須恵器	鉢	F・G 20・21	T15	Ⅲ	-	-	-	(外) 工具ナデ、ハケメ (内) 平行線状タタキ	(外) J7.5Y4/1 灰 (内) J5Y5/1 灰	石英・白色粒	中世	-	口縁部片・胎土層状			
446	-		須恵器	鉢	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	(外) ナデ、ユビオサエ (内) ナデ	(外・内) J7.2YR6/3 にぶい褐	石英・白色粒 黒色粒	中世	-	口縁部片 447 と同一個体の可能世			
447	-		須恵器	鉢	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	(外) ナデ (内) ハケメ	(外) J10YR6/2 灰黄褐 (内) J10YR7/2 にぶい黄褐	石英・白色粒 黒色粒	中世	-	胴部片			
81	448		-	須恵器	擂鉢	G・H 18 ～ 20	T16	表土	-	-	-	(外) ナデ (内) ナデ・ハケメ	(外) J10YR8/2 灰白 (内) J10YR7/2 にぶい黄褐	白色粒・黒色粒 (小)	中世	-	口縁部片、瓦質焼成、外面摩耗著しい		
	449		-	須恵器	擂鉢	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	(外) マメツ (内) 欄目	(外) J10YR8/2 灰白 (内) J10YR8/3 浅黄褐	白色粒・黒色粒 褐色粒・角閃石	中世	-	口縁部片、瓦質焼成、欄目7本単位、 胎土精良、外面上位に床付着		
	450		-	須恵器	擂鉢	D・E 22・23	T13	表土	-	-	-	(外) ナデ、マメツ (内) 欄目	(外) J10YR8/3 浅黄褐 (内) J2.5Y8/2 灰白	石英・黒色粒・褐色粒・ 角閃石・金色雲母	中世	-	口縁部片、瓦質焼成、外面上部に床 付着 欄目摩減		
	451		-	須恵器	擂鉢	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	(外) ナデ (外) ナデ、ハケメ	(外) J7.5YR8/6 浅黄褐 (内) J5YR7/6 橙	白色粒・黒色粒 褐色粒	中世	-	口縁部片、		
	452		-	備前 陶器	擂鉢	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	(外) 上部ナデ、部ケズリ (内) 欄目	(外・内) J2.5Y5/1 黄灰	角閃石	中世	-	底部片、欄目 10 本、外側にユビオ サエ痕・胎土精良・胎土織状		
	453		-	備前 陶器	擂鉢	D-23	-	表土	-	-	-	(外) ナデ、ケズリ (内) 欄目	(外) J10YR4/3 にぶい黄褐 (内) J10YR5/3 にぶい黄褐	黒色粒	中世	-	胴部片、欄目9本・胎土精良		
	82	454	-	瓦質 土器	擂鉢	F・G 20・21	T15	SS1	-	(13.8)	-	(内) ハケメ (外) ハケメ	(外・内) J7.5YR8/6 浅黄褐	石英・白色粒 黒色粒	近世 以降	-	瓦質焼成、胎土織状		
84	474	-	瓦質 土器	火鉢	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	(外) ハケメ、ケズリ (内) ハケメ	(外) J7.5YR8/2 灰白 (内) J7.5YR8/3 浅黄褐	石英・白色粒・黒色粒・ 褐色粒・角閃石	近世 以降	-	口縁部片			
	475	-	瓦質 土器	甕	F・G 20・21	T15	表土	-	-	-	(外) ナデ、マメツ (内) ナデ、マメツ	(外・内) J10YR5/3 にぶい黄褐	石英・白色粒・角閃石・ 火山ガラス (白)	近世 以降	-	胴部片、突帯をもつ、胎土織状			

第 23 表 石製品観察表

地点	挿図 番号	掲載 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	時代	備考
西 台 地	18	28	-	砥石	-	G-8	SB4-P6	-	14.23	6.98	6.91	841.0	中世	砂岩製
		29	-	根石?	-	G-8	SB4-P2	-	19.00	14.20	6.35	1490.0	中世	砂岩製
		30	-	基石	-	G-8	SB4-P2	埋土Ⅰ	1.50	1.50	0.35	1.0	中世	ホルンフェルス製
	24	46	-	二次加工・使用痕剥片	不明	D・E-7			3.54	1.80	1.69	10.1	-	チャート製 火打石の可能性あり
	26	49	-	根石	不明	G-8	SL 7 ビット	埋土	29.00	16.80	7.00	4000.0	-	砂岩製
	34	54	-	礎石?	不明	G-9	SF71	埋土Ⅱ	44.10	37.90	8.50	230000.0	-	安山岩
	35	57	-	基石	-	D・E-8	SD1	埋土	1.80	2.20	0.50	3.4	中世	ホルンフェルス製
		58	-	基石	-	D・E-8	SD1	埋土	1.75	2.20	0.30	2.5	中世	頁岩製
	39	69	129	二次加工・使用痕剥片	不明	E・F-7・8	大型土坑	Ⅷ	3.20	2.26	1.20	8.5	中世	黒色チャート製 火打石の可能性あり
	56	251	58	滑石製品	不明	E・F-7・8	大型土坑	Ⅳ	5.92	3.71	1.86	36.3	中世	石鏝の転用品か
		252	-	二次加工・使用痕剥片	石匙?	E・F-7・8	大型土坑	Ⅵ	2.58	4.40	0.80	36.3	不明	黒色チャート製 火打石の可能性あり
		253	-	二次加工・使用痕剥片	火打石?	E・F-7・8	大型土坑	Ⅰ	2.74	2.50	1.80	12.8	中世～近世	黒色チャート製 火打石の可能性あり
		254	-	二次加工・使用痕剥片	火打石?	E・F-7・8	大型土坑	Ⅰ	3.17	22.80	1.40	11.6	中世～近世	黒色チャート製 火打石の可能性あり
		255	-	二次加工・使用痕剥片	火打石?	E・F-7・8	大型土坑	Ⅲ a	3.48	31.50	1.97	20.0	中世～近世	黒色チャート製 火打石の可能性あり
		256	41	礫器	火打石?	E・F-7・8	大型土坑	Ⅱ	7.90	6.30	4.70	248.9	中世～近世	淡い褐色チャート製 上面珪質化火打石の可能性あり
		257	-	基石	-	F-8	大型土坑	Ⅱ a	2.20	2.20	0.60	4.7	中世	頁岩製
		258	-	基石	-	F-8	大型土坑	Ⅱ a	2.20	2.20	0.60	4.6	中世	ホルンフェルス製
		259	-	砥石	提砥石	E・F-7・8	大型土坑	Ⅱ	6.95	1.83	1.07	25.8	中世	頁岩製
		260	-	砥石	-	E・F-7・8	大型土坑	Ⅶ	8.60	9.73	3.23	467.4	中世	頁岩製
		261	-	叩石	-	E・F-7・8	大型土坑	Ⅲ b	12.13	3.20	2.28	146.2	中世	ホルンフェルス製
	67	396	-	二次加工・使用痕剥片	火打石?	F・G-8	-	Ⅰ	3.50	2.50	2.16	19.9	中世～近世	黒色チャート製 火打石の可能性あり
		397	-	滑石製品	-	F・G-7・8	-	Ⅰ	2.30	3.30	1.80	17.4	中世	滑石製石鏝の小片を加工
		398	-	滑石製品	-	G-8	-	Ⅰ	3.90	2.00	1.30	16.6	中世	滑石製石鏝の小片を加工
東 台 地	87	486	-	石斧	-	F・G-20・21	T 15	表土	123.50	73.00	31.00	374.8	-	安山岩
		487	-	砥石	-	F・G-20・21	T 15	表土	13.90	7.20	2.50	343.0	-	安山岩
		488	-	砥石	-	F・G-20・21	T 15	表土	12.00	9.10	5.20	869.0	-	安山岩?凝結凝灰岩?
		489	-	砥石	-	F・G-20・21	T 15	表土	12.30	10.20	4.30	700.0	-	砂岩
		490	-	磨・蔽石	-	F・G-20・21	T 15	表土	7.00	6.80	4.70	335.0	-	上面・右面敲打痕あり
		491	-	火打ち石	-	G・H-18～20	T 16	表土	3.20	2.30	1.90	14.8	-	緑色片岩・二次加工剥片 チャート製
		492	-	基石	-	F・G-20・21	T 15	表土	2.00	1.60	0.90	5.1	-	黒の基石 頁岩製
		493	-	基石	-	D・E-22・23	T 13	表土	1.80	1.60	0.50	2.5	-	白の基石 頁岩製
	88	495	-	鉄器	刀子(包丁)	G・H-18～20	T 16	表土	10.70	4.30	1.30	60.6	-	
		496	-	鉄製品	鉄滓	D-23	-	表土	5.60	6.00	2.10	84.0	-	とりべの下

第 24 表 鉄製品・鉄関連遺物観察表

地点	挿図 番号	掲載 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	時代	備考
西 台 地	18	31	56	鉄製品	鉄鍋	G-8	SB4-P2	埋土	5.10	7.20	0.40	37.0	-	
		32	-	鉄製品	不明	G-9	SB4-P3	埋土	3.70	1.20	0.30	4.0	-	
		33	-	鉄製品	不明	G-9	SB4-P3	埋土	8.90	1.50	0.20	9.0	-	
		34	-	鉄製品	不明	G-9	SB4-P3	埋土	3.85	1.30	0.20	4.0	-	
	55	241	86	鉄製品	鉄鏝	F-7	大型土坑	Ⅲ	7.40	1.80	刃部 0.2 基部 0.4	6.0	中世	雁股鏝 刃部先端欠損
		242	-	鉄製品	鉄鍋	E・F-7・8 地点 No 2	大型土坑	Ⅰ	3.80	4.20	0.20	17.0	中世～近世	口縁部
		243	-	鉄製品	鉄鍋	F・G-7・8	大型土坑	Ⅰ	4.10	4.20	器壁 0.2 底部 0.8	61.0	中世～近世	底部 底面にボタン状突起
		244	-	鉄製品	釘	-	大型土坑	Ⅰ	5.80	2.15	0.60	8.0	近世か	
		245	-	鉄製品	釘	-	大型土坑	Ⅰ	15.20	0.70	0.70	104.0	近世か	
		246	-	鉄製品	不明	E～G-7・8 地点 No3	大型土坑	—	4.50	2.30	1.40	9.0	中世～近世	棒状
		247	-	鉄製品	不明	F-7	大型土坑	Ⅱ下	4.70	1.20	0.60	15.0	中世～近世	鋳造品板状の2個体が癒着
		248	-	鉄滓	杓型鍛冶滓	E～G-7・8 地点 No 2	大型土坑	Ⅱ	7.20	8.70	3.20	226.0	中世～近世	底面厚 2.4 cm
		249	-	取鍋	取鍋	E・F-7・8	大型土坑	Ⅰ	(口径) (6.4)	(器高) (4.0)	(器壁厚) (2.0)	-	中世～近世	陶磁器小杯を転用か
		250	-	輪の羽口	-	E・F-7・8	大型土坑	Ⅶ	3.10	2.90	1.70	-	中世～近世	推定孔径 2.6 cm 鉄付着
	58	301	-	鉄製品	工具	F-8	通路状遺構	入口	(10.5)	輪 0.7 柄 2.0	(2.0)	37.0	-	入口近く
		302	-	鉄製品	釘	E・F-7・8	通路状遺構	入口	6.60	1.80	0.70	11.0	近世か	
		303	-	輪の羽口	-	E・G-10	通路状遺構	ホリキリ	(6.50)	(4.00)	(2.00)	-	中世～近世	推定孔径 4.0cm
	66	389	-	取鍋	取鍋	F・G-7・8	-	Ⅰ	(2.8)	(1.6)	0.8	-	-	
	67	392	-	鉄製品	鑿	D・E-7・8	-	Ⅰ	5.80	2.35	0.60	22.0	中世～近世	
		393	-	鉄製品	金具	G-9	-	Ⅱ	3.90	1.30	0.90	5.0	中世～近世	先端を曲げている螺番か
		394	-	鉄製品	鉄鍋	F・G-7・8	-	Ⅰ	3.00	3.90	0.20	14.0	中世～近世	鋳造品 約 1.0 × 0.5m の孔を有する
		395	-	鉄製品	釘	D・E-7・8	-	-	4.00	0.60	0.40	4.0	中世～近世	
東 台 地	88	495	-	鉄器	刀子(包丁)	G・H-18～20	T 16	表土	10.70	4.30	1.30	60.6	-	
		496	-	鉄製品	鉄滓	D-23	-	表土	5.60	6.00	2.10	84.0	-	とりべの下
		497	-	鉄器	鍋	F・G-20・21	T 15	表土	4.10	3.90	0.60	19.3	-	
		498	-	鉄製品	釘	F・G-20・21	T 15	表土	6.50	1.50	1.10	12.5	-	四角の釘
		499	-	銅製品	煙管吸い口	G・H-18～20	T 16	表土	8.20	1.10	0.10	15.0	-	煙管の吸い口 六角形

第 25 表 木製品観察表

地点	挿図 番号	掲載 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	時代	備考
東谷	73	401	-	木製品	丸杭	F-13	2TR	Ⅵ	49.45	6.90	4.90	-	中世	樹種：マツ属 1439-1500calAD
		402	-	木製品	丸杭	F-13	2TR	Ⅵ	13.00	4.35	3.90	-	中世	1442-1506calAD
		403	-	木製品	不明	F-13	2TR	Ⅵ	24.40	3.65	1.90	-	中世	1430-1475calAD
		404	-	木製品	不明	F-13	2TR	Ⅵ	9.15	2.80	1.45	-	中世	樹種：スギ 1540-1635calAD

第 26 表 土製品・その他観察表

地点	挿図 番号	掲載 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	時代	備考
西谷	9	17	-	瓦	瓦	E～G-4・5	-	I	(6.00)	(6.20)	1.80	-	近代	銘が入るか
		18	-	硯	石製品	E～G-6	-	I	12.30	6.10	2.10	-	近代	頁岩製
西台地	54	231	-	土製品	土鍾	E～G-7・8	大型土坑	Ⅲ	(1.40)	2.30	2.20	10.0	中世～近世	5Y5/1 灰
		232	101	土製品	土鍾	F-8	大型土坑	Ⅲ	3.20	1.30	1.30	5.0	中世～近世	10YR6/3 にぶい黄橙
		233	-	土製品	土鍾	E・F-7・8	大型土坑	Ⅵ	3.50	2.40	2.30	18.0	中世～近世	10YR6/4 にぶい黄橙
		234	-	土製品	土鍾	F-7	大型土坑	I	3.50	2.10	2.30	16.5	中世～近世	2.5Y6/3 にぶい黄
		235	-	土製品	土鍾	F・G-7・8	大型土坑	I	3.90	1.10	1.10	4.0	中世～近世	5YR5/8 明赤褐
		236	-	陶製品	馬の尻がしい	F・G-7・8	大型土坑	I	5.50	1.40	1.30	8.6	近世	7.5Y8/1 灰白 無軸
		237	-	陶製品	馬の尻がしい	F・G-7・8	大型土坑	I	(4.00)	1.30	1.20	5.2	近世	5G7/1 明緑灰
		238	-	土製品	不明	E・F-7・8	大型土坑	Ⅵ	2.60	2.60	1.30	-	中世～近世	表面ハケメを施す 10YR5/3 にぶい黄褐 石英、白色粒、赤色粒 黒色粒を含む
		239	-	瓦	平瓦	E・F-7・8	大型土坑	Ⅳ b	(6.20)	(5.00)	1.80	-	近世以降	
		240	-	瓦	丸瓦	E・F-7・8	大型土坑	I	(9.00)	(5.80)	2.40	-	中世か	布目痕あり
	58	295	-	瓦	平瓦	F-9	通路状遺構	ホリキリ	11.60	5.90	1.90	-	中世	布目痕あり
		296	-	瓦	平瓦	F-8	通路状遺構	入口	9.00	7.40	2.00	-	近代	
		297	-	瓦	平瓦	F・G-10	通路状遺構	ホリキリ	7.25	4.50	1.90	-	近代	
		298	-	瓦	丸瓦	E・F-7・8	通路状遺構	入口	6.40	3.60	1.80	-	近世か	
		299	-	瓶	透明 ガラス瓶	E・F-7・8	通路状遺構	Ⅱ入口	6.10	3.30	-	-	明治～ 昭和初期	銘「みや古染」 毛染め用
		300	-	瓶	青色 ガラス瓶	E・F-7・8	通路状遺構	Ⅱ入口	6.00	2.50	-	-	明治～ 昭和初期	銘「谷回春堂」「初からす」 毛染め用
	65	382	-	瓦	軒先瓦	D・E-7・8	-	I	4.60	6.00	2.20	-	中世～近世	
		383	-	瓦	平瓦	D・E-7・8	-	I	5.70	5.30	1.70	-	中世～近世	
	66	384	-	土製品	土鍾	D・E-7・8	-	I	3.40	1.60	1.45	6.2	中世～近世	孔径 5 mm 10YR8/2 灰白
		385	-	円盤状加工品	薩摩焼製	D・E-7・8	-	I	3.40	3.40	0.90	14.8	近世	苗代川系の鉢の底部片 を加工したか
		386	-	円盤状加工品	瓦質土器製	D・E-7・8	-	I	3.20	4.25	1.15	24.6	中世～近世	瓦質土器(甕)の胴部片の転用か。 内外面黒色を呈する
		387	-	円盤状土製加工品	瓦質土器製	F・G-7・8	-	I	5.40	4.00	1.00	15.5	中世	瓦質土器(甕)の胴部片の転用か。 浅い沈線によって格子目様の文様を描く
		388	-	土製品	土人形?	F・G-7・8	-	I	(2.10)	(3.30)	(2.80)	-	近世	焼成硬質 胎土精良 5YR6/6
		390	-	瓶	透明 ガラス製	D・E-7・8	-	I	(器高)7.5	3.30	-	-	近代	
		391	-	貝	-	不明(西台地)	-	I	3.80	1.80	1.80	-	不明	巻貝の芯
東台地	86	484	-	瓦	軒平	G・H-18～20	T16	表土	-	-	2.00	-	中世	鹿兒島式瓦 B 種 文様区高2.5cm
		485	-	瓦	軒丸	D・E-22・23	T13	表土	-	-	-	-	中世	-
	88	494	-	石製品	石皿	F・G-20・21	T15	表土	(20.00)	-	-	-		石材滑石に類似 17世紀頃から近代にいたるまで孝氏朝鮮で 使用されてきた形態

第V章 自然科学分析

第1節 概要

新城跡の自然科学分析は、①年代測定・種実同定・樹種同定（報告 No. 1, 2）, ②放射性炭素年代（報告 No. 3, 4）, ③蛍光X線分析（報告 No. 5）, の3種類で、①～②の分析は外部委託により実施した。委託先は（株）パレオ・ラボ、パリノ・サーヴェイ（株）、（株）加速器分析研究所の3社である。③の分析は県立埋蔵文化財センターにて実施した。本節では分析の種類別に分けて掲載する。

第2節 分析結果の報告

1 年代測定・種実同定・樹種同定

報告 No. 1（株）パレオ・ラボ（2024年1月報告）

新城跡の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史

・山形秀樹・Zaur Lomtadze・三谷智広

1. はじめに

鹿児島県新城跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ試料を用いて樹種同定も行われている（別項参照）。

2. 試料と方法

試料は、新城跡の遺構から出土した炭化材10点（試料 No. 6～15：PLD-51355～51364）である。なお、試料 No. 6～8（PLD-51355～51357）、試料 No. 10（PLD-51359）、試料 No. 13（PLD-51362）には、最終形成年輪が残っていた。

測定試料の情報、調製データは第27表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

第28表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第89図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記し

た ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

放射性炭素年代測定の結果について、 2σ 暦年代範囲（確率95.45%）に着目して整理する。

炉跡10号の試料No.6（PLD-51355）は、1472-1527 cal AD（40.87%）および1552-1634 cal AD（54.58%）で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

炉跡7号の試料No.7（PLD-51356）は、1457-1523 cal AD（55.38%）および1573-1630 cal AD（40.07%）で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

炉跡6号の試料No.8（PLD-51357）は、1477-1528 cal AD（35.04%）、1541-1545 cal AD（1.05%）、1550-1634 cal AD（59.36%）で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

炉跡5号の試料No.9（PLD-51358）は、1476-1528 cal AD（35.74%）、1541-1545 cal AD（0.95%）、1550-1634 cal AD（58.77%）で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

掘立柱建物跡4号P2の試料No.10（PLD-51359）は、1407-1439 cal AD（95.45%）で、15世紀初頭～前半の暦年代を示した。これは、室町時代に相当する。

炉跡11号の試料No.11（PLD-51360）は、1660-1689 cal AD（20.20%）、1729-1789 cal AD（47.16%）、1791-1808 cal AD（9.85%）、1924-1954 cal AD（18.24%）で、17世紀後半～19世紀初頭および20世紀前半～中頃の暦年

代を示した。これは、江戸時代前期～後期および昭和時代に相当する。

炉跡 2 号の試料 No. 12 (PLD-51361) は, 1475-1528 cal AD (37.99%), 1543-1544 cal AD (0.26%), 1551-1634 cal AD (57.20%) で, 15 世紀後半～17 世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

炉跡 4 号の試料 No. 13 (PLD-51362) は, 1504-1597 cal AD (76.30%) および 1617-1642 cal AD (19.15%) で, 16 世紀初頭～17 世紀中頃の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

土坑 1 号の試料 No. 14 (PLD-51363) は, 1397-1433 cal AD (95.45%) で, 14 世紀末～15 世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代に相当する。

炉跡 1 号の試料 No. 15 (PLD-51364) は, 1510-1592 cal AD (73.56%) および 1619-1646 cal AD (21.89%) で, 16 世紀初頭～17 世紀中頃の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料のうち、試料 No. 6～8 (PLD-51355～51357), 試料 No. 10 (PLD-51359), 試料 No. 13 (PLD-51362) には最終形成年輪が残っており、測定結果は試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代を示していると考えられる。

また、これら以外の試料（試料 No. 9, No. 11, No. 12,

No. 14, No. 15) については、最終形成年輪が残っていないため、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C 年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

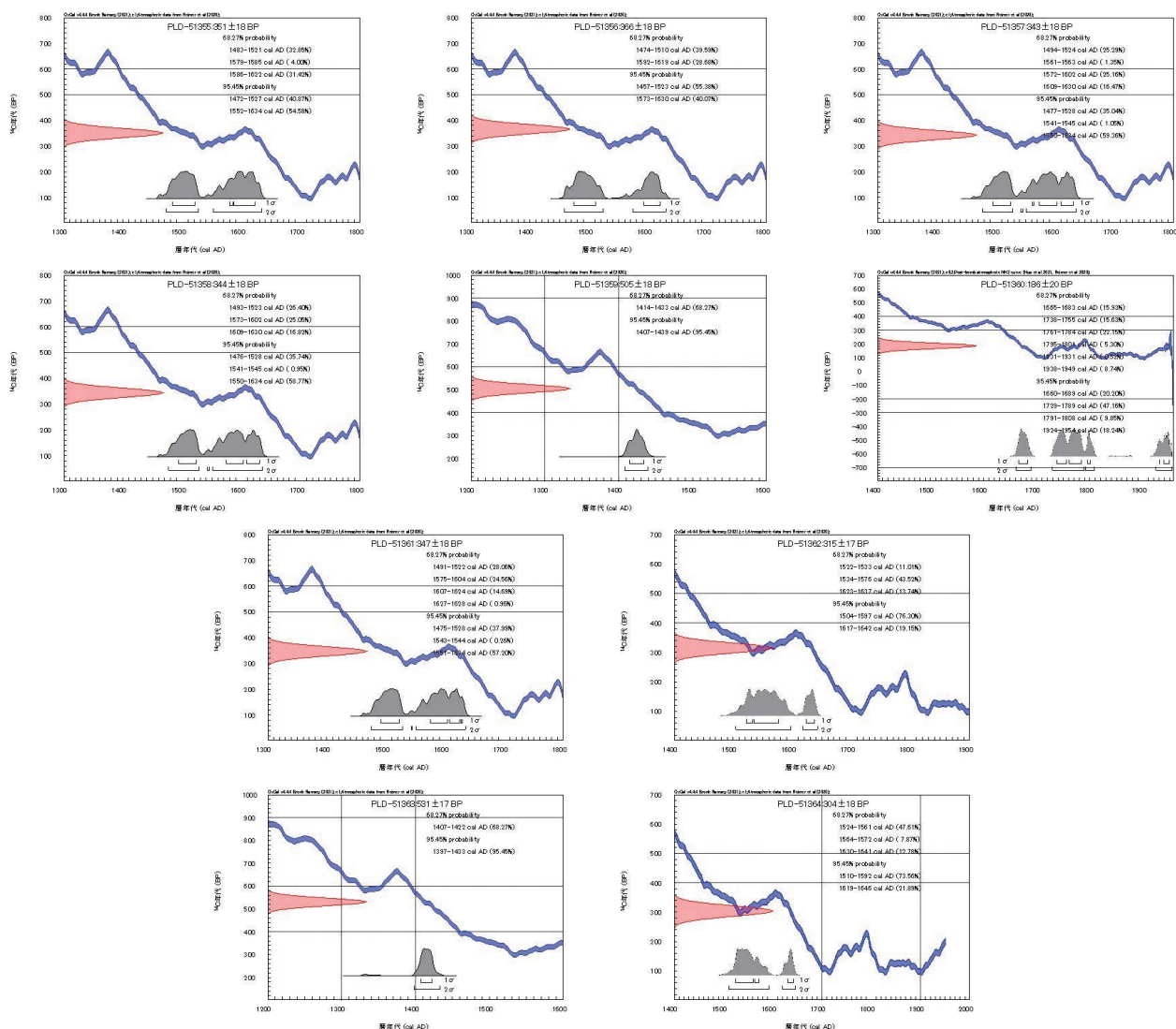
Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第 27 表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51355	試料 No.6 遺構：炉跡 10 号	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51356	試料 No.7 遺構：炉跡 7 号	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51357	試料 No.8 遺構：炉跡 6 号	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51358	試料 No.9 遺構：炉跡 5 号	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51359	試料 No.10 遺構：掘立柱建物跡 4 号 P2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51360	試料 No.11 遺構：炉跡 11 号	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51361	試料 No.12 遺構：炉跡 2 号	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51362	試料 No.13 遺構：炉跡 4 号	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51363	試料 No.14 遺構：土坑 1 号	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-51364	試料 No.15 遺構：炉跡 1 号	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)

第 28 表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-51355 試料 No.6	-27.74 \pm 0.18	351 \pm 18	350 \pm 20	1483-1521calAD(32.85%) 1579-1585calAD(4.00%) 1586-1622calAD(31.42%)	1472-1527calAD(40.87%) 1552-1634calAD(54.58%)
PLD-51356 試料 No.7	-25.98 \pm 0.18	366 \pm 18	365 \pm 20	1474-1510calAD(39.59%) 1592-1619calAD(28.68%)	1457-1523calAD(55.38%) 1573-1630calAD(40.07%)
PLD-51357 試料 No.8	-26.90 \pm 0.18	343 \pm 18	345 \pm 20	1494-1524calAD(25.29%) 1561-1563calAD(1.35%) 1572-1602calAD(25.16%) 1609-1630calAD(16.47%)	1477-1528calAD(35.04%) 1541-1545calAD(1.05%) 1550-1634calAD(59.36%)
PLD-51358 試料 No.9	-26.73 \pm 0.18	344 \pm 18	345 \pm 20	1493-1523calAD(26.40%) 1573-1602calAD(25.05%) 1609-1630calAD(16.82%)	1476-1528calAD(35.74%) 1541-1545calAD(0.95%) 1550-1634calAD(58.77%)
PLD-51359 試料 No.10	-29.17 \pm 0.18	505 \pm 18	505 \pm 20	1414-1433calAD(68.27%)	1407-1439calAD(95.45%)
PLD-51360 試料 No.11	-26.63 \pm 0.22	186 \pm 20	185 \pm 20	Post-bombNH2curve(Huaetal2021,Reimeretal2020): 1665-1683calAD(15.93%) 1738-1755calAD(15.63%) 1761-1784calAD(22.15%) 1795-1801calAD(5.30%) 1931-1931calAD(0.52%) 1938-1949calAD(8.74%)	Post-bombNH2curve(Huaetal2021,Reimeretal2020): 1660-1689calAD(20.20%) 1729-1789calAD(47.16%) 1791-1808calAD(9.85%) 1924-1954calAD(18.24%)
PLD-51361 試料 No.12	-26.14 \pm 0.18	347 \pm 18	345 \pm 20	1491-1522calAD(28.06%) 1575-1604calAD(24.56%) 1607-1624calAD(14.69%) 1627-1628calAD(0.96%)	1475-1528calAD(37.99%) 1543-1544calAD(0.26%) 1551-1634calAD(57.20%)
PLD-51362 試料 No.13	-25.41 \pm 0.18	315 \pm 17	315 \pm 15	1522-1533calAD(11.01%) 1534-1576calAD(43.52%) 1623-1637calAD(13.74%)	1504-1597calAD(76.30%) 1617-1642calAD(19.15%)
PLD-51363 試料 No.14	-27.41 \pm 0.18	531 \pm 17	530 \pm 15	1407-1422calAD(68.27%)	1397-1433calAD(95.45%)
PLD-51364 試料 No.15	-24.84 \pm 0.18	304 \pm 18	305 \pm 20	1524-1561calAD(47.61%) 1564-1572calAD(7.87%) 1630-1641calAD(12.78%)	1510-1592calAD(73.56%) 1619-1646calAD(21.89%)



第 89 図 暦年校正年代グラフ

新城跡から出土した炭化種実

バンダリ スタルシャン(パレオ・ラボ)

1. はじめに

鹿児島県阿久根市の新城跡の焼土跡から出土した炭化種実の同定結果を報告し、当時の利用植物や植生について明らかにする。

2. 試料と方法

分析試料は、水洗済みの5試料で、中世～近世の炉跡10号から採取された4試料(炭化種子①～炭化種子④)と、炉跡7号から採取された1試料(炭化種子①)である。

土壌の採取から水洗、種実の抽出までの作業は、公益財団法人鹿児島県文化振興財団によって行われた。土壌の水洗および炭化物の回収は、浮遊物を回収後、2.0mmと0.45mm目の篩を使用して行われた。水洗量は不明である。

種実の同定・計数は、パレオ・ラボにて、肉眼および実体顕微鏡下で行い、写真撮影は実体顕微鏡で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。炭化種実以外には礫などがあり、およそその数を記号(+)で表記した。試料は、公益財団法人鹿児島県文化振興財団に保管されている。

3. 結果

同定した結果、草本植物のオオムギ炭化種子(穎果)とイネ炭化種子(穎果)の2分類群が確認された。さらに、未炭化のアキノノゲシ属果実も得られたが、遺跡の立地から当時の未炭化の種実が遺存する可能性は極めて低いと考えられるため、今回は検討の対象外とした(第29表)。

以下に、炭化種実の産出傾向を試料別に記載する(同定不能炭化種実は除く)。

炉跡10号炭化種子①：オオムギが4点得られた。
炉跡10号炭化種子②：オオムギが2点得られた。
炉跡10号炭化種子③：オオムギが4点とイネが1点得られた。

第29表 新城跡から出土した炭化種実(括弧内は破片数)

分類群	試料名	焼土跡				
		炉跡10号				炉跡7号
		炭化種子①	炭化種子②	炭化種子③	炭化種子④	炭化種子①
オオムギ	炭化種子(穎果)	4	2	4		
イネ	炭化種子(穎果)			1		
未炭化						
アキノノゲシ属	果実					1
種実ではない	礫など		(+)	(+)	(+)	

+: 1-9

炉跡10号炭化種子④：同定可能な炭化種実は得られなかった。

炉跡7号炭化種子①：同定可能な炭化種実は得られなかった。

次に、産出した炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名や順番については米倉・梶田(2003-)に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観は長楕円形、側面観は楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分が中央付近にある。背面の中央部下端には三角形の胚がある。長さ5.4mm、幅2.3mm、厚さ1.9mm(図版1-1)、長さ4.7mm、幅3.0mm、厚さ2.5mm(図版1-2)。

(2) イネ *Oryza sativa* L. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は長楕円形。一端に胚が残る。両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ4.5mm、幅2.2mm。

4. 考察

炉跡10号からは、栽培植物で畑作物のオオムギとイネが得られた。食用となる部位である種子(穎果)が出土しており、一部に粃殻が残っているため、粃が焼けて堆積したと考えられる。

引用文献

米倉浩司・梶田 忠(2003-) BG Plants 和名-学名インデックス(YList), <http://ylist.info>



新城跡から出土した炭化種実

1、2. オオムギ炭化種子(穎果)(炉跡10号、炭化種子③)、3. イネ炭化種子(穎果)(炉跡10号、炭化種子③)

第90図 新城跡から出土した炭化種実

新城跡出土炭化材の樹種同定

小林克也(パレオ・ラボ)

1. はじめに

鹿児島県阿久根市の新城跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、鍛冶関連遺構である炉跡 10 号、2 号、4 号、7 号、6 号、5 号、掘立柱建物跡 4 号 P 2、土坑 1 号から各 1 点出土した炭化材、計 8 点である。発掘調査所見では、時期については、15～16 世紀頃と考えられている。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柃目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製 JSM-IT200)にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属 1 分類群と、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)とツバキ属、トベラの 3 分類群の、計 4 分類群がみられた。マツ属複維管束亜属が最も多く 3 点で、ツバキ属が 2 点、アカガシ亜属とトベラが各 1 点みられた。また、材が収縮して散孔材までの同定となった試料が 1 点みられた。同定結果を第 30 表に、一覧を第 31 表に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、第 91 図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 図版 1 1a-1c (No. 6), 2c (No. 7)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

(2) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 図版 1 3a-3c (No. 14)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ

強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(3) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版 1 4a-4c (No. 12)

角張った小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端 1～3 列が直立する異性で、幅 1～3 列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

(4) トベラ *Pittosporum tobira* (Thunb.) W.T.Aiton トベラ科 図版 1 5a-5c (No. 8)

小型の道管が単独ないし数個複合し、接線～斜線方向に配列する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内腔にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端 1 列が直立する異性で、幅 1～4 列となる。

トベラは、岩手県以南ないし新潟県以南の本州、四国、九州、沖縄の海岸に分布する、常緑小高木の広葉樹である。現在では材の利用は顕著でなく、薪炭材として利用される程度である。

(5) 散孔材 Diffuse porous wood 図版 1 6a-6c (No. 10)

小型の道管が単独ないし 2～3 個複合し、やや密に散在する散孔材である。放射組織は被熱による収縮で形状確認が行えない状態となっており、散孔材までの同定とした。

4. 考察

同定の結果、土坑 1 号の炭化材はアカガシ亜属、鍛冶関連遺構である炉跡から出土した炭化材はマツ属複維管束亜属とツバキ属、トベラ、掘立柱建物跡の柱穴の試料は散孔材であった。

土坑の炭化材の用途は不明であるが、鍛冶関連遺構から出土した炭化材は、鍛冶の際の燃料材であると考えられる。また掘立柱建物跡の柱穴の炭化材は、柱の可能性が考えられる。

鍛冶関連遺構から出土した炭化材は、いずれも炭窯で焼成された炭製品であると考えられるが、マツ属複維管束亜属およびツバキ属、トベラは、薪炭材として普通に利用される樹種である(伊東ほか, 2011)。

また土坑から出土したコナラ属アカガシ亜属は、堅硬な樹種であるため、建築材や木製品としても有用で、薪炭材としても利用される樹種である(伊東ほか, 2011)。

マツ属複維管束亜属とアカガシ亜属、ツバキ属については遺跡周辺に生育していた樹木を伐採利用していたと考えられるが、トベラは海岸付近に分布する樹種であり、海岸付近で伐採して新城まで持ってきていた可能性が考えられる。

引用文献

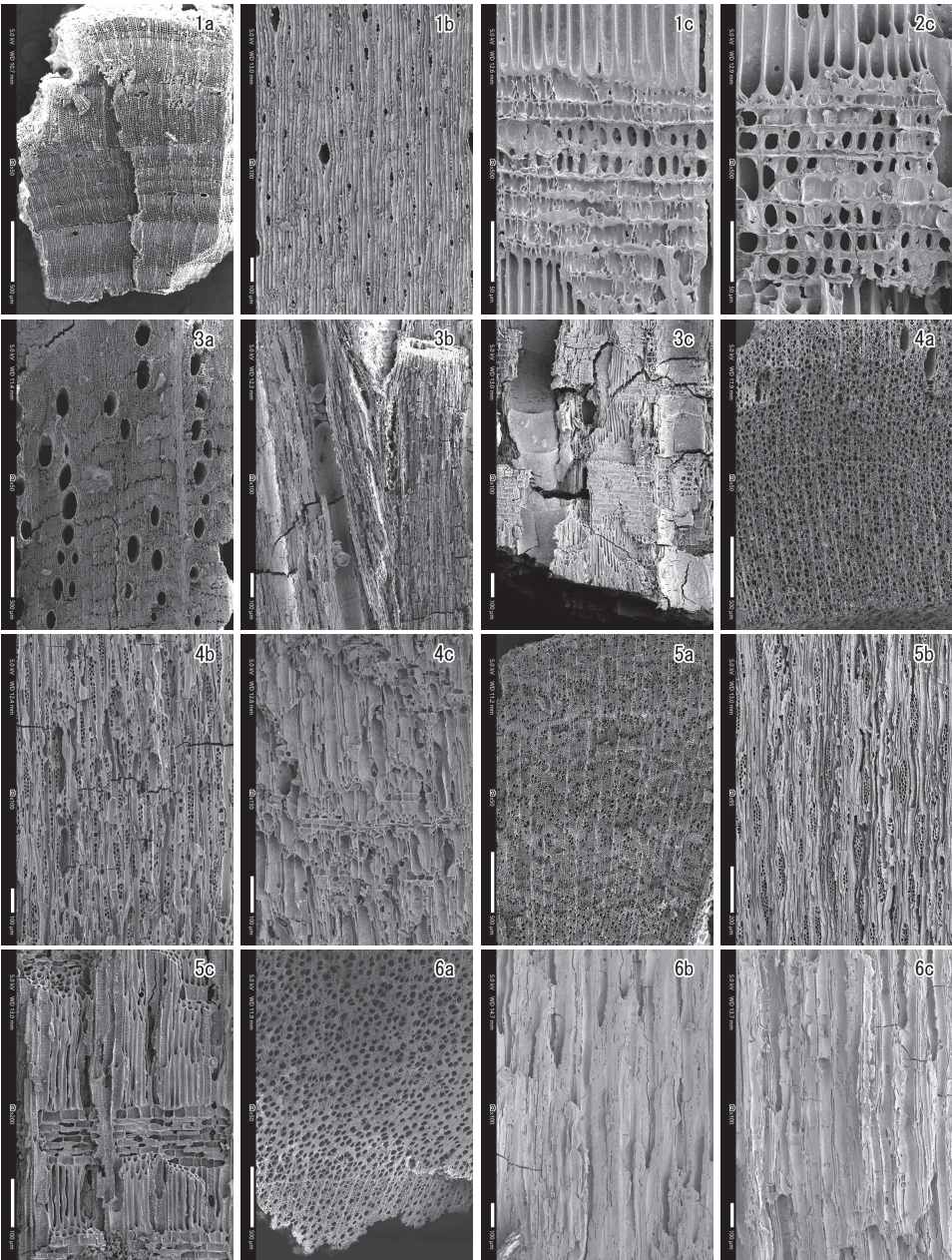
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日
本有用樹木誌. 238p, 海青社.

第 30 表 新城跡出土炭化材の樹種同定結果

樹種/遺構	土坑 1 号	炉跡10号	炉跡2号	炉跡4号	炉跡7号	炉跡6号	炉跡5号	掘立柱 建物跡4号 2P	合計
マツ属複維管束亜属		1			1		1		3
コナラ属アカガシ亜属	1								1
ツバキ属			1	1					2
トベラ					1				1
散孔材								1	1
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	8

第 31 表 新城跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	出土遺構	種類	樹種	時期	年代測定番号
6	炉跡 10 号	炭化材	マツ属複維管束亜属	15 世紀～16 世紀頃	PLD-51355
7	炉跡7号	炭化材	マツ属複維管束亜属	15 世紀～16 世紀頃	PLD-51356
8	炉跡6号	炭化材	トベラ	15 世紀～16 世紀頃	PLD-51357
9	炉跡5号	炭化材	マツ属複維管束亜属	15 世紀～16 世紀頃	PLD-51358
10	掘立柱 建物跡4号 P2	炭化材	散孔材	15 世紀～16 世紀頃	PLD-51359
12	炉跡2号	炭化材	ツバキ属	15 世紀～16 世紀頃	PLD-51361
13	炉跡4号	炭化材	ツバキ属	15 世紀～16 世紀頃	PLD-51362
14	土坑 1 号	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	15 世紀～16 世紀頃	PLD-51363



図版 1 新城跡出土炭化材の
走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No. 6)
2c. マツ属複維管束亜属 (No. 7)
3a-3c. コナラ属アカガシ亜属
(No. 14)
4a-4c. ツバキ属 (No. 12)
5a-5c. トベラ (No. 8)
6a-6c. 散孔材 (No. 10)
a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面

第 91 図 新城跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

はじめに

新城跡は鹿児島県阿久根市山下に位置する遺跡である。本報告では、出土試料の種類を知る目的で、種実同定、マイクロスコープ観察、樹種同定を行う。また、放射性炭素年代測定を行い、遺跡についての年代観を考察する。

1. 試料

試料は樹種同定、種実同定の結果と合わせて第32表に示す。年代測定試料についても、種類を知る目的で種実や樹種の同定を行っている。なお、試料番号5は金属に薄く付着した木材であり、大部分が金属に置換されているため、放射性炭素年代測定および通常の樹種同定が困難である。このため、マイクロスコープで観察を行い、分析については代替試料で対応した。

2. 分析方法

(1) 種実同定

双眼実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴から種類を同定する。同定した試料は、年代測定に用いた。

(2) マイクロスコープ観察

試料が脆弱であること、鉄製品に付着した木材は薄く、一部を切り取っても木口面が広範囲に観察できる状態にはならないこと、鉄さびによって木材が置換・癒着していることから、表面部分をデジタルマイクロスコープ(キーエンス VHX-1000)で観察し、その形態的特徴から、同定を試みる。

(3) 樹種同定

材は、剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の切片を作成する。ガムクロールで封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

(4) 放射性炭素年代測定

塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1 mol/Lである。なお、微量な試料や脆弱な試料は、アルカリの濃度を薄くする(AaA)と記述。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge 3を連結した自動化

装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1 mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C 6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C 1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.4 (Bronk, 2009)、較正曲線は、Intcal20 (Reimer et al., 2020)、Bomb21 NH 2 (Hua et al., 2021)である。

3. 結果

(1) 種実同定の結果

試料番号1, 2, 8はオオムギ、試料番号3はマツ属複維管束亜属と不明である。試料番号4は、キク科の果実と思われるが、炭化していないため、後代の混入の可能性がある。以下に検出された炭化種実の形態的特徴を記す。

・マツ属複維管束亜属(*Pinus* subgen. *Diploxylo*)
マツ科

翼は欠損しており、本体のみ残る。大きさは長さ7 mm、幅4 mm程度。本体は狭楕円形でへその方は尖る。側面の陵がある。種子表面は粗面。

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1~15細胞高。

・オオムギ(*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属
穎果は炭化しており黒色、長さ5 mm、幅3.9 mm、厚さ2 mm程度のやや偏平な紡錘状長楕円体、両端はやや尖る。腹面正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡がある。

・キク科(Compositae)

大きさは3 mm程度。扁平で、表面は粗面。断面は菱形。アザミの類に似る。

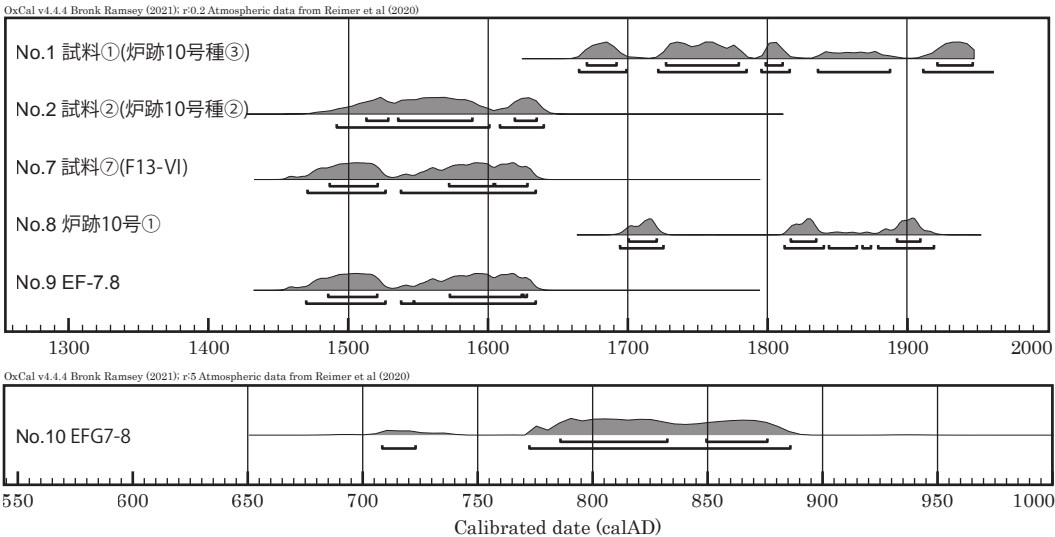
第 32 表 試料一覧・種実・樹種同定結果

試料番号	試料名		性状	種類	備考
1	試料① (炉跡 10 号種③)	試料 R601 資料 3	炭化種実	オオムギ (4)	年代測定試料
2	試料② (炉跡 10 号種②)	試料 R602 (R5) 資料 2	炭化種実	オオムギ (2)	年代測定試料
3	試料③ (炉跡 10 号埋土)	試料 R603	炭化種実	マツ属 (1)、不明 (1)	年代測定試料 (modern)
4	試料④ (炉跡7号Ⅱ層)	試料 R604	種実	キク科 (1)	年代測定試料 (modern)
5	試料⑤	試料 R605	鉄工具の柄	広葉樹	
6	試料⑥ (F13- VI)	試料 R606	木材	マツ属複雑管束亜属	掲載 No401
7	試料⑦ (F13- VI)	試料 R607	木材	スギ	年代測定試料 掲載 No404
8	炉跡 10 号①	資料 1 (R5)	炭化種実	オオムギ (4)	年代測定試料
9	EF-7.8	No.2 大型土坑 入口埋土一括	炭化材	スギ	年代測定試料
10	EFG7-8	大型土坑 炭化物 V層	炭化材	タブノキ属	
11	SL10		炭化材	クスノキ科 ?	年代測定試料

第 33 表 放射性炭素年代測定結果

No.	試料名	性状	方法	補正年代 BP (暦年較正用)	δ 13C (‰)	暦年較正年代										Code No.		
						年代値											確率%	
1	試料① (炉跡 10 号種③)	炭化種実 (オオムギ)	AaA	160 ± 20 (160 ± 22)	-26.65 ± 0.19	σ	cal AD	1671	-	cal AD	1692	279	-	258	calBP	12.9	PLD-53940	
							cal AD	1727	-	cal AD	1779	223	-	172	calBP	31.8		
							cal AD	1798	-	cal AD	1810	153	-	141	calBP	7.5		
							cal AD	1919	-	cal AD	1944	31	-	6	calBP	16.2		
							cal AD	1666	-	cal AD	1699	285	-	251	calBP	16.4		
						2 σ	cal AD	1722	-	cal AD	1784	229	-	166	calBP	35.3		
							cal AD	1795	-	cal AD	1815	156	-	136	calBP	9.7		
							cal AD	1835	-	cal AD	1886	116	-	65	calBP	12.9		
							cal AD	1909	-	cal AD	...	41	-	...	calBP	21.1		
							2	試料② (炉跡 10 号種②)	炭化種実 (オオムギ)	AaA	320 ± 20 (322 ± 22)	-28.51 ± 0.18	σ	cal AD	1515	-		cal AD
cal AD	1538	-	cal AD	1590	413	-								360	calBP	43.5		
cal AD	1620	-	cal AD	1636	330	-								315	calBP	12.6		
cal AD	1494	-	cal AD	1602	456	-								348	calBP	75.9		
cal AD	1610	-	cal AD	1641	341	-								310	calBP	19.5		
2 σ	cal AD	1489	-	cal AD	1523	462							-	428	calBP	27.2	PLD-53944	
	cal AD	1574	-	cal AD	1627	377							-	323	calBP	41.1		
	cal AD	1472	-	cal AD	1530	478							-	421	calBP	37.3		
	cal AD	1540	-	cal AD	1635	411							-	315	calBP	58.2		
	8	炉跡 10 号①	炭化種実 (オオムギ)	AaA	70 ± 25 (70 ± 23)	-26.37 ± 0.2							σ	cal AD	1701	-		cal AD
cal AD							1815	-	cal AD	1834	135	-		117	calBP	21.7		
cal AD							1890	-	cal AD	1908	61	-		42	calBP	23.6		
cal AD							1694	-	cal AD	1725	256	-		225	calBP	27.9		
cal AD							1811	-	cal AD	1917	140	-		33	calBP	67.6		
2 σ							cal AD	1488	-	cal AD	1522	463	-	428	calBP	28.1	PLD-53951	
							cal AD	1575	-	cal AD	1626	376	-	325	calBP	40.2		
							cal AD	1471	-	cal AD	1530	479	-	421	calBP	37.9		
							cal AD	1540	-	cal AD	1635	411	-	315	calBP	57.5		
							10	EFG7-8	炭化材 (タブノキ属)	AAA	1210 ± 25 (1212 ± 23)	-16.21 ± 0.18	σ	cal AD	786	-		cal AD
cal AD	849	-	cal AD	876	1101	-								1075	calBP	23.5		
cal AD	708	-	cal AD	723	1242	-								1228	calBP	3.8		
cal AD	772	-	cal AD	886	1178	-								1065	calBP	91.6		
2 σ	cal AD	786	-	cal AD	832	1165								-	1118	calBP	44.8	PLD-53952
	cal AD	849	-	cal AD	876	1101							-	1075	calBP	23.5		
	cal AD	708	-	cal AD	723	1242							-	1228	calBP	3.8		
	cal AD	772	-	cal AD	886	1178							-	1065	calBP	91.6		
	cal AD	786	-	cal AD	832	1165							-	1118	calBP	44.8		

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68.2% が入る範囲) を年代値に換算した値。
4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaA はアルカリ濃度を薄めて処理したことを示す。
5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4 を使用
- 6) 暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用
7) 校正データセットは Intcal20,Bomb21 NH2 を使用。
8) 校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が 68.2%、2 σ が 95.4% である



第 92 図 暦年較正結果

(2) マイクロスコープ観察

観察の結果、3の木口面と板目面は観察不可である。柾目面(第93図の3)のみ観察できた。道管がみられることから広葉樹であることは確かだが、その他の特徴は保存状態が悪くて観察できなかったため、種類は不明である。

(3) 樹種同定

結果を第32表に示す。検出された樹種は、生材はマツ属複雑維管束亜属とスギ、炭化材はスギとタブノキ?であった。以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。

・マツ属 (*Pinus*) マツ科

軸方向組織をみると、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・タブノキ属 (*Persea*) クスノキ科

散孔材で管壁は厚く、単独および2～3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔もしくは階段穿孔を有し、壁孔は交互状。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状。

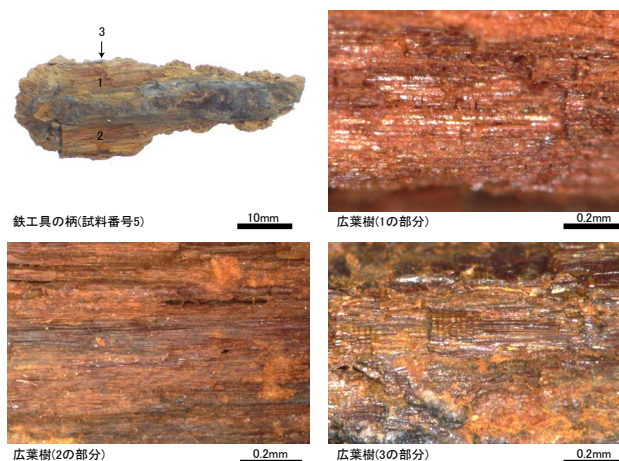
(4) 放射性炭素年代測定

結果を第33表、第92図に示す。炭化材は定法での分析処理が可能であり、測定に必要なグラフアイトは十分得られている。同位体補正を行った値は、「No. 1」が $160 \pm 20\text{BP}$ 、「No. 2」が $320 \pm 20\text{BP}$ 、「No. 7」が $350 \pm 20\text{BP}$ 、「No. 8」が $70 \pm 25\text{BP}$ 、「No. 9」が $350 \pm 20\text{BP}$ 、「No. 10」が $1210 \pm 25\text{BP}$ である。また、「No. 3」および「No. 4」は、放射性炭素年代測定の結果、現代のものであることが分かった。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。2 σ の値は、「No. 1」が ca 1 AD1666 以降、「No. 2」が ca 1 AD1494～1641、「No. 7」が ca 1 AD1472～1635、「No. 8」が ca 1 AD1694～1917、「No. 9」が ca 1 AD1471～1635、「No. 10」が ca 1 AD708～886 である。

暦年で見ると No. 1 は 17 世紀以降、No. 2, No. 7, No. 9

第93図 種実・マイクロスコープ観察



第 93 図 種実・マイクロスコープ観察

は、15～17世紀、No. 8 は 17～20 世紀で、No. 10 は 8～9 世紀である。

4. 考察

炭化している種実は、オオムギとマツ属である。オオムギは、食用のために渡来した栽培種で、弥生時代以降、全国各地で出土例がみられる。当時の栽培、利用が示唆される。また、マツ属は炭化材でも出土しており、周辺に生育していた可能性がある。

マイクロスコープで観察を行った結果、広葉樹であることはわかったが、保存状態が悪く、樹種を明らかにすることはできなかった。

検出された生材はどちらも針葉樹であり、マツ属複雑維管束亜属とスギであった。マツ属複雑維管束亜属は木杭として出土している。木杭などの杭材は遺跡周辺の植生を反映しやすい傾向にある。マツ属複雑維管束亜属は植生破壊が進んだ場所に先駆的に侵入して二次林を構成することから、人里近くに多い樹木である。材は、樹脂を多く含み、水湿に強く、保存性が良い。そのため、建築材や土木材に多く利用されている。

スギは木器に使用されていた。スギは多湿な場所を好むため、谷沿いや湧水池周辺などに生育する。材は、水湿に強く、軽軟で割裂しやすく曲げに強く、加工もしやすい良材である。また、樹木は高い巨木になり、太くまっすぐな材が得やすいことから、建築材や施設材、器具

材，曲物などで頻繁に用いられる。

以上のことから，どちらの樹種も用途に合わせて材を利用されていると考えられる。また，木製品用材データベースを見ても，どちらの樹種も出土が確認できる。

炭化材は，スギとタブノキ属である。微細であり，用途不明であるが，燃料材等に用いられた可能性がある。いずれも自生可能な種類であり，周辺から採取し，利用したものと思われる。

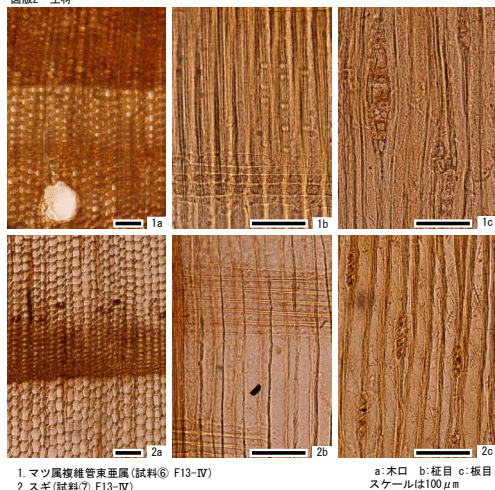
引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- Hua Q., Turnbull J. C., Santos G. M., Rakowski A. Z., Ancapichún S., De Pol-Holz R., Hammer S., Lehman S. J., Levin I., Miller J.B., Palmer, J. G., & Turney C. S. M., 2021, Atmospheric Radiocarbon For The Period 1950-2019. *Radiocarbon*, 63, 1-23.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

伊東隆夫・山田昌久（編），2012，木の考古学 出土木製品用材データベース．海青社，449p.

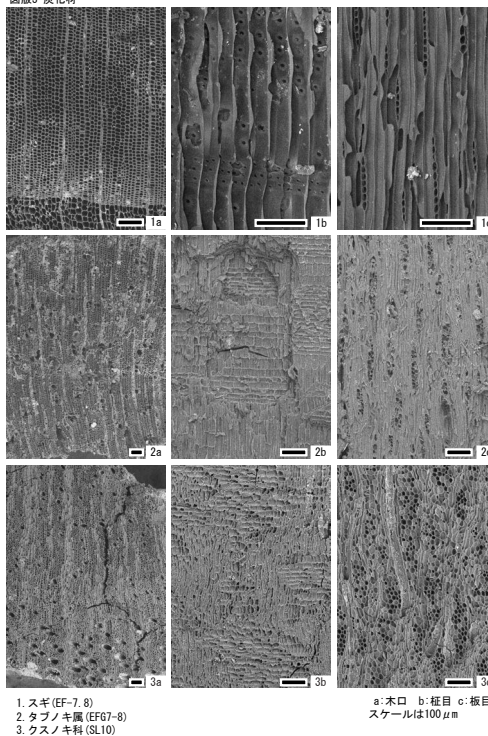
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0 -55 cal kBP) . *Radiocarbon*, 62, 1-33.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Stuiver M., & Polach A.H., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修），海青社，122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版2 生材



第 94 図 生材

図版3 炭化材



第 95 図 炭化材

2 放射性炭素年代年代測定(AMS測定)

報告No.3 (株)加速器分析研究所(2024年3月報告)

1. 測定対象試料

新城跡の測定対象試料は、EF78 くぼ地埋土IX層から出土した炭化物6点とF-13のVI層から出土した生木3点である(第34表)。

2. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: AcidAlkaliAcid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第34表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラフアイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(第34表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(LibbyAge: yrBP, 第34表)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用し、 $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとす

る。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正されている(第34表)。

- (4) 暦年較正年代(または単に較正年代)とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.3\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である(第35表の「暦年較正用(yrBP)」)。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線(Reimer et al. 2020)を用い、OxCal v4.4較正プログラム(Bronk and Ramsey 2009)を使用した。暦年較正の結果を第35表($1\sigma \cdot 2\sigma$ 暦年代範囲)に示す。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「calBC/AD」または「calBP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用(yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

5. 測定結果

測定結果を第34・35表に示す。

EF78 くぼ地埋土IX層出土試料6点のうち、試料5を除く5点(試料1～4, 6)の¹⁴C年代は、25890 \pm 100 yrBP(試料3)から25560 \pm 90 yrBP(試料6)の間にまとまる。暦年較正年代(1σ)は、最も古い試料3が28258～28087 cal BC(30207～30036 cal BP)の範囲、最も新しい試料6が28079～27907 cal BC(30028～29856 cal BP)の範囲で示され、後期旧石器時代前半期と後半期の境界となるATが降下した時期頃に相当する(工藤 2012)。試料5の¹⁴C年代は420 \pm 20 yrBP、暦年較正年代(1σ)は1445～1467 cal ADの範囲で示される。

F-13 VI層出土試料3点(試料7～9)の¹⁴C年代は、440 \pm 20 yrBP(試料8)から400 \pm 20 yrBP(試料9)の間にまとまる。暦年較正年代(1σ)は、最も古い試料8が1438～1458 cal ADの範囲、最も新しい試料9が1448～1483 cal ADの範囲で示される。なお、これら3点はいずれも樹皮直下と見られる部位から測定用試料を採取した。

試料の炭素含有率はすべて50%を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360

工藤雄一郎 2012 旧石器・縄文時代の環境文化史 高精度放射性炭素年代と考古学, 新泉社

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62 (4), 725-757

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363

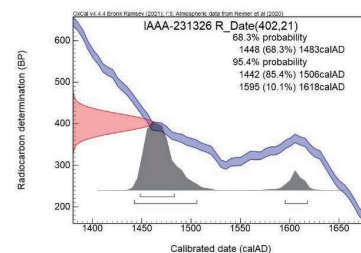
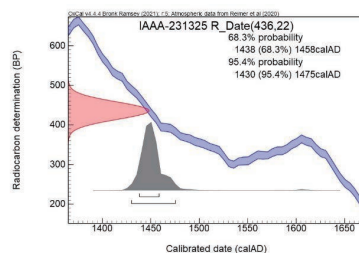
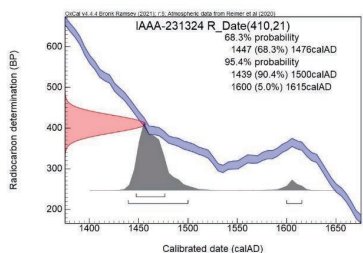
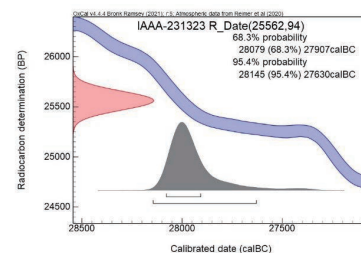
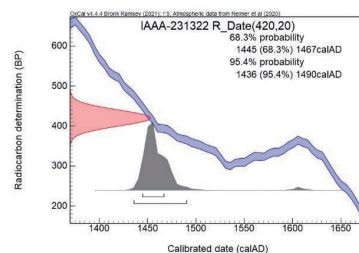
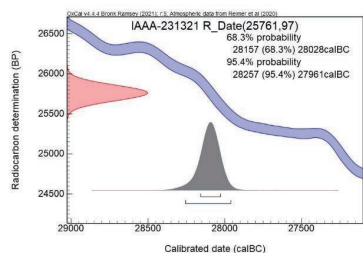
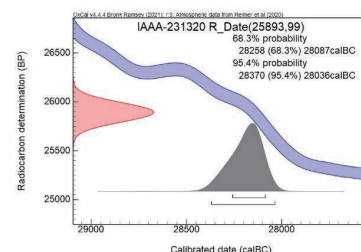
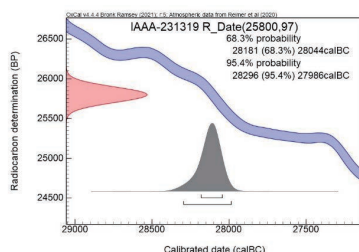
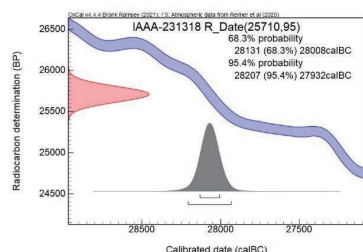
第34表 放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$, ^{14}C 年代, pMC)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-231318	1	EF78 大型土坑埋土IX層①	炭化物	AAA	-25.26 ± 0.19	25,710 ± 100	4.07 ± 0.05
IAAA-231319	2	EF78 大型土坑埋土IX層②	炭化物	AAA	-25.15 ± 0.18	25,800 ± 100	4.03 ± 0.05
IAAA-231320	3	EF78 大型土坑埋土IX層③	炭化物	AAA	-26.81 ± 0.16	25,890 ± 100	3.98 ± 0.05
IAAA-231321	4	EF78 大型土坑埋土IX層④	炭化物	AAA	-27.40 ± 0.18	25,760 ± 100	4.05 ± 0.05
IAAA-231322	5	EF78 大型土坑埋土IX層⑤	炭化物	AAA	-25.41 ± 0.16	420 ± 20	94.90 ± 0.24
IAAA-231323	6	EF78 大型土坑埋土IX層⑥	炭化物	AAA	-25.76 ± 0.19	25,560 ± 90	4.15 ± 0.05
IAAA-231324	7	F-13 VI層 (掲載 No401)	生木	AAA	-26.42 ± 0.18	410 ± 20	95.02 ± 0.25
IAAA-231325	8	F-13 VI層 (掲載 No403)	生木	AAA	-28.04 ± 0.16	440 ± 20	94.71 ± 0.27
IAAA-231326	9	F-13 VI層 (掲載 No402)	生木	AAA	-26.39 ± 0.16	400 ± 20	95.11 ± 0.25

[IAA 登録番号: #C280]

第35表 放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)

測定番号	試料名	暦年較正用 (yrBP)	較正条件	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA-231318	1	25,710 ± 95	OxCal v4.4 IntCal20	28131calBC - 28008calBC (68.3%)	28207calBC - 27932calBC (95.4%)
IAAA-231319	2	25,800 ± 97	OxCal v4.4 IntCal20	28181calBC - 28044calBC (68.3%)	28296calBC - 27986calBC (95.4%)
IAAA-231320	3	25,893 ± 99	OxCal v4.4 IntCal20	28258calBC - 28087calBC (68.3%)	28370calBC - 28036calBC (95.4%)
IAAA-231321	4	25,761 ± 97	OxCal v4.4 IntCal20	28157calBC - 28028calBC (68.3%)	28257calBC - 27961calBC (95.4%)
IAAA-231322	5	420 ± 20	OxCal v4.4 IntCal20	1445calAD - 1467calAD (68.3%)	1436calAD - 1490calAD (95.4%)
IAAA-231323	6	25,562 ± 94	OxCal v4.4 IntCal20	28079calBC - 27907calBC (68.3%)	28145calBC - 27630calBC (95.4%)
IAAA-231324	7	410 ± 21	OxCal v4.4 IntCal20	1447calAD - 1476calAD (68.3%)	1439calAD - 1500calAD (90.4%) 1600calAD - 1615calAD (5.0%)
IAAA-231325	8	436 ± 22	OxCal v4.4 IntCal20	1438calAD - 1458calAD (68.3%)	1430calAD - 1475calAD (95.4%)
IAAA-231326	9	402 ± 21	OxCal v4.4 IntCal20	1448calAD - 1483calAD (68.3%)	1442calAD - 1506calAD (85.4%) 1595calAD - 1618calAD (10.1%)



第 96 図 暦年較正年代グラフ

報告No. 4 (株)加速器分析研究所(2023年3月報告)

1. 測定対象試料

鹿児島県に所在する新城跡遺跡の測定対象試料は炉跡から出土した炭化物1点である(第36表)。

2. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物、混入物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: AcidAlkaliAcid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第36表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(第36表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(LibbyAge: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第36表に、補正していない値を参考値として第37表に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、

補正した値を第36表に、補正していない値を参考値として第37表に示した。

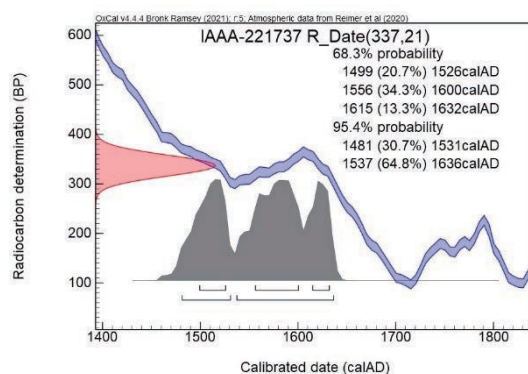
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1 σ = 68.3%)あるいは2標準偏差(2 σ = 95.4%)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線(Reimer et al. 2020)を用い、OxCal v4.4較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第37表に示した。なお、暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「calBP」または「calBC/AD」という単位で表される。

5. 測定結果

測定結果を第36・37表に示す。新城跡出土試料8の¹⁴C年代は340 \pm 20yrBP、暦年較正年代(1 σ)は1499 ~ 1632calADの間に3つの範囲で示される。試料の炭素含有率はすべて50%を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62 (4), 725-757
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363



第97図 暦年較正年代グラフ

第36表 放射性炭素年代測定結果(σ¹³C補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C 補正あり			
						Libby Age(yrBP)		pMC(%)	
IAAA-221737	8	G-8 区 炉跡 10 号 埋 ii 層 炉跡出土炭化物	炭化物	AAA	-29.71 ± 0.30	340 ± 20		95.89 ± 0.26	

[IAA 登録番号：#B739, B740]

第37表 放射性炭素年代測定結果(σ¹³C未補正, 暦年較正用¹⁴C年代, 較正年代)

測定番号	δ ¹³ C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-221737	420 ± 20	94.96 ± 0.25	337 ± 21	1499calAD - 1526calAD (20.7%) 1556calAD - 1600calAD (34.3%) 1615calAD - 1632calAD (13.3%)	1481calAD - 1531calAD (30.7%) 1537calAD - 1636calAD (64.8%)

[参考値]

* Warning! Date may extend out of range
(この警告は較正プログラム OxCal が発するもので、試料の 14C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

報告No.5 鹿児島県立埋蔵文化財センター

取鍋付着溶解物および石製品の蛍光X線分析について

1. 測定対象資料

取鍋 2 点, 滑石製品 3 点, 砥石 1 点, 石鍋 1 点の合計 7 点で出土遺跡と地点, 遺物の種類, 石材, 報告書掲載 No については第 38 表中に記す。

2. 分析の目的

①取鍋 (掲載 No249, 389) 付着溶解物の成分分析

②石皿 (掲載 No494) の石材の推定

3. 分析に使用した装置と結果について

エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (堀場製作所製 XGT-1000, X 線管球ターゲット: ロジウム, X 線照射径 100 μm) を使用し, X 線管電圧: 15/50 kV, 電流: 自動設定で分析を行った。以下, 試料ごとの分析結果を第 38 表に示す。

4. 考察

①取鍋の分析について

249 は鉛の含有量が突出する。389 は銅の含有量が最も高く亜鉛も多く含む。鉛や銅を含む合金の溶解物を受けた痕跡であると判断される。

②石皿の石材について

石皿に使用された石材は, 新城跡および諏訪ノ前遺跡から出土した滑石製品の分析結果と比較すると, 肉眼観

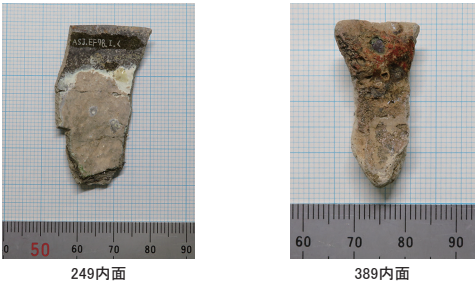
察によると基質や粒子が似る砂岩とは含有成分の重なりが少なく, 滑石に近い成分比率である。質量濃度を比較すると諏訪ノ前遺跡出土滑石製品 (No689) と最も数値が近い。滑石の一種である可能性があるが, 比較資料に含まれない成分を含む。石材の断定は難しく, 今回の分析による産地の同定も難しい。

含有成分や質量濃度からほかの滑石製品は北部九州産のものとして推測される。

文献

2006 今岡 照喜・中村 徹也・早坂 康隆・鈴木 康之「滑石製石鍋 原材料の比較研究ー長崎県ホグット遺跡と山口県下請川南遺跡ー」『考古学と自然科学』日本文化財科学会

2021 白石 純「滑石製品の自然科学的研究 (2)ー備前高島遺跡出土滑石製品の産地についてー」『半田山地理考古』9 岡山理科大学



第38表 蛍光X線分析試料および結果一覧

時期	型式/類別等	型式 / 器種 / 遺構名など	含有成分															
			Mg (マグネシウム)	Al (アルミニウム)	Si (ケイ素)	S (硫黄)	K (カリウム)	Ca (カルシウム)	Ti (チタン)	Cr (クロム)	Fe (鉄)	Ni (ニッケル)	Cu (銅)	As (ヒ素)	Sr (ストロンチウム)	Zr (ジルコニウム)	Sn (すず)	Pb (鉛)
中世	取鍋 (掲載 No249)	陶磁器小杯の転用品 / 大型土坑	—	—	7.38 (8.44)	—	—	—	—	—	0.84 (12.54)	—	0.13 (3.03)	0.07 (1.63)	—	—	—	91.58 (527.85)
中世	取鍋 (掲載 No389)	専用品 / 西台地 I 層	—	4.98 (9.47)	30.74 (131.92)	—	2.11 (18.17)	1.30 (12.81)	0.44 (14.23)	—	1.98 (174.44)	0.27 (28.50)	19.83 (2224.32)	0.05 (4.90)	—	0.07 (5.02)	6.27 (50.91)	31.96 (869.42)
不明	石皿 (掲載 No494)	朝鮮産か? / 東台地 T 13	19.93 (8.86)	5.91 (9.32)	51.28 (177.03)	0.34 (3.46)	0.45 (4.20)	0.53 (6.31)	—	1.20 (99.77)	19.54 (2056.83)	0.82 (70.78)	—	—	—	—	—	—
中世	砥石 (掲載 No489)	砂岩製 / 東台地 T 15	—	5.42 (6.11)	89.74 (165.51)	—	1.15 (2.95)	0.20 (0.65)	0.90 (11.89)	—	2.33 (82.83)	—	—	—	0.26 (25.00)	—	—	—
中世	滑石製品	比較資料 / 石鍋片の加工品 諏訪ノ前遺跡 (掲載 No687)	24.48 (5.01)	—	61.16 (90.84)	—	—	0.11 (0.50)	—	0.46 (14.55)	13.26 (579.50)	0.53 (21.67)	—	—	—	—	—	—
中世	滑石製品	比較資料 / 鉛筆型製品 諏訪ノ前遺跡 (掲載 No689)	24.56 (8.18)	8.72 (9.60)	43.93 (104.13)	—	—	—	—	2.79 (180.80)	19.25 (1502.98)	0.76 (49.20)	—	—	—	—	—	—
中世	滑石製品 (掲載 No397)	北部九州産か? / 西台地 I 層	26.97 (14.56)	—	64.22 (222.60)	—	—	—	—	0.13 (9.51)	8.20 (855.72)	0.48 (52.46)	—	—	—	—	—	—

第Ⅴ章 総括

第1節 調査の成果

本報告では調査区域を東西2つの谷と台地に分けて発掘調査の成果を記載した。地形や遺構・遺物の検出状況から中世の各地点の機能が違うことが窺えたためである。すべての地点で中世から近代に至るまでの遺物がみつかっており、詳細は第2・3節に記載するが、人の手を加えて地形を大きく変えながら現在まで利用され続けてきた場所であることが発掘調査で明らかになった。

1 出土陶磁器から考えられる遺跡の年代

本遺跡から出土した中世貿易陶磁器（青白磁・青花）の組成について第39表、第100図に示す。陶磁器は、凡例で示した歴博分類によって仕分け、部位に関わらず1破片＝1点として数えた。西台地は、帰属時期の分析のため、主要な遺構から出土した遺物を別途集計した。大型土坑と通路状遺構に限り、存続期間を考察する必要から、近世と近代の遺物を分けて全点をカウントした（第39表網掛け部）。

中世の陶磁器は出土数に大きな違いはあるものの、帰属時期ごとの出土比率において地点による差はみられない（第100図）。このことは各地点の消長期間がほぼ同時期であることを意味する。

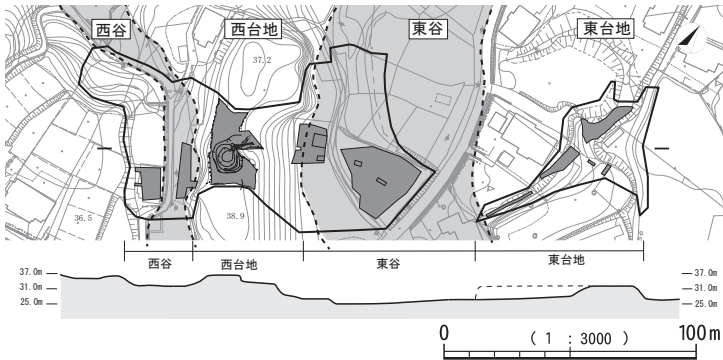
西谷、西台地、東台地からは11世紀後半～12世紀代に帰属する玉縁口縁の白磁、同安窯系青磁、龍泉窯系の搔花文を描く青磁なども出土するがごく少数である。遺物が増え始めるのは13世紀後半頃（歴博分類Ⅲ期）からで、活動の最盛期は15世紀後半～16世紀前半頃（歴博分類Ⅴ期）である。出土点数は減少傾向にあるが、16世紀末頃（歴博分類Ⅵ期）の青花は西台地に多く出土し、漳州窯産製品の碗E群（饅頭心型）および皿C群（基筈底皿）が多い。漳州窯産製品の流通の中心時期は16世紀代で戦国時代末頃にかけて増えることが知られる。

近世以降の陶磁器は全地点で出土した。

西台地・東台地では17世紀半ば頃の肥前産の磁器が

第39表 新城跡出土陶磁器組成表

時代	時期 (歴博)	種類	器種	分類 (歴博)	出土地点								計	
					西谷	西台地				東谷	東台地			
						大型土坑	通路状遺構	掘立柱建物跡 瓦跡・土坑 溝状遺構	I・II層					
中世	I	青磁	碗	龍泉A0類		1							1	
		白磁	碗	II類					1				1	
			碗	IV類					2				2	
			皿	II類									0	
			皿	IV類									0	
			皿	V類									0	
			皿	VI類						1			1	
	皿	VII類									0			
	II	青磁	碗	同安A類						1				1
			碗	同安B類						1				1
			碗	龍泉A1類										0
			碗	龍泉A2類										0
			碗	龍泉A3類										0
			碗	龍泉A4類						1		1	2	
			碗	龍泉A5類									0	
			碗	龍泉A6類									0	
			皿	同安窯系	1								1	
		皿	刺花文皿		1								1	
		白磁	碗	V類										0
			碗	VI類										0
			碗	VII類										0
			碗	VIII類							3			3
			皿	III類										0
	II III		白磁	皿	VIII類		1							1
	III	青磁	碗	龍泉B0類										0
			碗	龍泉B1類	1	4			7			3	15	
			皿	折縁皿	1	1							2	
			皿	腰折皿									0	
		白磁	碗	IX類		2							2	
			皿	IX類	1				3		1	5		
			IVa	青磁	碗	龍泉B2類	5	1	2	2		2	12	
	碗	龍泉C1類									0			
	小坏	—			1						1			
	染付(青花)	碗		龍泉D1類	3				1		2	6		
	IVb	青磁	碗	A群								0		
			碗	龍泉B3類	2				1			3		
			碗	龍泉C2類	1			1	2			4		
			碗	龍泉D2類	3	3	1	2	2		2	13		
		白磁	皿	内嚙皿	1				2			3		
			碗	ピロースクIII類類似					1			1		
			皿	B群					1	2	1	6	10	
			碗	B群								1		
	IVb V	輸入陶器	沖縄V類大壺	—	1							1		
		輸入陶器	沖縄III・IV類大壺	—	2							2		
	V	青磁	碗	龍泉B4類	2	5				5		1	13	
			碗	龍泉C3類					1			1		
			碗	龍泉E1類	1				1			2		
			皿	端反皿			1		1		3	5		
			皿	腰折丸皿								0		
			皿	稜花皿	4	1			3			8		
白磁		碗	C群(端反碗)	1	2							3		
		皿	C1群	4			2	5			11			
		皿	C2群	4							4			
		皿	E群								0			
		染付(青花)	碗	C群	1	11				6		2	20	
V VI		青磁	碗	D群								0		
			皿	B1群	1	3	1	1	1			7		
			皿	C群	1	5	1		6	1	1	15		
			皿	基筈底皿						1		1		
	染付(青花)	盤	—						1		1			
VI	青磁	壺	—						1		1			
		皿(角皿)	—	1				1		2				
		赤絵皿	—	1				1		2				
		天目碗	—	2				1		3				
	輸入陶器	鉢	—	1							1			
		青磁	碗	龍泉E2類	3						3			
	白磁	青磁	皿	菊皿							0			
		碗	D群	11							1			
		碗	E群	11	2	1	15				29			
		碗	F群		1						1			
染付(青花)		皿	B2群	1	1	1	7			10				
皿		E群	2							2				
分類不可	青磁	皿	青磁不明	10				2		2				
	白磁	皿	白磁不明	8				13		23				
	染付(青花)	皿	青花不明	14				5		13				
近世	計	12	124	10	12	126	2	24	312					
		近世染付	35	14										
		陶器(県外産)	10	7										
		薩摩焼	30	8										
					199	39								



第98図 西谷・西台地・東谷・東台地位置図

出土した。そのうち東台地出土の染付は有田産の良品（459）である。阿久根氏が土地を去った後も、良品を入手できるような有力者が暮らした可能性を示唆する。その後遺物の出土はしばらく途絶え、18世紀中頃になると増え始め、近代に至る。遺物は播鉢、土瓶、甕などの生活雑器や染付の碗、皿、鉢などの供膳具といった国産陶器が主体である。

2 各地点の概要

①西谷

西谷は、東谷と合流して高松川へつながる谷状の旧地形であったことがわかった。空堀を想定して調査を行ったが、調査の結果、西谷から西台地へと登る入口を発見することはできなかった。太田秀春氏による現地指導では、西谷について「空堀を掘らなくても、空堀に十分利用できる自然地形である」との所見を得ており、自然の小谷を堀や道として利用していたと考えられる。

②西台地

遺構について

掘立柱建物跡5棟や炉跡11基など、多数の遺構を検出した。そして、中世山城の曲輪としての機能を窺わせる通路状遺構と、枡形に近い平面形の大型土坑から成る虎口状遺構、土坑、土塁状の高まりといった防御的な遺構を発見することができた。出土遺物、出土炭化材や炭化種子の年代測定値、遺構同士の切り合い状況から判断される帰属時期を第40表に示した。なお、虎口状遺構については後述する。

第40表 遺構の年代別一覧表

帰属時期	陶磁器の時期	遺構名
15世紀	IV b～V期	掘立柱建物跡1・3号、土坑1・3号
16世紀前半	V期	掘立柱建物跡4・5号、炉跡1・4・7号
16世紀後半	VI期	炉跡2・5・6・10号
16世紀末頃	VI期	掘立柱建物跡2号

大型土坑
通路状遺構

掘立柱建物跡は、虎口状遺構と同時期に帰属する。5軒ともに廂をもたず、柱筋は整わず、柱穴の形や深さに規格性はみられない。北山遺跡（阿久根市）や外畠遺跡（出水市）などの集落遺跡では、長軸が5m前後で形態が類似した平面形の掘立柱建物跡が報告される。それらの柱筋は整い、本遺跡の例に比べて規模も大きい。本遺跡の例は、それらとは形態を異にする。周辺にもピットを多数検出したため、居住域よりも簡易な造りの小屋を頻繁に建て替えたことが考えられる（第99図）。

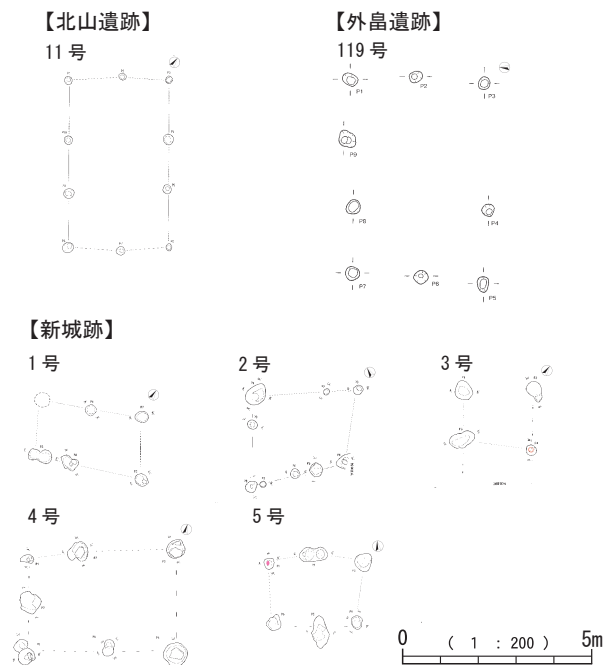
炉跡は埋土中の炭化材の年代測定の結果から、16世紀前半期のもの（1・4・7号）と、16世紀後半期のもの（2・5・6・10号）とがあると判断される。前半期のものは縦長で長軸は東西方向にあり崖側を向く。

3基中2基が特に形の整ったひょうたん形である。後半期のものは不定形で長軸が短いものが多く、軸の方向性もまばらである。炉跡10号からはイネやオオムギの炭化種子が多数出土した。よって炉跡には炊事用の炉として使用されたものを含むと考えられる。

ひょうたん型の炉跡は、近隣の中之城跡・北山遺跡・諏訪ノ前遺跡にも形状・規格に近いタイプが検出されている。同じ場所で造り直す例も多く、プランが崩れた状態で検出されることが多い。上部の構造が残らず、遺物を伴う例も少ない。北山遺跡では炭焼き窯として利用された可能性も指摘されており、用途を明らかにするためには、埋土の土壌水洗や科学分析を行い検討する必要がある。

土塁状の高まりは、削平のため残存部の断面から上部構造や形状を把握することはできなかった。ただし、虎口状遺構を検出したことから削平された土塁の基部を想定して掲載した。土塁であるならば、高松川から西谷を伝って北山側へ抜ける道を見張る場所に存在している。

また、西台地は、地元住民によって「さくらが城」と呼ばれていたことなども考慮すると、新城本体とは別の遺構群に相当する可能性もある。伝承による呼び名で断定することはできないが、『三國名勝圖會』に阿久根城山裾の出城の1つとして『櫻ヶ城』の名がある。



第99図 北山遺跡・外畠遺跡・新城跡の掘立柱建物跡

遺物について

陶磁器は、皿・碗などの供膳具には粗製品も含む一方で、景德鎮産の小壺の良品（328）などの装飾品や中国産の天目碗（137）、瓦質焼成の風炉（184）などの茶道具や基石、鉄鉢も出土している。そのことから武士階級の人々の駐留の場であった可能性も考えられる。

土師器は皿が多く、坏は少なかった。皿には規格の統一性がみられた。15世紀後半～16世紀前半頃の形態のものが多く、陶磁器の年代観と矛盾しない。

そのほか、播鉢が多く出土した。材質は備前系陶器、瓦質、須恵質、土師質の4種類で後者ほど出土点数が多かった。土師質のものには硬質・軟質のものがあ、内外面に煤が付着する傾向がみられた。火にかける用途が想定される。

③東谷

東谷は今回の調査によって中世の時期から流水のある低地であったことが分かった。当時の層であるⅥ層から出土した杭などの木製品は概ね西台地と同時期の15世紀後半～16世紀代に帰属することが科学分析によって判明した。その時期には水田跡などの施設の存在が想定される。トレンチ調査によって少なくとも西台地近くまで低地が迫っていたことが明らかになっている。

④東台地

東台地は中之城側の台地の縁辺部にあたる。新城本体があったと伝わるエリアに立地するが、削平のため、城跡に関する遺構は確認できない。また現在の地形からは西谷側にどこまで迫っていたかを知ることも難しい。しかし、トレンチ調査による限られた面積ではあったが、中世以降の遺物を発見することができ、陶磁器の比較によって西台地と同じ中世後半に最盛期を迎えることが分かった。

古瀬戸の瓶（424）や広範囲の交易を窺わせる常滑焼大甕（423）といった遺物が出土していることから、中

世前半から人が住んでいた可能性も考えられる。また、有田産の陶磁器の良品の出土は近世の初め頃も生活の場であったことが窺える。

調査の結果わかったこと

今回の調査の結果、西台地・東台地・東谷に人の活動の痕跡が認められた。遺構を発見することができた西台地は防御施設として機能していた可能性をもつ。東台地については後世の削平の影響もあり、当時の利用状況を知ることは難しかった。谷部は台地部に通じる堀や道、水田として使用されたと推測される。

3 虎口状遺構について

構造について

今回の調査で発見した虎口状遺構は、西谷側から登ると約5m、東谷側から登ると約10mの標高の低い瘦せ尾根状の台地への入口である。

発掘調査時には、現在の傾斜の壁面であっても大型土坑の底から上部に登ることは困難だった。通路状遺構の傾斜は急で、大型土坑の入口は一段高くなっており入りづらい構造である。入口直前で進入角度が変わるため、東谷から大型土坑が見えず、通路状遺構のある斜面は畑地や宅地としての利用のために段状に削平されており（写真図版9-①）、築造当初はより切り立っていたと考えられる。削平された現在でも上部の発掘作業員の気配が分かりにくい状況であった。

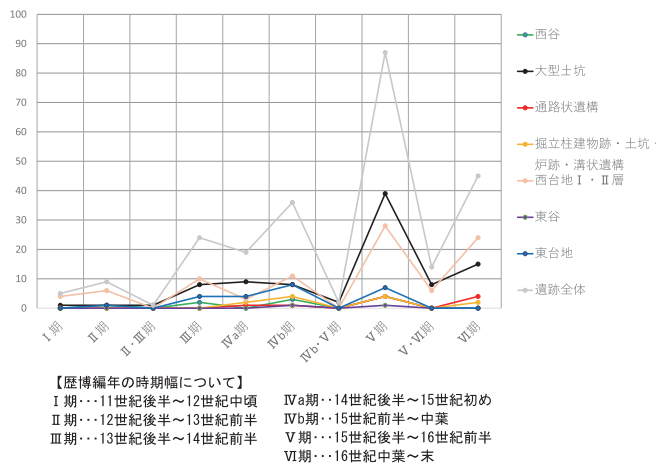
シラスを掘り込んで通路をつくり、蛇行しながら登り、入口で大きく角度を変える通路状遺構は南九州的な城郭の虎口の構築方法に則ったものである。ただしその典型的な枡形虎口は登り切ったところが曲輪であるのに対し、本遺跡の場合は角度を大きく変え、枡形の深い土坑に接続させている。

三木靖氏の現地指導によると、西台地のように低い台地に虎口を設け、登り切った平坦面に大型の深い土坑を設ける例は南九州、そして九州内にはみられないとのことであった。

虎口状遺構の年代について

大型土坑の底面直上のⅨ層に遺物はなく、炭化材の年代測定により構築時期は15世紀中頃であると推定される。通路状遺構も、大型土坑との切り合いがみられないことから同時期に構築されたと考えられる。機能していた時期は、中世の遺物のみが出土したⅧ層であると判断した。Ⅷ層から出土した陶磁器は漳州窯系を含む青花が中心であるため、Ⅷ層の帰属時期は16世紀後半頃に比定できる可能性がある。よって虎口状遺構が機能した期間はⅨ・Ⅷ層が堆積した15世紀中頃～16世紀末頃であると推測する。

Ⅶ層～Ⅲ層上面までは、埋土の堆積状況から壁面からの崩落や周辺からの自然の堆積が長期間続いたものと考



第100図 出土陶磁器組成グラフ

えられる。出土した近世の陶磁器は18世紀後半頃までのものが多く、その頃までは浅いくぼ地として残っていたことが窺える。

近現代の陶磁器はⅠ・Ⅱ層からのみ出土している。地元住民の「子どもの頃（昭和20～30年頃か）凹みを埋め立てる光景を見た。」との証言から、Ⅰ・Ⅱ層は、耕作地として利用するための埋め立て土である。また、通路状遺構からは近世以降の陶磁器の出土比率が高い。近年まで西台地へ登る道として利用され続けたことによると考える。

虎口状遺構の性格

通常の虎口は城内へ通じる出口があるが、本遺跡の通路の終点は堅穴で閉じている。また、周辺には大手や搦手の記録や伝承はない。

三木氏は「土坑は出入り口の上端になるので、いわゆる虎口に相当する」とし、「大手、搦手ではない山城登城路で、頂上に登るところに、独特な複雑な構えを造ろうとしたと見ることができる」との見解であった。

虎口状遺構については、①虎口、②堀切、③井戸、④排水施設の指摘があったため、以下のように分析した。

- ①虎口→谷から蛇行して台地に入り、近世以降も道として利用されていることから可能性はある。
- ②堀切→深く「V」字状に掘り込み、西台地を分断していることから可能性はある。
- ③井戸→底面が地下水層まで届かず、シラス層の途中で止まっているため可能性は低い。
- ④排水施設→南九州の他例と比較すると規模と構造が違う（上田2024）。また、本遺跡のように通路と接続する例はないため可能性は低い。

以上の特徴から、本遺跡の虎口状遺構は、虎口と、堀切の両方の機能を持ち合わせた防御施設の可能性があると考ええる。ただし、大型土坑の機能は説明が難しく今後の検討課題である。

虎口状遺構は高松川から南下し、山下台地に登る入口にある。『北山遺跡1』の総括中では、北山遺跡は阿久根氏に関連する集落で、13～14世紀頃には集落が存在するが、15～16世紀になると畠や墓域に変わることが述べられている（2023埋文調査センター『北山遺跡1』）。このことは、山下台地において15世紀前後に土地利用の転換期があることを示す。

本遺跡の西台地上には15世紀から掘立柱建物跡などの遺構とともに虎口状遺構が構築され、活動の最盛期を迎える時期と一致する。これらの遺構の発見は阿久根氏の動向を考察するうえで重要な調査事例として加わった。

第2節 新城の城域について

1 山下の台地周辺の中世山城について

国土地理院の赤色立体地図を使い新城周辺の地形と遺跡を表した（第101図）。

今回の調査区域としての新城跡の範囲は、東谷を挟んで2つの台地に広がっている。東谷は現地を踏査した結果、愛宕山を始点とし、山下の台地と久保下の台地を隔てていることが分かった（第101図点線部）。山下の台地には中世の集落である北山遺跡が存在する。

山下の台地から諏訪ノ前遺跡まではほとんど平坦である。山下の台地は詰め之城である阿久根城を背にして、支城である中之城、新城、大石城、小田城、賀喜城に囲まれる。鎌倉時代初め頃には賀喜城、小田城あたりまでが海で、川や湿地は現在よりも台地に迫っていたとする文献もあり、「波留」という地名の由来との節もある。築城の年代は賀喜城、小田城が12世紀中頃とされ古く、阿久根城は12世紀終わり頃、大石城、中之城は13世紀以降、新城は16世紀半ば頃とされる。

2 新城の城域について

新城があったと伝わる現在の公民館周辺は、字名にはその呼称が残るが後世のシラス削平により中世から地形を大きく変えている。そのため実際の城域は確認できない。

1888（明治21）年の古地図（第102図）では久保下の台地の南側は既に住居となっているが、東側には台地が残る。その後の航空写真（第103・104図）から時代が進むごとに削平が進み、1975（昭和50）年にはシラス取りで消滅し耕作地へと変わっていることが分かる。

久保下の台地上にある東台地調査区で遺構を発見できなかったのは、この間に消滅したためである。

『阿久根市誌』によると、新城は山下の「久保下」にあるとされている。「久保下」という地名は、現存する字で愛宕山麓の「久保平」集落よりも北に位置する広大なエリアを指す。新城は字名や伝承によると、久保下の台地や現在の新城集落にあったことになる。「東台地」は久保下の台地の縁辺部にあたる。台地は低く、中之城あたりを通っていたとされる当時の街道にも近く、利便性や機動性に優れた居住地であったと推測される。「東台地」の発掘調査では、新城が構築されたと伝わる16世紀半ば頃に遺物が増加することがわかった。

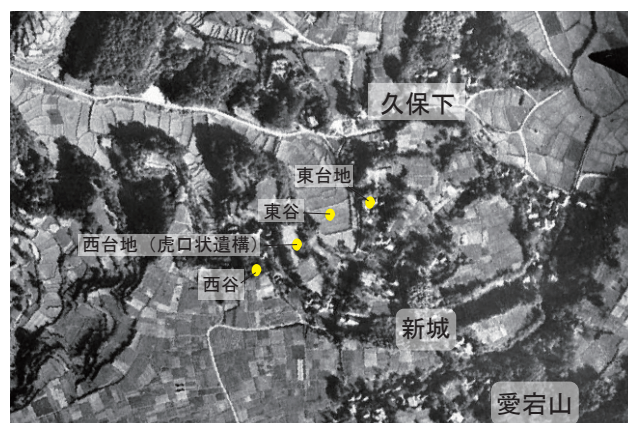
伝承や調査の結果から、新城と呼ばれた中世の遺跡群は、久保下台地上に存在したことを推測する。



第101図 赤色立体図を用いた新城周辺の遺跡と地形(1:25000)



第102図 1888年(明治21)年の古地図



第103図 1947(昭和22)年の航空写真



第104図 1975(昭和50)年の航空写真



第105図 新城を含む中世遺構群(1:30000)

第3節 阿久根氏と新城について

まず、文献や伝承から考えられる「新城跡」と阿久根氏の関係について整理したい。阿久根氏の動向については不明な点が多いが、藤崎琢郎氏によって研究および考察が進められており（藤崎 2017, 2024）、『阿久根市誌』などを年代の参考とした。

本遺跡で活動のピークを迎える 15 世紀後半～16 世紀代は、9 代阿久根良忠が薩州島津家の家老となった時期から 12 代良正、13 代良有が阿久根地頭であった時期にかけてである。「新城跡」は『三國名勝圖會』には良正が、『阿久根市誌』には良有が居城していたとの記載がある。その年代は概ね永禄年間（1558～1570）年に該当する。そして、ほぼ同じ期間となる 1547 年から 1570 年の間に、入来の渋谷氏一族の東郷氏との戦いが 5 回を数えたとされる。地域における緊張状態が最も高まった時期で、本遺跡の台地部が最も利用されていた時期にも重なる。

なお、13 代良有が当主の頃には琉球やポルトガルとの関連も伝わる。良有は豊後の大友宗麟などと同じ時代に生きた武将である。豊後府内 80 次調査の島津侵攻による焼土層（1586 年）やその直下の溝で出土した青花を実見する機会を得たが、西台地から出土したものと同じタイプの製品が多くみられ、帰属時期の近さを感じた。阿久根氏が、中国産の陶磁器を日常的に入手できるような交易の手段を持っていた事が窺える。

阿久根氏の城については情報が少なく、発掘調査が行われたのは中之城（城の比定には至っていない）のみである。その状況下で本遺跡の西台地において、類例の無い構造の虎口状遺構を備えた曲輪に類する施設を発見したことは大きな成果であり、阿久根氏の実態を知る貴重な資料を得ることができた。北山遺跡の中世の集落との関連が強く、新城、中之城、大石城、小田城、賀喜城といった山下の台地を取り囲む支城と共に、その北側を守るために中世後半期に稼働していた防御施設であると捉えたい。

今回の調査区域「新城跡」の「西台地」は物流の拠点である高松川を遡上すると、山下の台地への北側からの入口にあたる。そして「西台地」・「東台地」はそれぞれが阿久根氏の防御・居住施設の 1 つであり、戦国の乱世において、阿久根氏の存亡を担った山下の台地の「要」の場所である。

近世には、元禄 3 年（1690 年）に地頭仮屋が波留小牟田に移り、江戸後期には出水方面に通じる街道も海側のルートに移ったことから、山下は阿久根の中心から外れ人々が穏やかに暮らす一般的な集落に変わっていった。現在も山下小学校周辺に「麓」の地名が残る。

ー引用・参考文献ー

- 上田 耕 2024 「中世城郭で出土する堅穴土坑の意義ー南九州地域の場合ー」『南九州城郭研究 第 4 号 三木先生追悼文集』南九州城郭談話会
- 大橋康二他 2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁研究会
- 岡寺良・竹中克繁、吉本明弘 2023 『九州の名城を歩く』吉川弘文館
- 五代秀堯ほか編纂 1982 『三國名勝圖會』
- 池谷初恵・小野正俊・岩元康成・小出麻友美・佐々木健作・村木二郎 2021 「中世琉球における貿易当時調査 I」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 226 集
- 岩元康成 2012 「鹿児島県の遺構内出土関係遺物の組成」『中近世土器の基礎研究』24 日本中世土器研究会
- 續伸一郎 2022 「中世後期の貿易陶磁器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 真陽社
- 藤崎琢郎 2017 『莫禰院司 莫禰氏の考察』千台第 45 号 薩摩千台郷土史研究会
- 藤崎琢郎 2024 『鎌倉・室町時代における莫祢（阿久根）一族と阿久根・川内地方』千台第 52 号 薩摩千台郷土史研究会
- 藤崎琢郎 2024 「鎌倉・南北朝期の莫祢（阿久根氏）居館～三木先生が阿久根に遺された思い出を交えて～」『南九州城郭研究 第 4 号 三木先生追悼文集』南九州城郭談話会
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2013 『豊後府内 17』大分県教育庁埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 63 集
- 阿久根市誌編さん委員会 1974 『阿久根市誌』阿久根市
- 阿久根市誌編算委員会 1982 『阿久根の文化財』阿久根市
- 阿久根市誌編さん委員会 1985 『阿久根の地名』阿久根市
- 阿久根市教育委員会 1982 『北山遺跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
- 阿久根市教育委員会 2003 『中之城跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 鹿児島県教育委員会 1997 『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（VI）』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（72）
- 鹿児島県教育委員会 1987 『鹿児島県の中世城館跡ー中世城館跡報告書ー』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 『外島遺跡』発掘調査報告書（175）
- 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2023 『北山遺跡1』発掘調査報告書（51）
- 2025 『北山遺跡2』発掘調査報告書（61）
- 2025 『諏訪ノ前遺跡』発掘調査報告書（60）